秋田叢書
別集

菅江真澄集

第二

『菅江眞澄翁終焉之地』

佐竹男爵筆。仙北郡角館町鄉社神明社神職鈴木氏舊宅址にあり。（昭和三年角館史考會建設）

菅江眞澄翁遺墨（其三）

大館町栗盛教育團所藏

去年のまゝにて音信もあらで、久しう月日をへてとふらひ侍りてけれは、あるし

宿しつるほども久しきささこ夏につもれるちりをけふやはらはむ。　茂　肅

となんありけるにこたへして、

めつらしな露も塵なきささこなつの宿に涼しくこよひねなまし。　秀　雄

又聞へ給ふる

なつかしき昔を軒にいまそふく花橘の匂ふ夕かせ。　司家女

返し

馴しその香をなつかしみささひそよる花たちはなの風をしるへに。　秀　雄

菅江眞澄翁遺墨(其四)

平鹿郡沼館町佐々木順氏所藏

きのふは家のしりなるそのふに鶯の來て鳴しか、けふはいつこに行しか、ひねもそまてと、いまたこさらぬは、いかになと人のいへれは、

眞　澄

梅もまた咲ぬかきりは誰か屋戸こねくらさためぬ春の鶯

秋田叢書別集　菅江眞澄集第二　目次

解題

本集に編輯したる菅江眞澄翁の著錄は『けふのせばのゝ』以下九種であるが、地理的に見て主として縣北部、卽ち鹿角、北秋田二郡に關係のものを收錄した。但し、此の間自然山本郡に關係のものもある。又殊に『けふのせばのゝ』の如きは、鹿角郡より筆を起してゐるが、岩手縣和賀郡江刺郡地方にまで及んでゐる翁の紀行日記である。又これを年代的に見ると、天明五年三十二歲の時の紀行『けふのせばのゝ』から、享和二年四十九歲の時の『簬夏岐野莽望圖』、翌年五十歲の時の『秀酒企乃温濤』等で、其間約二十年を經過して居る。

『けふのせばのゝ』『錦木』『房住山昔物語』の三種は、何れも、大館町栗盛敎育團所藏の眞澄翁の自筆原本より採錄し、其の挿畫も亦、此の原本より寫眞としたるものである。また『簬夏岐野莽望圖』以下六種は、何れも佐竹侯爵家所藏の原本より採錄寫眞せることゝ前集と異なることなし。此の點、讀者諸賢と共に佐竹侯爵家、幷に栗盛家に厚く謝意を表する。

けふのせばのゝ　一卷

此の書は翁の自序にもある如く、翁が年三十一歳の時はじめて秋田に入りたる翌年の紀行の一部分である。此の歳は、雄勝郡柳田村の草薙家を振出しに大間越を經て津輕に入り、青森より黑石、碇ケ關を經て再び秋田領に入り、珍らしくも大旅行をなした年である。而して此の翌年、卽ち天明六年には平泉に滯留してゐることが判る。

秋雨蕭々たる秋の南部路を出た翁は、鹿の角突きの音を聞きて非常に興を催してゐる。今から考ふれば洵に思ひも及ばぬ珍事である。それから錦木塚の由來より涙川や觀音寺の沿革を說き、細布のことなどを巨細に聽き取り、花輪道に入り小豆澤の大日堂にも參詣してゐる。二戶郡に入りては名にし負ふ末の松山を經て沼宮內に入り、更に卷堀に至りては有名なる金勢明神に賽し、盛岡より日詰、花卷に入り、伊藤修が家に宿りたるとき火事に逢ふてゐる。和賀郡に入りて多田氏のことをたづね黑澤尻に黑澤尻正任のことを書き、斯くて神無月の朔日には、江刺郡片岡邑に宿りて一卷の筆を擱いた。

此の書は、內藤十灣氏の編輯せる鹿角志にも、亦南部叢書にも收錄されてゐるが、如何なる故か、ともに內容の幾部を省略されてある。又、文字の草略のため讀み得ざりしと認めらるゝ誤謬も若干あつたが、是等は嚴密に原本によつて補修し訂正したり。但し、翁の一種の癖なる萬葉假名を隨所に使用したる處や、假名遣ひ等は、その儘原本によれること旣刊の第一集と同例たり。

錦木　一巻（未完本）

これは栗盛教育團の所藏本で、同じく眞澄翁の自筆のものであるが、未だ世間に流布してないものであるから刊行は本書が最初である。『錦木』と綴目に書てあるが、大部分は松前や津輕地方の風景らしい繪である。しかし其の中の文章十三頁と繪十二頁は、全く錦木及び其の附近に緣りのものである。その文章は、眞の斷編ではあるが全く錦木塚を說かんとしたもので、恐らくは翁の艸稿のまゝのものかとも思ふが、或は別に成本があつて、其の一部の殘存されたものかも知れぬ。而して其の後部に、詩人墨客の錦木に關する詩歌をも纒めてあるので、これを合せて、一篇の名として收錄することゝした。其の表紙も、何の葉か知らぬが葉摺りとしたもので、全く翁の意匠に成れるものなることは、他の著錄のそれと比較して肯かるゝ。

元來翁は、鹿角郡に入りて何處をどう步いたか、一回ならず二回も三回も遊んだものか、猶研究を積まねば明らかでないが、餘程趣味を以て硏究した形跡がある。同じく栗盛家の藏本で故眞崎醉月翁の蒐集本の中に、『陸奧國毛布郡一事』と題する雜筆本がある。內容は、翁の記錄の材料と覺しきものを無秩序に綴り込んだもので、書名は恐らく後人の假りに附けたものと思ふが、其の中に左の一節がある。

○毛布（ケフ）の細布を、たゞ狹布（サヌノ）せばのゝといひ、また細布とのみもいひしことありやいなや。玉加都末七の卷に、台記のことを記せる條に、『陸奧國五個莊年貢之事、同記云、仁平三年七月十四日去々年厩舍人長勝、延貞爲レ使下向、奧州先年可レ增二奧州高鞍庄年貢一之由禪閤被レ仰二基衡一（金五十兩、布千段、馬三疋）基衡不二肯增一レ之云々、金十兩、細布十段、布三百段、云々とあり。細布とばかりいひしことあるにや。

とあり。翁が例の癖で古記を漁り、之を集めて一篇の記録の基本材料となしたることに、細心周到の搜索研究あることを覗ふの資料と思ふ。或は翁の著録に、更に『錦木』若くは其の他の名に於て、『けふのせばのゝ』の姉妹篇の完本がないとも限らない。記して世の博識に問ふ。

辭夏岐野莘望圖　一卷

著者の自序に、山本郡を夏木立の茂きときに見しといふ心で、茂き山本と命名したとある。城戶石村を振出しに七倉山に分け登り、小繋驛より高岩山に詣で、藤琴村より行々山間の飛瀑を賞し、斯くて太良鑛山を視察し、仁鮒村や粕毛村を縫ふて再び太良に行くのが一篇の經路である。此の年は享和二年の夏である。

此の一篇は繪は非常に多く、然かも何れも心をこめたる密畫である。紀行文は、或意味に於ては繪

詞である。

近頃、名勝地の紹介宣傳は隨分行はれてゐる。男鹿、十和田湖は言はずもがな、田澤湖、抱き還りなどの湖沼溪谷の風景もある。それでも、山本郡の須波里溪の紹介はあまり聞かない。然し、斯くの如く隱れたる勝地にも翁の吟筇は及んでゐるのは、今に至りて、我々は翁の健脚と其の風景禮讃の熱心なるには深く敬意を表せずには居られぬ。

阿仁酒澤水　一卷

此の書は阿仁山中の風景畫集である。中には古碑の摹本もある。享和二年の收穫であること勿論である。其の繪詞によりて大略を知るべきであるが、次の『雪能飽田寢』や、前の『茂き山本』などの記事も參考とすべきである。阿仁山中の風景は、翁の彩筆によりて永遠に傳へられるのである。

雪能飽田寢　一卷

眞澄翁の旅行癖は單に歌枕のためばかりではなく、土俗を訪ひ文化の源を尋ぬるばかりでもない。もとより四季折々の山水風景を寫生するのも其の生命ではあるが、更にもつた大きい希望がある。此の『雪能飽田寢』には雪中に森吉嶽に登りて、泰山に上りて魯を小なりとするほどの雄觀を擅にしてゐる

○毛布(ケフ)の細布を、たゞ狭布(サヌノ)、せばのゝといひ、また細布とのみもいひしことありやいなや。玉加都末七の卷に、台記のことを記せる條に、『陸奥國五個莊年貢之事、同記云、仁平三年七月十四日去々年廐舍人長勝、延貞爲レ使下向、奥州先年可レ増ニ奥州高鞍庄年貢ニ之由禪閤被レ仰ニ基衡ニ(金五十兩、布千段、馬三疋)基衡不ニ肯增レ之云々、金十兩、細布十段、布三百段、云々とあり。細布とばかりいひしことあるにや。

とあり。翁が例の癖で古記を漁り、之を集めて一篇の記錄の基本材料となしたることに、細心周到の搜索研究あることを覗ふの資料と思ふ。或は翁の著錄に、更に『錦木』若くは其の他の名に於て、『けふのせばのゝ』の姉妹篇の完本がないとも限らない。記して世の博識に問ふ。

辭夏岐野莽望圖　一卷

著者の自序に、山本郡を夏木立の茂きときに見しといふ心で、茂き山本と命名したとある。城戸石村を振出しに七倉山に分け登り、小蘗驛より高岩山に詣で、藤琴村より行々山間の飛瀑を賞し、斯くて太良鑛山を視察し、仁鮒村や粕毛村を縫ふて再び太良に行くのが一篇の經路である。此の年は享和二年の夏である。

此の一篇は繪は非常に多く、然かも何れも心をこめたる寫畫である。紀行文は、或意味に於ては繪

詞である。

近頃、名勝地の紹介宣傳は隨分行はれてゐる。男鹿、十和田湖は言はずもがな、田澤湖、抱き還りなどの湖沼溪谷の風景もある。それでも、山本郡の須波里溪の紹介はあまり聞かない。然し、斯くの如く隱れたる勝地にも翁の吟笻は及んでゐるのは、今に至りて、我々は翁の健脚と其の風景禮讃の熱心なるには深く敬意を表せずには居られぬ。

阿仁迺澤水　一巻

此の書は阿仁山中の風景畫集である。中には古碑の摹本もある。享和二年の收穫であること勿論である。其の繪詞によりて大略を知るべきであるが、次の『雪能飽田寢』や、前の『茂き山本』などの記事も參考とすべきである。阿仁山中の風景は、翁の彩筆によりて永遠に傳へられるのである。

雪能飽田寢　一巻

眞澄翁の旅行癖は單に歌枕のためばかりではなく、土俗を訪ひ文化の源を尋ぬるばかりでもない。もとより四季折々の山水風景を寫生するのも其の生命ではあるが、更にもつた大きい希望がある。此の『雪能飽田寢』には雪中に森吉嶽に登りて、泰山に上りて魯を小なりとするほどの雄觀を擅にしてゐ

る。更に耐寒旅行をなして、人間の通はぬ程の深山幽谷に分け入りて雪中の飛瀑を觀賞してゐる。恰も六年先きの寛政八年冬に、津輕暗門の瀑布を見に行つた冒險旅行を、又この阿仁山中に繰返してゐるのである。其の他例によりて、淺利氏の舊墟に懷古の涙を濺ぎ、六寸の筆端に五官の感觸を遺憾なく寫してゐる。而も此の冒險旅行の如きは、血氣にはやる時代ではなく、年四十九の冬であるから驚かざるを得ない。

此の雪の俤田寢は、翁の序文にも見る如く享和二年の冬、阿仁山中より出でゝ大瀧溫泉に至るまでの紀行ではあるが、長野村の山中では山市を見てゐる。研臺の石山にては花紋石を寫生し、又毛久の夜具布團に一夜をあかしたこともあり、湯の臺に宿りては、枉屏風の裏にて圍碁の音ならんと思ひしに、童等の榛の實を嚙み碎くの音なりとて、地方の風習や時代の特色をそれとなく暗示してゐる。

秀酒企乃溫濤　一卷

大瀧の溫泉を芒の湯といふが故に、此の册子の名とせりと序詞にある。卽ち、享和三年の春正月より夏五月まで此の地にありて、附近の風景を賞し土俗を探り、名所舊跡をたづねつゝ此の一册を書いた。これには珍らしく菅江眞澄の假名の牟を脱して、白井眞隅と署名してある。

此の書のはじめには、大瀧を中心としたる年頭の風俗を詳しく記してある。此の點は鄉土研究者の

見遁してならぬところである。又扇田に屢次遊びて武田敬夫と和歌發句の贈答をなし、又ともに阿仁に遊びて、去年の冬見し白絲瀑布の夏の風景を賞してゐる。

又大葛鑛山にては萬會物語、或は嘉左衞門淸七の物語を記し、或に金鑛の種類、鑛坑の數々、鑛山の風習など細々と說いてある。筆は山水と共に美しく、其の挿繪と相俟つて、永遠にかはらざる如實の姿を吾々に展開して吳れる。他に類書のないものである。

美香弊乃譽路臂　一卷

此の書には紀年がないが、杜良權現に詣でゝ一昨年の冬二の股の麓より登りしとあり、又一昨年阿仁に遊びしとあるより推して、多分享和四年の七月から筆を起したものと思ふ。同じく大瀧附近の土俗風景を主題としてゐるが、季節による阿仁の風光に接せんがためか再び阿仁に吟筇を曳き、森吉嶽に夏の絕賓の吟眸を擅にし、大人や山人の話に興を催し、深溪の飛泉の音に耳を澄ましてゐる。

栩木澤を經て可笑內に至り、又荒瀨の銀山に滯留し、米內澤に出で檜岡氏の昔を偲び、川井村薄井村を縫ひて七倉の天神を拜し、連理の公孫樹に興を添へ兜の明神に賽し、雁木梯子や方言などを語りつゝ山本郡仁鮒に出で、舟渡りして薄井の秋林某方に宿る。

凡そ此の附近に筆を載せて遊べるは、未だ曾て翁の外には無い。翁の彩筆と麗辭を以て此の風景と

土俗を長しへに傳ふることを得たのは、同地方のため、又土俗研究者のための珍寶である。

贄能辭賀樂美　一卷

享和三年六月朔日、翁は扇田を出でゝ古蹟をたづねながら、今いふ仁井田村の古柵阯に藤原泰衡の古墳を弔ひ、又はぶかけの出土品を調べ口碑の數々を認め、出川村に入りて滯在し、大館にて秋田實泰が怪物を斬りし傳說を珍とし、亂川を横ぎりて釋迦內の里に最明寺時頼が廻國傳說を偲び、遂に松峯山に上りて珍寶の古鐸を見てゐる。

花岡村より櫃崎村の丸岡定政の許に宿りしときは、旣に秋風の身に覺ゆる頃である。

房住山昔物語　一卷

山本郡大幡寺の古記を其の儘採錄したものであるから、嚴密なる意味に於ては翁の著錄ではないが、翁の周到なる用意により、現在に傳りて朽ちざる昔物語である。其の採訪の年代は明瞭せぬ。

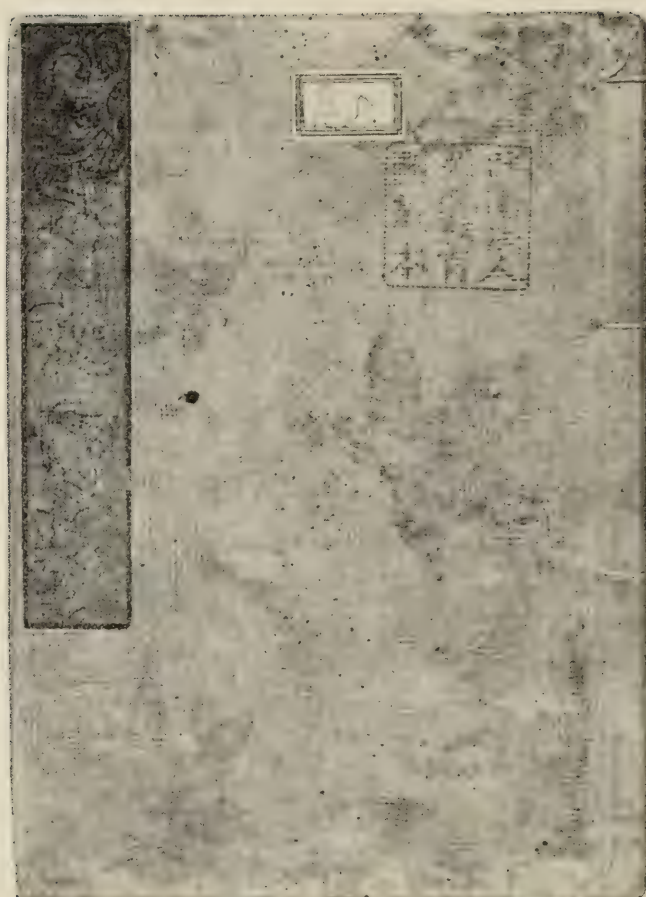
此の書は、故石川理紀之助翁の編集せる「秋田の昔」に採錄されてあるが、本書は前述の如く、大館栗盛教育團所藏の翁の自筆本によれり。

尙欄外の小標題は、適宜編者に於て撰記したものである事は旣刊第一集の凡例に記した通りである

が、此の『房住山昔物語』には翁が一々朱筆を以て小標題を欄外を附記してあるので、本書には是を其儘收錄したものである。

以上、本集に收錄した各卷につき大略の解說を終つたが、未だ研究の足らぬために說いて詳ならざる點も多い。更に適當の機會に於て翁の行程圖を添へて、其の年代と行路を明瞭にしたいと思ふ。

昭和五年十二月　　編輯同人

けふのせばのゝ

天明五年の秋、つかろちをへて南陪の鹿角郡になりて錦木のむかしを尋ね、岩手郡、和賀郡を過て仙臺路にかゝり、江刺郡に片岡邑に宿りたるまてかいのせたり。其言葉みしかうといひもたらされは、けふのせばのゝさ名つく。

葉月廿六日。あしたのま雨ふりてほどなう晴れ行、遠近のやまのけしきたくふかたなう見やりつつ行は、遠う行ならん鴈の聲のみして、しばしのうちに霧ふかうこめて、そことかたもしらされは、「いつこにかさして行らん山たかみあさゐる雲に消るかりかね。」となかめたるいにしへ人の心まておもひ出られて、あはれいとふかく過れは、又村雨ふり出て沾れつゝ來れば、みちのおくの南部鹿角郡土深井といふ里を左に出て、松山の舘をへて岨路わけくれは、木ぶかう茂る山陰にはら〳〵と鳴る音のうちしきるは、いかにと草かるゐけまきにとへは、鹿のなづきおしあて、雄鹿どしの、ぬかとぬかとをおし合ひ、角と角とを打たゝかはしけるその音といふ。いつこにやとうかゝへは、雄鹿ふたつ木立よりいてて奥山に去ぬ。これなん「伊夜彦の神の麓にけふらもか鹿の伏らん皮のきぬきて角つきなから。」とあるを、此こゝろにもいははいひてんか。わきてこの山路は鹿のいと多しといへは、このわらは聞て、名さへ鹿角にてとうちわらふに、

けふのせばのゝ

いつれをかかつの郡の名もしるくおしかあらそふ秋の山かけ。

ゆく〳〵も又おなしう、

　つれなしと待やわふらん角つきに雄鹿つまとふわさもわすれて。

新田邑

新田（神田とも）といふ邑につきたり。川水ふかくいてまさりて、舟わたさねはこゝに泊る。夜更て、かさ戸の鳴るに寐さめて、

　荻の葉の音せぬ夜半も身にそしむたひねの床に通ふ秋かせ。

廿七日。水あせ行たれは舟渡しぬ。此河を毛布の渡といふか。

　夢にさへふる里人にあひかたきけふの渡に袖ぬれにけり。

錦木塚由來

古川といふ村につきて、錦木塚と聞しやあると尋れは、稲かる女田の中に立て、かりあけたる田の面を行て、大杉の生たるあなたと鎌さして、そことをしへたり。としふる椙のもとに、ぬるての木、櫻の梢、かへ手なと、すこしもみちたる木々生ひまちりたる中に、土小高くつきあけて犬のふせるかことき石をすへたり。これやそのかみ、赤森の郷の邊に、月毎に市たちて家居あまたに、とみてにきはゝしき處ありてけり。其近となりの里に、柴田原といふにすむとしたかき翁、いつこよりかをさなき女子ひとりをやしなひ來りて、あかほとけとはくくみたてて、この女ひととなりてかたちきよらに、心なをく、あいきやうつきて、あけくれ

のわさには白鳥のにこ毛をませて、はたはりせはき布とをりて、その市にもて出てうるを、見る人ことにこの女にけさうし、又毛布のめてたさとて、われ〳〵とひこしろひあらかひてかふ。廣河原といへる里に男ありて、世を渡るわさには楓の木、まきの木（まゆみの木ならんか、鬼箭に似たり、犬まきとか）酸の木（勝軍木のたくひ）かはさくら、苦木（あふちの葉に似て葉さゝやかに長く、星のかたありて、味ひ苦けれはしかいへり）この五もとの木の枝を三尺あまりにして、一束にゆひ、なかどう木といひてけるは、仲人木といふ言葉にてやあらん。世にいふ錦木とは、この木ともわきて色よく紅葉すれは、うへいふにやあらん。むかしよりこと〳〵にいへと、いかゝあらんか。ひろ河原の男、なかどう木を市路にもて行てあきなふを人々かひて、わかおもふ女ある門のとにたつれは、女見て、わかすへき男とおもへは此木を夜るのまにとり入るを、おやは其ことしりてあはせたりといへり。千束といふも、この木をひとつか、ふたつかといふにてもしるへし。此にしき木うり、毛布あきなふ女のみめことからよきに戀て、あさからす契りて夜毎に人しらす通ひ、今は人めはゝからぬかたらひもしてんと、錦木のたかやかなるをその女の門にたつれは、女うれしうとり入なんとせりけるを翁ととめて、この男なせそ、よな〳〵あまたして立つるなかどう木の中にまだよき男やあらん、いかにも智あらん男をこそむこかねともなさめと、錦木うる男をおとしめそねみてけれは、すへなう翁の心にまかせたり。日毎に重る、いくつかの錦木はそのまゝに朽ぬ。此こ

梟谷、狐埼

けふの細道

淚川

ゝろをや、けふの細布胸あはさなゐことに世にはいひなしぬ。女おもへともそのかひなう、男くれともえあはて、物こしにしのひ、あからさまに夜な／＼ない別ぬ。翁、みそかに男の夜半にかたらふことをしりて、ひねもすひるはねて、よるはいもねす此女をまもりて、いさゝかもとには出たさす、布もうらせす。男いかゝしてか女を見てんと、翁のまどろまんまにとうかゝへと、いともものかなしき聲に、けちかくふくろうのなけは、翁ねさめしてしはふきぬ。ある夜は來りて板戸さと明て、いまはものいはんとおもふに、きつねの軒近う叫ふに翁の夢おどろかいて、ほゐとけさりき。このことをのちにいひつたふにや、いま梟か谷、狐か埼といふ名あり。翁ともすれは、あかしぶとて、山ふどうのかつらの皮を繩になひ、たへまつとして火ともし、うちふり／＼うちとを見めくれは、男くる夜も／＼逢かたく、こゝかしこと、あらぬかたにみちふみ迷ひ廣河原に歸りぬ。その行かひのすちを、奥の細みち、けふの細道といひて、風張といふ處のしたつかたに中りてあり。其通路に淚も露もいとふかう、物うしとはらひしとて、其まゝ草の露むすふなしと、田に在る女とものいへるにおもひつつけたり。

　しら露のおくの細みち物うしとはらひし草や今もむすはし。

鶴田村の邊になみた河といふめるは、あはぬ夜毎／＼を恨み、なかるゝなみたの顔をあらひたるより川の名におへりとも、又いつまて世にすみありつとも、あかおもふ女を見ることこ

そかたからめとや思ひけん、深き林に入て此男くひれ死けり。又、その川に身をなけたるゆへ、なみた川といふともいへり。女も、たゝ此男をのみ戀ひ、おもひやみて身はやせ、いたはり重く湯水のまれす、つゐに身まかりぬ。翁うちおとろきふしまろひて、かくはかりおもひふかく、せちに契しなかと夢にもしりせは、あはせてんにとてくひなけゝといふかひなく、せんすへもなけれは、親ともなくなく、男も女もひとつ塚の中に、男の立つる千束の錦木ともにこめつきて、其邊に寺を建て錦木山觀音寺といひしとなん。此男女の塚のもとにたゝすみて、なきたまに手向はやと、五もとの木の枝の、すこしもみちたるを折て莓の上にさし、紙に引むすびて、

錦木山観音寺

錦木の朽しむかしをおもひ出て俤にたつはしのもみち葉。
細布の胸あはさりしいにしへをとへははたをるむしそ鳴なる。

塚の口碑

といふ、ふたくさの歌をかいつけて、もとの田つらをつたひあせみちをくれは、かの田の面の女休らひてといふまゝ、しはしとて芝生に在てものかたりを聞は、中むかしの頃まて、ふん月のなかは、つかのうちにはたをる音の聞へ、物見坂といふより見れは、かたちうつくしけなる女の、はたものにむかひ居て機をるを、ある士のあやしみて、此ふる塚の中に女あらん、ほり見てんと、こゝらの人に仰て鋤鍬立てほりこほちてのちは、まほろしに見へたりつ

けふのせばのゝ

黒澤兵之丞
毛布の細布

るつかの俤も、さをなくる音もたへはてにき。さるころより、毛布をるわさはもはら絶うせたりけるといひ捨て、又鎌とりおりたち苅ぬ。うへ　「今は世に在るもまれなる奥布のもちひられしはむかし也けり、といふふるき歌思ひあはしたり。この古河の村をさ、黒澤兵之丞といふものの家に傳て今もをるといへは、それか宿を尋て、あるしのものかたりを聞に、いまはさらに鳥の毛ませてをることはえし侍らし、をりとして君に奉ることあるに、そのころは、家のうちと清らかに注連ひきはへて奉る。その織る女も湯あひ、いもゐして、うみそつくりて、をりいとなむとなん。はたはりのいとせはきゆへ、衣にぬひてはむねあらはるゝよりいふにや、今も南部布とて村々よりせはき布をり出しぬ、此たくひにこそあらめ。いにしへのみつきものには、きよらかに織て奉りたるならん、此黒澤かやに、そのかみよりをりつたへたるもゆへやあらん。「道奥のけふのせはののほとせはみ胸あひかたき戀もするかな。「おもへたゝ毛布のさぬのの麻衣きても逢見ぬむねのくるしさ、となかめおけるも、みな此毛布郡のこの宿にをる布の、むかしをよみし歌のこゝろ也。やをらこゝを出て、松の木村といふをくるに、石のおはしかたをならへたる祠あり。これや、しなの、越後、いては、わきて

花輪道

陸奥にいと多し。冠田村をへて涙川を渉る。「おほ空にわたる衢のわれならはけふのわたりをいかになかまし、とよめるは、この流とも、又古川と神田のあはひのわたりをいふとも、

たれしれる人なし。鶴田を過て村の名をとへは、鐵炮とことゝしういらへたるとき、たはれうたつくる。

羽よはきつる田のひなは心せよ鐵炮村の近くありつゝ。

花輪の里に出たり。「わかことひとりありとやはきく、とありけるはこと處にて、おなし名のこゝにもあるにこそあらめ。此里をはしめ、此あたりのわざとて紫染るいとなひあり。これを染るに、かならすにしこほりてふ木の灰をさすといふ。なにくれと子の字のみ付て物いふを聞て、おなしう。

野に出てひかしこにしこほりためて染るとそきくかつのむらさき。

かちまる餝摩の里にひとしく、筑紫、むらさいの野の外に、かく名の世に聞へたり。こゝを離て木の下に休らひ、

たけくまにあらぬ花回の松陰もひとり行身のたつきとそなる。

大里村にいたりて、作山誰とかいふ宿にとまる。

廿八日。うらふれて、おなし旅舘に居る。遠かたの、山の尾ことゝに雲のいつるやと見やるは、銅ふくけふりなりけるとか。その山より來るわらは、あちかのこときものに葺あまた入て、馬の歯つぶれてふくさの實を、ひたにくひくゝ行たりけるを見て、「あなうまのはつ

ふりくらふ童かな、とうちたはれたり。

廿九日。夜邊よりの雨つれ〳〵と、晴行けちめも見へねは家にをるに、菊池何某といふ村の長とひ來てかたる。

なか月一日。いまたあまもよの空なり。川水やふかからんとて、やのぬしせちにとゝめれは、けふもおなし宿に在て近きあたりを出ありくに、福用山大徳寺に遊ひて、恵音といふ僧としはしうちものかたらひ、此かへさ、やのをさなき童のあるにとらせはやと、物あきなふやに入て、くだものかはんとあくらによれは、年高き翁ふみども やりて、つづらこ、あるはこやうのものを、しぶのりもてそはりける。なさけふかからんふみもやとうかゝひ見る中に、錦木山觀音寺由來記としるして、黒うすゝづける册子あり。それしはしさいへは翁ゆるしぬ。ひらき見れはこはいかに、そのすち〳〵は正しからされと、大化のむかしに恵正法師のかい殘せるに、遠きいにしへを忍ひてこゝにのす。此觀世音者、人皇卅六代皇極天皇之御願所、當國之大守、敏達天皇第五之宮、瑞羅皇子之御建立也、其源者、人皇拾三代成務天皇之

觀音寺由來記

御宇、奥州黎民、動干戈度度也、其來由者、地理不分明、而民爭奪境、小者無勝、大者結黨、而鬪爭、故置郡司、正邪正、北奥州五郡者、大巳貴命廿六代之苗裔、狹名大夫、同帝三歲御下向當國、置吏長、分地理之上下、定町數限堺、令開墈溝、教農耕之道、自是農夫等、悅伏、而無爭堺、民人伏、帝褒美其勳功、改豐岳里、狹名之以狹字、稱號狹郡、狹名大夫、居官三拾七歲、仲哀天皇二年、於狹郡豐岳之邑薨、狹名大夫八代之後流、政子女、得工布絹、或時織始毛布、民間之兒女習之、而色色雜鳥毛織毛布、其頃同郡草城里長之子、某、戀慕政子女、而立錦木三歲、旣及千束、政子女、初程有懟人恐父心、重月而見彼容㒵、吾故不似初、面瘦恨聲入身中、如爲砭身、乍在身者古河里、心者在草城里、而業卽荒、父大海云、先祖文石不幸而落民間、家貧而雖在民間、自狹名大夫八代家名、人知之、嫁里子恥家名、先祖不孝之至也、制之不許嫁、長子自是伏病床、斷鍼藥飮食、推古天皇七歲、七月十日、遂早世、政子女、哭泣無止、心胸大痛暈到、而同月十五日、誘引無常風、命葉忽落、大海悲嘆餘、乞長子之亡骸、同穴政子女、而以千束之錦木共埋之、故號錦木塚、其後、敏達帝之皇子、第五之宮者、臣守屋之女、岩手姬御子也、故除皇子之列、奉成庶人配流奥州當國之部、吏猪人依蘇我馬子下知、爲奉弑北奥之部、吏有麻呂、竊奉迎五之宮、造宮奉恭敬、猪人初、五郡之官司等、來豐岳里、敬伏、三十六代、皇極天皇元、壬寅之歲、(天註――皇極天皇元年は舒明天皇卅七年にあたりて己丑にして壬寅にあらず。)五之宮七拾三歲、配流有勅免、而上京、在配所五十二年、此時

當國之產物、毛布細布三百反、砂金百兩、獻之、自是爲貢物、帝曰、大織官鎌子、朕、伯父七人、叔母十人、幸五之宮殘命、父大兄皇子、爲再會之念、御落淚甚、其時鎌子、毛布細布之由來、達叡聞、押御感淚流、狹名者、在往昔(マヽ)」又云　勳功臣且而名也命哉、至政子女家斷絕、堪痛哭、草創一宇之堂、慰亡魂、賜正觀音一軀、御長一尺八寸、求法之僧善信、自百濟國持來木像也、誠以難有勅願也、同四年、五之宮造立一寺所賜之、安置觀世音稱號錦木山觀音寺、孝德天皇大化乙巳歲、八月、導師、惠正法師敬白」とかいたり。からふみのまねひふかからぬ人の、はかなう作なせるもんしやうなから、そのことはつはらにしるく、遠き千とせのむかしまてそれと偲ぶに足れり。

二日。朝たつ。をりしも惠音ほつし、とよりさしのそき、又いつかなといへるに、

　昨日來てけふの細布たちさらはむねあひかたき別ならまし。

とて、やを出て、小豆澤村になれは、いかめしき大日如來の堂あり。そのゆへは、そのかみ田山の庄のうちに、平間田本といふ處に男女すんて、耕をわさに、めおつねに出てうちかへし、鍬を枕にひるねしたりける。男の鼻より秋津むしのさゝやかなるか出て、岩のはさまをめくり莓の雫やなめたりけん、羽ぬれて飛かへり、ひたんのはなの穴に入ぬ。妻もひち枕してけるか、おさろき男をおこしぬ。男起あかり、おもしろの夢見しといふとき女しかくと語

小豆澤村
だんびる長者物語

養老山喜徳寺

るを聞て、さらはその處はいつこ、いて行て見てんと、女のをしゆるかたをさして尋至り、苔よりつたふ泉をむすへは薫りみちたる酒也。あなうれし、あめのたすけにあへるものかなと、酒の泉のほとりに家たてて、風の吹付るやうに日あらすとみうどとなり榮ふるを、かしこくも帝きこしめして、そか持たる子やあると問せ給ふに、かたち、あづまうどににざる、うつくしき女子うめるを、やがてうちにめし給ひて、御后にたゝせ給ふとなん。里人蜻蛉をだんびるといへは、そのころの人だんびる長者といひたりけるとなん。このたちに居る、いくはくの人のくふよねかしく水のしろく流て、行水も眞白のふちせとなりたるとて、米白川とよふ。此河、鹿の角のやうにふり分てなかるゝとて鹿角の庄といひ、郡は狹布といふへきを今はもはら、かつの郡といひならはせり。長者身まかりてのち、この寺をたつへしの勅命ありて、養老の頃とかや、すなはち寺の名を養老山喜徳寺となん。三野の國、瀧のむかし物語におなし。いつらやまことならん。いとふるきみてらにや、運慶の作る五大尊あり、何の佛ならん、くちたるみかたしろあまたをたてならへたり。前なる大杉に養老のむかしを忍ぶ。いまた河あさからねは、河岸のさかしき山を左に分ゆき、からくして此河に渡したるといへる菱床橋はくちて、名のみかけたるそのもとに近う出たり。むかし此橋や、天狗のわたしそめ給ひしとて人ことに天狗はしといひ、又こと處に鈎木のみわたして、しのゝめになりぬる

湯瀬

またぎ

糸宿の女達

さて、そのまゝに在けるあり。そこを夜あけ嶋となんいふと、みち行友のしかかたりたり。

　入逢のかねの音する山かけも島は夜明の名に聞へぬる。

湯瀬といひて、湯桁の三ならひたるところありけるに湯あひして、こよひはこゝに宿りぬ。やまうとにましりて、山かたな腰にさしたる翁は、万太幾とて狩人の名也。かれかいはく、われ若かりしときは國々にはせありき、遠江、三河なとは分て久しうありつなと語るに、こは何わさしてかとゝへは、ずほうへり（偽ない）山とて露なきこかね出るとて、山てふ山をほり／＼て、人のかねとりて、安けにくらしつる盗人やうのもの也。そのむくひにや、今はかく夜さむのころさへ、あかづける布かたひらに、あしきものくひて、しし、ましをうちてはかなう世を渡ると、むかしのおかしをくひ、又此むくひの、末の子かけてなしかはよかるへきと思へと、わさなけれはとて煙ふき捨ていぬ。暮れは、女ともあまた苧笥かゝへてきあつまる、これを糸宿といへり。うみそするに、左あるは右の膝をあらはし、それなんたよりによりぬ。こは女の身もて、あるへきさまともおもほへねと、里のならはしとて、露はかり人にはちらうけしきも見へす。夜とともに、よろつうちかたらひて更たり。

　麻糸の長きよる／＼をとめらか話るまとゐや樂しかるらん。

宿近きあら河の波音、こゝらなく虫のこゑ／＼あと枕にひゞき、老ならぬ身も寐覺かちに、

さめては、いとどこし方のみおもひも捨ず、いねもつかれぬに、軒はの山ならん、鹿のゆくりなう、ないおどろかしたるに涙おちて、

ふる郷をおもひ出湯の山ちかくわきて物うき棹鹿の聲。

湯瀬を出て

三日。湯舟にいまだ星の影あかうさしうつる頃起出て、人みな衣ふるふわさして、こゝを出遠ざかる。人のいふ、過來し小澤てふ南に、長牛といへる山より砂金ほるといふは、皇の御代榮へんと、みちのく山はいつこも〳〵、むかしよりこかね花さきけるにこそあらめと。齋田、兒畑、佐比内などをへて折壁といへる里あり。こゝのあら垣に關手あらためて通しぬ。われ持たるいさゝかのこかねは、やはしき世のよねのしろにつかひはてて、椎の葉に盛らん料もなければ、ゆく〳〵、うすきころもひとへをうりてむとおもひつゝ、

いくちさときならし衣ぬきかへてあしをかりねの長きせにせん。

めくら暦

と、なかめたるをかたれば、人さもといひて又歌をわらふ。やをら田山といふ里に出たり。このあたりの村にては、ものかく人まれに、めくら暦とて、春より冬まで一とせの月日の數を形にかいて、田殖へ、耕の時をしれり。世にことなれるためしなりけり。吉澤たれといふかやにとまる。

曲田宿り

四日。ようへより雨ふる。苗代澤村梨木峠を行に、牛をふ男、けふはもゝさゝを行て宿から

んにいそけと、さきなる子らにいふ。道をとへは一塚といひ、あるは一里といふ。六町を一里とし、ひとつかとは七里を合て、よそちふたまちをいふなりけり、この國のならひ也。牛馬のゆきかひしけう、路は田の中のことにぬかり、はきふかうさし入て行なやめは、日たかう曲田（まがた）といふ邑に宿つきたり。夕附行ころ、雨は晴たるに露いとふかう、外山の鹿の聲高くなけは、やのわらは窓にかしらさしいたし、あの山にて、かのしゝがさかぶことよといへは、男ら、鹿は世におもしろきもの也。何かしの神の夜みやありつるに、こもりゐかしたるあした、笛つゝみの聲にうかれて、放ちたる野かひの馬にましりて、角ふりたてておどり〳〵めくるを、この小童（がき）めかさかびしまゝ、木山の中にみなとひ入ぬ。われ、かや野にかくろひゐりて見しをりの樂しさとかたるを、ねふり〳〵聞ゐたる翁あくひうちして、さるゆへ世中に在る獅子儛は、鹿踊を見てはしめたるといふか誠ならんとかたる。鹿は聲のをやみもなうなけは、枕とりつゝ、

（鹿の踊り）

さらてたにさひしき夜半の草枕なみたなそへそ小雄鹿の聲。

五日。とのしらみゆけは、女戸おし明て、こは水霜（露をしかいふなり）しろ霜ましりふりたりとて、眞柴折くへ物にるにあたりて、出たつよそひす。けふは末の松山見にいかんとおもひて、とくとくと出ぬ。梨木坂のこなたよりは二戸郡といへり。保登澤、石神、中齋、駒ヶ嶽をへて、淨法

（二戸郡に入る）

桂清水

金葛村

寺村とて椀、おしきやうのものをつくりいたすをわさとせり。むかし、淨法寺なにかしといふ人しるよしして住給しなと語る。吉祥山福藏寺に入て活龍上人とかたらひて、こよひは此寺一夜をとありけれと、こゝろせけはこの寺をまかんてて、石淵、岡本なといふ村々をも過るに、老たるほうし、しりよりゆくりなう聲をかけていはく、いつこにか旅人は行そと、こたへて、世にありとある、かしこきところをこそたつね奉り侍れ。老ほうし、さらは、こゝにも桂清水とてたふときところあり。いて、をしへ申へしとて、としふる桂木の根より水細くわき出るにほくらゐたてり。是なん、むかし圓仁たいしの夢のみさかありて、もとめ給ひしとかたり、はた、みてらの觀世音は行基菩薩の作給ひて、そのいにしへは聖武天皇の建給ひて、そのかみは、いかめしき堂とも多かりつるなと、御前にぬかさけて語るを聞て、水月の意を、

かしこしないく世桂のかけそへてなかるゝ水の月やすむらん。

山路はる〳〵とわけ來て、金葛といふ村にやとかり、うすき衣をかたしきて、いもやすからぬに、あれたる板戸のひまより夜半の秋風寒く吹入て、はたへをおかすに、いとゝふしもつかれす。風なひきそ、衣重ねきてよと、あと枕のかたくへなとし給ひし父母のふかき情を、いまはたおもひ出て、たゝなみたかちに夢もむすはす。

あなさむし衣織ぬふ人もかなくすのかつらや糸によらなん。

六日。筑館、十日市、中澤、一戸の里のはつれよりしはしゆけは、「をのかつま波こしつとや恨むらん末の松山雄鹿鳴也、と、家隆のなかめ給ひしをすして麓に到る。今は浪うち坂といひ、波うち峠といふ。上れは、土の中よりわれから、波間かしはそなと小貝ほりて、つとにとひろふ旅人あり。この山越れは福岡の郷に出るといふ。「おもひこそ千嶋のおくをへたてねと、とありける壺の碑は、坪といふ村に埋れてあり。「しほかせこして衡鳴玉川は閉井郡也。徒膺の薦いづてふ處は、外ヶ濱邊にも、また此あたりにも、宮城野の邊にもありといふ。此末の松山を仙臺路にも在けるは、夫木集に、「波にうつる色にや秋の越へぬらんみやきか原のすゑのまつ山、といふ歌のあれはいふにや。しかはあれと、本中末と、そこにはあらじかし。この浪うちは、近き邊に中山といふすくあり。これなん中の松、本の松は盛岡に在りとかたる人もありき。いつれやまめならん。ふたゝひ一戸にかへりくとて、多かる薄に風落ちわたるを、

風吹はこゆてふ浪と見ゆるまてなひく尾花か末の松山。

小澤の袖家にて

栖穴村、白子坂、荷坂、宮口、小澤に來けり。こゝにこの夜をといへは、やのあるしの女、よねてふものをひとつぶも持ねは、やとすことかなうましとて、ゆるすべうもあらねば、ひと夜斗はものくはてもやあらんかし、みち遠く足つかれたれはと、ひたにいへは、さらはやとり

ねさて、やをら栗の飯に、しほつけの桃の實そへてくれたり。をのれらは栗のみくひぬ。ことしも又、はたつものみのりよからす、わひしき世中とうちなけきて、これもて枕にとて、米はかる枡とり出てふさしむ。いぬれは風はけしく吹に、ふる郷の夢もなこりなうやふれて、

露なみたますほの薄枕にてかりねの床の風そ身にしむ。

ものの音したるに又めさめて聞は、とりもいまたなかぬに、やの翁火いたくたきて何ならん磨ぬ。枕もたきて見れは、爐のへたにをのまさかりを、ひのわれのやうにときならへたり。こは、この離家に在てわか命やほろひん、又おひやかし、かねあらはとらんとやするか、衣やとらん。さりけれは、いかゝしてこゝをはのかれんとためらひ、みしかきさひたちを身にそへ持たるに、たましゐをこめて、ひそみたちてひかへたるをやしりたりけん、ひけかきなてて、くま〱に光る眼をとはせ、白髮ふりみたしたるは、ふりさへおそろしきに、とより人のけはひして戸あららかに引あけて、あら男二人かしらは布につつみ、はちまきして、けらといふみのきて、そのくひに、はひろのまさかりをさして、かまのはきまきして爐の中に足さし入て、寐たるはたそ、旅人といふ。ひとりかといひて、其こたへはあらて、夜あけぬまにといふに、いよゝ心おちゐす、おそろしさいはんかたなし。翁聲たかう、みな來り、兄なく〱とよはふ。さらにこたへねは、春木（樵木をなへて春に伐れは、しかはる木といふ）の大なるして、板しきも通れと二うち、三

うち打て、兄おきよ〳〵といふに、おき出てこてさし、はきまきしておなしさまによそひ、門より歌うたひていさなはれ出行に、あきれたり。ことしらされはおやしみたり。おき出て、人はいつこにとヽふ、こたへて、山に行たり。また夜ふかしといひつヽふせは、こはいかにそや、かはかり人はうたかふものかは、あかこヽろより鬼も佛もをのつから作り出んは、いとやすけなるものかと、はちらひてふしぬ。

小澤より沼宮内まで

七日。飯いてたり、おきよといふにうちおどろけは、よへの人々ゐならひて薄墨色の飯をくひぬ。われも、れいの女郎花を椎の葉の露はかりなめて、雨ふるに出たつ。高屋鋪、笹目子、小繋、日行、中山のうまやに到る。

錦着て歸るとや見ん旅人のわくる紅葉のなかの松山。

御堂の觀音

摺糠、馬羽松（馬不食とむかしはいへり）といふ處あり。頼義のおほん馬の料の糠くちすたれて、うまのはまされは捨たる處の名なるとなん。御堂（みどう）といふ村に來り、こヽにをさめたる觀世音ほさちは、うまやとの皇子のおき給ふとも、はた、御堂は田村麻呂のたて給ふともいひつたふ。北上山と鷄栖に額あり、御前にいさヽかの泉あり、これ北上河（いにしへは上川といふ）源也。ねかひある人は、この水にかうより打とて、紙をさき、かうひねりをして水の面になぐ。かなふべきはしつみ、うけたまはぬは浮きたヽよへるとぞ。ふかね、かいらげなど行に旅人の云、こたひ八戸のほ

卷堀の金勢大明神

長根の千本松

とりは水あふれ、なか〳〵のさはき也と。されはこそ玉川、みやしま見んことをとゞめつれとかたりあひて、くら〳〵に沼宮内（ぬまくない）とて、がまのはぎまきつくりあきなふ里に宿とふ。鷹の鳴たるに、

雲井路をゆきやわふらんおもひやるわれも夜寒の衣かりかね。

八日。つとめて寺林、河口をへて、卷堀といふ村に齋ふ金勢大明神といふかん籬あり。こは名にたかふ、石の雄元の形あまた祠にをさめたるはいかにととふに、近きころ盜人とりうせたるを、もとめいたし奉りてのちは、此里のこと處のやにと人のこたふるを聞て、其處にあないさすれは、一間の小高きところの机のうへに、黑がねのなゝき斗のおばしかたをふたつ、みなくさり付たるをいやし奉る。あるしにゆへをとへは、むかし、粟生（あはふ）の草ひきやる女のたぶさにさはるものあり。あやしの形なれはとり捨たるに、ふたゝひしかせり。さりければとり持かへりて、道祖神といはひたいまつりしかはしめといふ。實方朝臣の見たまひしはここにや、又こと處にや。澁民（むかしは枯杉といひし處といふ）邑に來けり。長根といふところに千本松とて、ひともとの根より、いくもとも生ひたてる木のかれたるもつれなし。

生ひ初し松は一木をいく本か過しちとせの數にたちけん。

此したつかたに、ぞうり、わらんつ、すへてはなをもなきふみものを木の枝にかけたるは、わ

鍵錢と鄙唄

らはやみやめてとねきことして、いゆれは、かくなん人ことにかくるといふ。女あまたうすつくを見れは、鍵錢とて、せに、みそ斗に鍵あまたを緒につらぬき腰に付たるか、杵とるほうしに鳴りぬ。又聲をそろへて「はちのへの、とのご達は、にちやうさいた能さいた、おらもなたと鎌、にちやうさいた、能さいたな。」「十五七か、澤をのぼりに笛をふく、嶺の小松がみななひく。」とうたふを聞て、

　榮行みねの小松に笛竹のちよもこもれとうたふ一ふし。

巖鷲山

左に姫か嶽といふ山あり。右にいや高きねのありけるを、かんじゆさんといらへたるは、「とへは名をいはての丘ともしるへきを奥の不盡とはこれをいはわしと、圓位上人もなかめ給ふと、里の子らかあだしことにつたへき。巖鷲(かんしゅ)は岩手(かんしゅ)をかいあやまれるにやとおもへと、鷲の形したる岩ありなと、「口なしの一入そめの薄艶いはての山はさそしくるらん。」といふ名たかきをなど、かく、まち〳〵にはいふらんかし。このあたりは、「誰れをともいはての野邊の花薄招きにまねく秋の夕くれ。」「とにかくに人に磐手の野邊に來て千種の花をひとり見るかな。」といふ、ふるき名ところにやあらん。此みねに雲のをるもねたく、

　紅葉するいろこそ見へねかゝりてはそれといはての山の白雲。

磐井の郡、あるは信夫の郡にも此山のありといふは、「別路はけふをかきりとみちのくの

いはてしのふに沾る袖かな。」と、師氏のなかめありけるより、しかいへるにや。そのむかし岩木山に安壽姫をまつり、此たけには津志王丸をまつる。又いふ、岩木ねはつし王のみたまをいはひ、此たけに安壽女のみたまをあかめまつれは、安壽山といはんをあやまれるなと、後の世の人のくさ〴〵にいふに心まとひぬ。まほなることやいかに、知る人にとはまほし。此あたりにたゝら山といふなるは、「陸奥の吾田多良眞弓つるすけてひけはか人のわれを事なさん。」と、よみけるところにこそあらめ。夕霧にこめて見やられす。

わかもかく心ひけはかあたゝらの眞弓の紅葉いかにそむらん。

森崗に出たり。とみうと軒をつらね、里ひろうにきはゝし。北上川の邊に宿かりつ。舟橋あり。かみ河のひろ瀨の面に舟をひし〳〵とならへて、行かふ人も上弦の光にあらはれたり。

ふなはしの數もしられて行かひのあらはれ渡る月の夕影。

九日。けふのいはひに、菊のふゝみたるを折て朝とく出たつ。

いさ今日の例にぬれんとしら露もはらはてかさす菊の一枝。

はたち斗も小舟を早瀨にうかへ、中洲に柱立て、かなつなを引はへつなき板をしいて、うまも人もやすけにわたりぬ。此はしめは毛詩大明の篇に、造舟爲梁となんありけり。晉の杜

預といふ人、富平津といへる水ひろきながれに舟をならへて浮橋としけるを、武帝、觴をあけてめてくつかへり給ひしとなん。佐埜のふなはしとりはなしと、ふるき言の葉にいひわたり、あるは越の國にありとのみきけと、いまたふみも見されは、めつらしく、たゝすみ〳〵わたる。このあたりの業には、なへてあまごころとて、黄精をむしたゞらかし、あるは膏のことにしてうるめり、いみしき藥也。津輕町、上野、見前といふ處のあれは、

月花のたよりよからん泉郎のかる見るまへてふ名こゝに在けり。

日詰にて

やをら十日市町となんいふを過る。これより郡山といふ。大槻の觀音と人のたふとめるは、聖武のみかとのおき奉り給ふといひ傳ふ。日詰といふ處あり。これなん、淸衡の四男樋爪太郎俊衡入道の館の址は、五郎沼のひんかし北に在といへは、處の名にもいふならん。路のかたはらの石ふみに志賀理和氣神社とかき、裏に赤石明神とえりたり。しかりわけの神は、斯波郡にひとつのかんかきといふは、此おほん神なれはまうて奉る。又祠を北上の河の涯近くひんかしにそむけて立るは、此みな底に夜毎〳〵に光る石あるをとりて、神とはまつりしとなん、庵よりほうしたち出て話る。櫻町といふ村あり。

春も又こゝにとはなん山さくらまちて梢の紅葉をそ見る。

志和の稻荷

西なる吾妻峯(あつまね)といふ麓に、志和の稻荷といふ神あり。いにしへの鹿獵分の社こそ、此神の瑞

離を申奉りけめと、をしゆる人ありき。しかはあれと、行みちしれされはとめつ。このおほん神や、倭日向建日向八綱田命にておましますときけは、よみて奉る。（天註――姓氏錄云、輕部、倭日向建日向八綱多命之後也。雄略天皇御世獻加里乃郷、仍賜姓輕部君。同云、豐城入彦命男倭日向建日向八綱田命。續日本紀云、入彦命子孫東國八腹朝臣各因居地賜命氏。）

八束穗に秋の田の實やみのるらんこは鹿かりの神の惠に。

かくて細きなかれをたくな河とてわたれは、ゆふへになりぬ。

行水や海士のたく繩くり返すいさまも波にくるゝ秋の日。

くれて、石鳥谷といふ里に宿つきたり。

十日。大瀨河といふに土橋かけたるを渡る。この流は藤原朝臣盛方の、「ほともなくなかれそとまる逢瀨河かはるこゝろやゐせきなるらん。」となかめ給ひしは、これと、もはらいへり。八幡を過て宮部をくれは、花卷といふうまやあり。むかしや牧のありけるやらんとふに、さはこたへす。むかしは河岸に花多くありてちりうく頃、水にうつまかれてたゆたふよりいひし名とこたふ。こゝに居る伊藤修といふくすし、けふは止りてとひたにいへれは、日たかう宿もとめたり。夕暮ちかつくに旅人ふたりとふらひ來るは、五瀨の國より國々めくるとて、櫁正唯、岩波良清とて歌よみ、はいかいする人也。

花卷の驛

伊藤修

十一日。けふも人々とともにまとゐして、あかす旅の思ひも忘れたり。

けふのせばのゝ

十二日。この人たちことかたに出行を、名殘猶やらんかたなう、いつこにてめくり逢んと契てたゝはやといふ袖をひきて、此日斗はとておなし宿に暮たり。

十三日。けふはとてともにものしたるを、われ斗せめてはとて、山田のひたに止められて出たゝす。正唯ふてをとりて、

めくり逢ふ月の例をかけておもひけふの別を夢いふな君。

とりか鳴東の奥はいととしく別れかたくそおもほゆるかも。

といふ、ふたくさの歌作てわれに見せける返し。

めくりあふ月のためしはおもへともけふの細布たち別うき。

別行ちまたもつらし鳥かなく東のおくをかなたこなたに。

いはなみよしきよの句に、

見ととけよ木々の錦のしたしみつ。

となんありけるに、

ひとりはらはん露のやまみち。

とつけて、里のしりまて人々と友に送り出て歸るさに、あふけは早地峰（はやちね）とて高きねに瀬織津比咩をまつると聞は、ぬかつきぬ。其近き邊に十握のみやといふありて、そこには日本武の

日本武尊古戰場

みこその、みいくさひきゐ給ひしころの、みかりやのあとといひつたふあり。この山より射はなち給ひしかぶらのひゞきに、みなをそりわなゝき、おかせるゑみしら、名残なうにけしそきたりとか。其箭のとゞまりしみねを、的場山といふとかたるを聞つつ、修の家に至る。くるれは、こよひの月見んと人々も集ひ來るに、とにあふきて、

明らけき月のこよひの初霜に手折わつらふ庭のしらきく。

火事に遭ふ

十七日。この二三日は風おこりて、日記もせすふしくらすに、戌の貝ふくころ、とに聲たかふよはふはいかにときけは、すは火のこと也。とよめきさはくに、はや、ちかとなりのやまてけふり立わたり、なにくれの調度ともてはこふにましりて、われもこゝらのふみともおひもち出て、あるしをたすけぬるほとに、枕とりしあたりもみな火かかりて、一ときのうちに、あまたのやは灰となりて夜なんあけはてぬ。いみしきわさはひにあへりと、おしなへてうれへなきさはきたり。

老女方言

十八日、修はやのしりに、ゐくはところのよきやのあるにうつりて、われに、しはしはかゝるさはきをな見捨そ、いましはしありてと、やの人こそりていへは止りぬ。遠きさかひよりこゝにすみつきたる老たる女、布前たれをし、頭はつゝみにかくしたるか來りてあるしに、藥たまへ、あが家のやまうどやいつか〳〵よからん。「糸はねの一筋もなでねへし、つづれや

つこもささねへし。垣ねかいたま、猫けた物がもくりありく。」に、又おやこまきはやけたれは、此さし、いかゝくれんとうんしてさりぬ。此物語きゝもしられねは、いかゝそと居る人にとふに、このあたりにては、たゝ麻苧の糸をのみ糸はねといひ、引をなづるとはいへと、ことくには、えしり侍らしとかたはらよりこたふ。ふるきこと葉にやあらんと、きゝつゝ戯れうた作る。

糸なです綴奴もさゝすきてあれにあれたる垣ねかいたま。

このかりやに日数へぬ。村谷守中といへる人、情ふかう、うすき旅衣して夜寒の秋風いかゝしのきてんと、綿あつ〳〵と入たる衣くれたりける。うれしさに、「ものたうひしひとにをくる」てふことを、もと末の上と下とにおいて六くさをつくる。

もみち葉の色こそ増れきのふけふ時雨にけりな峰はいくたひ。

のち山路見しは物かは語りあひおもなれてこし里はいくさと。

たち別れ行空もうしあすよりは獨たとらんしらぬ山路に。

うらかるゝあさちかや原ふみしたき野邊にやからん草の枕を。

ひたすらにかけてを通へ玉つさはをたへの橋の絶す久しく。

しももやゝおくの細路ふみ分てけなんおもひは別とそしる。

廿七日。くすしをさむのやを出たつに、あるし。

しら雲の立へたたれる遠方をよそにのみ見て戀や渡らん。

と、よみてくれたりける返し。

ふたゝひと契おきても白雲のよそに隔る身をいかゝせん。

行〳〵紅葉のおかしかりなんなといひて　守　中。

草枕うき旅かけて故郷に艳の衣きつゝ行らん。

かくなんありける返し。

ふる里のつとに見なまし唐錦艳色そふ人の言の葉。

月見しこと、なわすれ給ひそとて　文　英。

草枕むすふ旅ねの夢にても見し夜の月の影なわすれそ。

と聞へし返し。

友に見し月の圓居のわすれしなしのひてもかな空にしのはん。

ふたゝひとて　文　英。

別ても心へたつなながめやる空ははるかのさかひなれども。

とそありけるに、返し。

けふのせばのゝ

わかれてはことこそたゆれ大空に通ふ心はへたてさりけり。

又おなし人々の句に、

これよりや夢のうきはし時雨めり。　溪路（あるし修を溪路といふ）

日うつりやかさしの笠に女蘿もみち。　買絲

人遠し撮折はきにあきのかせ。　守中

笠めせは君と秋との餘波かな。　至岳

きくに名をこめてはおしきわかれ哉。　素綾

鳥屋崎城

この人々送り出て、みちの左に鳥屋崎の城といふ、これなん琵琶の柵といひて、安陪頼時のつきそめ給ひしとかたり、又道のゆんてめてに、としふりたる槻と椋の生立るを筆塚とて、頼朝のむかはせ給ひしころほひより、生ひ立りし木にてありつなといふを、

治れる御世のしるしは毫塚にかきつもりにし年そしられぬ。

和賀に入る

送り來つる人々は、豐澤川の橋をふみ過きて、こゝに扇堀とて、人にふたゝひ逢んあふきてふ名のよけれは、このきしべよりみな歸りけり。十二町目といふ村中に、對面せきといへる細きなかれあるより、稗貫、和賀と郡はへたつなと、處の人のをしへたり。成田村を過て岩田堂、二子、この二子に、あやしのあみたふちを八幡といはひたり。飛馳森（きやせ）といふなるは、天

正十八年の春のころほろひたる、和賀主馬のかみと聞へたりし城址なり。此主馬の君の遠つおやは、多田薩摩守頼春の末也。頼春の君は、伊藤入道祐親の女満幸の前のうめるころ、祐親入道都より歸來て此ちごを見て、こは、たかぞ男やあらんとゝへるに、まんかうの前のまゝ母きみ、見たまへ、此子は蛭か小島のにゐ島もりかうませたる、おほん孫にてさふらふなり。瓜なんふたつにはやしたらんかごとに能似たりと、にくさけに足もてかいなて、こなたにおもむけてけり。すけちか、なに頼朝の子なるか。平氏への聞へ、又つみんとのたねといひ、たすくへうもあらしと、はらくろにのゝしり、水深き淵に捨へし、とく／＼といへれは、すへなううしなひ奉りしとこたへて、齋藤五齋藤六と、曾我太郎祐信等とこゝろをあはして、このをさなき君を、人しらすたすけまゐらせはぐゝみたてて、頼朝、あめかしたをまつりごち給ふのときをまち得て、君、信濃の國善光寺にまうて給ふをりしも、みちすから、このわか君のうへを申いつれは、頼朝公、になうめてよろこひ給ひて、梶原をめして、いつらの國にか二三萬石のところやあらん、とらせよとのたまふに、みちのくならて、かきたる城もあらさるよしをけいすれは、それにとのたまひしかは、住給ひしとなんいひ傳ふ。齋藤五齋藤六は、のちに小原八重樫と名のりて、此末今も南陪にいと多しといふ。其城の址に、夏と秋とふたゝひなる栗の樹も侍ると村長か語るに、日影かたふき、早地峰をむかふに風いと寒

く、見るく、

冬ちかみあらしの風もはやちねの山のあなたや時雨そめけん。

黑澤尻といふうまやにつきて、昆といふ何かしかやに泊る。

廿八日。あるしにいさなはれて、阿部のふる館のあと見にとて行ぬ。加志といふ處に、黑澤尻四郎政任のありしいにしへを偲ぶ。北上河をへたてて、國見山のいとよく見やられたり。國見てふ名はところ〲に聞へたり。神武の帝八十梟を國見丘に撃給ふのとき、「かん風のいせの海の大石にや、いはひもとへるしたゝみの、となかめ給ひしこともありけるをおもひ出、はた「やまとにはむらやまあれととりよろふ、あめのかくやまのほりたち、國見をすれは、とすしたり。里人のいへらく「音に聞くにみの山の霍公鳥杏背の渡くり返しなく。」又いふ「みちのくの門岡山の時鳥稻瀨のわたりかけて鳴也。」此ふたくさ、いつれをまことさいひもさためん、歌はれいの西行にたぐふ。むかし和賀郡、江刺郡の境をあらそふこと、とし久しかりける。その頃白狐、にぎてをくはへて駒か嶽にさりぬ。これなん稻荷の神の、その筋をしへ給ふにこそあらめと、あらかへるものらか中うちなこみ、あなかしこさかたりあひ相去さ、鬼柳の邊まて水落をあらため、さかひには二股の木を植へ、あるは炭を埋みたり。これなん炭塚といふ。さりけれは、その川を稻荷の渡、あるは飯形瀨といひつる

を、いまはいなせの渡といふ。又西行上人といひはやすうた「みちのくの和賀と江刺のさかひこそ河にはいなせ山にまた森。」といふあり。いなせの渡を岩城川（同名ところ〴〵におひたゝし）といふ。廿九日。きのふ夕つかたよりの雨、けふのあしたに猶ふりまさりてけれは出たゝす。この日三九日とて家ことにいはひ、わきてすゑの九日なれはといひて、茄子の薰ものくはさるはなし。雨はいよゝふりくれて、つれ〴〵とひとりともし火をかゝけて、人の書おける冊子ともありけるを見れは、いつれのおほんときならん、むつきのはしめつかた春日山に鹿の鳴たるは、いかなるためしにやあらんとけいし奉るよしを、この南陪十二代にあたる信行の君、そのころ都におはし給ひて、「春霞秋たつ霧にまかはねはおもひわすれてしかやなくらん。」となかめ給ひたるを人ことにすしつたへて、はて〳〵は叡聞に達し、主上あさからすやめて給ひけん、松風といふ硯を信行の君にたはひ給ふ。此松風の硯は、むかし本三位中將重衡受戒し給ひけるとき、法然上人にまゐらせられたるのちは、うちに在りたりけるを、こたひ信行にたうはりて、なかく南部のたからとはなりぬ。硯の大さ、いつき、むきはかりにして、青き石もてつくり、世にたくひなき器なりけるとなん。又いはく、この廿九代にあたり給ふ重信の君は、あやしう歌にこゝろさしふかく、天和三年五月七日、五月雨の晴ままち得て大樹公ものになんまうて給ふに、五位下にてしたかひ給ふに、不忍池の邊に逍遙し給ふをりし

南部信行

南部重信

も、雨一とをりふり過てけしきことによかりければ、重信やある、此なかめいかゝとありしかは、「飛かねて上野の池の五月雨にみの毛もうすき五位のぬれ鷺。」公あさからすめて給ふのあまり、その夜四品になり給ふければ、重信の君、そか鳥の羽色の衣ぬきかへて、たもとゆたかにかへり給ふたるなとありけるを、めつらしく見つゝ、

家の風ふきもたゆます水くきのあとさへ花と匂ふことの葉。

狐の館

三十日。けふも雨をやます。あるしの云、冬のするよりむつきのはしめに、この西なる後藤野といふひろ野の雪のうへに、狐の館見ゆ。又七戸の三本木平(たい)といふには、きさらきの末つかた狐の柵ふるなりと。」これなん山市のたちけるを、後藤野にはきつねのたてといひ、さんぼんぎたひには、きつねのさくといふと也。こしの海の海市を、狐の森といふたくひ也けり。或地市ともいひけるものか。

黒澤尻を出て

かんな月の一日。晴たれは黒澤尻をいづ。あるしも、いでそのあたりまてとて、ふたゝひ政任のうしの館あと近く送り來りてけるに、かいやる。

冬來ぬと身にも時雨の雫そめぬわかるゝ袖をしるへとはして。

しはしその毫をとこひて、あるし　　　　看　山。

今朝そしる手をわかつとき日のさむみ。

とかいて、いかゝあらんと見せけるに、

袖にきのふの露氷る也。

といひて別ぬれは、北上河をふねにてさし渡し行に、やなかけて鮏とる人々水の邊にゐならぶか、いとさむけに河風吹ぬ。男岡、國見山を見つゝ過れは、橘村といふあり。

すむ人の衣手寒く立花の實さへ枝さへ霜やおくらん。

寺坂を越れは門岡村也。南陪を離れ、江刺郡に入て鎮岡神社をたつね、ぬさたいまつらんと鶴脚、倉澤といふをへて、片岡てふ處に宿かりたるあかつき、

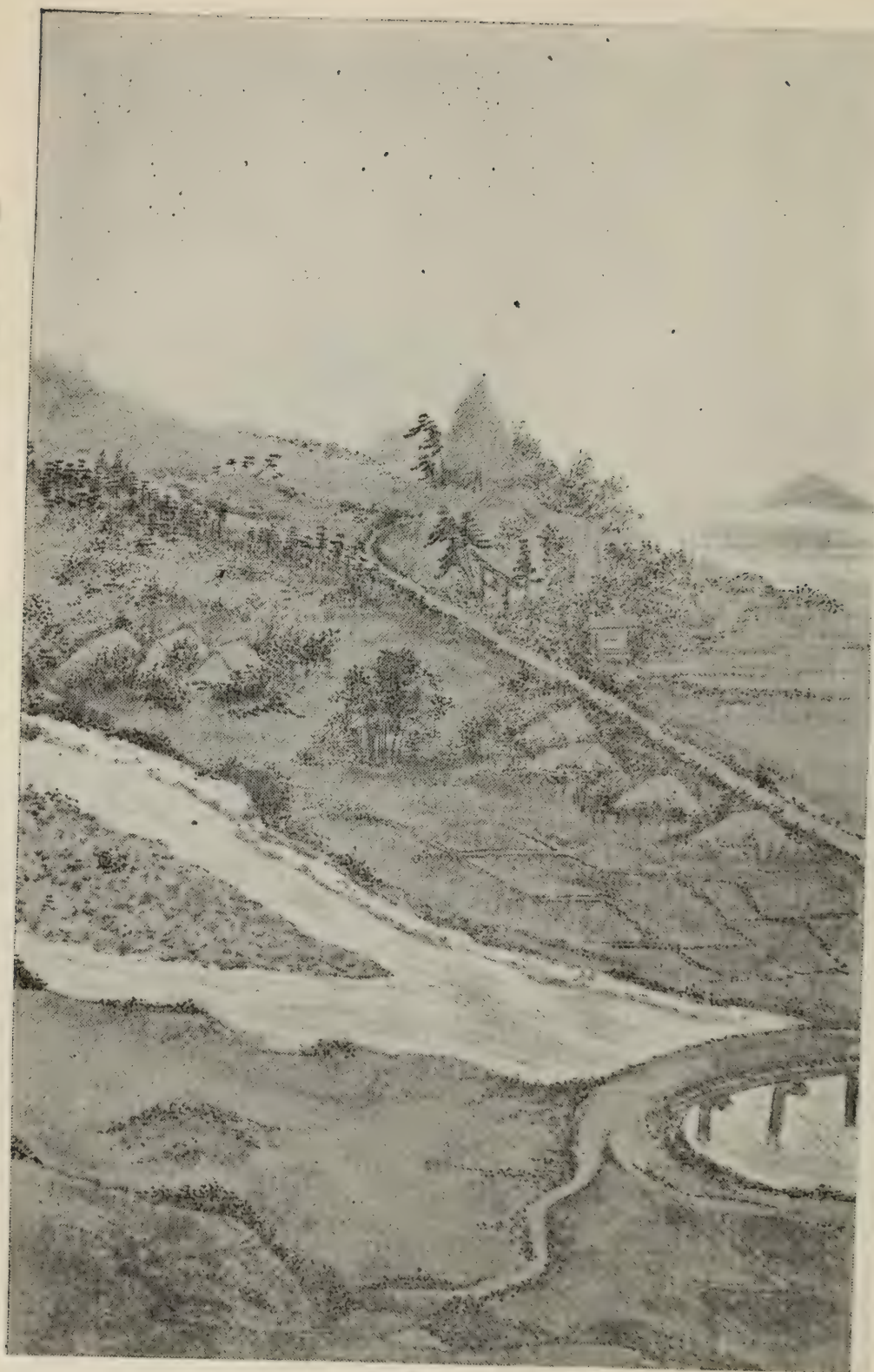
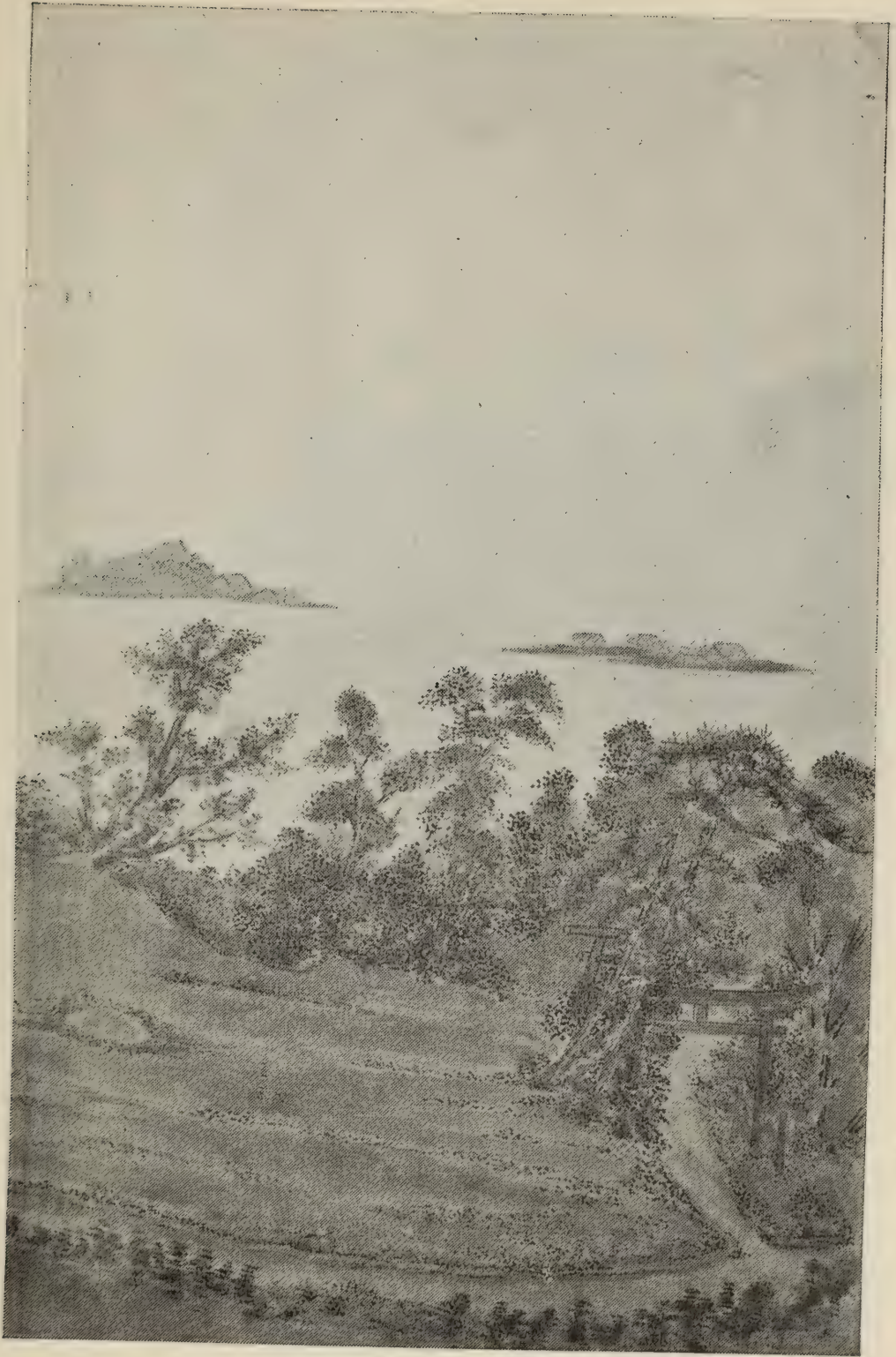
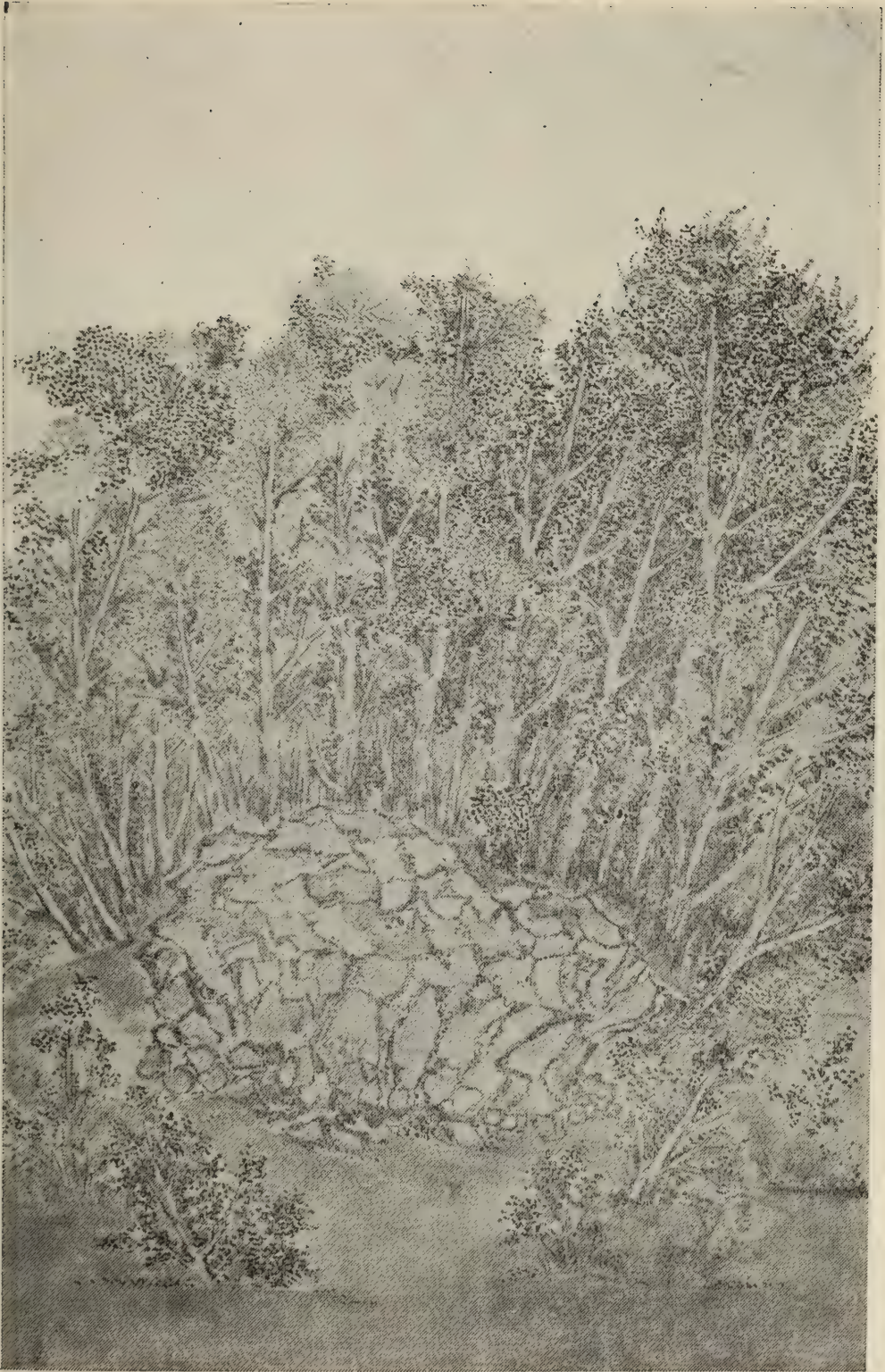
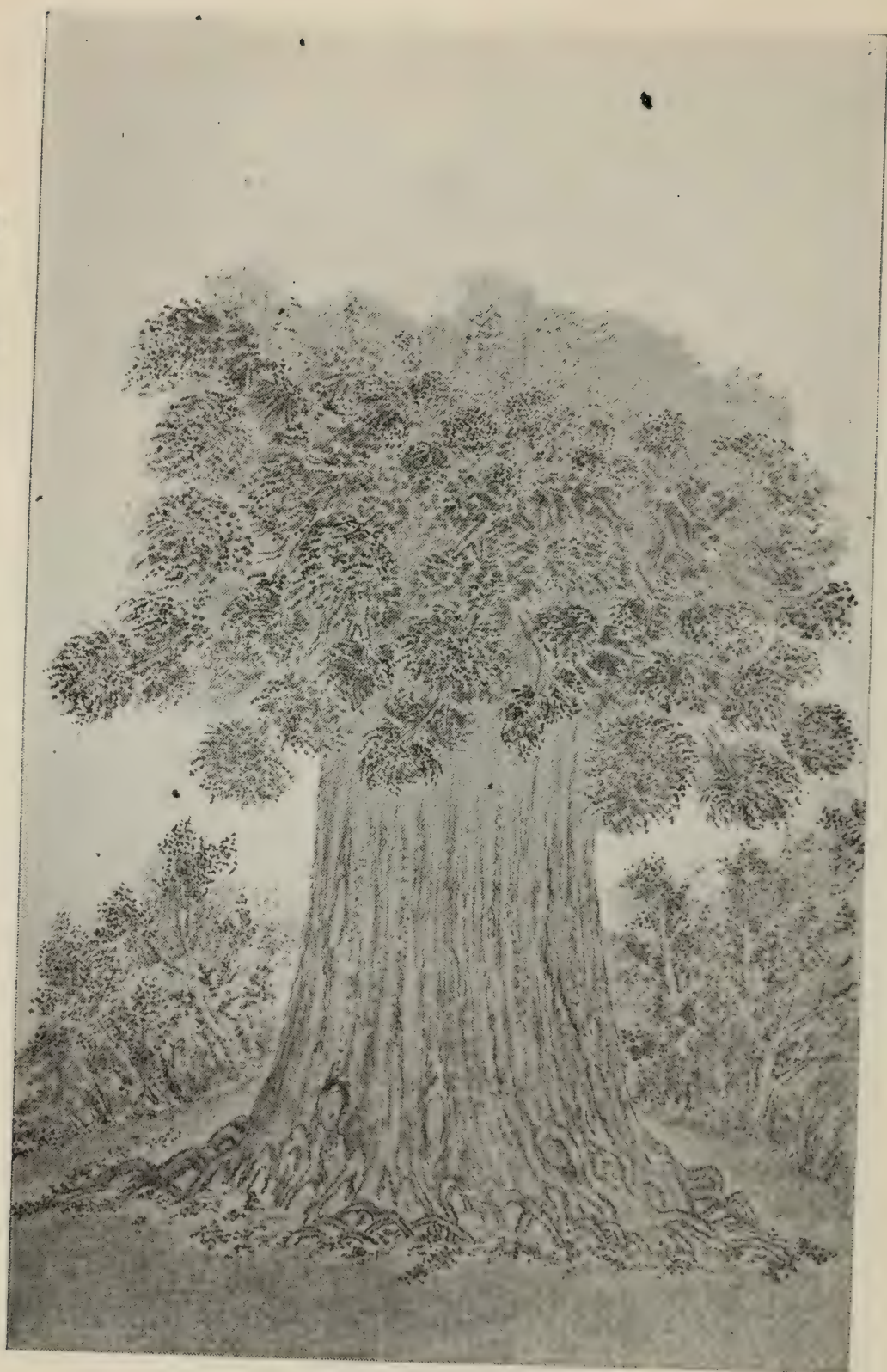
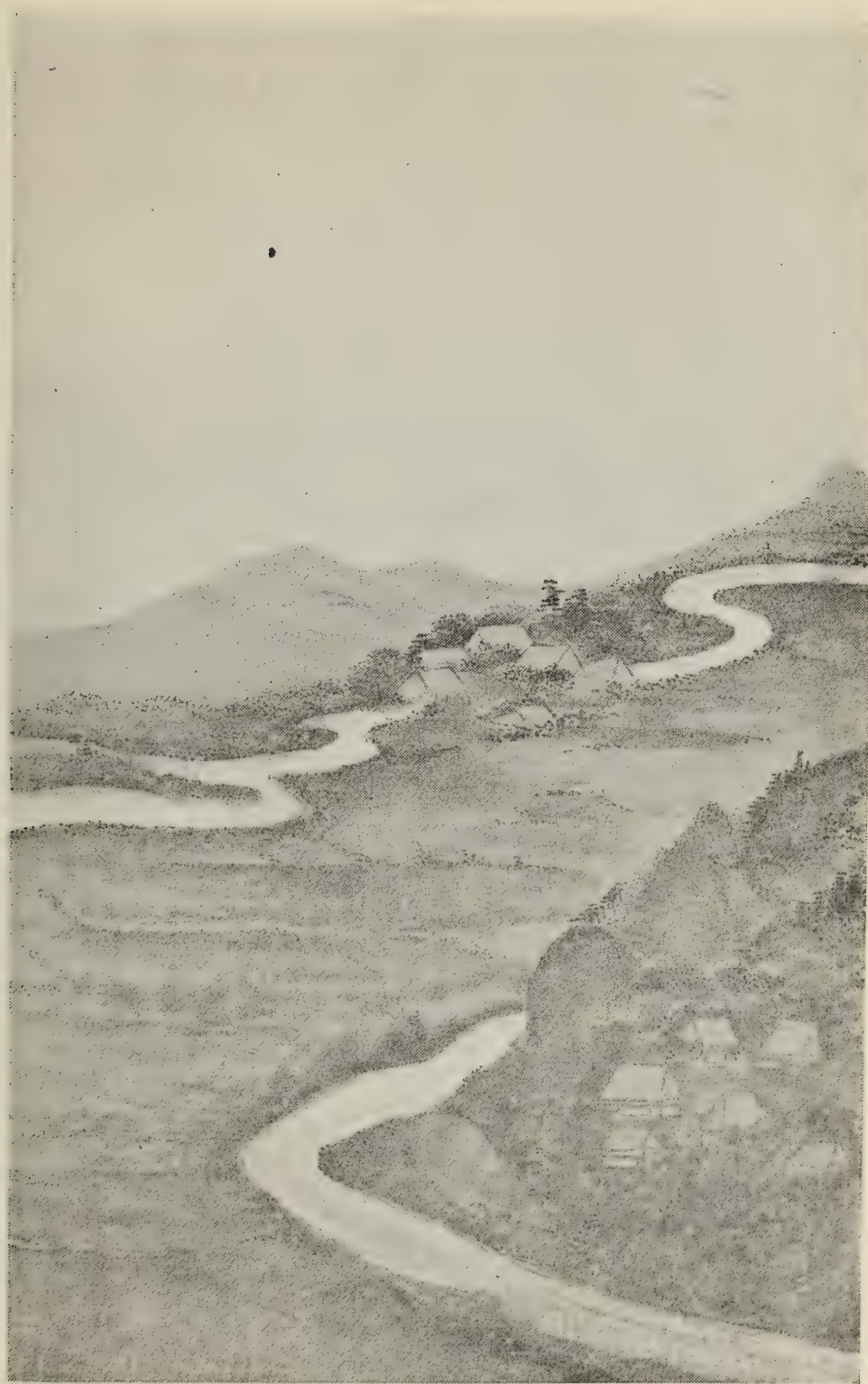
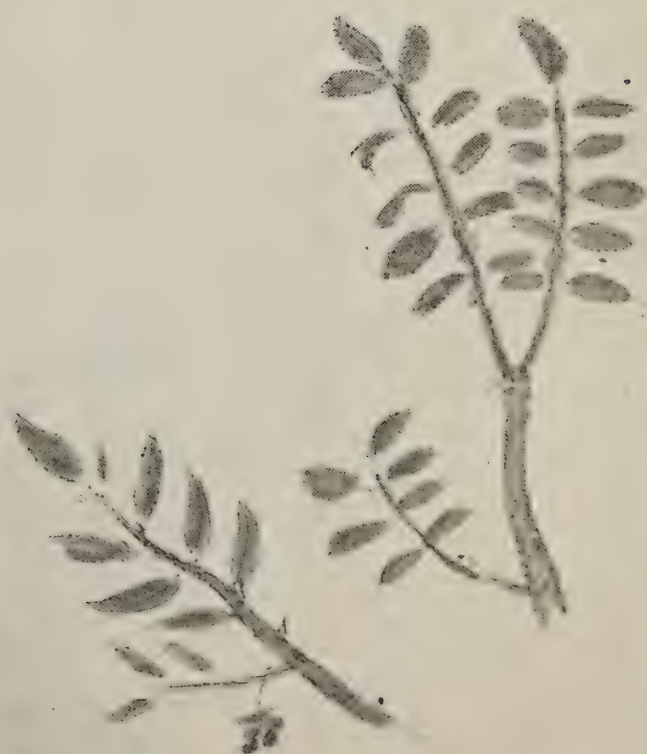
ねられすよ枕に霜や岡の名の片しく袖の冴る冬のよ。

錦

木

錦木

錦木

錦木

楚蓮のとしのさつきのすゑつかた、つとめて、いてはぢの雪澤のやかたを出て、みちのおくの國べさかひをへて、馬手(めて)に小玉といふ峠あり。日くらしといふ尾越への路あり。

わけ入れはあさまたきよりひくらしの根山はくもる木々の高けむ。

あなたに今朝懸といふたかさごあり。いとさかしき山坂をおりく。烏帽子山、あるはいふ母爺(もや)てふ、いづらにもしか名たゝる山の、つとそびへたてる。そのそびらのかたに、出羽の國なる、月の山をうつし齋ふしけ山あり。阪上宿禰の、蝦夷等(えみしら)をむけたまふたるいはれの猶ありとか。そのころ、一位大坊といひし、おほみやつこはすめりとなん。いま、たいぼうがたてと字してよぶ、外山の川のへにそ在りける。やはら村あり、瀨田石といふ。こは蝦夷辭にて、世多以世委てふことをいふにや。世多は犬ちふこと葉にして、伊世以は石をそいふなる。さあらは、狗のふせるがごとなる石もや、こゝに在りつらんかし。うべも、そのむかしゑみしらが栖家したりける山里とはしられたり。前河を渡り手裡劔川を渡りて、毛布の郡

手裡劔川

毛馬内處々

鹿角の庄毛馬内の縣にそつきたる。これも郝麻は足をいひ、奈爲は澤てふゑひす詞にして、足澤といふところにこそあらめ。此ちかとなりにあるてふ葦名澤も、脚の澤てふことをよこなまりて、いひうつろふ名にや。毛馬內、花輪の土毛とて、茜、紫の根染の色ふかう、やいかまの疾鎌を、しのゝ竹炭して鍛ふかなたくみあり。罌粟霰の帒物賣るやとあり、さりけれど、津輕の郡黑石の里なる、大谷か家に製りなす五色丸雪、あるは花あられにくらふれば、品も、さゝやかさもやゝをとれり。酒殿あり、酒はやよけん。月ことに三日の市たちて、里肥へ、人ゆたかにすめり。こよひはこゝにとて休らひ、たかはしなにかしのもとにやどる。

書月のはしめ、こゝに齋ひまつる月山の神にまうてんとて、人々にいさなはれて出つ。さゝやかの流を手裡劔川といふ。なかむかしあらそひのころ、こゝよりつるき、とをなけしてあたをうちぬ。さりけるときゆ、川の名におふてふいはれはあれど、しりくへ川といふこそうべならめ。前河をわたりて物見坂に休らひ、毛馬內澤にいたる。飯形の社あり、山陰にめをの瀧あり。雄瀧に荒澤不動とておましまし、妻手に米山あり。越のよね山の藥師ふちの堂

毛馬内古館

和田兼藏某

ありたりしか、春ことに野火のかゝれば、すべなう大地の村にうつして大事の藥師とて、今川曲(くま)の森に堂あり。この米山の麓に、圓仁の作りたまふたるといふ不動尊の祠ありしをも、近き世に月山の梺にうつし奉るといふ。弓手のかたに母爺山あり、こゝは、毛馬内の里より眞酉の方にやあらん。この母夜の麓に一位大坊のふるあとあり。大同のころなんこゝにすめりとか。毛馬内の北に古館といふが見へたり。こゝに武田統にて大權之祐といひ、のちは靭負なにかしといひて、鹿角の郡二萬石のあるしたりし。この城山の下に西町とて、黎民(おほんたから)あまた軒をつらねてすめり。大坊のむまこならんこゝにうつり栖家して、一位のあたへはてぬ。武田の家に、和田兼藏なにかしとて、ゆゝしき人あり。蝦夷人の起り寄せ來るうちてにむかひて、うちまけ虜となりて、それらか國へひかれ、とし月をへて、からき命いきて津輕の郡藤埼の村にのかれて、大聖院といふ優婆塞の家にまねひて、けんさのをこなひをして藤崎坊とて、ふたゝひ挾布の郡に來て、毛馬内の武田氏の命にしたかひ、大坊一位の家をおこしてつがしめ、城の鎮坐少宮八幡、摩利支天の二の祠ありけるに二十石をよせられ、しかふたつのほぐらを（以下無し）

錦木懷古

東都源　尙

君不見、南部城西毛布里。綽約處女深窓裏。薰性蘭心世所稀。明眸皓齒一何美。門擯擇對未許嫁。里中好色誰家子。覬覦彼姝寄殷勤。心旌搖々若亂雲。目挑情馳無不到。尾生之信那足云。踰牆撼悅無由去。夜々徵行多露暮。有鷕雉鳴松桂谷。綏々狐行草城路。衝風冒雨度幾宵。撲樕林中錦繡樹。一夜一株春復秋。千株千夜未嘗遇。身疲氣衰奈情何。墮涙川畔獨經過。維旹鷟發驟雪飄。倐忽凍死斃郊原。妾亦感之心私慕。遂期黃壤契幽婚。一樹空認同穴塚。千年賜詔弔香魂。楓葉秋紅錦襛張。蟋蟀聲呑自斷腸。吾亦與東探勝者。相傳俗說謾成章。章成佇立藁楻側。古河風水轉沾裳。

錦木四章章四句

二階堂道形

錦木在門雨雪翻々。子心雖怨我不敢奔。錦木在戶乃雪乃雨。子心雖怒我不敢迋。錦木在牆乃雪乃霜。子心乃傷我不敢忘。乃霜乃雪終死同穴。嬉女明哲彝倫烈々。

題錦樹古墳

東都　劉　文　州

鹿角郡原夏艸薫。米川波浪五宮雲。唯看奇石青松裡。千載感人錦木墳。

錦樹墳歌 七言古

龍　嵜　狂　夫

孤村地僻倚幽邃。忽看片石埋紫翠。云是狹里錦樹墳。野翁爲說千古事。君不聞昔者　推古皇帝時。邑之長有好女兒。女兒二八名政子。碧紗窗裡巧織機。天質美不假粧粉。玉貌閑麗雪爲肌。細腰纖手何其艶。歯如含貝翠羽眉。雲髻峨々綽態多。更疑芙蕖出綠池。遐邇無問老與少。見之何人不惱思。艸城村中一男子。風度淸英美姿儀。眷戀政子最爲甚。寄情通問錦樹枝。千枝萬條遂不答。秋風誰憐顏色衰。臥病空去窀穸鄕。政子始聞不勝悲。仰天慟哭涙爲血。懷恨呑聲瑣花萎。何知一旦先朝露。父母哀號無盡期。悔令寡脩不理婚。合尸聊葬郊北原。郊北原頭草蕭瑟。爲栽錦樹成墓門。墓門不朽千餘歲。猶看拱木連理存。國風往々弔古在。君豈無辭慰芳魂。聞之余亦涙模糊。撫碑長揖且躑躅。墓乎墓乎吁何久。埋身莫嗟在荒蕪。維雖天地多墳塋。今古獨高錦樹名。

詠錦木和歌

三論表秀

にしきゝもたか世に立ておきつかのあはれふりにし名を殘すらん。

藤枝道恒

錦木のたちし世とへは塚の原むしもはた織る音をやそふらむ。

東　政智

つもりこし年もちつかにふりぬらんそのにしきゝの名にたてしより。

毛馬内次丕

世々をへて綾なきかたも錦木の名にや立らんけふのほそ布。

埜澤政則

紅葉する秋にし見れは錦木の色もちつかにあまるとそおもふ。

高田康英

名にやたつそのにしきゝのつかね緒もとけぬ思ひの幾世つもりて。

太田忠假

たれも今おもひやそめむ錦木の名も世にしふる里のもみち葉。

菊池立德

むねあはぬためしもかなし細布のたつにしきゝに名はのこれとも。

僧　惠明

朽やらぬ名を世にとめてにしきゝの立つもりこしさしはひさしき。

黑川成隆

言の葉にたか立そめてにしきゝのくちせぬ名をや世に傳ふらむ。

浪速政尹

たてなから朽し世遠くふる塚の猶にしきゝの名こそかはらね。

松尾榮祥

世語はいまも名にたつにしきゝのちつかにこめしおもひをそしる。

小本尙方

たてし世のちつかや朽て一つかにうつもれぬ名をのこすにしきゝ。

僧　靈明

秋の名に立にしきゝのつかの閒も見過しかたみ染るもみち葉。

戀のこゝろを　黑澤定泰

にしきゝのたつ名いとはてきぬれともなとむねあはぬけふのほそ布。

安田友泰

たてなから朽はてねとや錦木の門は千束のつもるまゝなる。

釋崇源

人よしれかく立初しにしきゝのちつかにつもるおもひありとは。

錦木塚をよめる長歌

三輪穗さき

秋されは　染るもみちも　錦木の　名におひきぬる
ふる塚に　立やすらひて　往古の　事をしとへは
里人の　我に語らく　なゆ竹の　とをよるすかた
靑柳の　ほそき眉根の　いつくしき　うまし處女は
この里の　貢の數に奉る　けふの細布　栲はたの
神も守るか　棚機の　手をもかるかと　唐にしき

あやしきまてに　織り出す　稀の手人を　赤良引
朝夕ことに　風流をら　妻とひすれと　天放る
ひなの國へは　母しは艸　もしかくことも　たな橋の
ふみかよはさむ　よしをしも　おろかなりける　こゝろには
しらすあれとも　をのつから　風俗に傳ふ　美凝の
あやに色とる　にしきゝを　千束百束　伏菴の
門に立つる　あまたとし　往かよひにし　通ひ路の
跡もあら野と　草むして　有かなきかに　殘れると
聞はかなしも　鴉鳥の　勝鹿處女　あつさゆみ
末の珠女か　事までも　おもひあはせて　まつかねの
遠く久しき　世のさまを　すゝろにしのふ　ころも手に
あへす亂れて　散來なる　風の木の葉も　八千種に
匂ふ小艸も　むかしへの　形見なれはや　さゝらかた
にしきなしけり　そか上に　秋のあはれを　結ふなる
夕のつゆと　はかなくも　消へしをとめか　靈かあらぬか。

餴夏岐野莽望圖

共二冊　七倉附近
北秋田　一

享和二年の春やよひのはしめ、出羽乃國秋田の郡、城戸石をたち出て七倉山の權現嶺に入り、小繋のうまやより高岩山の神にぬさとり藤琴にいたり、湯の澤の瀧を見、瀧の澤の飛泉を見つつ、かくて靑金掘る陀比良夜萬の花盛を卯月のころほひに見て、皐月のころ邇布南村に來て鬼鹿毛の牧のふるあとをたつね、糟毛の邑を水無月はかり水にさかのほり陰路の瀧に凉みとり、ふたゝひ平山の奥ふかく川つたひわけてけり。この多飛羅山路は山本の郡也。しか、こゝを夏見きといふこゝろをもて、しげきやまもと　と、このひとまきの名とはしけるものか。

木戸石村

下田平

夜欲寐の八日。雨はれの河水ふかけれは、舟渡りからくして企度委志をさく。楯舘とやらんのふる趾の、おかしう見つつきたり。そこに、佐藤豐後なにかしのむかしをおもふ。佐藤庄司なとの、それか末葉にてやあらん、きどいしの村長佐藤吉左衞門信氏か家に、梅と櫻のかたある兜あり。やりたる胄ありて、遠つおやよりつたふたるとか。

いく代々をこゝにふる枝の杉たてる山路を近み霞む川くま。

麻須舎波のやかたなる、成田なにかしがもとにうち話りて暮たり。

九日。あるしの男にあないさせて、多太良とそいふなる、あやうけの岨路をゆんてに朝河わたりて、山椒澤、あるは寺澤なといふ山の峽より越て、下田平(けんだひら)といふ村はしにひろき池ありて、さゝやかのうき嶋の、ふたつまてうきたるさまことなり。

水鳥のそれかあらぬか岸遠く霞にうかふ島のすかたは。

その村に出てふたせのわたりをして、小舟あやうけに安左布の邑につく。

ますらおか野邊に種まきやかて又もゆる麻生の名そしられぬる。

七倉の岩窟

七峪のたけにのほりてんとて、小田くろみちつたひ篠原ふかく分て、やはらのほりうれは、いと大なるいはやとのありて、とさせり。うちに、大なる巖のつらを獅子頭に造りなしたるを、圓仁大とこのしたまふ權現さまとて、くにうとさらにたふとめり。さりけれはこゝをこんげんくらといひ、松倉、大倉、三本杉の倉、柴倉、箕倉、烏帽子倉、正面、正面の亦の名をこんげんぐらともいひて、しか七倉山とはいへり。としふりたる松さくらの、八重むす苺のいはほにしけりたち、桐の大なるか、枝さしかはし生ひましりたる木々のおくふかう、鷽のまた雪にいや寒げなる聲の、仄に聞へたるはいつこ。

鶯のいつるもをそし雪消ぬやまのなゝくら谷つたひして。

小繋村

立岩の末によちのほれば、末遠く川水も餘波なう、なゝよのかん籬の杜をはしめ、見やらるゝやま〳〵もおかし。まいて花の咲たらましかはと、しはしありて、巨都奈祇のうまやに、相しれるぬしのもとに宿つきたり。

十日。ひるつかたより、高岩やまにのほりてんと、あないを賴みいさなはれて、戀澤といふを左にわけて、

うくひすのこゑこそきかねをのかつま戀てふ澤をいてかてにして。

醉夏岐野葬望圖

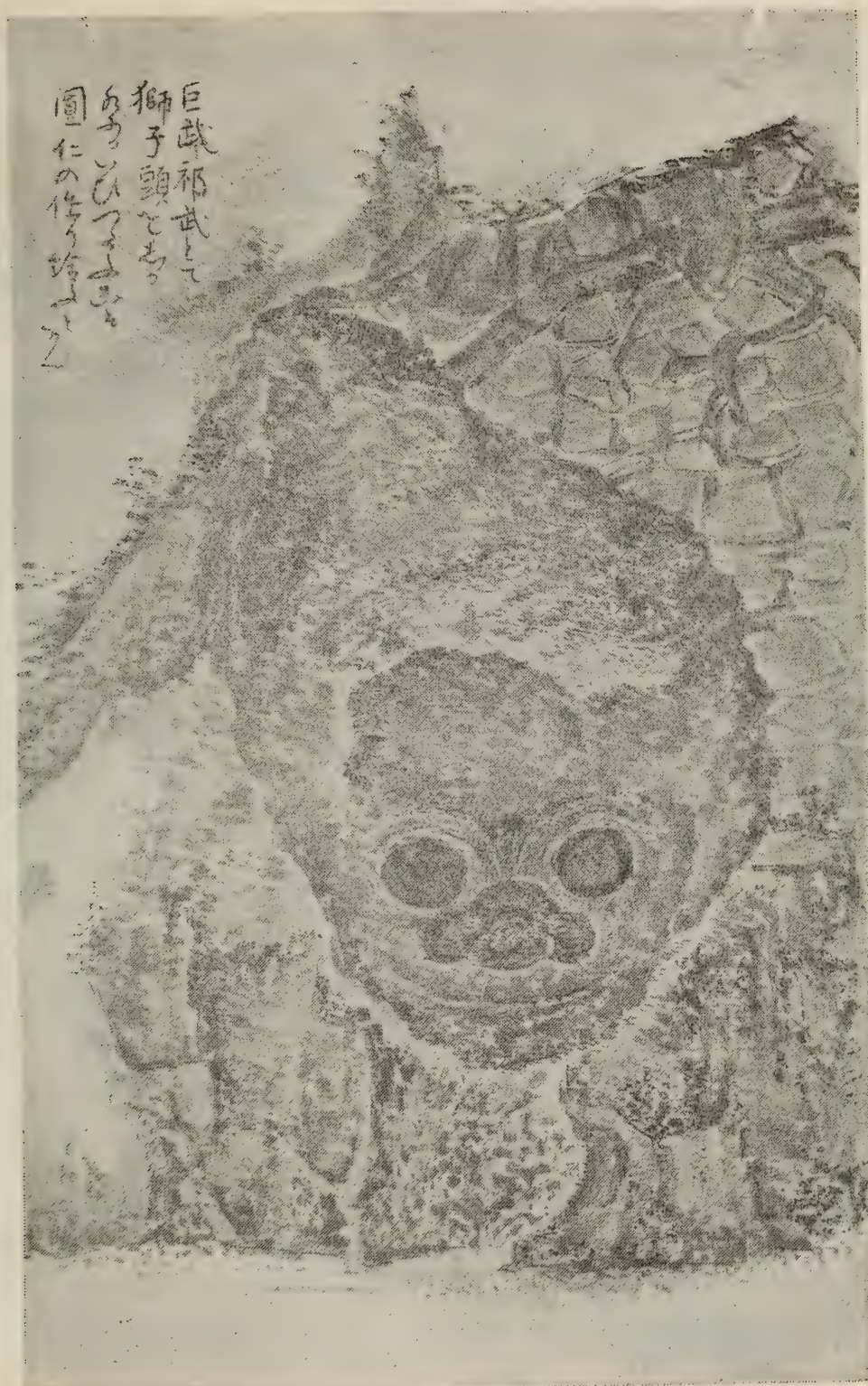
権現倉の

辭夏岐野莽望圖

巨武祁武とて
獅子頭

高岩山

男、女御殿

権現の窟

加護山の坂なかにたちて見わたせば、まぢかき七倉山 遠近の山の、行川つらにつらなりたるなど、いふへうもあらず。兒岩なと、おもしろきところありけり、いはれやありけん。いはね木のもとをよぢて鷄栖に入ては、ひし〳〵と立る大岩のすかたは、もろこし大湖に名たゝる、うつし画に見たらんにひとしう、あふき見れは、三芳野のこかねのみたけをわけのほるにことならず。としふる松、杉、檜、櫻、槻、桂、楓なとのしけりあひたる、こゝらの木ともの なかに、巖の末のみたちあらはれたるすかたことに、尚ふかうわけ行は、かやふける堂を高う作り、そのづからなれる石の五倫塔の苔に埋れ、高き五葉の枝をたれて巖に生ひ、はたひろの岩のなからをほりうがちて、格子さして三十三の石の菩薩をおき、阪のほりて堂に入は、あみだほとけ、やくしぶち、くわんおんさつたのみかたしろををさめたり。高岩山の編額は、源義和しるすとあり。こは、いまし代をまつりこち給ふくにのかみの、めてたうかいなし給ふ也。男御殿、女御殿といふあり。おとこごてんの下つかたには、かの、みそまりみつの観音ほさちのみかたしろありて、このいはほのうしろさまより、からくしてはいのほれば、はさまのありて、それに錢うち入れば、はる〳〵と遠うまで音の聞へておちぬ。五葉の生ひたつ岩の上に石の菩薩の在る。いはの、くほかなる處に渟りたる水もてあらひて、目の病のしるしをうとなん。ところ〳〵にいと多く、いはやごのあるがなかに、こんげんのいは

目籠石

やといふありて、此いはやの奥に斧作りの獅子頭あり。ゆへをとへば、なかむかしのころとやらん、陀比良といふ處の山おくに、春木伐のわかおらあまた泊山して、大木のもとを獅子の頭に造りて、つま木こるをのれ〳〵か布こぎぬ、あるはいろ〳〵衣やうのものをもて、まくてふものとなすらへとりかけ、冠りかさして笛吹うたひ、飯筒をつゝみとうち叩て夜毎にうち戯てあそひてのち、山に捨てみな家に皈り來て、男とも、ものゝけとなりて身はやくがごとく、口疾くいふ。いかに吾ひとりをやまに捨て行しそ、雨露にぬれて、うきめにはあひつるそと。こはいかにとて移託巫女に弓ひかすれば、おなしさまに語りてけるを聞て、親ともおとろきあまたゆき、とり來て、このいはやとにをさめ奉れは、ものゝけもさめたりけるとなん。堂のたふれし址とおほしきところのありて、木の力士のかたしろ、ふたつまてある。むねに八萬大菩薩と、あやしき文字に彫たり。女御殿てふ岩のいと高く、その大なる岩に、こゝらのあなのありて、名を目籠石といふ。うべ、おほまあらこ、かだまなとみたらんやうなり。此石面の竅ごとに、獼猴のあまたふしかくろひ、さしかゞまれるさま、春日山の石(ひ)燈籠(ともし)に、身をひそみ居たるにひとし。このめかご石の穴に錢なげ入たらん人は、わかおもふおもひのかなふとて、たゞうちにうつに、をるましらの、かしらにや打あてつらんかし、めはなをおほひかしらをかゝへて、ひとつ出れはふたついで、いさなひつれてみないぬ。雄御殿

別當實相院
祖先

は、おほうそうのほる人まれなれど、雌御殿は男女のわいためなう、卯月八日はかんわざにて倘人のほりぬ。山は幽にして見どころの多し。いにしへは寺〳〵のありしとて址あり。五倫臺といふ麓のあたりには密乘寺、如來寺、藥師寺、觀音寺、法性寺といふ、五の寺のをさたる密乘寺は、もとも大なりしかど、いまいふ荷上場の梅林寺のしりなる山に柵ありて、額田甲斐守といふぬしすめり。その遠つおやの代より、高岩の寺ともとむつびあひてけれど、甲斐守客なるこゝろふかう、さらにてんはくの一刈も寄られず、そをたにあるを、寺ともに佃る田すらかすめとり、僧をあつめては、ほしゝ、生しゝをすゝめ、かくて、おかしありとてつみにおとし、なか〳〵のふるまひそ多かりける。僧侶やすからず、ひそかにはかりて藥師寺にもふけして、湯などひかせ、をさたかためしをまねび、なまよみのかひをうちとりて、あるしむなしき城にゆくりなうおし入り、むれみたれて、おもふまゝにせめおとし、五の寺のしるよし、ふしなびくいなほの露のことなう、よろこびの寶螺をこそ吹たれど、世の中しつかならす、秋田城介の戟のために、寺のしるよしせしところ〳〵みなめされて、僧とも世をふるたつきもなければ、あまたの僧いつことなうちりうせて、密乘寺、如來寺のみに、僧ひとりつゝすみてけれど、倘かてとぼしうせんすべなければ、如來寺を矢坂村の下の澤といふ奥にうつして、密乘寺は、いまたむかしをしのぶばかりに殘たるを、おちかくろふうちかぶと

のものゝ、火をはなちてやきはらひしかは、あるしの僧のかれ出て、箭坂へ來て如來寺に入て、庵をおなし住て密乘寺と名のりて、とし月をふるまゝ、如來寺の僧老て身まかれり。かくてのちは、寺ひとつを如來寺といひ密乘寺ともいへりしか、寺はたゝ名のみたてれは、おちて何かしの女をつまとして、男ひとりを生り。名を密嚴院とよひて、役のうはそこの流をくみて、けんさののりをばをこなへり。母がちなみによて八酒村に庵をむすひ、實相院と名のりて、その末の子いま、高岩山の權現をもりたいまつることしかりと、ことしれる里人のものかたりに聞へたり。こなたさまに山をおりくれは、川をへたてて矢坂といふ村は見へたり。それかちかとなりに、糟毛といふやかたとも見へわたりて、なかめおかし。川の名をとへは藤琴といらへたる。

水上は霞流れてふちことのしらへのとけき春の河なみ。

藤琴の村

むかしいと大なる桐の樹ありて、それにとしふる藤のからまりて、桐の木の、たふれふしぬへう見へたるを伐て琴を作りて、いつれの君のみよにてかあらん奉りたり。その木の生たりしところに、ほぐらを建て藤權現と齋ひしより、末の世の人しかまよひて、いまは木花開邪比咩をまつり奉るは、つみもあらさなれと、ふちさ、ふしとのえやはかよふへき。村を藤琴といふいはれ、しかしとなん。あるはいふ、いくはくとしはへたらんともしらぬ女のすめ

平鑛山道

湯の澤

るか、つねに琴をなんかいならし、松吹風かあらぬか、けち行てけり。そのみたまを、布士の神ともまつり奉る。そのみやところとて、山のかた岨に、としふる松杉なと生ひしけれるうちに、鶏栖見へたり。

やよひの十二日。平山にいかんとて、やとのあるし加茂屋なにかし、くすし山田なにかしなとにいさなはれいてて、藤の權現のもり、うちとの神籬なと、としへたる木々立り。馬坂を越へて高石澤のやかた、市の渡なる、菅大臣のみやところのあたりへわたらんに、柴橋の面に組（ぐみ）とて、綱のこときものの二筋ひきはへ、しいて通ふ。杜のさくらも、やかて咲へうけしきたちぬ。湯の澤とて湯の泉あれと、ひやゝかなれば、夏はかり人の來て浴してけるやかたの、軒をつらねて、人なくあばれたり。めてなる杜に藥師如來の堂あり。弓手に、不動明王の堂のありけるに入て見れは、瀧の、岩をはなれてたかく落かゝり、こなたのいはねまてはひのほりたる藤の、いくはくとしをかへぬらんかし、風情ことに、たきのいとおもしろし。

藤かつらくりかへし見るいはかねにかゝるも高き瀧のしらいと。

川の邊さしめくれは、南馬脳とかいふらんものに似たる、又いろのいとしろうして、截子馬脳とかやいふらんにもたくふ石あり。めつらしけれは碎て、さゝやかなるをつとにせり。こゝを出て、弓手のかたに川をへたてて村あり。比内といへるところのあれば、それにたく

鮮夏岐野莽望圖

辭夏岐野莽望圖

高岩
鶏栖

醉夏岐野莽望圖

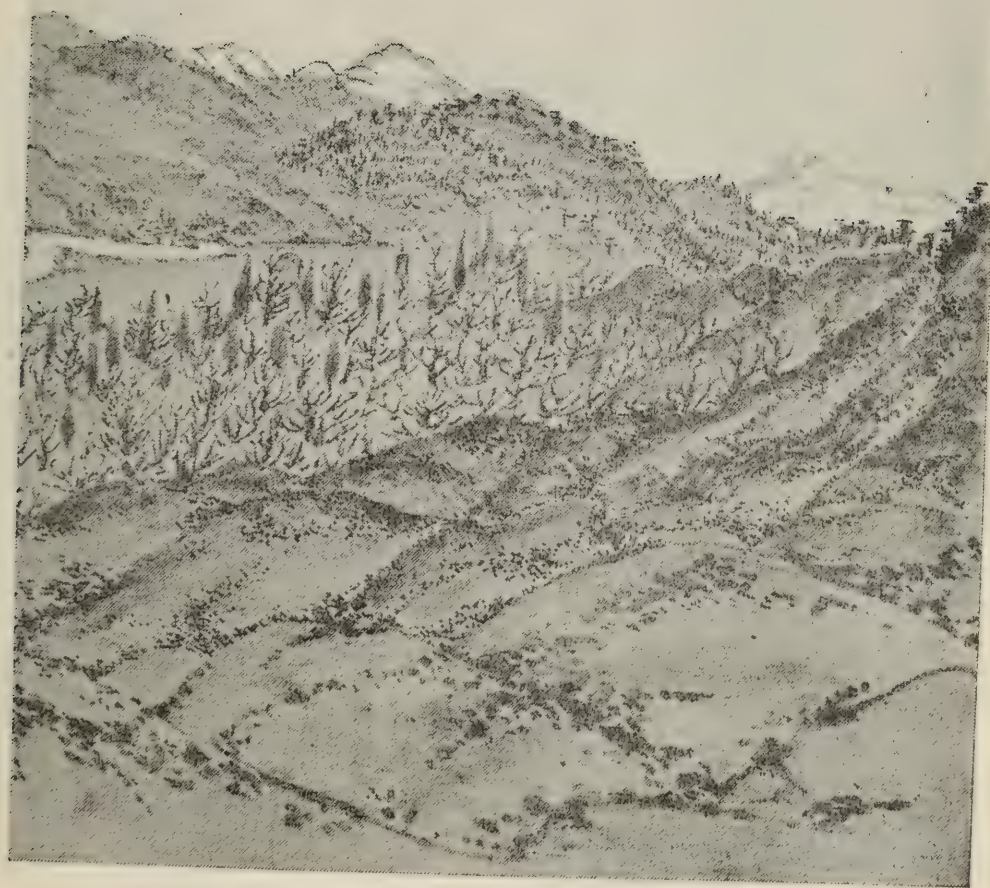
仲夏岐野莽望圖

高岩権現の堂
めぐり岩三十三の

御夏岐野葬望圖

瀧の澤村

十六貫山

金澤邑

へて、名を小比内といふ。此澤のおくひろう、やかたのいと多かりけるとなん。瀧の澤といふ村に來る。こゝの不動尊の堂のほとりにも、いとよき瀧のありて、鳥居のあまた立るより橋わたり、堂に入てふりあふぎ見れは、岩ことに高うして、水けふりの霧とたちこめ、霞となひきたちわたりて、けしきたくひなう見へたり。

零る雪か花かあらぬかやま風にさそはれてちる瀧のしら泡。

川わたり得て、栗の木臺といふ山坂をのほり見やれば、瀧の澤は、めてにいと近し。十六貫といふ山の、河きしよりそびへたちたり。此いはやまに杣たて、木を伐り大炭といふものをやき、そのためにこり捨たる、このれ、枝なとしては小炭をそやくめる。それらかふみならして、かけはしをわたし、炭竈に行かふみちを、画かきしいなつまのやうにふみたり。ところ〳〵に炭かまのあとあり。かく、山の木をこりて炭やきはてて、木もさらに山にあらさなれは、小柴やきはらひ畠となし、粟稗を作り、そこに家居し栖つき、村とはなりぬ。されは此あたりの人ことに、はたまき小屋とはいへり。金澤邑にいたる。陀比良夜万に鎔きわけし黑鉛、十六貫泉をひとこほりの荷として、人の背にておひもて出て、こゝより丸木舟につみくだし、淳代の港にこき行なとかたり聞へて、しはし此中宿に在て、坡臺をへて眞名子といふ村の、川へたにをさなきわらはの立たるを、老たる女のあせになり、はせ來てかゝへてい

寒屋澤
ごつちや婆

平鑛山

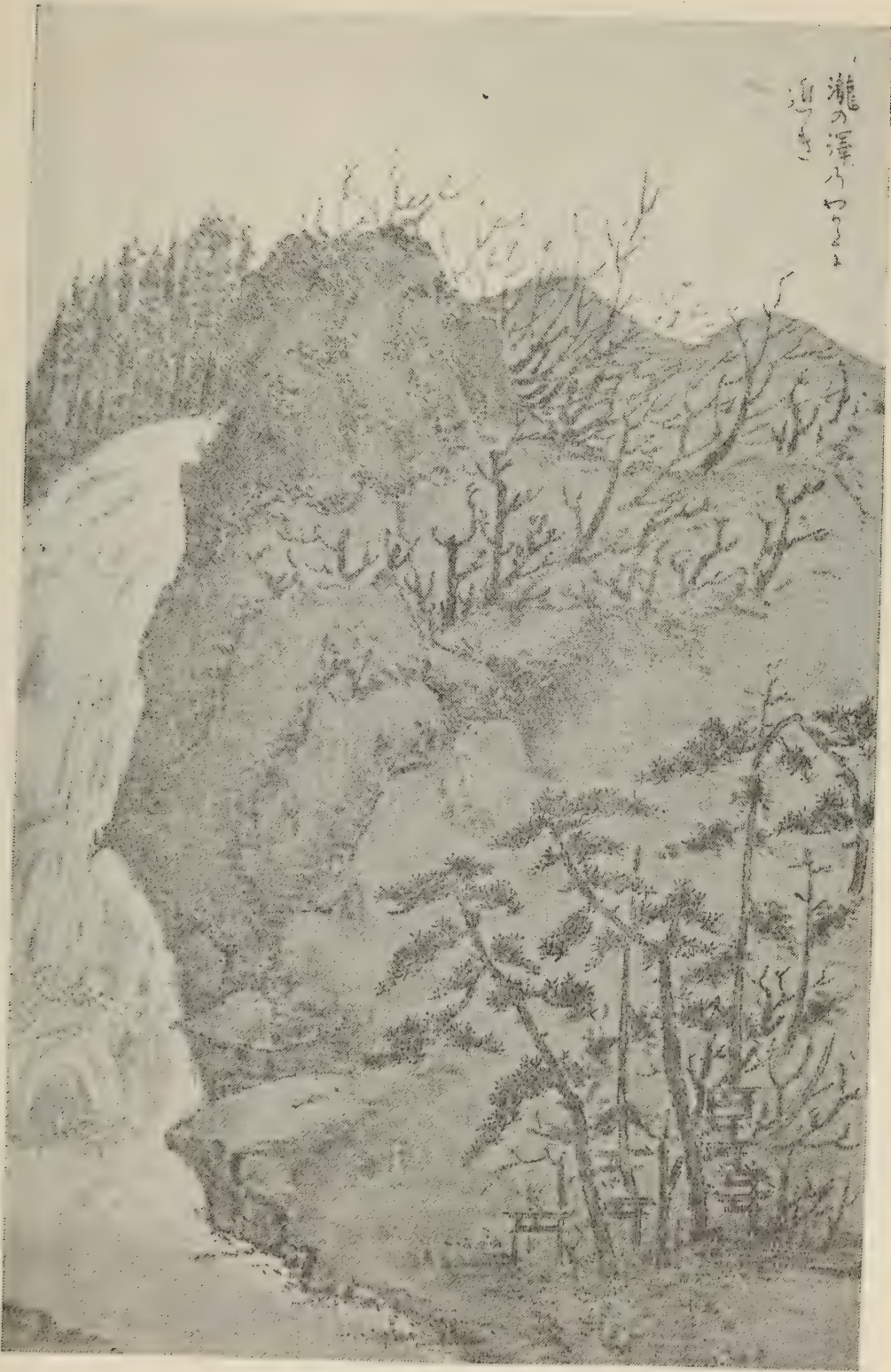
にき。かく見て戲て、

老の波よりくもはやくうちつけにきしのまな子のいさなはれけり。

寒屋澤（さぶや）といふ畑つくりの宿に休らへば、をこなる刀自のひとり居て、手かけとて、折ひつやうのものにもりて、これまゐれよ、命長いの粟餅にてさもらふとて、粟の氷餅をすゝめ、きのふよりも今朝よりも、こゝに人々の來ると聞て、まつほどに〱と、ながやかにいひて手をはたとうちて、「來るか〱と麻がらを三把たはなか四把たけど、こないその夜のつらにくや。」とうたひて、これは男のことなりといひて、はとうちわらひぬ。醉たるけにやあらん、すかたことにふるまふとおもへば、これはごつちやばゝとてかしこきものながら、つねに戲れのみそせりけると、みなかたり聞へたり。黑淵、大寸波利、小數波里などいふ、あやうきふちを左に見なし高くのほり、七曲りを行ほとに、歲菊の花、堅香子の咲たるなかみちを過て、臺所澤をへて、やはら陀比良夜方につきたり。山のあるじなりける成田なにかしに見へ、山田のもとにやとつきたり。

十三日。あさとでに見れは床屋のなりとよめけは、「お臺所と川の瀨は、いつもごんごゝなるがよい。」めのわらはのうたふ。かね鎔く、たゝらの音を鳴るとはいふ也。山神をまつる祉あり、藥師の堂あり。をたぎの堂とて、河をへたてて山のいと高し。袴腰といふこなたは

雪いと寒く殘りたり。寺のやけたるほとりのつかはらに、株の燼となりたる五葉あり。こゝにうたふ「平名代の花咲松は、もとは本庄葉は能代、花は久保田の城と榮久。」とかたりき。此山の志貴てふものゝ數こそしらね、太郎作淵の鋪、こは六八とて、口の高さ八尺、よこ六尺といふ。水樋大切四六、大黒大切一六、板屋のしき四六、うばしき四六、化粧しき五七、幸しき四六、天狗鋪四六。凡むかしは、八百八口といひし釜の口なりしかど、いまはほりにほりうがちて、山谷といはず、きりのたてどもあらず、蜂の栖のごとく、千あまりの竈の口ありといへり。かまの口とは鋪口をそいふなる。化粧鋪は日本のしきのをさたるべけれど、柱きり入て立しかば、太郎鋪の名はけたれて、次郎鋪にて二番とはなりきとかたる。山ふかうわけ入て、野田てふかね山ありて大切あり。赤出し、前樋、淸五郎、巳之丈、中鋪などのしきぬし栖て、しきいと多く、山はかぎりもなうふかく水さし。

十五日。箭櫃山にいたりてんとて、木戸のとより、臺所澤よりはる〴〵とのほりてあたり見ありく。そのしき、かぞふれはいと多し。彌右衞門大切四六、したざは四六、ちう段六八、あかだし、あるはいふ甚七、勘兵衞など、六七百はかゝりそありけるとか。竈の口のあたり、やゝけちはてたる雪のうちに、ほそくたちむすふは、あかし竹てふものゝけふりめくり出るにや。雪堆に靑金をうすづく音、荷金井の水のさく〴〵とながれるに、さるあげをし、石からみうた唄

辭夏岐野莽望圖

師夏岐野莽望圖

辭夏岐野莽望圖

韓夏岐野莽望圖

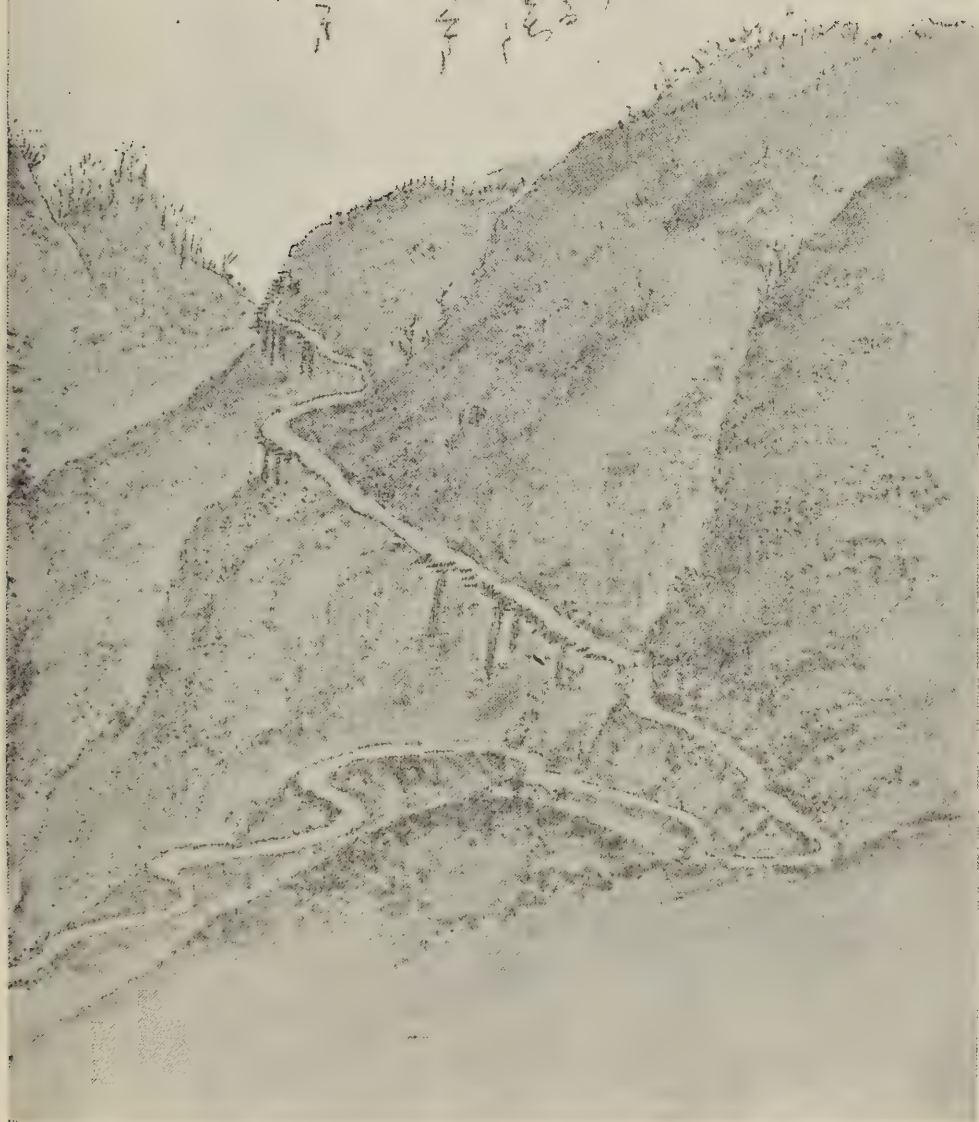
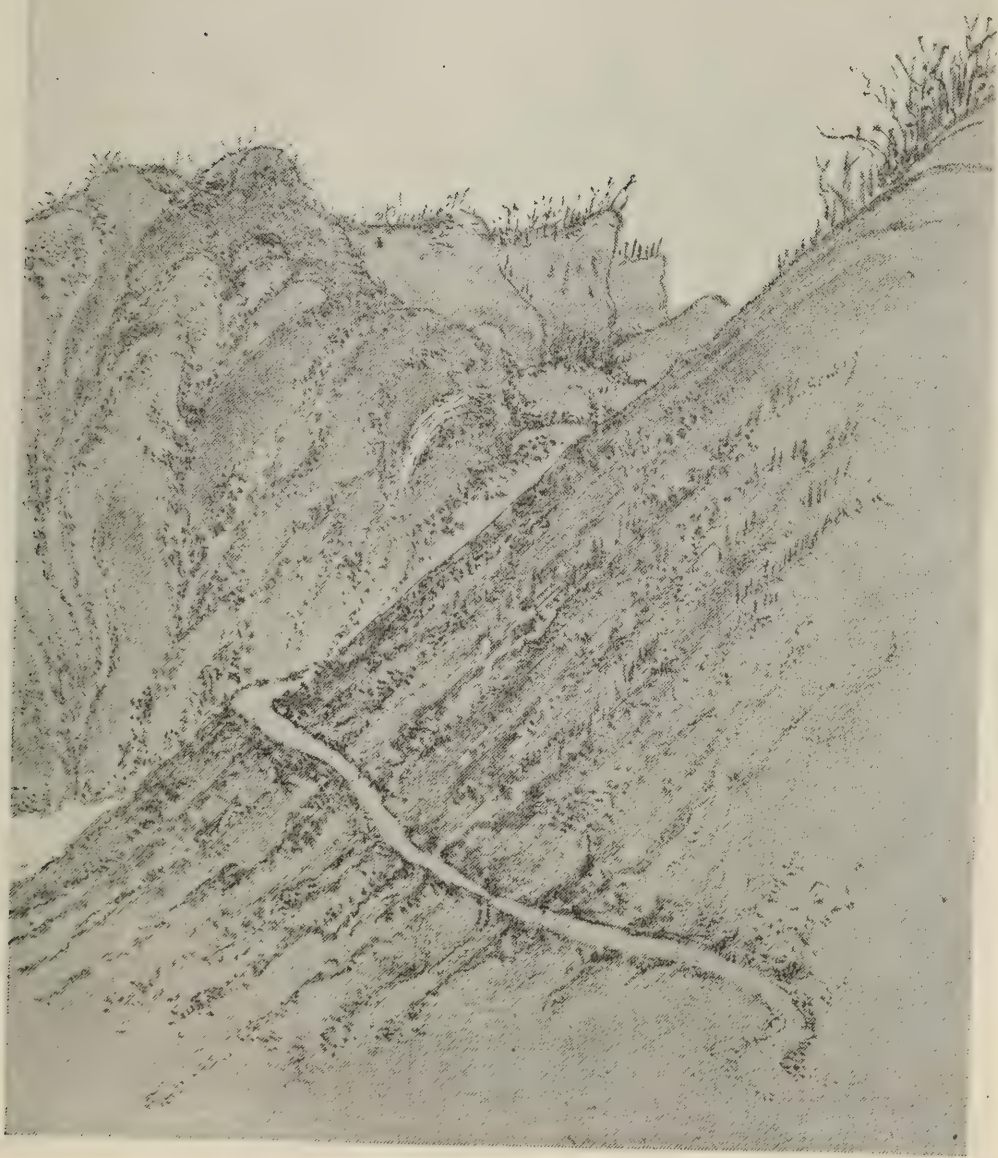
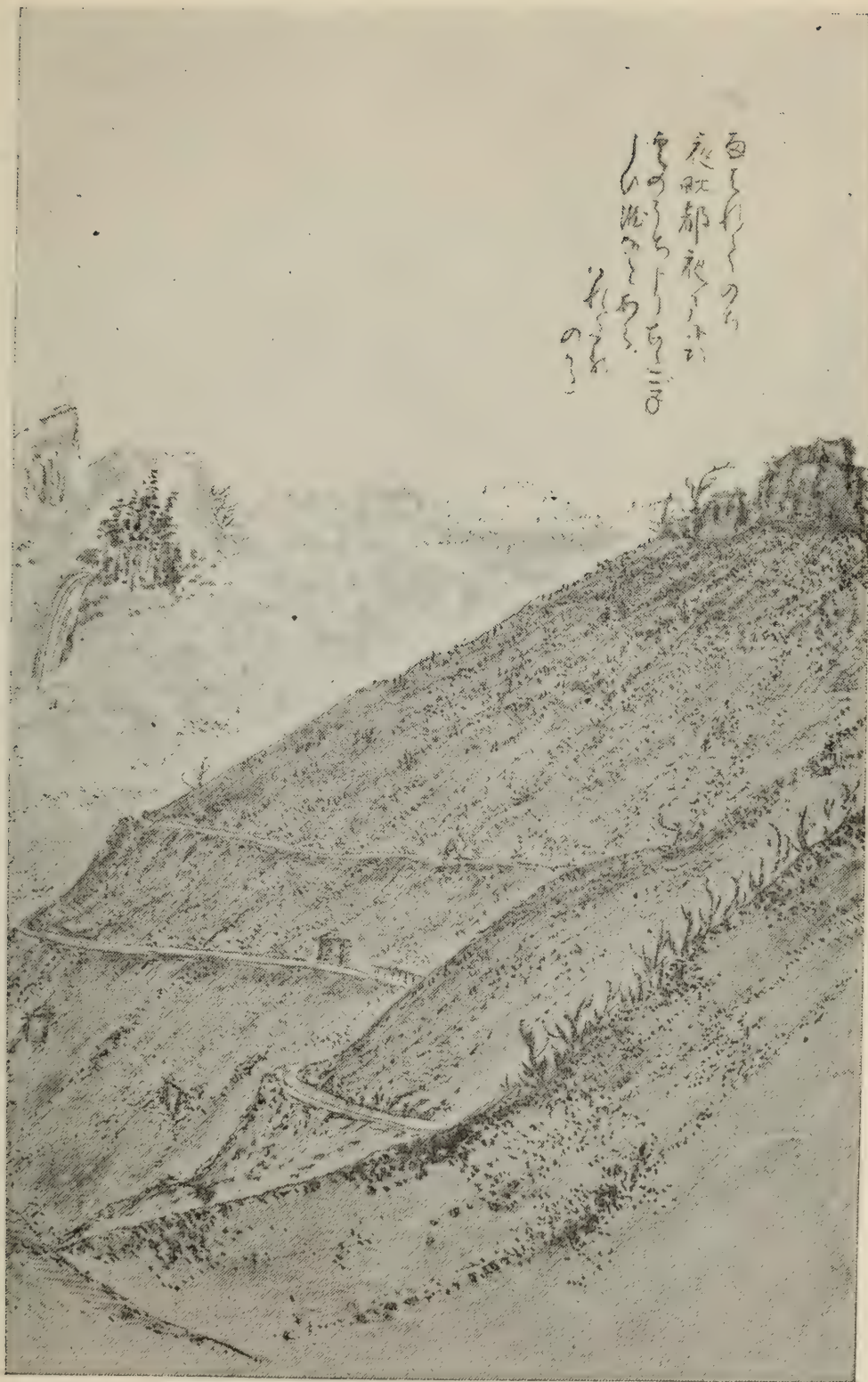
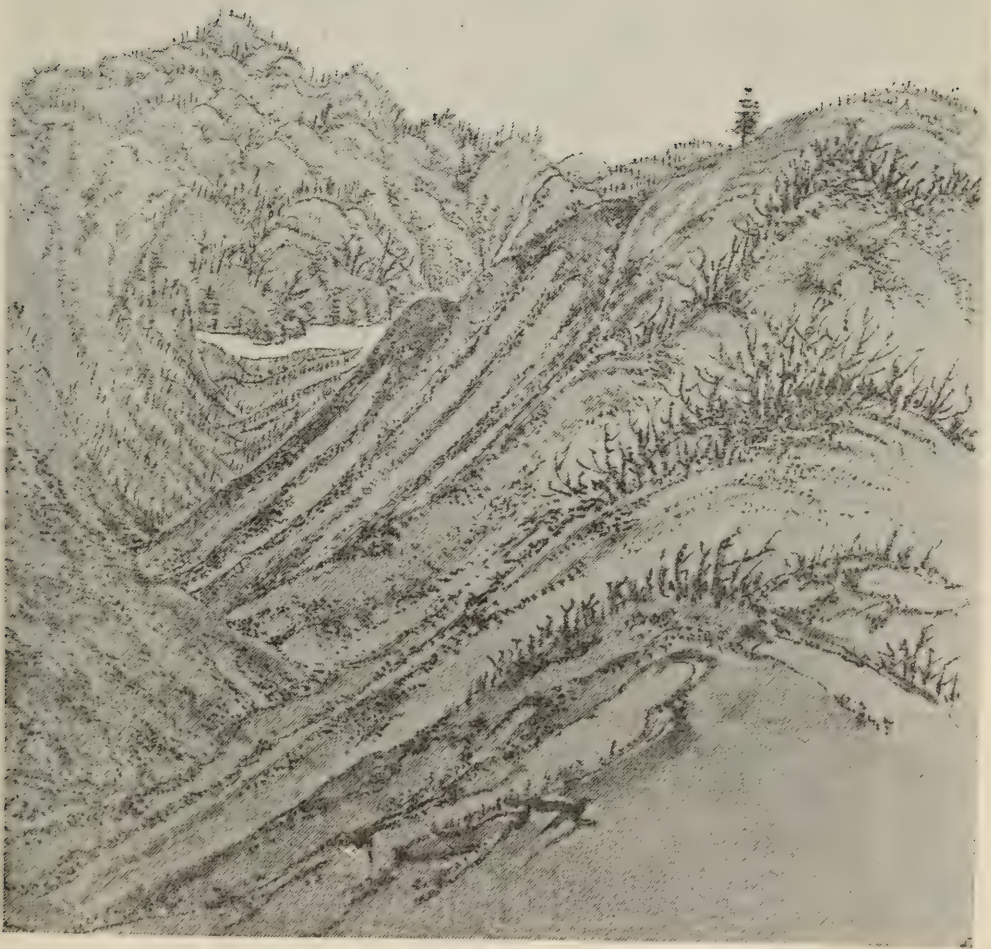
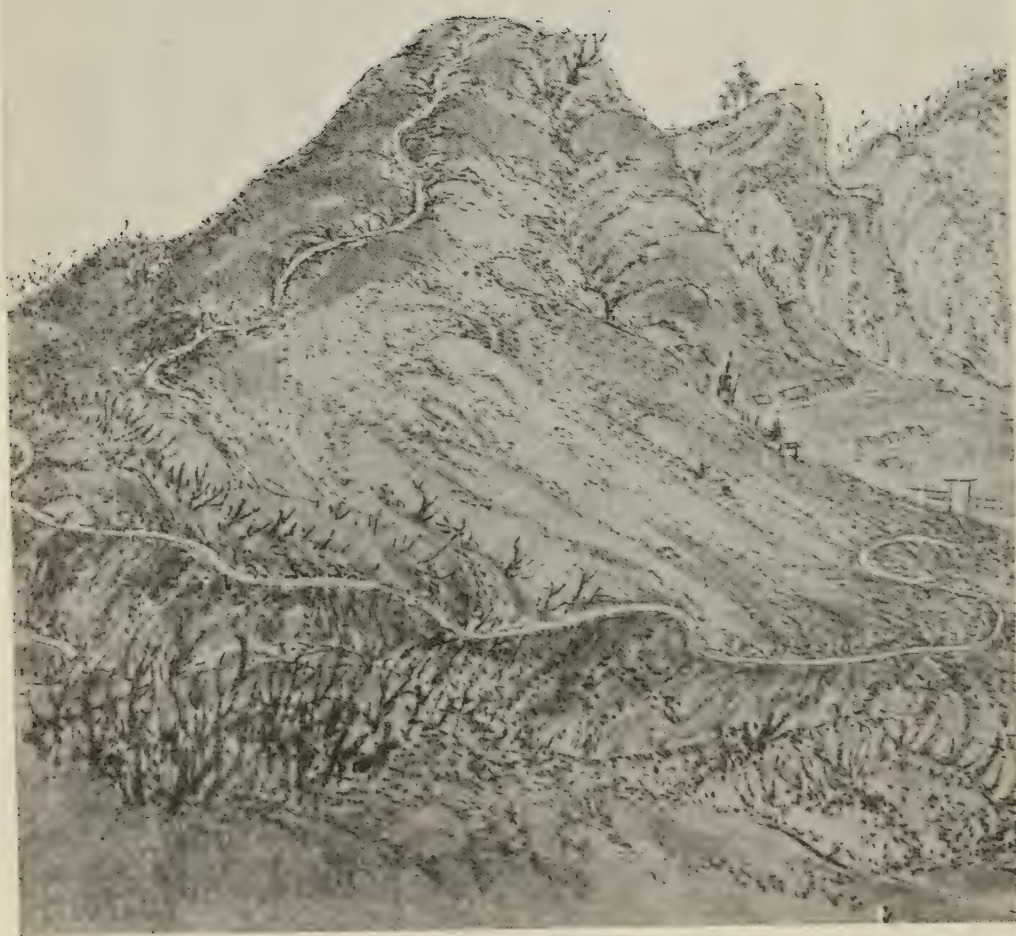
解夏岐野莽望圖

鮮夏岐野莽望圖

辭夏岐野莽望圖

辟夏岐野莽望圖

鮮夏岐野莽望圖

辟夏岐野葬望圖

ふ女のころ〳〵、水とともにとよみたり。

十八日。寒さは冬にことならず。山田のもとにありて、とに出て見れば、つとめて霜いましろに、あまた軒ならふかなごらか栖家なと、雪のふりたるかと見わたされて、暮行空には、またおきそふるおもひして、うちなかめぬ。

深山春淺し

花はいつ櫻の梢松の葉もまたゆふ凝の霜のおくやま。

いまたいつこも、けしきたつこすゑもなけんと、さすかに、おくかおくたる山とはしられたり。

廿八日。あたり近きそかひ、谷かげを、人にいさなはれて見ありきて、おもひしことを、

春はやゝくるゝはかりに日はふれとまた花鳥のいろたにも見す。

愛宕山詣

卯月八日。あたこやまにのほらんとて、人さはにむれ行に友なひ、あら川渡り、きしへより生ひそばたちたる山は、したゞみのすかたして、さかしさいふへうもあらず。よぢつれて堂につく。遠きむかしもありしところにや、大同のとしの鰐口鐸のありしを、盗人のとりいに

水無

力士平之

しなと語り、なかむかしのころほひに、此平山に、いしがねは涌かことくほりにほりて、鉛の、いたくふきいたして榮へたりしをもかたりて、火をたき酒あたゝめ、わりごひらいて醉ひ、尙ふかく分行て、水無（みづなし）とて五六はかり、大池のへたに在るやかたにつきたり。櫻さき、桂のこのめ、しで、こぶしの花おもしろく、影の水のうへにおちて、さばかりひろかりける水の面に、木の根の朽のこれるがいと多く、むれたる鴨のあさりたらんやうに見やられたるに、躑躅さき、こと木もやとり生ひてひし〳〵とありけり。こは五十とせの近きむかし、平之（へいの）といふ、いくはくの力とみたるかありて、ちいさき池なりしを、一夜のほとに、ひとりしてつきとめひらきし。世にたくふかたなき力人たりしかど、木こりてんとて、そのわざにたつさはりて、山おくの白石股といふ、みなかみの大瀧におち入て、身を泡とけちたるはあはれなと語るむしろに、みちのく聲にこはつくろひ、しはふきて老たる女の來る。としをとへば九十といらへぬ。酒進れは、うちゑみ盞とりて、「ひとつひかへてその影見れば、こがね花やら豊にさく。」とうたひて、とよのあかりをなんしたりける。此女は、津輕郡あちか澤に生れし人なから、いまたはたちならさるころ、ゆくりなう人にいさなはれ來て平之かつまとなりて、しか此山里に、いくとせといふをすみつきしと聞へたるを聞つゝ、

もゝとせの齡もちかき老の身の花に樂しくめくるさかつき。

雪解の水

かくて此かへさに、雪解の水まさりて岩波高く、川渡らんことのあたはねば、いかゝと立わづらふに、あなたの岸にあまたの人立かさなりて、あやうし〳〵とよはふ。かな子七たり八たり衣ぬきやり、みなぎる波をかいわけ、頭のみ出てはる〳〵と來てけるにおはれて、身はなからぬれ、手をつらねて渡る。むかふきしべには人々聲をあげてよひ叫ひ、いそきて石なふみそ、右へ左へさしてなと、たましゐ空にとふ思ひして、人々にたすけられて、みなからくしてきしにいたりて、夢かとおほへたり。

平山を下る

九日。平夜万を出て臺處澤、七曲り、小すばり、おほすばり、くろぶちなと、見しおなしすちなから、木のめ青やかに、櫻こゝかしこに咲ておかしう、かね澤村より、さちに鉛つむ小舟にのりて、一ときのほとに藤琴にいたる。

　行袖にかゝるおもひよきしにさく花のふちこと波たかくして。

佉文夜にいねたり。

粟福の花

十日。糟毛のやかたに行に、遠近の櫻の、紅のこきもうすきもいろをつくしたるに、蘺ねの山吹みちもせに咲みちたるを、わらはべの、こゝろなう川にこきすて、路にこきちらし、あるは手ことに折行を、あらおらの來かゝりて、そのあはふくはどこから採りきしそなと、ことかはして過たり。此あたりの人は、山吹を粟福の花とはいふなり。

晩夏岐野莽望圖

解夏岐野莽望圖

觧夏岐野莽望圖

辥夏岐野莽望圖

くちなしの色をうつして寄る波にけぬるか水の泡ふくの花。

霍公鳥

そことなううかれ行に、雨のひとむら過たり。しはしとて人の軒はに笠やどりして、たゝすむほどもなう空はれたれは、藤言に皈りくとて、霍公鳥のふた聲三聲名のりたるに、

春はまたくれぬおもひにほとゝきすまたてことしははつ音をそきく。

山村晩春

波流はきのふとくれはとり、あやしき山てふ山のみね麓、川てふ河の川くまも、八重たつ雲のすかた、ながるゝ霞の衣手のいや寒きまで、けのこる雪の遠近にやゝけしき見へて、木のめ春なることゝちせられて、尾上高砂をわけて、まことの雪と雲とのあさむかれたるはかり、花に埋れたるみたに、あるは、嶺に日かけさしそふる、うす花さくらのまさかりなるに、鳥もいろ音をつくしたる、なさけなか〳〵むなしう、いにし春の餘波もわすられて、

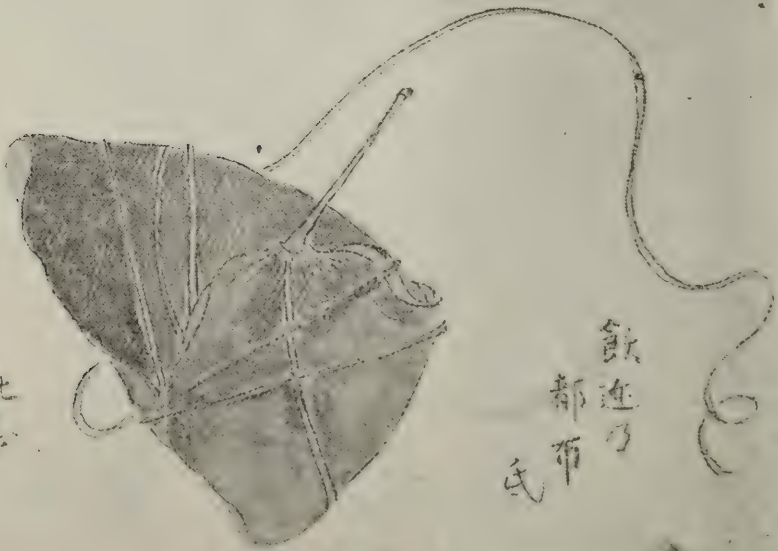
くれはてていくかになりぬ太山路は花に又見る春そ樂しき。

かくはかり花おもしろきところ、つま木こるをのかしゝおもふにまかせて、くれ竹のふしともさためす、山にくれやまにおかして、こゝろのゆくかきり見て、そのあらましのおかしきところ〳〵の、かたほなるすかたにうつして、人わらはへなるたねを、かいのこしぬることしか〳〵。

藤琴の端午

五月五日。れいのさゝまきをし、あるは菱粽、此又の名を鬼の礫てふものを、よねをしのゝ葉に包てむし、これをなゝつ、あるは十あまり絲にくゝり、さねかつらの實のことくにしてそなふは、藤事の澤のならはしにや。此日、仁鮒といふ村に舟にてわたる。尙ふかう行は子懸といふ。津輕路に聞しおなし名のありけるに、にゐはり筑波寺のいにしへ、德一大師のふることをおもひ出たり。鬼神といふ村の不動尊の堂にのほる。瀧あれど、水のかれてさらに音せず。

名馬物語

此山かげに、いばへの澤といふやまのふところあり。世にいふ、小栗判官ののれる鬼鹿毛はこゝに產れたり。その馬の靈を、神にいはひて鬼神といふより、やかて村の名ともなりけるにや。ある人、いにしへよりいては、みちのおくは、よき馬のむかしよりいづなと語る。しかり聞つたふ、治承の軍に伊豆守仲紹のもたる、木の下鹿毛の駒は宮城の郡よりいで、源九郎義經のり給ひし太夫黑といふは、津刈の郡立野の牧に生れて、いつらをいつらとも、まさりをさりのしられさりけれと、そのころ誰ならんか、「名に高くたちのゝこまもみやきのゝ木のしたかけにいかてまさらん。」なとおもひ出て、かたらひつれて邇婦奈にかへり來て、なにがしのもとにこよひはやとる。

餘夏岐野莽望圖

六月朔日

みなつきの朔のあした、空のいと涼しうくもりぬ。けふのためしとて氷の餅をたうひ、藤の花やうのものをそくふめる。

糟毛川遡行

かねて聞わたりつる、糟毛川の水上に不動明王の瀧とて、おもしろきかありと人のもはらいへは、ひとりみちとひこしわけて、田屋といふふたつやのもとをさして、野行山行おりのほり、長士呂をへて谷地（やち）邑、根城なとは柵のあとゝか。うへ、その俤のあり。熊埜臺をよそに、田城といふをはる〳〵とすき、おなし川瀬を、こなたよりかなたとわたりして、畠といへる處のありて、この村なかに上日影、下日影といふなる名も聞へたるやかたに、しはし休らひてと人のいひしかは、

木のもとにいさ風またんここにしもひかけくまなくてらすやまさと。

不動堂

あつさに、えたへで、しかいひつる言葉には似す、やに入て水こひ休らひ、宿なる童をたのみてあないさすれは、七曲の路をなからおりて、鑑（がんこ）といふ河のへの村見おろし、おりはてて川渡り岸にのほり、淵あやうけにたとりて不動尊のおましま す堂に至れは、青黒山といふ額あり。くろかねにてさゝやかの劔を作りて、うつはりのひまさらになううちならへ、あるは穴ある石をかけ、紙をむすひ、麻苧のいとをとりかけて手向たり。

不動の瀧

かくて、みちしはし山かけに分て文無、威靈仙、木賊、零陵香なとふみしたき、履もかくはしうかの瀧のもとに行は、しら糸をあまたかけたらんやうにおちく。此瀧の中に路のありて、短きかたひら着たる男、み

たり行けり。

　山ふかきたきのかけみち行人のぬれて涼しき麻のさころも。

須波利の淵

ふたゝひ明王の堂の前にいてきて、小舟のさかのほるに、ものさらせてこれにたぐへ、須波利といふ迫り立るいはほのはさまに、つとこき入る。岩ごとにそはたちて高う、淵は、さをにふかけれど水の心はしつかなれは、みなそこのくまなう見やられて清し。倚行はいや迫し。桃の源にたつねいたりつらんおもひもおしはかられたるに、空うちくもり鳴る神のとゝろき、山にひゝき谷にこたふれは、舟とくくだりて長場内といふ村につきたり。

長場内

白雨やしてん、一夜はこゝになさと、なさけ〳〵しういへれば入ぬ。めの童わらんづとりて、檪にうち越せよとて投たり。わら沓作りて、いまた毛切てふこともせさるに、なる神の音聞ばうつばり越せ、かた〳〵作れば川にうちなかすためしなり。やゝ日もくれ、晴たる河水に蛙鳴さよみて、ふすまなう明たり。

藤琴に下る

二日。遠差幡奈以をたちくれは、川へたてて米田といふ村の見へたりけれは、

　山かけに佃るよね田に風おちて涼しくわたる川そひのみち。

逆巻といへる村のあり。

　河きしにみなはさかまき行水の音もすすしく木々のなかみち。

萱澤といふ村はしに、あや杉の立るなかに、いとことなるをとへは、あをやしろといふ榾といらふ。

生ひ茂る梢にましる蒼社いく世を杉のたてるなるらん。

室臺、眞土をへて川わたり、佐秀郝のやかたを右に、上埜臺とてなかめのいとよけん。此ひろ野のなかをたどる〳〵ひとりわけづれは、藤琴のやかた、めのしたに河なかれたり。かくて至る。

再ひ平鑛山に

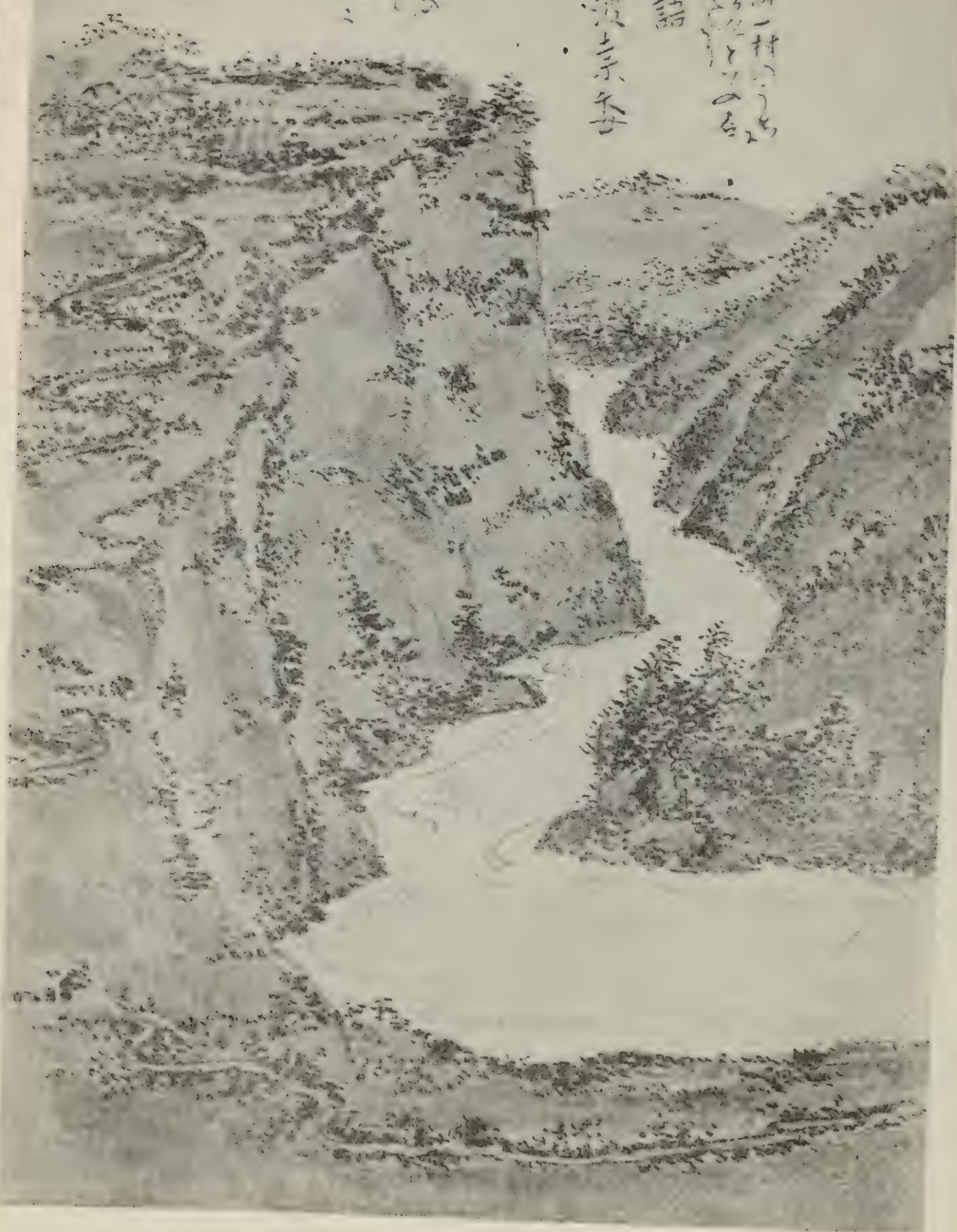
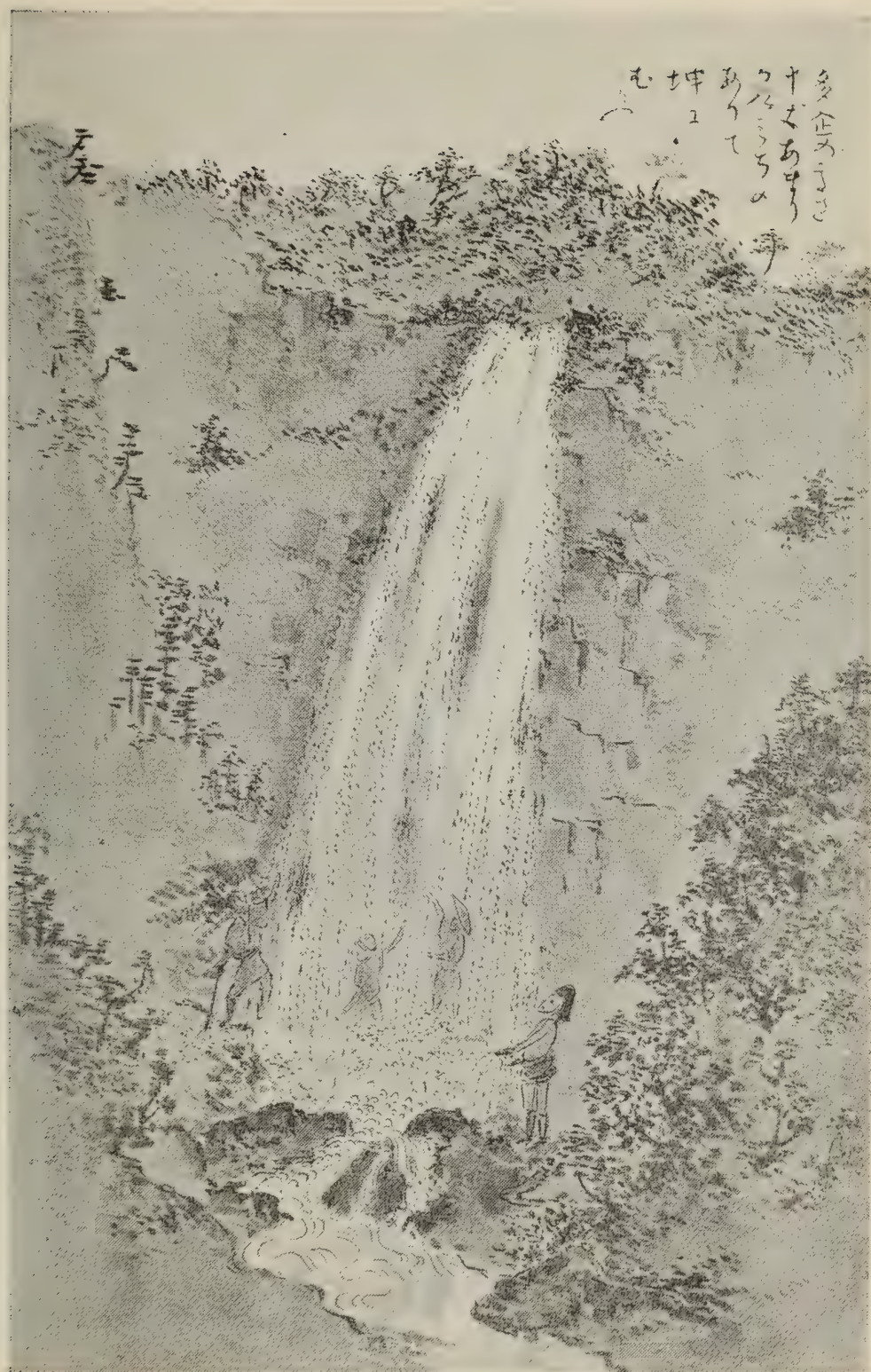
瀰寧通貴のもちはかり、あつささくべうたよりもと陀避良夜万にゆかまく、やとのあるし加母夜なにかしにいさなはれて淵言をいて、やはら委知の渡をせり。村のわらは、あらこをおしきにふせて、久呂都具美といふ鳥のひなをふたつみつこめて、とゝこのひるにてあつかふといふ、こかひする宿に入き。かふこを尊子といひ、ひるとは、ひゝるをこそいふなれ。由乃差波の瀧もよそに、かくいき〳〵て多伎乃澤の瀧の、こゝしう草の中におちくる末のおかしう、帒といふ田のなかのみちにたちて川越に見やりたるは、春わけしさまとはことに、木

辭夏岐・野莽望圖

辭夏岐野葬塋圖

平の奥へ

白瀧

大瀧

くさふかし。加尼差波村になかやどして、呼瀧など夕くれて音にたどり、山田のもとにつきぬ。

十八日。猶此平の山ふかう、川つらの路あるをたどり、木こり、炭やき、かなごらか通ふ皿路、ふちせの岩にはつか斗足かた付たるをふみて、やゝ門前坊といふ處あり。かの僧やこゝに折そめたりけん、春はいとよき蕨のもゆといふ、そのほたしけりあひたり。與助瀧の細くかゝり、藤からまり石とて、大なる岩の上にこそ木も生ひたるに、藤のいたくはひまつはりたる。花はいふへうもあらすおもしろしなど、人のいへり。白瀧といふあり。白綾一むら峯より麓にひきわたしたるかど、此河水におちそふなど、おもしろさたくふかたもあらし。いぬもとしをへて、いつとりといふ岩山のいと高きかありて、弓手の山には小瀧の二まておち、木々はとしふり水ふかう、さらに幽なること、ものに似す。語山、大嶽などいふ高山の多く、さる處にはあやしのものゝすむなど、人々、聲ひそかにおちてかたる。たゝみ石といふあなたは、みなきりたる水をへたてて委波爲以志、あるはいふ志夜久以志とて、牛三つをかくすへき、その高さ十尋はかり、淵にのぞみてたてり。しはし山坂わけのほりて、大瀧のもとに下る。こは黒石、白石といふ大なる山川ひとつに、岩のはさまの迫りておちくる。飛泉はいとひきけれど、音は、こゝらのいかつちのうちしきるかごとく、すかたは雪のくづれか

ゝるかさ、しら淡のわきかへり、雪と霧とに沾たるおもひし、見るもなか〳〵氣もきへ、こゝろならねは、いそきいてていさゝかふちつたひ、不動尊の瀧とて、水なん迫りなかるゝあり。河瀬分れは、鼻くり岩といふいはやとあり。白石といふ川の名は、ましろに乾より流れ、黑石の川は石くろう卯辰よりいで、此二のあら河、ちまたのやうに流くなり。さりけれは、しろ石また、くろいしまたといへり。この白石の路とて世にたくふかたもなう、その葉いと大に、莖ふとく高う、にごやかに味のよけんと。このふゝき、いまも刈る人多し。倘川瀬わたりてさかのほれは、檜原といふ小河なかれて、水上は眞木のしけ山也。白石の源を見んとならは、津輕郡乙部山に至るとなん。こたひは山路行てんと、藥師山といふにのほり番樂の澤をわけのほる。かの高岩山のものかたりあり。炭竈のけふりこゝかしこにたち、遠のやま〳〵高くつらなり、燊吉山なと大空にひとしう見やられ、いとまちかう語山より人のわけ來るならん、そのあたりに聲す。

白石路

番樂の澤

　つま木こるをのかおもひをかたり山語りておりくこゑ聞ゆなり。

日くれ近く、だひらのやとに皈りぬ。

辭夏岐野莽望圖

辭夏岐野莽望圖

錦夏岐野莽望圖

辭夏岐野莽望圖

斯呂無志
万多の
大瀧

辟夏岐野莽望圖

白石岐の
不動ヶ淵

辟夏岐野莽望圖

阿仁洒澤水

共五冊
北秋田ノ
阿仁
三

切石の邑
七折山

七座山
松倉　大倉
三本杉
箕倉　烏帽子
正面
権現倉

阿仁迺澤水

阿仁廼澤水

阿仁酒澤水

阿仁迺澤水

河合村

阿仁迺澤水

川合村
松石の碑
實ハ川井村ナリ眞澄ガ好筆ニ因テ
井ヲ合ト書キ換ヘシナリ此村ハ
大阿仁ノ内ナリ

延慶のころの

阿仁迺澤水

阿仁酒澤水

阿仁迴澤水

阿仁逎澤水

阿仁迺澤水

阿仁迺澤水

阿仁迺澤水

七十枚

阿仁迺澤水

阿仁週澤水

阿仁迴澤水

大蛇岬よ

阿仁迺澤水

阿仁逎澤水

雪能飽田寢

共五冊
北秋田ノ阿仁
二

享和二年の冬かみな月のはしめ、出羽の國秋田の郡阿仁ちふほとりのまぎ山をいてて、杜良乃山、いはゆる秋田夜万にのぼり、あるは素絲の懸水を見、研石の物語をし、安佐利與一のありしむかしをたつね、火内のほとりに來て大瀧の溫濤に浴して、年のくれはつるをしるしてこの册子の名を雪の飽田ねといふ。これが末に、贄のしからみとふ春のはしめをかいそめつ。

眞樹山初冬

鐘禮いやふるかんな月のはしめつかた、赤銅ほりふく眞樹やまのほとりに在て、さと嵐たち、雨におち葉のこゝらいさなはれかちに空かきくらし。

　軒はふく風に時雨て冬來れはあめも木の葉もはれぬ山里。

ふつか、みかと日もへぬれは、一夜のほとに初太雪のふりにふれゝは、山のすかたもをもかはりせり。

　いとはやゝ冬をふかめてみやまちはきのふの時雨今朝のはつゆき。

ゆふくれて風の音倚はけし。

笹平へ

十二日。六貫目といふしきやまを出て峯越へ尾こへ、會衣文奈加世をへて多加比良もへぬれば、みたにの底のやうなる笹平といふところにきやどる。小夜すから風のすさましう、板ひさしうつあられのさはきに、いもやすからて、

　あられふる軒はのをさゝたひ枕音のさひけく夢ちむすはす。

かくてとりは鳴つ。

十三日。時雨のいたくふりて、きのふはふみわけ來し山路の雪のなごりなう、けふはけちて、ふたゝひかんな月のきたるおもひそせられたる。こゝをたちて波多祁万布のかねやまも過れは、蛇腹の岩坑（しき）とてあり。このいはほのさまいとたかうそひへたてるを、とはかり見て溪めぐり岨つたひて、天狗比良なとの、かねほる子らかやども過て、ふかき谷をへたてて獅子鼻とそいふなる大岩のたてり。黑印澤に見し面影にやゝ似たり。かくちやまをへて雨ふり頻て、土山に來て宿つく。（土山まで）

　たひ衣袖のしぐれをまくらにてぬる夜はゆめもむすはさりけり。

ものおもひして、とはしらみわたりぬ。

十五日。きのふは風のこゝちして、よき日なからえしもいでたゝで、けふなん此やかたを出たゝまく、あるし小林を別ぬ。こゝを土山ともはらいへど、八とせのむかし、三枚の比良よりやかたともこほちうつしてけれは、いまの名は三枚とこそなれ。まほの名は金か崎といへるとか。北なる河ぐまにあたりて、天鍎（あまたて）といふふるき柵の址とて高き山あり。向ヒ林といふ村の川をへたてて見ゆ。岡ひとつ越る路のべに、尼池の瀧とてさゝやかに落たるを見き。冬枯の梢あらはに大吉澤（おほよし）とかいふ村の河越へに見へ、ふか澤をめてに鮎瀧てふ村ありて、高（土山近傍）（尼池の瀧、鮎瀧）

蛇腹の鋪

不動の瀧、大瀧

小出澤へ

杜貝登山

からぬ飛泉おちたり。むかしは年魚のさはしりのほりて、この瀧の下にむれ來し物語をせり。綱引澤といふを過て、一の渡とて巖そはたち、あら川に柴橋かけわたし、不動の瀧とてあり。ふりあふけば、二筋におちくなる水をへたてゝちいさきいは山のあれは、瀧を妹背ともいはゝいひてんかし。此山河のきしべ行〳〵大瀧といふかあり。鍋瀧といへるは一の股の山より流れ、二の股の谷川も、こゝにてふたせのあら河おちまじりていよゝ水ふかくみなぎり渡れは、大瀧の亦の名を落會の瀧ともいふといへり。

涌かへり岩間ところにおちあひのたきつしら泡雪とふるかに。

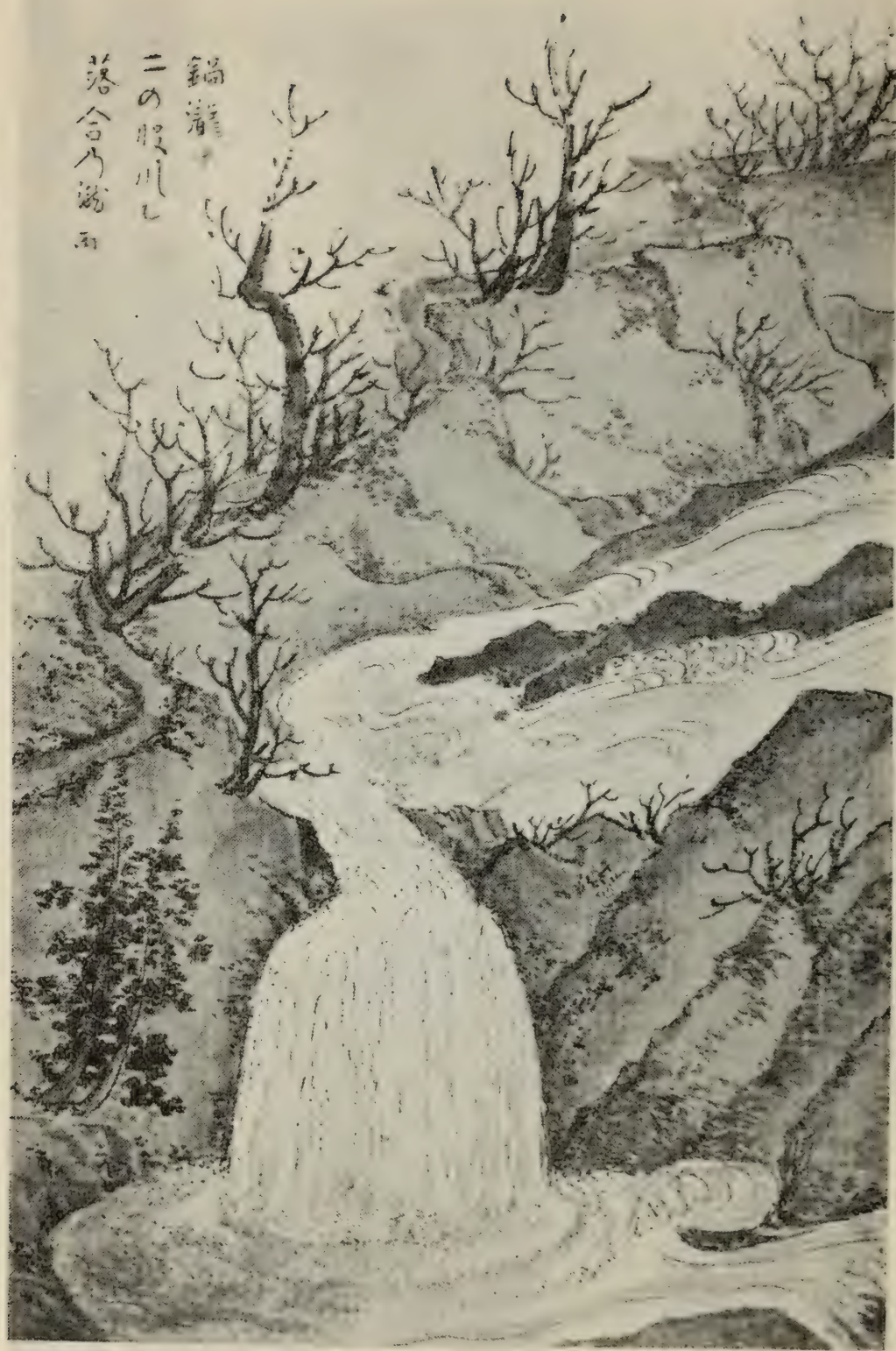
二の渡、木立か澤をへて、一の叉のかね山を弓手に、二の叉峠をよちて日もはや入りぬ。五十本、傘間歩を過て、こゝにも不動の瀧とておもしろきかありといへと、くらければ音にのみそしられたる。毛度比良、七葉樹比良、五間比良、千代ひら、山猫、八月ひらなとを竹火のまつに、くもりたる夜の路しるく、やゝ小出澤につきぬ。

おなしき十六日に、二の股のやかたより御嶽まうてしてむとて、人にいさなはりて茂利余志の山にのほりぬ。こゝなん麓なれは、めやすくわけいらんに、たよりよけなりとかねておもひしごとなれは、しかすかにうれしう、霜のおく山はる〳〵といたりいたれは、旭ほのかにてれり。

さしのほる日かけに霜のとけそめて山わけ衣袖ぬれにけり。

三の股　一の懸　登山者齋戒

三の股といふ山里のありて、みちのかた岨なる、八船豊受比咩のかんやしろにぬさとりむけてわけのほれは、かれふにたふれたる鶏栖あり。そはたつ赤倉かたけとやらんを谷水へたてて見やり、沼の臺とそいへる高岡にのほれは、沼水青く埜にながれ、水艸枯れゐたるまてあはれふかう見渡し、一の懸といふに至れは、石のほさちのみぐしくだけたるを、かづらにまとひて堂に立り。大鳥居をへて、霜にかぢけたるやまぐみのいろめつらしう袖にこき入れ、ゑひかつらの葉かくれて人の採りのこしたるか、いまはその葉もおちはてて、かづらのみあらはにはひまつはれば、こゝにもかしこにもありつとて、ひたにましらのあさるやうにとりくひて、あゆみこうじ、いきくるしかりつるのんとをうるほし、二の神門も過たり。雨瀧の澤とかいふらんあたりにふりあふきて見れは、みねのしら雲なこりなうはれたり。祓川とて水細き流に、みさかはかりのまろ木はしかけわたせり、こゝにみそぎやしてん。このみたけは大同のむかしふみそめて、いたゝきのほくらのうちには、かしこくも大汝、少彦名のふたはしらを齋ひまつりて、むかしは夏草のかりそめにのぼらん人たにも、おもきいもゐにこもりしかと、近き世となりては、かろらかにさうじしてまうでのぼるとはいへど、魚、くれのおもをもくひ、女にもふれて、つゆはかりも身のきよまはることなきものをは神さら

鍋瀧ト
二の股川と
落合乃瀧
図

ふとて、谷鳴り峯ひゞき、空のかきくもり、はやち梢をならし、いつちにか吹いさなはりける
となん。此みな月はかり、さるおかしあるものにてやあらん、竹きりのおのこひとりを、あ
またかなかより、空をとはしてさそはれたりし。ときのまに晴わたりしかは、そのものゝむ
くろはと尋れは、はるかなる谷かけにふしまろひ居て、からき命をばたすかり、ことなきを
よろこひたりと人の話り聞へたり。

川の名のはらひしまゝにいさきよく水の心もすみ渡りけり。

竹伐の假家

まかねふく山てふやまにもてはこぶ、ともし竹伐りのもの、しか夏より秋かけて在りつる小
家の、形は法師の冠のすかたしたるを、この小川のへたに、みちもせにこゝらたちならひた
り。ひまよりうちをさしのそけば、やすの木のひろ皮をしきて戸さしぬ。

誰こゝに木の皮むしろいく夜ねてたか葉かりふく宿そ多かる。

ばくち長根

笹臺とて、うへも小笹の多かりけるしのゝ中路をわけて、ばくちながねといふか、めてなる
さゝふかくれにそありける。こは竹採りのおのこども、つま木こる雄らもよりつとひ、錢、
よねをかけ、斧、とかまをしちとして、ばくやうをそしたりける、それか名とは今なりたると
か。赤坂を過て鉤栗臺とて、その木いやしけうかれたちて、木の葉さらにあらざれといとく

毛呂美臺

らし。毛呂美臺とて、靈櫃の木のいと多し。それを欅檜とやいふらん、ことを、くにうとのし

かよこなまりて、もろび、あるはもろみとはいへるなるへし。松倉峠といふあたりのたかはらなとに、蛇苺の形したる三葉の支連ひし〳〵と生たり。津輕郡小田山に生ふるにひとし。息くるしとて、をのれ〳〵か力とたのみたるたか杖は、路のぬかりにみなさしつかねて捨たり。おはなばたけとて、かれふあり。花のまさかりなるころは、もゝくさの色あはれをつくすとなん。

山田小田

こなたにさゝやかの水田あり、山かけにもいと多しといふ。春は誰れすともあらて苗代のたねまき、夏は早苗植わたし、秋はたが刈しともあらねど、いなくさといふものゝ、いなくきのことく水のうちに殘りぬ。けにやあらん、小田なる山にこかねほりてふなかめは、みちのく山にして、いまも小田のまちのさはにありけり。いまこのやまに小田のかたち、畔なとすらまさに見へたるは、いにしへ人のこの嶽をさして、「道奧の秋田の山はあき霧の立野の駒も近つきぬらし。」と、うへもなかめたりけん。そのむかしに牧やありけん、いまも麓に、眞木てふかね山のあるにても尙こそしられたれ。もともそのころは、小股の澤邊なる森吉村よりわけのほりくを、もととせりけれと、いまし世となりては、一の叉、二の叉、

前嶽、中嶽、向嶽

かやくさなとよりものほりて、麓の路そ多かりける。おなし山のいたゝきなから、前嶽、中嶽、向嶽とて三のみねあり。前だけに小田あり、なかだけに石つみの塚あり。なへて山は、

むろの木

いつことなうむろの木生ひたてり。これを、まうつる人は、かならすつとに折くたりて、一

石塔

守良大權現

はひ松

登山の期間

とせのうちあさな、ゆふべ、火をきよめてけること、いせの海二見の浦の、きよめくさてふにぎもして、やかのうちごに水うちきよむにひとし。いきふれのけがれあれば、まづたきて身をくゆらかし、やまふさのやとにさふらひても、いたくこかしけるのためしなり。なかたけのおちくほなるところに、なゝひろはかり高き、をのつからなれるいはほの、塔の形したるあり。以志塔とて人もはらたふとみ、遠かたにのぞみてもそのかたちいちしるし。このいし塔のもとに堂ありて、石の藥師のみかたしろをおきて、守良大權現とあかめ奉れり。秋田城之介のころは、神田なとも寄せ給ひて榮へたる物語あり。むかしは麓に寺ともありしかと、いまはたゞ森吉山龍淵寺とて、はつかに寺の名のみ殘りて、けんざの家にもり奉る。小股よりのほる峠に塔堂群梠(むらすき)といふか、うす雲の中にへたてられてそ見ゆめる。向嶽に至らむの路いと遠く、はひ松とて五葉の枝葉しげうなへふして、青葉のむしろやしきたらんと遠目には見ゆる。その木の枝のみ、あやうげにふみしたきてよぢのほりぬ。としことの卯月八日を山口とし、みな月の十五日は神わざなれは、まうづる人多し。葉月十五日となりては山ふみをとゞめつれど、われおぼろげのねがひならねば、ふたゝひこゝに來至らんこともかたけれは、吾ばかりこのかんな月のなかからにも、ふりはへてまうてのほるははしめ也。はや雪も三たひふりしかと、さちにみなけちはてて、わきてけふしも、名におふ

山上の展望

春や來ぬらんかと日さへうら〳〵と照り、風さらになう、水無月のてりはたたくにのほりてさへ寒さにえたへぬといふに、あつき衣着たるにや、さることもなう、あし手はかり露さへて、あせや〻ひきたり。遠かたのはる〳〵と見やられて、ひんかしは岩手山、西に近きは恩荷の島やま、寒風山、北は小田山、岩木やま、南は栗駒山の見ゆなといと遠し。坤にけふりのむら〳〵とたつは、不二をあさむく鳥海の岳にこそあなれ。この山三とせはかりもへいでて、しか、けふりそ多かりける。空に一むらの雲となひき、ときのまに、やものくまはも雲か〻り、こほ〳〵と音の聞へたるは神のひ〻きにやと聞おとろけば、あないうちわらひて、あ

旭股

の鳴音こそ旭股とて、遠きみなもとに夜須(やす)か瀧とて、いくはくか高からんはかりもしらぬ瀧のありて、そのおつる水の、こ〻まてはとゞろ〳〵と鳴り聞へたれとかたる。そこなん大股の澤といふ、仙北に近きその瀧なん、いくひろおちくならん、誰しりきといふ人もなき、おそろしき處なと、人々かたりあひて休らふ。此向嶽もおなしう藥師ぶちをおきて、守良の神とはいた〻きまつり奉る。見やる埜に遠くは大又澤、こなたに小又澤、そか中に一の又、二の又、三の又のやま澤つゞきて、根山ひろく連瀬、丹瀨なといふ太谷いと幽にして、八重やまの連りたり。こは飽田郡の山のをさとやいはん。わたの沖邊より此山を見れば、蝦蟆の蹲り

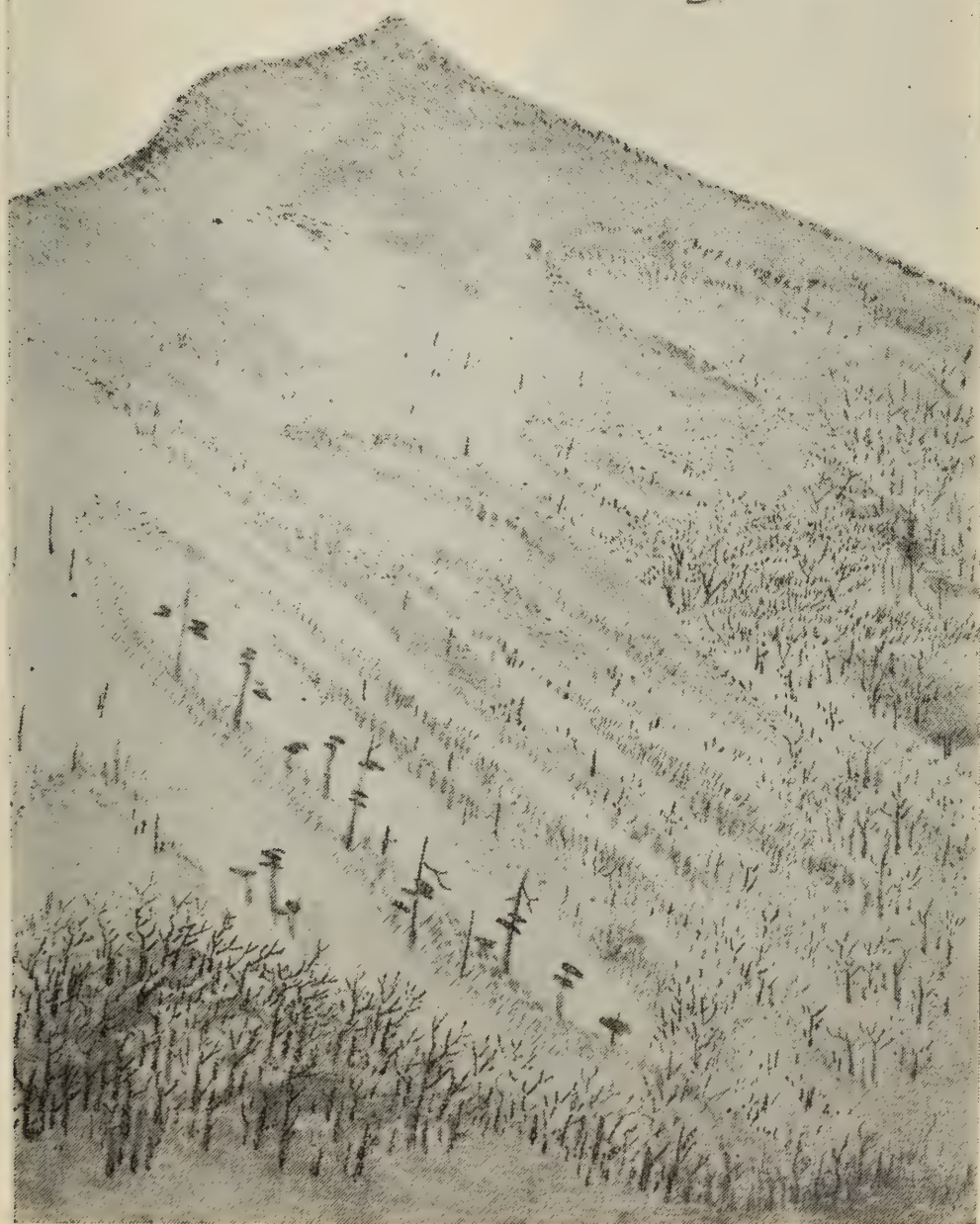
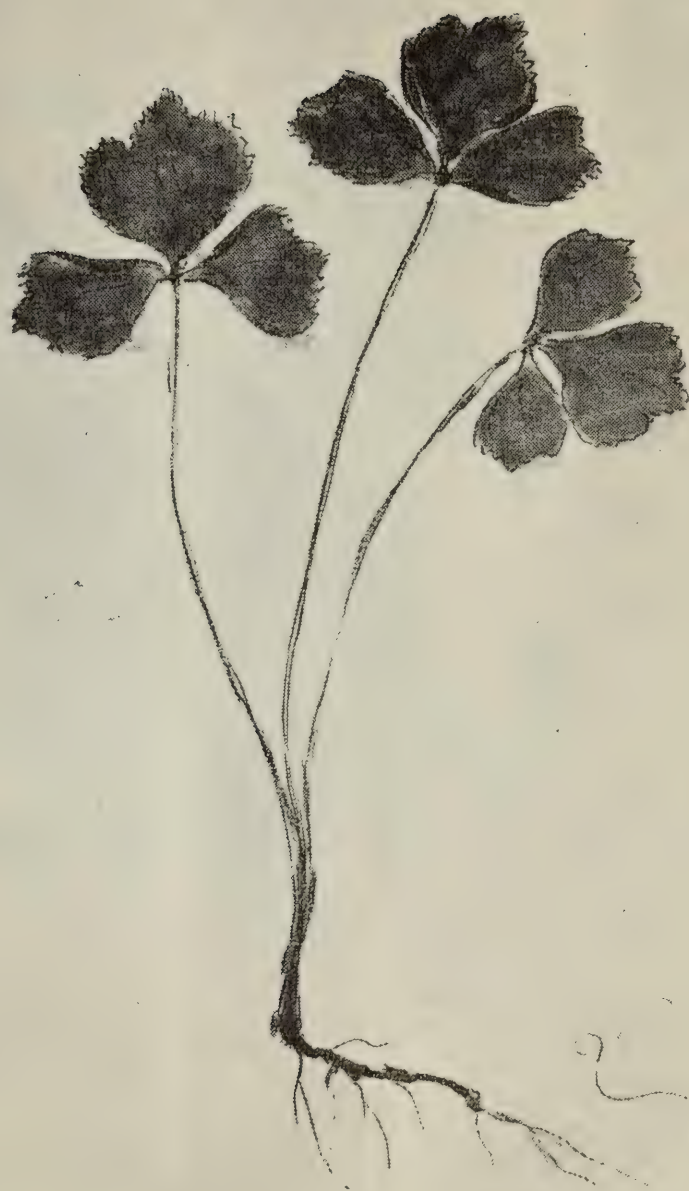
か嶽

たるに似たれは、船人等は蟾(ひき)か嶽とあふき見て、これを舟路のしるへとして湊人をせりける

布奈多比
差左巨夜
波良比川

秋田夜乃
杜良山
武甲斐岳

雪能飽田疇

垂斯塔田
以波塔
胎内潜

となん。いさ、みねをおりなんとてむろ檜を採ぬ。うれなをりそ、神のいたくおしみたまふよなと、小枝こゝら折りかゝへ來ておひ去もありき。

　秋田山いはねのむろひ折かさし雲ふみわけて皈るかち人。

この山には兎のほか、さらに獸のすみかくろふかたもあらし。うさきを逐ひ、蛙をとりたるものしは、そのむくひをかならす身におふとなん。まくたりにいさとくおりはてて、たとる〳〵くら〳〵になりて、二の股のやかたに皈りたり。

霜寒月のみそか。山のあるし莊内なにかしにともなひて、千代倉、山猫なとの、なゝさか、やさかとふり埋れてける、雪の八重山越へすとてよちのほる。邇乃萬多峠のいたゝきより、露のちりたる斗、つちくれのまろひたるやうにおちくやと見るかうちに、とりの子のことく礫の大きになり、わらふだの太さにひろこり、倘いはほなとのくつれかゝりたらんかとおち重りて、岩つらにうちくたかれては、さとこほれてちりぬ。これを輪走（わし）といひて、人さへうたれ身をもうしなひ、家をもうちたふさるゝとて人みなおぢたり。音のして雪のこけおつるを鳴提（なで）といひ、聲もせで落る雪くづれを和志とはいふとなん。蝦夷の海への岩のそはたてる岬あれば、わしりといふに名はおなし。

　麓行身はこゝろせよふゝく日はおちくもしらし雪のしら鷲。

みゆきかきわけふみならし〳〵おりはてて、加都比良の不動堂に近きといふ千長が瀧も、けふのふゞきにくらみて見なんそらもなう、この市の叉なる、釜の澤てふ戸塚のやとにつきたり。夜とともにかたらひ炭さしそへて、そはむぎの粉ものして、これたうひてなと、あるし鶴歩。

釜の澤

濁らぬはこゝろはかりの蕎麥湯可南。

とぞありけるに、すひつに更てあたゝまる屋戸。いよゝ更たり。あるしの情あさからで、こゝに三日斗ありて、此ころの大雪にふりこめられ、やゝ斯波秀のけふは四日なん。晴にれは、かねて聞つる小叉の澤の奧ふかくあるてふ、白絲の瀧の雪におちなんも見まほしくて、しかおもひたてと、そのあたりへの行かひたへてあらさなれば、こゝろたしかなるあらおらを雪ふみにさいたゝせて、こゝを立づる餘波に、いましはとて　鶴歩。

師走四日雪中の出立

踏なれぬ橇をわらふ出立かな。

となんありつるに、晴ると見れは叉雪の路。

此あるしの妻なりける人の句とて、

後から帽子直すや雪の門。

とありけるに、こよひはとこに榾火あたらん。

雪の身仕度

雪八九尺

狹間田村

柴橋獨木橋

かしらには奴帽額といふものをまとひ、そか上に逆ぼうしてふ菅ごものかうむりをし、蒲のはぎまきに、つまごわらくつをさして、かち木をひき、手に小長柄といふものをついて、さはかりふかかりける高山の大雪をふみ分る。このあたりは毋利用斯夜万の峯なから、遠方にて此あたりをのそめは、山のなからのやうにそ見へけるは、今行嶇路也。うへならん、八さか九さかといやつもれは、雪にはぎをふとさし入ぬらんあやうさと、あないかふみならし行あとに身をうけられて、かちやしきといふあたりの高岡ひとつわけくたり、からくして高畑といへる山里の近うなれば、雪をやみて、松倉といふなかめいとよけん。桐内の村をへて、錢瀧の末の山河音とよみ渡りて、

　こかねふくやまのかひとて行河もみなせに飛泉のなかれなりけり。

日回とて、かね山に炭もてはこふ、そのえたちのやとあり。ゆき〳〵て、狹間田といふ村のやゝ見へたり。こしかた行すゑの山澤の名を、なへては小又とそいふなる。この小又川の高岸にのそめば、そのたかさいくはくならん、岩そひへ木々茂りて水ふかく、いは波たかし。小角といふところに、いとたかやかなる柱をふたもとおし立、いはほの末にかけわたせる柴橋をしはし渡れは、十尋あまりの大木をふたもとわたしたるに雪ふかくかゝりて、半ふみ行は、ふりうごきてあめに雲ふむこゝちして身にあせし、あないにとりすかり、たすけられ、か

らくして向ふさまたといふ村にわたりえて、あなうれしとおもふのこゝろまとひにうかれてや、あらぬすちにみちふみ入て、こはいかにと、あないもうんじかほして出たり。

跡見へしかたをしるへにふみまよふいさまたしらぬ雪の中路。

雪に足のさし入〳〵して、はきふかくわくれば、みちのはかとらすしてあゆみこうじぬ。はや山鴉の三四、いやふる雪に鳴つれて、なれも梢やもとむらん。夕くれの近からん、宿はいつこにか、天津羽といふ村なかにいたりき。その鳥や栖ぬらんかし、あまつばは、雨つはくらめのことを、此あたりにてはしかいへり。いはゆるあまとり、胡燕をこそいふならめ。尙しも雪のふり來れは、

むらからすねくらに皈るあまつ羽も雪吹にくれのいとはやき空。

森吉といふ邑に入は、さはかりふりたる雪の雨となりて、いやふりにふるころ宿つきたり。ひるよりはゆるひ行ならん、たちならぶやねより雪鳴提のつくてふ音は、なへのふるかといねもつかれす。まいて宿のあるしはまち人なれば、さらにふすまやうのものもあらて、かの孫辰かゆふへにものし、あしたにをさめしことに、わらをあつ〳〵とつかね、上にいなむしろをしいて、海士のかるにぎものむしろ、こは湖水より採て、まち人は夜半の寒さをしのき、

藻夜着のふとんと蒲黄の色にいひなすらへ、うち戯れていひ、とみうざは火のふせぎとそせ

りける毛久てふものを着て、そのつらさかきりなけれど、冴へたる夜ころともしらで、あつぶすまなこやか上のおもひはしたれど、露めもあはて鷄は鳴たり。

行くれて一夜ふす猪の床ならでかるものふすま夢もむすはす。

烏帽子坂

五日。よんへのまゝに雨のをやみもやらで、今朝しもふりまさりて雨つゝみしていづ。烏帽子といふ山坂の雪路夜半のあめにとけあひ、なめらかに氷て、ふむさへあやうきに、いたゝきとおぼしきところより垂氷くたけおち、石もまろびおちて身もくたかれ行こゝちして、あしさく過なんとすれはこけまろひ、かたはらの岩むらをたよりに、あないのしりにたちて、やはらおりはてて鷲の瀬といふ河つらの村にいづ。みなきる水の高くうちあかりて、その鳥のこゝら居たらんに、たくへつへう見やられて、

なれも來てこゝにすむらん鷲の湍の水はつはさのすかたのみして。

斯毛都留志の喩

おかしき川くまなから、雨は雪とふり冴へて、雜魚淵といふ邑にたとりつき、休らひて出つ。川をへたてて深渡とそいへるやかたも、丹瀬の澤てふなとも雪のしたにうつもれて、立る木のうれのみそ見へ渡る。斯毛都留志とてふりあふけは、雪はすいさうをもてはりたらん壁代のやうに、氷きらめき見へて、のほらんこともなか〳〵にとおもひたへたるを、あないがいさめて、しもとのやうに木の枝の杖して足かたをつけ、あないふみならして、荷の緒とき

小瀧村

丸木橋危く

さげてこれをとり、またぶりをつきたてて雪に手をつき、ひざつきてのほり、やゝなからならんと、しはしいきつきうづくまりて、したつかたを見れば、そのたかさはかりもしらす。あら川の水ふかうなかるゝさま、たましゐ身にそはす。やはらのほりうれと、雨に鳴提(なて)のおち重りて、ふみわけ〳〵行なやみて、高岨のみちを瀬にのそみ、淵にのそみて加美都留志もへて小瀧村に來る。しはし村長の宿に休らへば、これつきていきねと、あるしの、なさけありけに竹杖をくれたるに、算用師とて、村のものかきする翁一來といふものゝ來て、それかいへり。

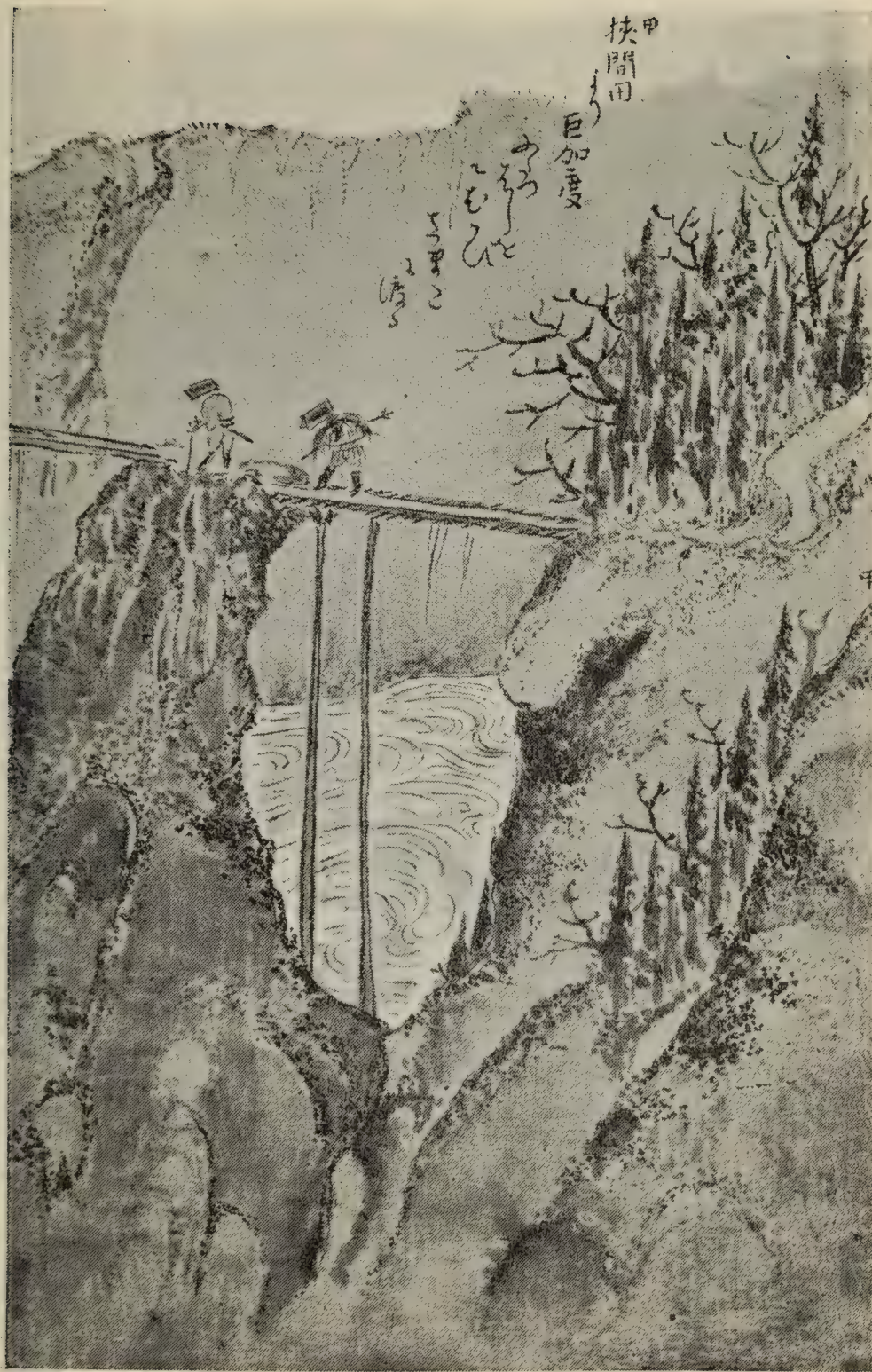
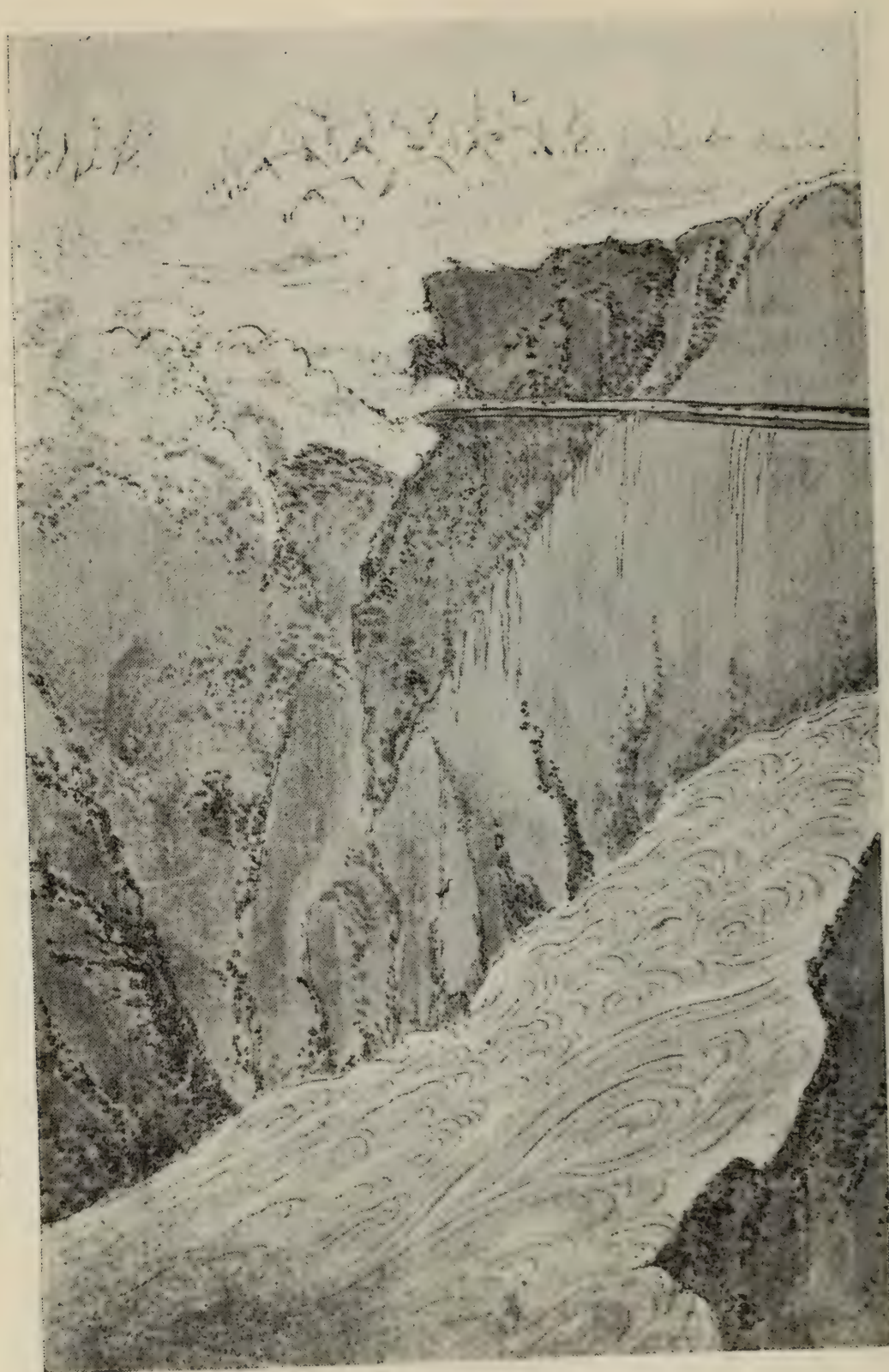
行路の力にたとれ雪の竹。

さすかにおかしきこゝろさし見へたり。　歩木の脛のつらき山ふみ、とかいそへて、刀企度布といふ村の川越へに見やられて行く。ときとふは朱鶴を、このあたりにていふ鳥の名也。女木内(をなぎ)といふ山里の、川のべに見へたる。瀧の澤とて雪にみなぎり、たきちなかるゝきしべも行て、下モ眞名板、上眞魚板なといふ、岨の高みちの雪ふみ分わつらひて、やゝおりつとおもふ川のふたせに、丸木橋あやうく、けふの雨に雪けちて、いよゝみかさまさり、風さへいたく吹て、いのちいきたるおもひにからくしてわたりうれは、やかてその橋も流れたるを見て、たまきゆるこゝちして小坂ひとつのほれば、風たかう、あないも風に吹いさなはれ、吹ま

万都久良
多加波太
銭瀧川の
みれ
ゐる

甲
扶間田より
巨加度

雪能飽田瀑

甲
烏帽子の阪

湯の臺にて

雪の白絲道

ろはされて行もはてねは、手を連て雪にまみれたる袖のいや寒く、湯の臺とて、雪の下にふりかくろへる家の二三ある門に入て、しか〳〵とて火たかくたかせて、こゝちよみかへりたるおもひはしたり。柾屏風といふものを引まはして、中に圍碁うつは誰そとおもふほとに、雪目のくらみたるも晴て見たれは、童とものさしむかひ居て、榛の實をはち〳〵とかむ、その音の石とは聞へたりけり。尙ふゞきの聲はげしう、ふしたる枕がみのひまより吹入て、床も、ふすまも、ましろになりて明たり。

六日。よんへより吹に吹たりし風のみをやみたれど、つとめて雪いよゝふりぬ。白絲の瀧見なん、いと近けれど、大雪にみちもさらにあらざなれば、三人の路ふみをたのみて、やぶれたる小舟の雪かいはらひ、雨に入たるあかも氷もかい捨てさし出るに、いまだともへの氷に重ければ、うきぬしつみてあらき川波に行なやみ、からくして岩の上に、あやうくもうちあてておりつ。みたりのあないとも、手ことに猿手てふ、むらかしはやうのものをとり雪につき立、かいわけて入る。めてに冠岩といふいはね、湯の臺のほとりに在り。山松なとに雪のおもしろうふりて、たくふかたもなう見やり、不動明王の祠の雪に埋れたる、谷川をへたてて、鳥居のはつかにかくろひ殘たるにいちしるく、此行かち木のあとをしるべと、雪の深山に、雪の小坂をところ〳〵にかい作りて、梢折しき、柴こりしきて、雪に折れふす木の枝を渡

白絲の瀧

り、たどる〳〵三たりのあないかみち作り、みちしるべしてその山陰にいたれは、いや高き山のかひより、いはねふたつまでつらなりて落瀧つ。くろきいはほの面に、白き糸すちをあはをによりかくるかと、あまたみたれかゝりたる。山のすかたもことにおもしろく、赤檜、黑檜といふか、かれたる木々のなかに、冬をときはと雪のふりかゝり枝をましえて、松もこと木もいやしけりて、梢は花の眞盛の面影とうち見たる。うへ櫻なともいと多く、岩のはさま〳〵に、いくとしふりたるか生ひ立ぬ。わきてもみづる色をつくして、春秋は瀧のしらいとより〳〵に、くる人そ多かるなと、あないとものかたり聞へたり。この瀧のみなかみ、あるは

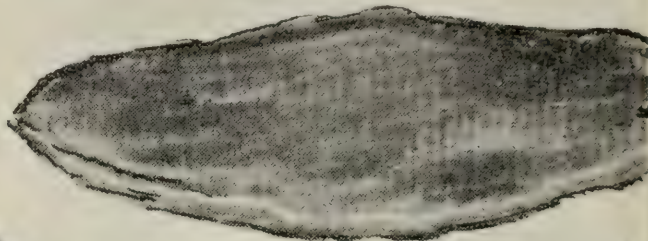
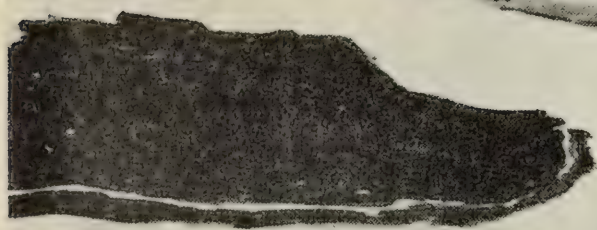
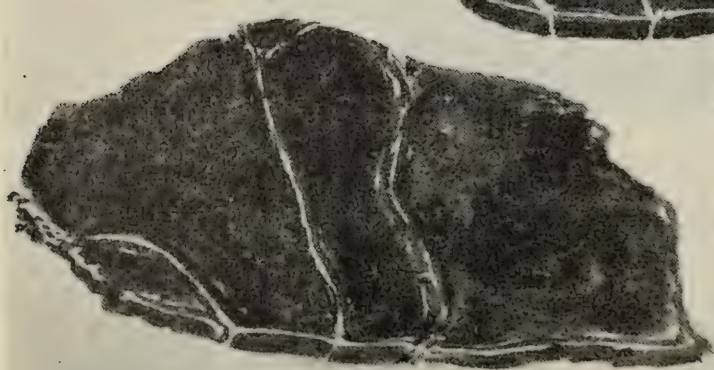
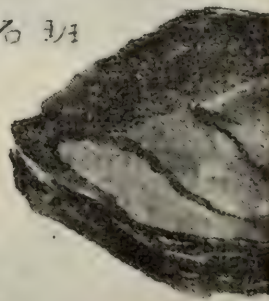
石材を產す

此谷川のへたいさゝかわけのほらはば、研臺といふ處ありて石材あまたいづ。その石黑く、する墨のことく、又うす墨のことなるもあり。はた金筋、銀筋とて、こかね、しろかねの線をひきまとひたるもあり。もともまれなれと、楓、はたつもり、ぶな、槲葉なとの花紋石あり。石は、いつらも堅實にして試金石のことし。甲斐かね、いはゆるあまばた山の石よりも光澤のまさりて、しか世にまれなる石もありけるものか。さりけれと、もはらとは、くにうとさへしらさりけるもねたし。いまはとりえんことも、いつさか、むさかとふりし雪に埋れはて

水源の山々

すへなければ、手をむなしくうち見やりたるのみ。ふりあふけば、源の山の弓手は籠か澤、めてに湯の岡の森のむかつ尾あり。中に千頭か嶽あり。このせんどうの水は火内の郡七日

雪能飽田疇

雪能飽田疇

花紋石

市のほとりにおち、かごが澤山の水は、於保久曾のこがね山のこなた砂子澤におち、ゆの岡の杜のなかれは、此山の近となりなる出湯の澤におつとか。そのやま〳〵のあはひより、白糸の瀧の水はなかれくとなん。しはしは見とゝまらまく、見こころもいと多かりつへけれと、雪吹身をうちて目くらみ、袖さへ渡れば皈りいなんと、

零るほとは雪のしら糸たへ〳〵にみたれてかゝる風のたき浪。

小瀧に下る

こたひは、ここかたにみちふみかへてわけいつれは、あないふたり舟にうちのり、やすけにうたひて、夜邊やとりしやかたにいにき。かくてあないふたりに雪ふませて、ひとつ橋の埋れたるを猿手してかいもとめ、雪のうつばりをふみ行おもひに渡れば、よろほひ立る鷄栖の笠のみ見へたるかたは、夏より秋かけて浴すとて、人さはに入たつ湯の澤の泉あり。その屋形ともは埋みはててしらす。眞魚板の澤路分わつらひて行〳〵、きのふ休らひし小瀧の村をさ、新林かもとにこよひはとて入て、二人のあないに別たり。

新林氏にて

七日。けふもふゝきしつれは、えしもいてたゝず。けふはかりはこゝにあれなと、あるし、ねもころに聞へて日はくれたり。たか杖に句したる一來のとひきて、ほたびさしくべて、更るまてものうち話て、あけなは別ならんとて、

旅衣雪の千里をたつね來て路しらいとの瀧や見つらん。

とそいへる、こゝろさしのうれしさもうれしけれは、たゝにやみなんもほゐなう、返しをせり。

ふる雪のふかきなさけのことの葉は瀧のしらいとかけてわすれし。

しとすとて、たか火さしててらしてとにいつれば、雪はこほすかことし。

雪深き山路

八日。空ははれたれと、一夜のほどにふりつみし、みさか、よさかの雪に、そことさしいなんかたもなけれは、行かひのたへなんとて、村のをさ、みそはかりの人をうなかして、みちふみならさせ、木を伐り橋をかけ、雪の上に木の枝をひし／＼とこりしき、つるしの路のあやうしとて河越してみちふむ子等、うたひつれてにきはゝし。連瀨の澤とて、いと深き谷をへてたる太山を、みねにのぼり麓におり、尾上、高砂をよぢ、大峽小峽をたどり、谷をめぐりて、さはかり遠きやまの村あひを雪路ひらけて、やすげに、いとまひろきかよひちとはなりぬ。

深渡村

たどる／＼深渡といふ村に出たり。

山いく重わけこし雪のふかわたり埋れはてし川つらの里。

こゝまては、またみちふみの分も來されば、かいうつもれたるまゝにて、いつらやみたに、いつらや小河と、さらにわいためもなう、こゝろあてに、あないの行をたのみにふみ行ば、あない醉のまきれにふみあやまちて、大なる男の、たけもかくろふはかり雪の中におち入て、吹

鷲の瀬村

避疫禁厭か

早瀬まで

疫神の像

たまりにやとて、からくしてはひ出たるは身の毛もいよたちて、いよゝやみち行やうに、さくり〳〵ふみもとめて差巨布地に出て、わしの瀬の村についてとまりもとめたり。

九日。王斯乃世の宿のあるし、四郎平のもとをたちづる。いましはしとて家の刀自、上戸ならずとも、このひとつきはまゐれとて、濁れる酒を、さすなべにあたゝめて進め、女とも、摺臼ひきとゝめて見をくりす。門てふ門の雪垣に、うはら、しの笹さしつかねたるは、何の料、なにのふせきにやとゝへは、かんな月にもなりて冬籬てふものすれは、たか宿もかく、門、垣ねともいはずさしけるためし、病を避のましなひにや。この村人をあないとたのめば、それか行しりにたちてたとる〳〵、茂利與志の村に近う、けふも、ゑぼうし坂の雪路あやうくわけのほり來て休らひ、あない、村はしに立て見やり、水鴉の飛行しかたに羽子の渡りとて橋のあり、それさへおち流れずは、樣田の高橋わたらずとも安げに行なんといふ。

　身をかへてわれもあまとふ鳥ならばさしてはねこの渡りせましを。

雪かいわけていいたれば、その橋もありて早瀬といふ村につきて、吉田なにかしのもとにこよひ泊てん。

十二日。身に風のおこりて、一日二日とこのさうせいに在りて、けふなん出たつ。さまた村をへて桐内村にいたり、左右の村はしの雪の中に、泥塑天子のごとく疫神のかたしろを作り

へぐりの道

立て、ゆくりなう來かゝりて見おどろきぬ。かくて剌河原といふところのへぐりのみちとて、その高さ、いくそばくともはかりもしらぬ雪のしみ氷り、弓手は、そはたつ高山に迫りたる細路あやうく、底もしられぬ淵におち入なん、こゝろしてゆけなど、さいたつあない、雪をふみしめ〳〵、杖を力とつき立てすぐる。そのあやうさおもふへし。ちいさき瀧の落るなど風情ことにおもしろけれど、しはしと見とゝむへきおもひもせて、たどる〳〵、やはらたひらかなるかたに來て、川越に根森田といふ村を見やり、蒔淵の村のつぎはしを渡りて細越

小股村

邑をへぬれは、春わけ見し新屋鋪など、見し處なりけり。小股村にいとはやつきて、あないに別たり。齋藤綱繼こゝにありて、秋のころ手をわかちたるより、ことなきをともにとひよろこほひて更ぬ。

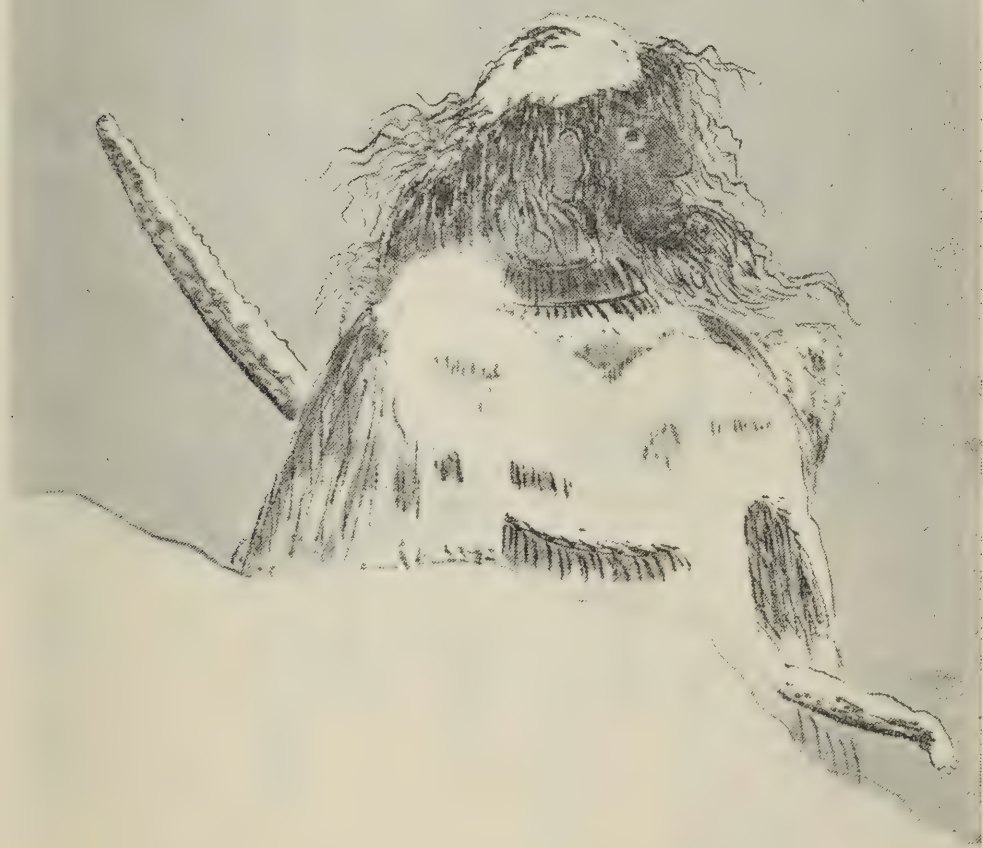
十三日。夜は、なる神して雨ふり、けふは雪冴へてふりぬ。前田の渡りして、めてに見やる

米內澤

比流左万てふいはねのこなたに、七角とやらんの雪のなかめいとおかしう、浦田、與里乃布のやまなど、雪のあさひらき、たとへつべうかたなし。米內澤にいたりてやどかりつ。こよひは寒になるてふ、さむさ、うへしのきかたし。

朝晴の雪景

十四日。とりと友におき出て、與甫以左波より朝川わたりて、雪の塘やうのところをわくる。おないもこゝろにおかしとやおもふ、けふりうちくゆらせて、けしきよしなといひて、

避疫神

さいたちて行。こしかたの川越の山に、ひさむらよこたふ雲に離れて、山埼、鞍懸なさの旭にさしかぎろひ、きら〱さてれり。晴たるあはひを杜良の嶽のすかたましろに、いつれを雲さやいはん。河のへに根小屋さかいふ一村の見へて、行〱て鶴田さいふやかたのあたりは、わきて雪のふかう見へたり。

　友よはふこゑしたてすはえもしらし雪のしら鶴田にむれりとも。

長野村をへて山路にかゝりて、かたは艮のあはひさおほしくて、仄にものゝかけありて、そのさま、鳥羽僧正のそら画にうつしなせる、手長、あしなかのすかたして、いくはくのうまいくさを、いてたゝせたらんやうに、うす墨の色して見へたるは、山市てふものゝ冬さへたてるにや。この春のころほひ、八龍の水海の氷渡て、雪の上に見しよりはまほなりさ見やる。あないもあきれて、狐なさのわさにや、わも見しこさのはしめ也さ。尙見るかうちに、かいけちたり。

　遠かたの山の市人たつほともあらていつこに雪の面影。

上臺、下臺なさいふひろ野に出たり、こゝを大埜堆さいふ。そかなかに、うはがふさころさて凪なきさころに、米おひ、雪舟ひく人うちつどひ休らひて、けふりうち吹て、いま見し山市のものかたりをそせりける。此あたりにはゆめなきことにや。いな春雪の上にはあるこさ

狐の館

なり、狐の舘ともいふなと人ことにいへり。みちのく黒澤尻のうまやにいと近き、後藤野といふに、師走のはしめより、むつきのころありといふはしかならんと、ひとりこちていそく。

追分附近

追分といふところあり、此峠にしはし立休らふ。左に脇神、右に中屋鋪の村々、雪のそかひ山窓よりあらはれて、そらのとかに、如月のころほひにひとしう、瀬野舘の渡して、品類の村、かの草八幡のほぐらあるてふあたりの、川くまに見へたり。明り谷股、坊山の川ふたせにおち會て、水のちまたをなせり。あないか顔は面長にして、ひけむく〳〵と生ひしげり、老たる駒に似たれば、ふかき雪路もよくしりきやと、ひとりほゝゑみて行〳〵に、あらぬすちに遠くふみまよひて、中畑といふ川そひの村にはる〳〵と行て、又ことあない頼てみちふませて、岡にのほり谷を渡りて行なやみ、からくして棒山のやかたに出たり。あないの云、たつの馬もつまつき、きりんも老ては駑におとるとやら、われもかくとし老て、かゝるふみあやまちもせりと、倘しも駒のこゝちそせられたる。

湯の臺

湯の臺とて、そのかみ、いて湯のありたりし村あり。

雉子追ひ

野山にあらおらむれたち、雪に雉子逐つめて捉ふとてかりありき、あなきもやけることしたり、七羽逐ておとしたり、われは三羽にてとりつなと、かち木ひきつれて歸る。雉子の追はれてさとたち、又おはれてはさとたちするを、ひと羽、ふたはといひ、おとすとは、きゝすの、いつこにかかくろひて、見へさるをいふとなん。

麻亜澤

かくてくら〳〵になりて、麻

雪能飽田縁

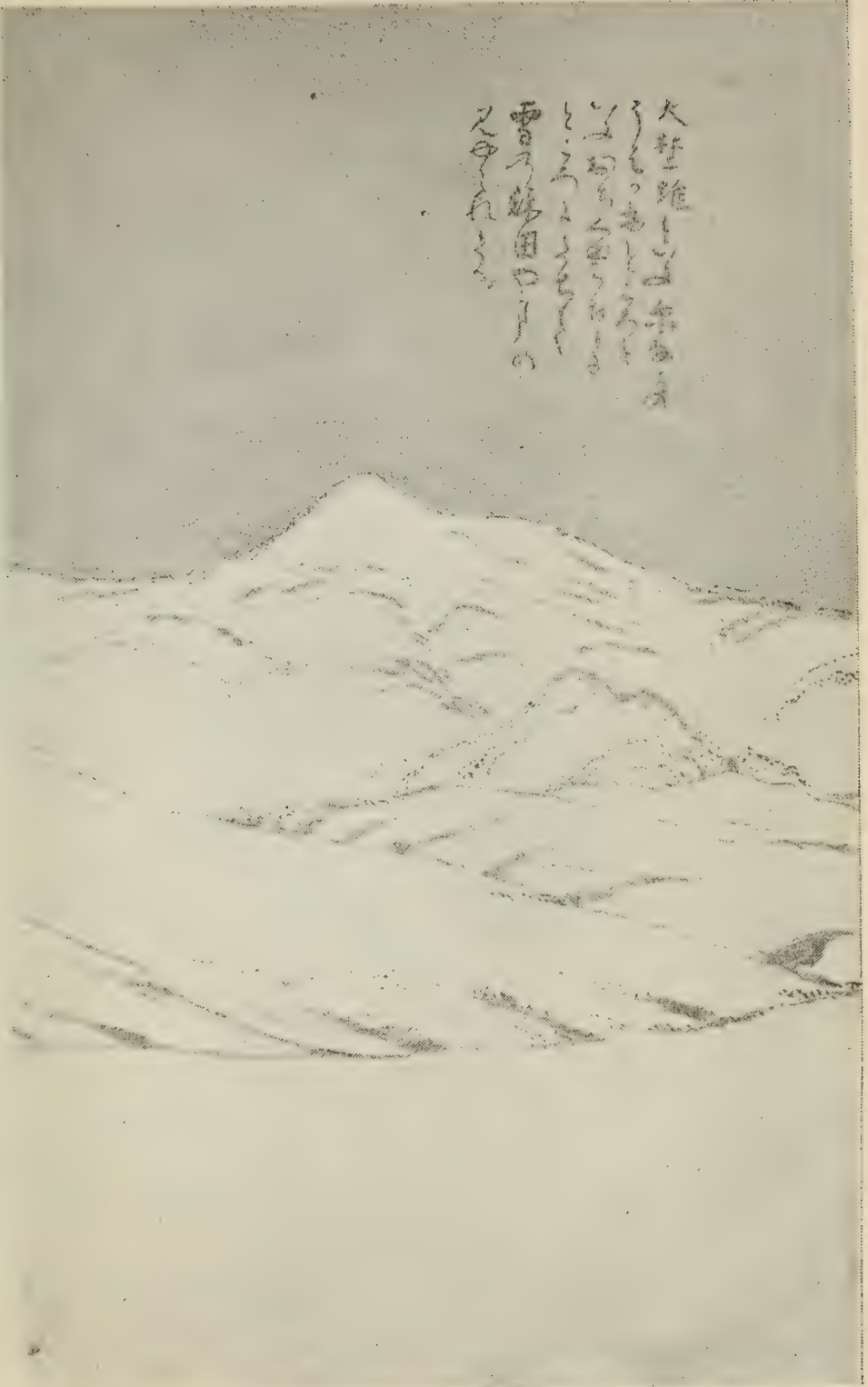
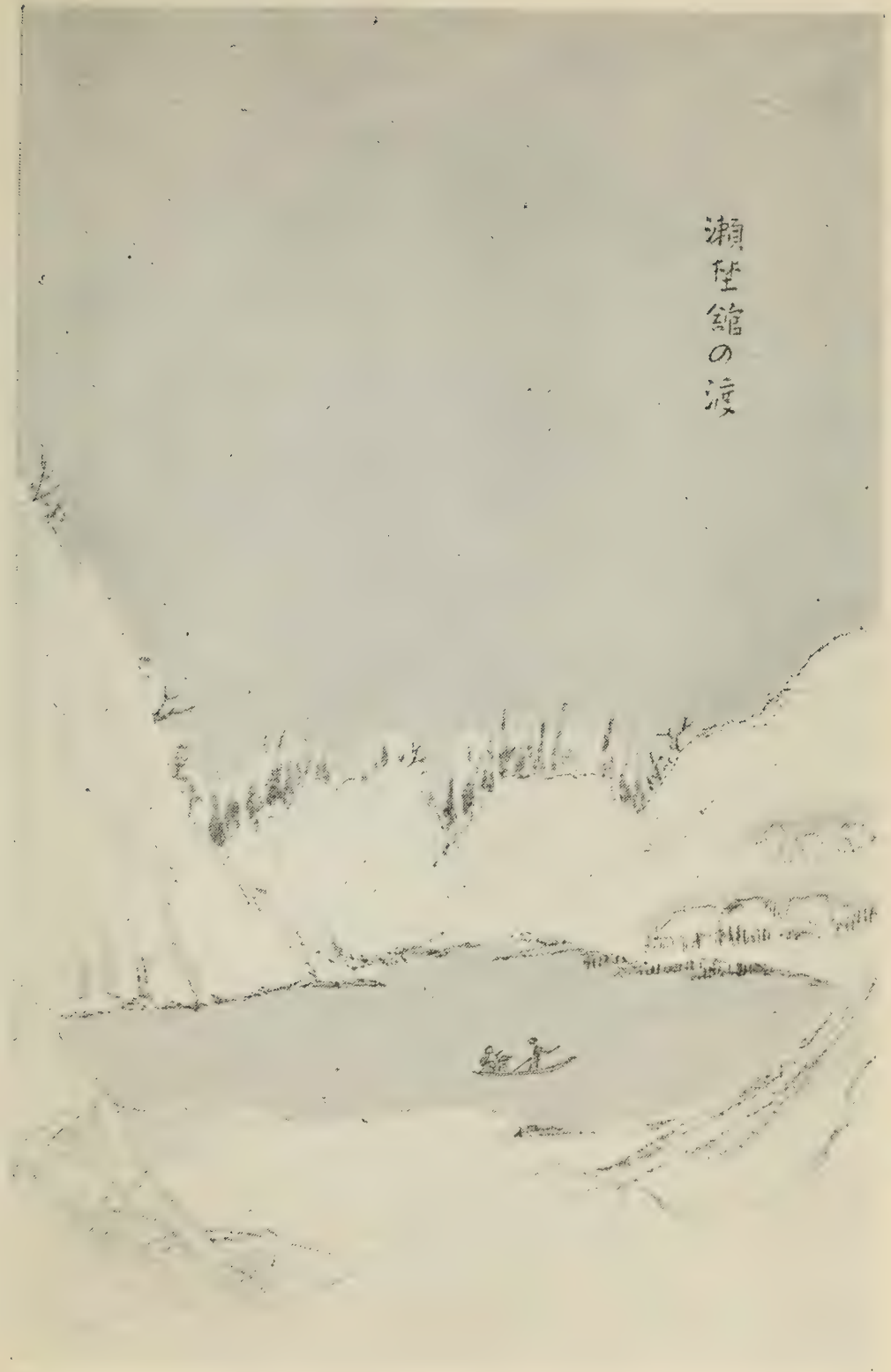
野能飽田綻

雪能飽田縣

瀬埜舘の渡

水澤

長者森

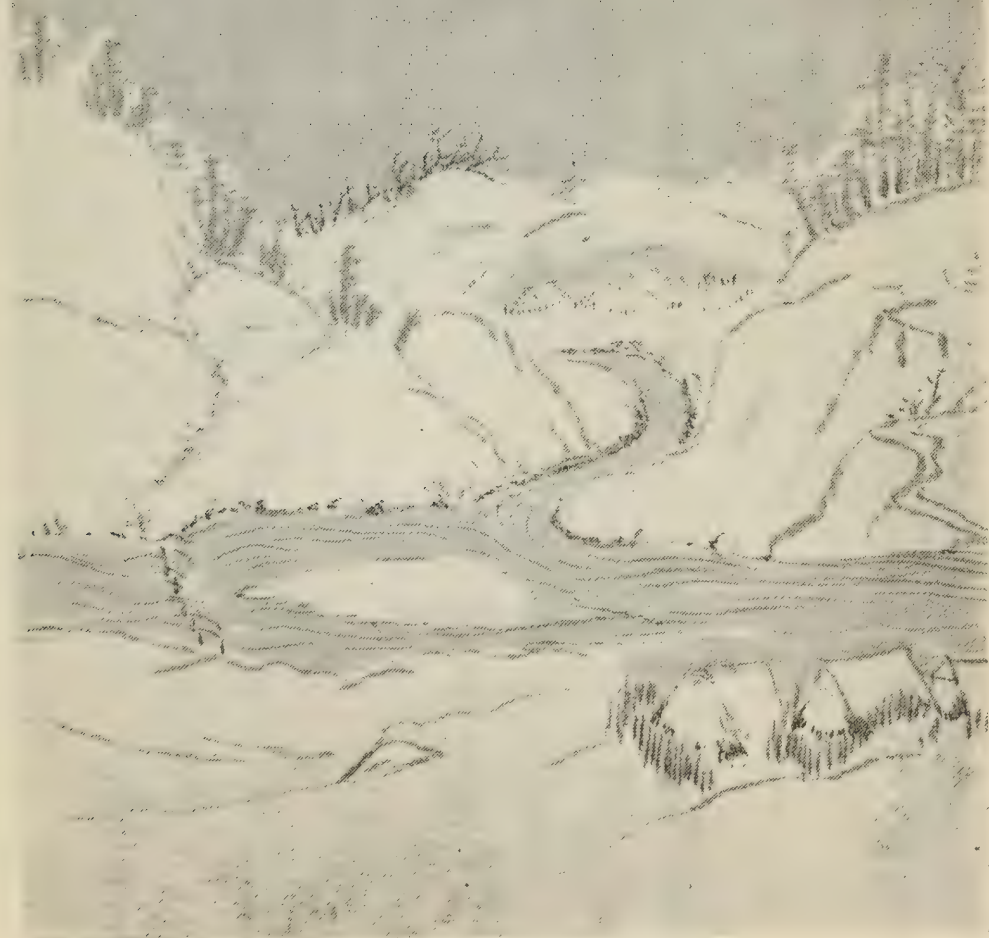
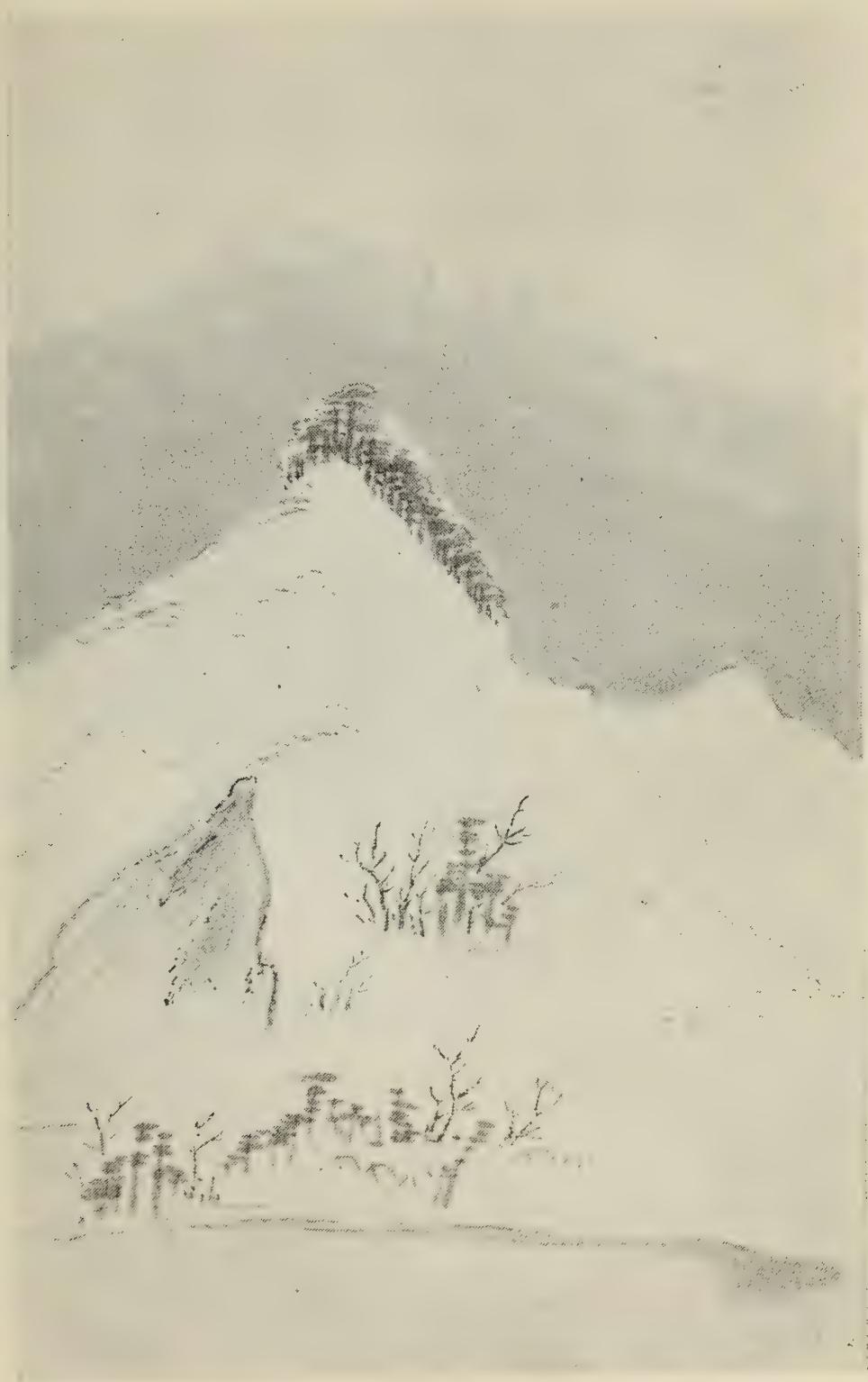
笹岡村

壺澤、又いふ眞木屋といふ村に至る。

十五日。夜半よりの雨の、つとめてもいやふれは、あまつゝみして、太郎助といふ山賤のもとをたちづる。前に十杭澤といふむかつ尾あり。此山のあはひより見やれば雲かゝりて、みたけといふ高山のはつかにあらはれたり。水澤のやかたに至る。松のいたく生たてるを丸山とていやたかく、武南方富命をうつしまつるみやところあり。高岡ひとつ越れは、板戸といふ村の、日をふりたる雪の底に見へたり。やはらそのやかたに來て、

雪ふかみ冬こもりするやま里の眞木の板戸のすゝたれにけり。

このあたりは山畑ありて粟穗つくり、山田ありていねつくり、冬は粟の穗ぎり、粟つき、いなする臼ひきたてて、いとなうそ見へたる。長者森とて、むかし人の栖家したる山あり。いつの頃にてやあらん、近きとしまで、きぬ布なとのさほにほしたるか、風にひるかへりて遠目には見へて、近つけは見へさりし、あやしのものかたりをもはらせり。大荒木といふ邑のありけり。

名にしおはゝ月にさはらしおほあらきむらのたつ木は軒おほへとも。

笹舘といふ村に入りく。こゝに淺利勘兵衞なにかしの柵ありと聞へし處にて、舘神といまも祭る八幡の祠のありけるに、その在し世をおもふ。畑なか、田面さおほしきあたりの雪ふ

み分れは、松なん二もと立るに、鷄栖も祠もふり埋れたるあり。これを尾頭清水とて、さゝやかの泉あり。むかし大なるくちなはありて、わたかまりて尾かしらを叩きしかと、いまはいつこにかさりぬ。水は尚清くなかるゝなと、ほくす吹たて、けふりくゆらせてあない話る。

　　たかをかみをかしら清水まもりませこと路にゆきのすみすてしとも。

獨鈷村

田尻といふ村に出て、向田村なとこゝろあてに雪ふみしたき、犀河の柴橋あやうけに獨鈷にいたる。

淺利家來由

十六日。こゝの山のとかげに上野(わの)といふ處ありて、行基菩薩の作り給ふたるとて大日如來の堂あり。近き大永のとしにも、すりをくはへていかめしく建るに、宿のあるしさともに、つとめてまうてぬ。雪のいたくかゝりたる杉むらの立かくみたるあたりは、阿佐利のすめりしふるあととか。つたへきく、その遠つおやは建仁のはしめ、越後國鳥坂の軍やぶれて、

板額御前

越后守平朝臣資永の妹、城の資盛か姨母なりける板額御前、さはかり名に高き力者ながら、藤澤四郎清親に射られて虜となりて、鎌倉にひかれ頼家卿の御前にめされて、女なれは流しやるへしよしの仰ありしを、

阿佐利與一

ひたに阿佐利與一義遠、かの囚の女を、われにあはれたうばりてと。將軍のたまふは、いかなれは朝敵の名たゝる女を、なにの料ありてかと。與一、世に

たくふかたなき武勇のほまれある女房なれは、義遠かつまとなして、よき弓とりの子をもたらせば、帝を守護し奉らしめんといふ。賴家聞たまひて、蓼くふ虫も、苦辛はむ虫も、をのかすきてふたとへにもれず、しか醜き女を、義遠はのそみけるよとて、はとわらひて、たうはりつ。與一よろこひて、はんがくの前をたつさへて甲斐の國にいざなひ、むつひて、けにその末ひろう、三百あまりのとしを榮へて、後奈良の帝のおほんとき、天文七年ふみ月のころ、なまよみの甲斐の國をおちしそきて、父朝賴とともに與市則賴、みちのおく津輕の郡にいたり、はた此いてはのくに比内の郡にいたり、十狐村にとしころ栖わたりて、家の風高うふかせ、民草四方にふしなひきたりしかと、則賴の子民部勝賴の代となりて、その子與市賴平と、秋田城介實季と戰ふことをり〳〵に及へと、淺利さすかにいきほひたけく、城介うちまけぬ。このいとみしけ〳〵なれは、將軍秀吉の御前に實季、賴平をめされて、いまよりさかひをおかし、軍をいたしたらんのともからは、くに郡をめし給んのよしをのたまひしかは、あらそひ止ぬ。さりけれと實季やすからすやおもひ、はかりて、中うちなこみてんと扇田の城にいたり、淺利民部勝賴にまみへ、實季、かはらけをとりて勝賴にさしつ。をりよしとめさしたるに、秋田の家にむかしつかへたりし生內(おぼない)權介といふもの、ぬきうちに勝賴をうつ。人々さはきたてと、かねてはからひ、淺利家に名ある兵らは戶をとちて一人も入こす、まし

比内に來る

秋田と戰ふ

勝賴謀らる

頼平復讐

て刀番なにかしすらこゝろかはりて、太刀のさやに鹽水を流しこみて、君をなみしたり。生内權介は、しえしとおもひて、とく足をそらになしておちのひたりしを、與市頼平きゝもあへす、あゆみとうする馬にとひのり、わか子頼廣をくしてあとを追ひ、市の亘にてはるかに見かけ、かへせ〳〵といきをかきりに叫ひ、尾組內といふほとりなる門野にてはせつき、親のかたき祖父のあたとて、權介をうちにうちぬ。かくて扇田の舘に皈ぬ。勝頼はうす手おひたれと、あまたゝひの戰ひにつかれ、つゐに、いくさのにはにて天正十年五月十七日うたれき。鳳凰山玉林寺に、いま機菴院勝全大居士といふ木主尙殘りたり。此寺大舘の里にうつせり。

頼平弑さる

頼平は、父うち死のゝちしはらく津輕に栖て、その司爲信の舘にいたり、此うしに刀をそへられて比內をせめかち、城介實季と旗下をあらそひ、このうたへによて大坂にまかり、將軍のおほんさたによて、頼平、しかまのちを得てあんごのおもひはせしかど、甲斐よりつきしたかひ來し末の子杉澤喜助、片山駿河、佐藤大學等こゝろかはり、君に毒して慶長三年正月八日、頼平大坂にて身まかれりとなん、かたりつたふ。雪の中に、ついひちのあと、馬たし、とのほりなと、ふり埋れてそれと見へこそわかね、さもありつへきと、在りし世をそおもひやる。堂のうちには、くちたるみほとけのかたしろ、こゝらたちならひおましませる。ひたんのかたに、たのこひのやうなるしら布を、いくらもみくしよりとりかけたる、木のく

淺利の琵琶

ちほとけの前なるくまに、鐵刀木を質としたりけるか、鳳眼やふれ、髭頭くたけたる琵琶あり。これなん阿佐利の家に、遠つおやよりやあそひつたふる、ふるき器ならんかし。いく世々を人々の袖ふれて、きぬにすれみかゝれたること、玉のてれるかことし。あないの翁もかい撫て見る〳〵、そのぬしをおもひやるすかたあり。倘いにしへをしき偲はれて、曲終收撥當心畫、四絃一聲如裂帛とずんじ嘯て、

　　むかし誰か手に馴しけん四の緒にしらへかへたる松風のこゑ。

と堂の柱にかいつくれは、雪よりふきおこる松風の、まことにすさましう袖のいとさむし。

淺利の重臣

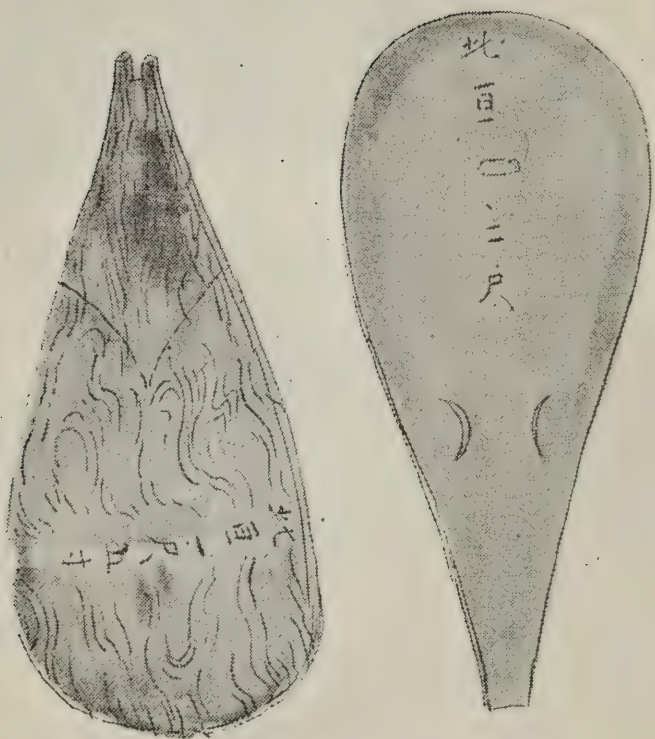
堂のかたはらなる庵のあるしの云、大島、川口、芳賀、武田、岸、多賀、杉澤、山口なとは、そのころ名に聞へし家にして、在つる趾ともは野はらとなり、田畠となりぬ。又笹舘の淺利勘兵衞、花岡の淺利次郎吉、八木橋の淺利及蘭、(マヽ)川口安藝、これを四家老、四天ともいひし。玉林寺にはいね百刈をよせ、いのりかちするうはそく林光坊には二百刈、この大日堂の別當眞宗坊には、三千五百刈のよねをつけられたりしかと、いまははつかに南光院とて、そのするゑ葉、扇田の里に在るうはそくの、もり奉るなと聞へたる。堂の前よりは二十九日(ひづめ)、森合、大渡、森の腰なといふ村をへて、こかねほり鎔く大葛(くぞ)の山に通ふの路あり。やかて、うは野をこなたさまに出てき。此十狐村の太郎左衞門のもとに、淺利の家のしづくらをつたへ

大日堂の本尊の左右にあるをば
かきうつしたるをおくるなり

左

右

萩留古戰場

鐙ヶ崎

加比亘祁池

のこれりと、人のかたりき。かくて、雪のうちを扇田に行みちあり。味噌内といふひろき村に來けり。淺利世に榮へたりしころは、四十五人のさもらひをおかれたり。そか中に川口右京、大藤新之丈なといふ、をさたる人のあとあり。多太越へといふ峠の、みゆきふみしたきのほり得て、見渡す川越への崗なん萩留〆といふ。その川のべに、なにかしの君といふか殿つくりして在りけり。天文の戰ひに、此たゝごへの峠より巨松をあまたてらして、麓にくたりて、たへまつうちけち、その兵等峠にはせのぼり、又松火ふりたてくくたりてはうちけち、かくすること、いくたひといふことをしらず。萩渟のしがらみには、すはや夜軍をいたして、かたきは近く寄せ來るぞ。いくさ君はたそ、兵はいくばくともはかりもしられじと、おどろきさはぎて萩渟のぬし、われ虜となりてくだり、世のはぢを見んよりはとて、秋風にふしなびく尾花あし毛といふにとひのり、いと高かりけるきしべの岩の上より、淵に、さとおち入たり。大將水の泡と消はて給ふはとて、したかふ兵ら、われもくくと水にをほれ、あるは冑ぬぎ捨て、おち散たるも多かりたりしとなん。そこを、よろひか崎の名にながれてそありけると、荷の緒ゆりあげてあないの行がてに語つゝ、雪のしみ氷たる九曲あやうくおりはつれば、その戰のありし名にやおふらん、陣か岡といふ名あり。小池のかたはらを過る。秋田家のいくさやぶれて、そのぬしはたそぞや、花かいらげの鞍おいたるあら駒に、む

ち高うあげて、うちはやめけるとて此池におち入て、馬とともにうせたりけるとなん。そのしつくらの近き世まて見へたりしとて、加比良祁の池と、もはら人のいへり。百目木のやかたを弓手に出來て、やはら大瀧のやかたも近つきたり。

大瀧溫泉

ふる雪に埋れてしもいつるゆのわきてけふりにしるきひとむら。

と口にまかせていへは、あないの聞つゝ、それは歌にてやさふらふか、馬に餞とやらん。せめては發句にてもあらば、露ばかりわか耳にも入らんと、あないが、こゝろありけに聞とかめたるに、はちらふおもひしたれと、おくしたりとや、おもふおもひのやさしければ、

一村や雪吹のなかを湯のけふる。

あないのうち聞て、こたひはあまたゝひすんし返し〳〵て、いて湯のやかたに來て、奈良なにかしのもとにやどつく。ひたふるに行かふすちは、湯氣に雪のむら消わたり、かけ樋をつたふ湯桁のあたりは春のこゝちして、歌女のうたふこゑほのかに聞へ、蛙のこゝと、偲び音にうもれ鳴もあやしう、長閑なるやうにおもほゆれと、湯あらしといふものに川風も吹そへて、夜半はかりいたく冴へて、身もたつおもひそしたる。

十二所道

二十日。このころの雪にふりこめられて、けふに晴たれば、出たちて十二處にまかる。弓手の河へたに、うちとのおほん神を齋ひ奉れる杜あり。みちのめてなる平内といふ村の、雪の

十二所村

くすし三徹（千葉上總之介）

いと深し。行〳〵て一本杉の神のいます。こは八頭權現とて、たかをかみを祭るとなん。しはし行てみちのめてに、雪のふりかゝりたる小松原あり、これもうちとの神籬をうつし奉る。やはら至る。里のかたはらに、ゑとりのすめるほとりに高き岡のありて、をたぎの神の祠を建り。はた里中の高皿には、十二天とてほぐらあり。さりけるゆへに十二所ともいひけるにや。はた、天文のむかし淺利の知る處にて、三千五百刈の税をたうばりし、十二所信濃なにかしといひし人のすみたりしとか。そのゆへありて里の名とも呼たるにやあらん。こゝは蝦夷か森といふ高山の麓にして、みちのく花輪、毛馬内なといふ縣にも關こそへたて、いと近く栖家せり。此夷か森のおちくほに見へたるところに、雪のふりかくしたるほぐらのありけり。こは慶安、承應のむかしとか、みちのおくの九戸のほとりより、いづこも〳〵さすらへありきし、千葉上總之介なにかしといふさもらひ、十二所にすめり。つねにゆゝしきわざにのみふるまひて、こゝろさまもたけしけれど、人にめぐみのいとふかく、直なること竹の如し。くすしとなりて三徹といふ。あたふるに、そのしるしあらじといふことなし。いつも、ひとつ歯の木の高ぐつをふんで、夏冬といはず大瀧に來て、日毎に浴して皈るなと、なべてならず、世の人にことなれり。あるはいふ、うつし心なりける人なりとも聞へしとか。一とせの秋、なりはひみのらずして世の中やはしう、人みなうきになきぬ。か

三徹の靈祠

みな月のなから三哲大瀧の村に來て、おほん物成□て、貢のよねを馬におふせて、はだれふみしたきて十二所にもてはこぶ□路もさりあへずひきつらなりて行を、三徹こゑあらかに、君よりしか仰のありてとゝむるぞ。こゝにとゞまれ〳〵とて、みなとゝめさせ、をのが手して券かいくれて、とゞめし米を、たから乏しき人にあたへて、わは、つみにひとりしつみけるとなん。あたかも、汲黯か君の節をとりさゝげて、河内の倉をひらいて、貧しき民に粟をとらせて、その里を、にきはゝせしのたぐひにひとしう、をこなる人にこそあなれ。つゐにつらめられ、囚(ひとや)に入てやがてうたれぬ。いまはに、われ命めされたらば、尸は夷か杜に埋めよと、いひのこしてける一ことを、まもれる人の送り塚せり。あらふる神となりてたゝりしかば、そこに社を建ていはひ、三徹の靈祠(みたま)といたゝきまつりて、病ある人はかならずのぼりて、山にいもゐをしてけり。わらはやみをいのれば、すみやかにしるしをうとなん。水無月十七日は、さんてち身まかれりし日なりとて、人さはにまうてけるとなん。こよひはこゝに宿かりて、いとませはき軒近うふして、雪の下行水の音とく〳〵と聞へて、ながれにまくらするおもひせられて、倚いや寒し。

十二所近傍

廿一日。この水は、近き山のくちたる桂のもとより涌出て、たくひなう淸しとて、よき茶とゝのへてくれたり。茶は森合、水梨子といふ村より、いさゝかつみ出しぬ。これを、人のつ

その四下分に、すこしもらひたるなとかたりもて、刀自のすゝめぬ。雪の小晴になれは出たつ。十二天、眞山、本山、あるはいふ道陸神なとの山も、雪にふり埋れて見ゆ。そか中に眞山臺といふは、いにしへの舘あとにして、そのころは今の十二所の里に、野原、川原なとにてそありたると人の語る。やはらおなしすちを雪ふみわけ來て、大瀧のやかたにふたゝひいたる。

廿五日。いてたゝまくおもへと、このころの空□なりては、わきてしのきかたく、夜ころ、しのぎわひたるつもりにや、身にやまふのおこりて、寒さにたへやらぬこゝち日をへければ、浴してこゝに、としもやゝくれいなんと、うちわひて、

身に月日つもりて雪のふる鄕をおもひいて湯のもとにくれなん。

廿九日。小なれは、けふに、せちふの豆はやすのためしありて、やとことに鬼のめをうつこゑ〳〵聞へ、臼鍋ふせて、としの尾なこりなうくれはてて、とりのかけろと鳴たり。

大瀧の温湯の
屋戸冬隠し

秀酒企乃溫濤

北秋田ノ四

秀酒企乃溫濤

此一まきは享和三とせのみつのはしめのあしたより飽田の大瀧といふ處に在りて、そこのふり、こゝのてぶりをもかいのせ、あるは卯月のなからはかり、その浴どのをたちて、さつきのあまはれに、去年見ししらいとのたきにふたゝひ至り扇田の郷に皈り來しまてをしるしたり。大瀧の溫泉を芒の湯ともはらいへば、此冊子の名によふ事しかく。

享和三年

癸亥夏五盡日

白井眞隅誌

道奥の毛布の郡には、闕舍ひとつ、ふたつをへたてていとまちかく、こなたはいてはのくにべ、ひうちの郡にして、贊の柵の近となりなる淤保多藝とそいふなる。河隈のやかたに、いてゆ浴してとしくれ、このねぬるまくらかみに、波のきよるかと、湯の涌なかるゝ音にきいおとろけば、こそは夢と今朝にさめて、はしり湯のもとに手あらひたゝすめは、人も群れ來て、よき日のはしめのとし人をも祝ひ、身のことほきをもいひあへり。

けふに明て見し面影のこまかへり老もわかゆのわきて長閑き。

去年よりいやふる雨のけしきも、みそれかちに、やはら雪とそ零りかふる。里のならはしとて、つとめて、やかことに安波世餅てふものをあぶりて、誰れはいくあはせ、かれはいくあはせそくひつるなといひもて、はかためをせり。あか棚に手酬たるみたまの飯をはじめ、おしきにゆづる葉、いつ葉の松をさしつかねたるかゝみもち、益等雄がそなふる鉈子のもち、一とせ山につま木こる、をのれ／＼かさちいのる神を齋ひ、山姫にや手向らん。媙嬬等が苧小

笥のもちひとて、そなふるも、處女は、うみそをへそに作り、布をる機神をや祭らんかし。

雪景遠望

二日。けふは雪のはれけなれば、とにさし出て、そことなう近きあたりを見ありけば、艮に雪の八重山へたゝりたるをとへば、あしこは陸奥の山、こかねほる、しらねてふあたりならんと人のいらふるに、

眞金ふく邇布の麻曾保のそれならて雪のしらねの山そ霞める。

見るかうちに空かきくらし、雪のふり來けり。

湯の花

五日。眞珠黄の多あみつらのやうにうきたゝよりて、樋の中を流れ出るを、童ともの來て、これをとりすさみぬ。

旭かけさしかきろひていつる湯の花さへ匂ふ里のはつ春。

これが又のから名は、水硫黄ちふものにもか。

田の神

七日。けふの粥に、なゝくさの名こそそれ〳〵にあらね、何にてまれ、なゝしなのものをとりくし、烹てそくふめる。聲うちとよむまて聞へたるは、樂久とて、ゐとりかたゐめけるものゝ來つゝ、「じうまんぢやうあなたにはなに、こなたには福、幸の田、みねにかた、ひさうの駒につまづきござらぬ、だいごだひし、春德はるかに、さしは榮ふて、つちに花咲て、こがねの實なる、もろこしやうさ、かごをいはふた、みかとにこそ松は二本榮へたれ、右の松は千

日待

温泉神の祭

賓かぞへ

歳山の姫小松、左の松は万歳やまの男松、松の上のかざりに、こかねの氷、奥山のゆつり葉、秋のわらにかさらせ給ふ、千万町うしろには、けんふのみくら、前は左右兩の泉をたゞへ、命ながえのひさこを持て、くめどもつきず、飲ともかはらす、大福長者といはゝれ給ふ、これぞ御家のこしうぎ。」と、家ごとに入來てしか唄ふ。これを田の神とて、かれかみとしの神のみかたしろを、紙におしもてありく。それらに錢とらせ、よねくれぬ。明なはこの湯の神祭るの日とて、日待てふ事をして、村長かやどに、ありとある人とらの集りて、あふら火あまた照らして錢かいつかね、度都久(きんづく)、多加良比企(たからびき)、あるは六牛めける、ばくやうをそしたりける。こは、のりのをかしながら、むつきのけふばかりはとて、むらのをさも見ゆるしてけりとなん。かくて、とはしらみたり。おなし宿の奥ふかうふしたれば、夜もすがら耳にたちて、ともに居あかしたるにひとしかりき。

八日。うまの貝吹ころより、夜經(よべ)の人〳〵の又集ひ來て、さはにうちむれて、ことしかみしたるとよみきを、みかのはらにみたらして、湯泉(いでゆ)の神にたいまつりしをもてわたり、をのれらも、いたくゑひしれて押附舞といふ事をし、あるは、たかうなまひなとの戯をしてけり。

九日。女の、男の假面(おもて)をかけて毛荒(けら)てふものをきて、手毎に鳴子をつき鳴らし、つきならして、「ゑもとさへもがほうたんだ、一本殖ればせんほとなる、かいとのわせのたねかな。」あ

るはうたふ「綾や錦の小袋」など、寶かぞへといふこともせり。こは、みちのおくのぬかのふの郡にも、女の諷ふ、ゑんぶりずりの藤九郎か參た、といふふりにひとし。

節分の豆撒

十三日。せちぶなれど、としにふたゝび豆散くちふ事は、豆生の豆の生へぎれする、よからぬのためしなればとて、ふたゝびせちぶのあれば、いつも除夜に豆はやして、こよみのせちふの夜さりには、ゆめ、せちふの豆はやさゞるは、たなつものをさむる家の風にこそ。

十二所の鎌倉焼

十四日。此夕くれつかたより人さはにむれたち、十二所の里なる、れいのかまくらやくの祝ひ見なんとて行けり。久保田に見しはやしにかはらさりけれど、秋の木の葉をいたくかい集て俵にこめて、これに火をかけてたゝふりにふれば、雪の上に紅葉のちりくかと、火花を春風にちらしたるは、めもあやに又なきためし、風情ことなりき。

十五日行事

十五日の夕くれ近う、田殖へそむるのためしとて、雪の畔まちをかいならして、稲くきと豆がらとをひとつにつかねさしたる。かやにてまれ、あしの穂にてまれ、ふたもとを深雪の中にさしたるは、こん秋の田の實よけん、はた、麻生の糸のいとよかれのためしにとて、葭のふたもとをさしつるか。みなぐち祭りとなん、木の棹のうれに、麻苧の絲卷く加和といふものをかくる。がはとは、わくての絲操るうつわ也。こは一とせつかふ賀波も、棹も休らはせぬるのためしとなん。

雪のうちに木のめ春田をけふ殖て秋は山とし稲穂つむらん。

とし男の翁、うすつきし豆の皮と、ことし酒の糟と、ひろめ、炭、松の葉、ゆづる葉、田作りなと、なりひさごのうちに入れてかいませて、「ほが〱」といひもて、やかのめぐりをまきちらしありくは、陸奥なとにて、しかものして二人、そのひとりは棒ついて、それが唱ふ辭に、「豆の皮ほんがほが、やれくるとんで來る、ぜにもかねもとんでくる、ことし酒が涌やら、ふる酒の香がする、おんなめもちのとのかな。」これをやらくろずりといふ、そのてぶりにやゝ似たり。蛇(ながむし)の入り來ぬためしとも、うくろもちの出ぬまじなひともいへり。苧桶にうみのこしたるがあれば、長虫と化(な)るとて、いとなきまゝにわすれなとしたるを、いそぎとうだして、けふのゆふつかたの前にうみをへ、夕飯をくひてのちには、すびつかいならせは、苗代のたねを蒔て鴫の來てかいあはくのためし、こゝにもいみて火筯(ひばし)たもとらず。菜刀もさらにとらせず。屋戸に大臼小臼をふせ、大鍋小鍋をふせて、棵にあはぼのもち、いなぼのもち、まゆたまのもちなとは、しのゝうれにさし、水木ちふものゝ朱なる枝に、白玉をつらぬけり。梨子(なしこ)のもちとてかざりなすも、となへことなり。みなからおなしさまにさしかさねたるは、花のそのにことならず。牛のもち、馬のもち、杜のもち、水のもち、桶のもち、かぎのもち、つむのもちなととり〱にとなへ、更てぬるまもあらで、鷄をしるべとおき出るとし男の、な

小正月

おしら神

へたる上下きて、ふり埋む雪をはらひてわか水むすぶは、三の始にそひとしかりける。こと村にては木の長太刀をよこたへ、みしかき袖に、たゝむきをいからして若水むすふとて、泉の氷うち叩て汲てけるやからは、遠つおやなとの、やごとなき人の末の子等にてや、例ことに、いにしへぶりの殘りたらんかし。まつ豆がらにきよ火をはなちて、はら〳〵と鳴りける音の、せにかねのざらめく聲すとて、さしくべ〳〵火いたく焚ぬ。里の童どもの、星をかざし月をいたゝきておき出て、「あさ鳥ほゝほ、ゆふ鳥ほゝほ、長者とのゝ圍地（かくち）には、鳥もないかくちだ、やいほいはた〳〵。」と、しもとのことき ものして雪を敲きつ、門を叩て、鳥追のためしありて、ひんかしはしらみたり。

十六日。林に入て、としぎりのためしをして明渡る。けふよりは小正月とて、女のわきてよそひたち、をのれ〳〵か、せまほしき戯れをなんしたりけり。

十七日。おしら神をほろぐとちふことして、移託（いたく）のめかんなぎら、としのうらとふに、いつらのころか氏良志のあらん、つゝしみて氏神をいのれなと。てらしとは火の神をいふとなむ。

十八日。けふ十二所に行とて、雪のいたくふり來れば、

ちる花の面影見へてめつらしさはらはぬそてに消ぬるあは雪。

織姫神祭り

目出し祝

金蘭齋と平元小助

やはらはれたり。

十九日。けふの夕は小麻笥(をそけ)の餅あぶるとて、村にひとつの屋戸なんさだめて、うらわかき女どものあつまりて、織姫の神をいやし祭り、そなへ奉りしもちをあぶりくひ、酒たうび、男は、れいの、なたこのもちをあふる。宿こそおなしからね、もちくひ、酒飲みつるあそひをして、處女(めらし)も、大丈夫(わかぜ)もおなしう、踊、舞ひ、うたふはおなし。「きのふまではやい、五尺むしろにひとり寐た、こよひうれしやふたりねる。」この一ふしは、嫁(め)むかふるの夜さり、もはらうたふべかりつるを、けふの祝とて、あらゆる唄もうたひませて、いとにきはゝし。十府の菅こもなゝふには君を宿して吾れ三布に宿んの、こゝろはへのこもりておかし。

二十日。目出(めだし)の祝ひ倘ありけり。ひねもす雨のふれは、

やゝはつかめたしめてたしはるのあめ。

のちのむつきのはしめつかた、十二處にまかりて、くすし武田三益のもとに一夜かたらひ明て、埋火のもとに、降士の画の一まきをかいひらきて、此飽田に名ありたりし人ともの、手ならひに、かい捨たりしふみてのあとを見る／＼行は、金蘭齋のくしとて、不二をなかめける根跨八州地鍾雄聲聞異域望奚窮、白頭高見白雲外、特立乾坤一老翁。」ふしのかたにおしならべて、倘餘情かきりなし。亦このぬしの春遊のしゐんとて、「山峙水流花倒臨、幾令遊子費

幽尋、忽爾詩成飛逸興、臻往我唫鳥無唫。」はた、そのころほひにか平元小助といひ、のちに梅隣といひ、卜玄といひし人あり。歌にこゝろさしあさからず、矢橋の村なる全良寺の櫻を見て、「とし毎にことしはかりとなかめつる花にあまたの春も經にけり。又此ぬし八十のとしのむつきはかり、「片かなによみて見たれば花(ハナ)の春。」もともおかしかりけり。

彼岸

廿五日。けふより、かのきしへにいたらん。菩提のみちの山口とて、老たる刀自の佛にずゝすり、鉦、つゝみをうちて、「往生不定のその時は、念佛は一返出申さない、唯今まをす念佛を、うけとりたまへや釋迦、地藏、さい／＼まをすもうるさくら、一度に千返なむあみた、なまいた。」と、聲をからしてそとなふる。こは、科野の國などの「のいだ／＼」と唱へて、佛にむかふのふりにたくへて、ことに聞へたり。暮近う、つかはらに童ともの群れて、わらをつかねて、れいの纒火(まきび)を焚き手向して、「おほぢな、おほばな、明(あか)りィに來とらふらひ／＼。」とよばふ。うべも、たまよはひをせり。

彼岸念佛

廿八日。ひかんねぶちの嫗とも、あなた醉ひしれてうちむれ、聲も鼻鳴りしてさはぎたち、かなつゝみにはやし、獅子頭をいたゝき、戯て踊り、うたふも、舞も、のりのみちのべに、たふれたるもありき。

別離の名殘

廿九日。十二所にいたりて、石井敎景のもとに一夜をありて、近きに、出たゝまくとおも

ふほりをいへは、あるしの、筆をとりてかいつみけり。賦歸雁贈客　南去北來萬里天、相呼相答自相憐、今春賴是有餘閏、願向花前莫遽然。」と、すしもてむかへは、雁の聲高う聞へたり。

なれも然皈る餘波や空に鳴く花の言の葉匂ふこの宿。

といらへて、けふも暮て、こよひもかたらひ明て、おなしあるしのもとに侑在り。

十二所

二月朔の日。此里の高岨に十二天を祭り、新山、本山、道陸神とて神のおましませり。この新山堆（たひ）といふは、いにしへの柵のありたりしあととか。河のあなたに葛原、猿間、輕井澤なとの村やかたともの、大雪の下に埋れ、一行雁の弓となり弦となりて、箭よりもいとはやく、浦山といふあたりの山まとを射るかと過たり。

そこともまた行衞もしらぬたひの空浦山しくも皈る鴈かね。

かくて大瀧の湯もとに、ひるつかた來る。（天註——十二所は熊野十二所の神な齋ひまつれるそ名にいふにやあらんかし。紀の熊野なところ〳〵にむかしはまつりたり。高野山の僧の萬にて花山少將忠長卿、正保のころ淸書のよしにて、陸奥津輕大濱十二所權現者北畠大納言源具永卿建立なり。棟札に金光寺持國多門天北斗寺妙見大菩薩建立以後熊野十二所權現勸請於十灣寺南藏坊勸進小補東覺坊とそありける。）

終の彼岸

二日。けふは、はつるひがんとて、家々に濁れる酒を、さすなべの大きやかなるにあたゝめて、酒菜は、すみのやまをなして醉ひ、あるは十二處の寺に入りて飮み唄ひ、夕附行ころ塚は

らに飯、餅などを手酬て、かねうち鳴らし纏火を焚きて、「おほちな、おほばな、あかりィに往(いつ)とらい〳〵。」と、わら火ふりもて、童の呼ふ聲〳〵聞へたり。

戸窓ふさぎ

八日。夕つかた、くれのをもと、いをのひれとを串にさしつらぬいて、戸窓(とまど)ふたぐとて、やかのくま〳〵にさしたり。かゝるをこなひは、みちのおくにも倘あれと、むつきの十四日、いをのひれともちとをさし、あるは五月の田殖へをへる日、さなふりたんごといふものを、たぐしにさして、家の戸まどのあるかきりさしてけるも、おなしふりにしてことなれり。

八十八の壽

十二日。ある宿にいたれは、しりくへ縄ひきはへたる、かんほくらの棚に立ならへたるは、ゆかりのもとより、いにし朔の日くはり來し、八十八とせの翁が、倘生升(いきます)のとかき木也。おなしとしたかき女の、めしべらとて、大なる飯匙ふたもとをそなふ。女のよね守りは、めしへらてふものにこそ。

獵人の生活

十四日。けふなん鹽谷山長興寺に、こよひ夜こもりしてけるとて、人さはに群れ行なかに、みめことがらよけなる女の、かたらひて行まじりたるを、裘着たるあら雄等、犬ひきくしたるが來かゝりたゝすみて、よき女よ、さつたてをほろにして、ねゝつふを、けあはせたしといひて、はと、うちわらひて過たり。それらは又鬼とて獵人也けり。そのまたぎ詞をしていひける也。禰尼都布は女元(めのはじめ)、左都多氏は雄のはしめ、保呂は大なるいひ、禰安和世留は、きく

ばへることをいふとなん。それらかわざには、雪ふれば深山に分入りて山羊(あをしゝ)を追ひ、春のさね雪を、かち木にふみて熊を逐ひ、手刀(たて)てふものに突めくり、くらがいとて長き布の袋いうちに、金餅(かねもち)といふものを入れてつねに腹卷として、雪の大嶽小嶽をはせて、大雪にふりこめられ、又は己か友にもあはさなるときは、雪にまみれてふし明すこともありて、空腹(はらからく)して米(くさのみは)喰むことのあたはされば、これを命と持つる、くらがいの、かねもちをそくふめる。熊をいたち、猿をさね、鹿をかご、山羊(あをしゝ)(かもしか)をけらなといひて、山に入ては、それ〴〵に忌詞の多かりけると、それらが語りぬ。

十五日。さかふちの寺詣てにとて人あまた行ぬ。このころ春田うつとて、耕のやどこどに、草の力餅といふものを搗て持行、短き衣にもゝひき、蒲のはき卷をして、ちいさき鍬を、鶯のものあさるやうにうちにうつ男女のすがた、さらに見わくべうもあらぬ。雪もやゝ消はつる田面、にぎはゝしう、山は辛夷、猪心の花咲たり。

春の田をうつゝにかへす夢なれやきのふは冬と見へし旅ねに。

こゝ處にては、田うちはつるの日、あるは種蒔終るの日なん、八皿酒とて、皿にてまれ椀にてまれ八の數をあはせて、おしきにのせて、これに濁れるさけをつぎて、あるし飲ぬ。しかするためしの、此比內の郡にはあらさりけり。三河のくにうご、ふと麥をまきはつるの日は、

この夕くれは、皿つるしなりといひもて、神にみわすゑまつる事あり。はしめ、をはりのたかひ、是なん、八岐のをろちのいはれを人傳へ話る。遠かたをうち見やれは、よも、やもの霞わたりてほのかに、みねも尾もあらはれたるなど、たくへんかたなし。

　いりあへのそらならなくにさほひめのなひく霞の袖そかよへる。

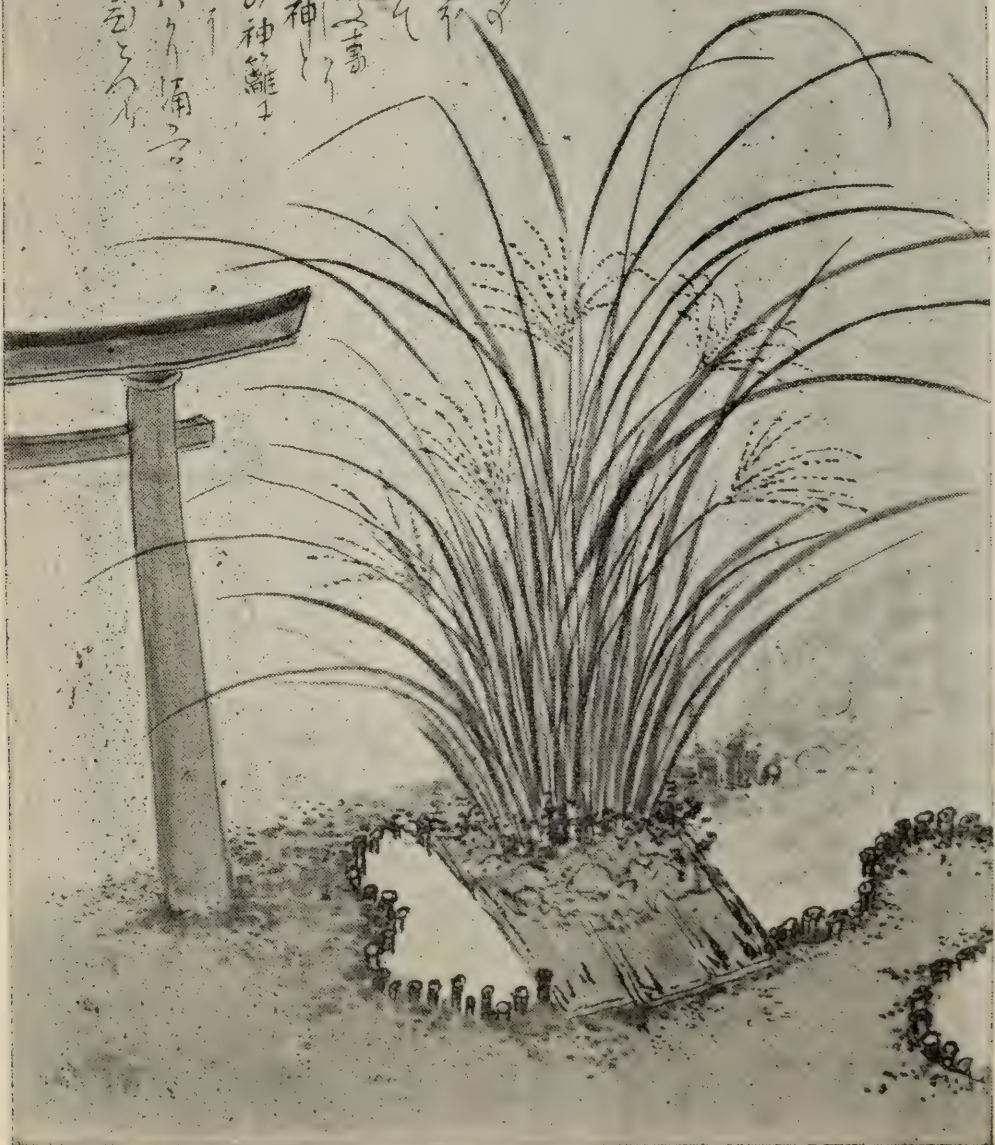
いよ〱けしきたつ空ののどやかに、日のかほりみちて、水の行衛もあはれいとふかし。

十二所木綿

十八日。十二所のやかたを行めくるに、こゝかしこの窓のうちに織る、きりはたり、機ものゝ音聞へたり。籆ひくとて、男も紡車(いとくるま)にたつさはり、緜花のいとのいとまなみ、つむき出して女は織りつ。うへも十二所木綿とて、いつらも古貝布(もめん)のつやゝかに、絲の細さ、ことくにゝまねつへうもあらしかし。（天註 — 紡車をもはら籆ととなへ、籆を手籆、あるは加波ともいへり。是を男の紡くことの女にまされり。此木綿車を紡くを加奈ひくてふ詞あり。）

芒の湯由來

二十日。大瀧の湯もとに來て藥師佛の堂に詣ぬ。かたはらの溫濤(てゆ)のとく〱と涌き出るに、板なんしきて土かいのせて、芒を一もと殖たるか、やはら、つのぐみ渡りてみゆ。そのよしをとへは、遠きむかしの事となん、あやしの翁の、とりの子のからに湯をつめて、是をすゝきの苞につゝみて、こゝにうちやりて過ぬ。それよりして、溫泉(いてゆ)のふち〱と涌そめたり。それは神にてか佛にてか在りつらんとて、芒を殖て奉ることしか〱。秋のころは、むさか、なゝさかと生ひのほり茂りあひ、尾花のほなみうちなびき、寄り來る人そ多かりける。さ

芒の温濤

りけれは薄の出湯、たまごの湯ともその名の流れたると、話り捨て人はいにき。此堂のうちには佛のみかたしろを置てけれと、級野の國に見奉りし寸須貴の社とて、もろつまの芒を殖て奉るにひとしかりき。

角組ていつるすゝきのゆくかたに秋はなひかん袖の追ひかせ。

梅そ咲く

やよひの朔日はかり、こゝに南といふあたりの人の、いとよき梅の盛なるをもて、やゝときをしりたり。けふ扇田の里より折來しとて、しはしたち話りて行過るを、やゝまて一枝をと、せちに乞て、

長閑しなさきて南の春にあふきたへは雪に寒き梅か枝。

鬪鶏

此ぬしにかいやれは、折わかちてくれたり。

三日。もゝのせくとてもてはやし、十二所の館に鬪雞ありけるを見にとて、近き村の鷄をかゝへもて、こゝらの人行たり。

湯洽味噌

七日。此ころ湯の涌かへる泉のうちに、おしきをふたとして縄にゆひかため、石をおもりと

して小桶をいくらもならべたるは、玉豆ちふものを碎て、糀、しほなどかい合て此桶に入て、湯の中にひたして七夜を經れは、色のあか〳〵と附ぬ。これを湯治味噌、あるはいふ、なぬかみそとて味ひやよけんとか。

やま〳〵の花の盛もけふなぬか見ぞあかなくにちり行はおし。

やはら夕つかたとなりて雨のいたくふりく。

花の霞

十二日。とりとともにおき出て、あたり近き岡にのほれば、むかつをの、のこんの雪を吹わくる風はいと寒けれど、こゝかしこの花のほころひわたりたるよこ雲のけしき、たとへつへうかたもなう、此あさひらきと、尚そ見やられたる。

雪に明け櫻にしらみ遠近のやまはかすみにまたくらき空。

見るかうちに、日のほの〳〵とさしのほりたり。

十七日。柳たてる河つらを、そことなう見ありけは、鶯のこゑおもしろし。

そめ渡る柳のいとのなかき日をくり返し鳴くきしのうくひす。

舟の行たるなと、風情ことにおかし。

候鳥と種蒔

いにし十三日は八十八夜なりしか、八十八夜の鍼長（はりたち）と、わかくにうどはもはらいひて、このころは縫ひ針のたけに苗代の萌へづれど、此國はしからず。梢に筒鳥の鳴を聞て、小田に種

蒔く子らがいふ、「とつとの口にたねをまけ、かんこの口に豆をまけ。」と、こはおかしき諺なりけり。子規の聲を聞て、早苗とり殖るより四手の田長を名のり、早來鳥(はこどり)の來鳴くころほひには、まめふに豆を蒔き、とつとの時を囀るをしるべに、みとしのたねを蒔くは、やまと、もろこしも、なへてひとしかるべきものか。こゝにいふとゝは都通度利、つゝとりのから名をいひて布穀となん。しかいふ名のありけるも、うへならんかし。

　汝れも來てみとしろ小田の苗代を四方にまきしくつゝ鳥のこゑ。

つつと鳴き、とゝと聞へたり。

廿五日。山のさくらの、もはら盛りなりと人の語りしかは、高岡によちて見ありくに、虎杖の葉ひろに帰返せりとうたひ、ふくべら、かたかご、おほこゞみ、なはしろこゞみ、あかはげ、出穚珊瑚(きのもふ)、わくのてなとも、みなから老たり。鳴く鶯も、四十(よそぢ)近つきぬらんとうち戯れて、うど、蕨折る女ともの、さいたちかたらひて、こと山路に入ぬ。こゝは山のとかげなれば、今はた谷の戸を出るかほゝ聞へて、

　やゝ木のめ春としられて谷かけはまたうらわかきうくひすの聲。

長嶺(ながね)といふにのほりたれは、遠近の空の霞ふかう、やはら晴たるかたより雲とかゝり、いまたに雪の殘るかど、こゝらの花のまさかり也。かくうち見つゝ、ふたまたといふあたりに、

上祖の傳統

湯瀧にて

桃、梨子、さくら、なにくれの花の枝さしかはしたる風情、いふへうもあらしかし。

又たくひなしもゝさくら咲ませてちむらのにしきかくるやまさと。

木々にかくろふる家の五六はかりも見えて、的石といふ澤に分入り、袖山といふ山里にやすらへば、御嶽といふいや高きやまの雪のましろに、吹渡る風のいと寒し。（天註――袖山といひ袖の澤なといふ名の出羽陸奥にいと多し。もと外といふを訛りいひし事となんいへり。）

春風にやゝほころひぬ早青姫の花のそてやままた寒くして。

このあたりに栖る山賤等か遠つおやは、陸奥九戸の亂をのかれし物語あり。はた、何かしの帝の五のみやのひとところ、みちのおくの、けふの郡に左遷し給ふのころ、かしつき奉し、すんさのものゝ末の子にて、安保、涌本、奈良、成田なと今もとなへて、むつきにをこなふ家の風も吹殘りて、十四日の夕つかた屋根の雪かい分て、かち木引てのほり、小松ふたもとを、やの棟におし立、とし繩ひく正月の例、かれ殘りたるか見ゆ。飯りなんとてたかねをよちて、むかひ見やる、みたけの雪の晴て風いや高し。

まよひつる雲はあらしのさそひても花とみたけの雪そかすめる。

こたひは大瀧の澤といふ路をよそに、たかね／＼をつたひ、道目木（だうめき）のやかた近う去年見しみちのべの櫻、やま風に吹いさなはれて、いよゝ名におふ花かひらけの池水に、花のさゝなみ

たてり。河邊つたひにくれば湯の末の流れたる瀧のもとに、やまふざ居ならび腰をうたせ、あしてをうたせ、かしらをうたせて、こもひきまはして岩の上にむつかたりし、あるは唄ひ戯て浴みせり。

出る湯のたきつしら泡風おちていまはた花のちるかとぞ見る。

やかてやとりになりつ。

更衣を思ふ

紆豆耆の朔。ことしは春のくはゝれるけにやあらん、春に花さき春に散りて、四方にわか葉さしをほひて軒端の山のほのくらく、まちかきとやまを分て更衣をおもふ。

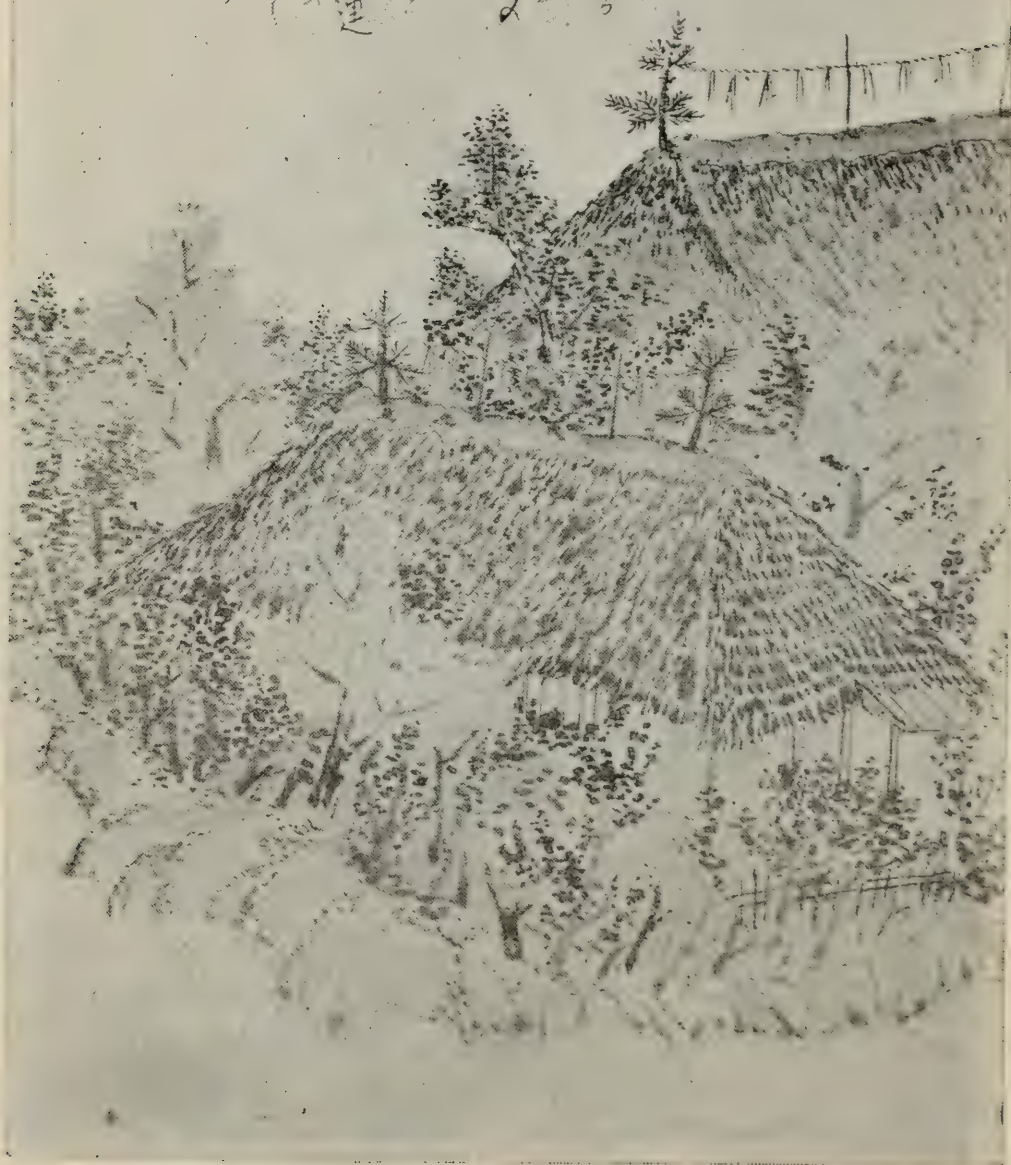
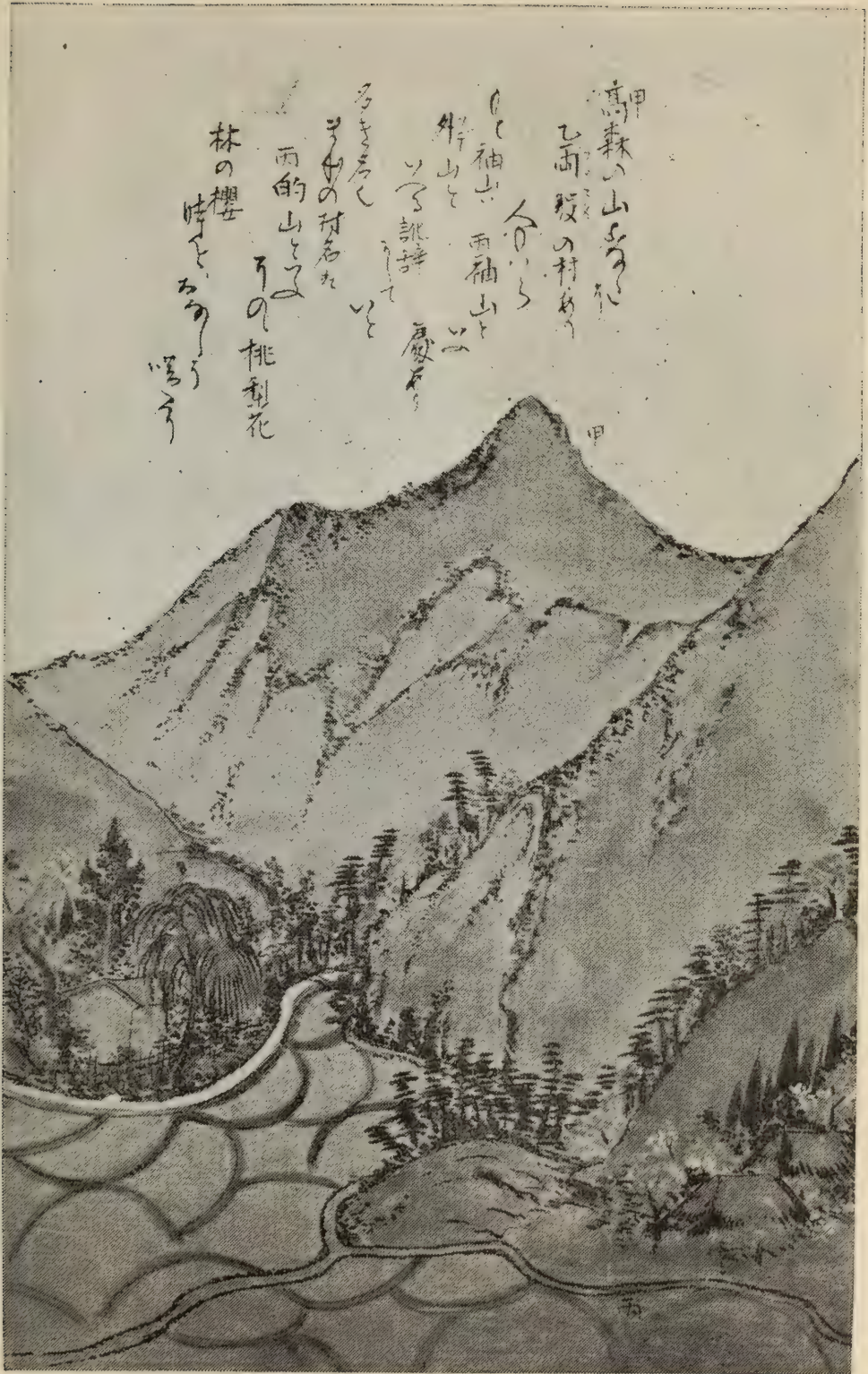
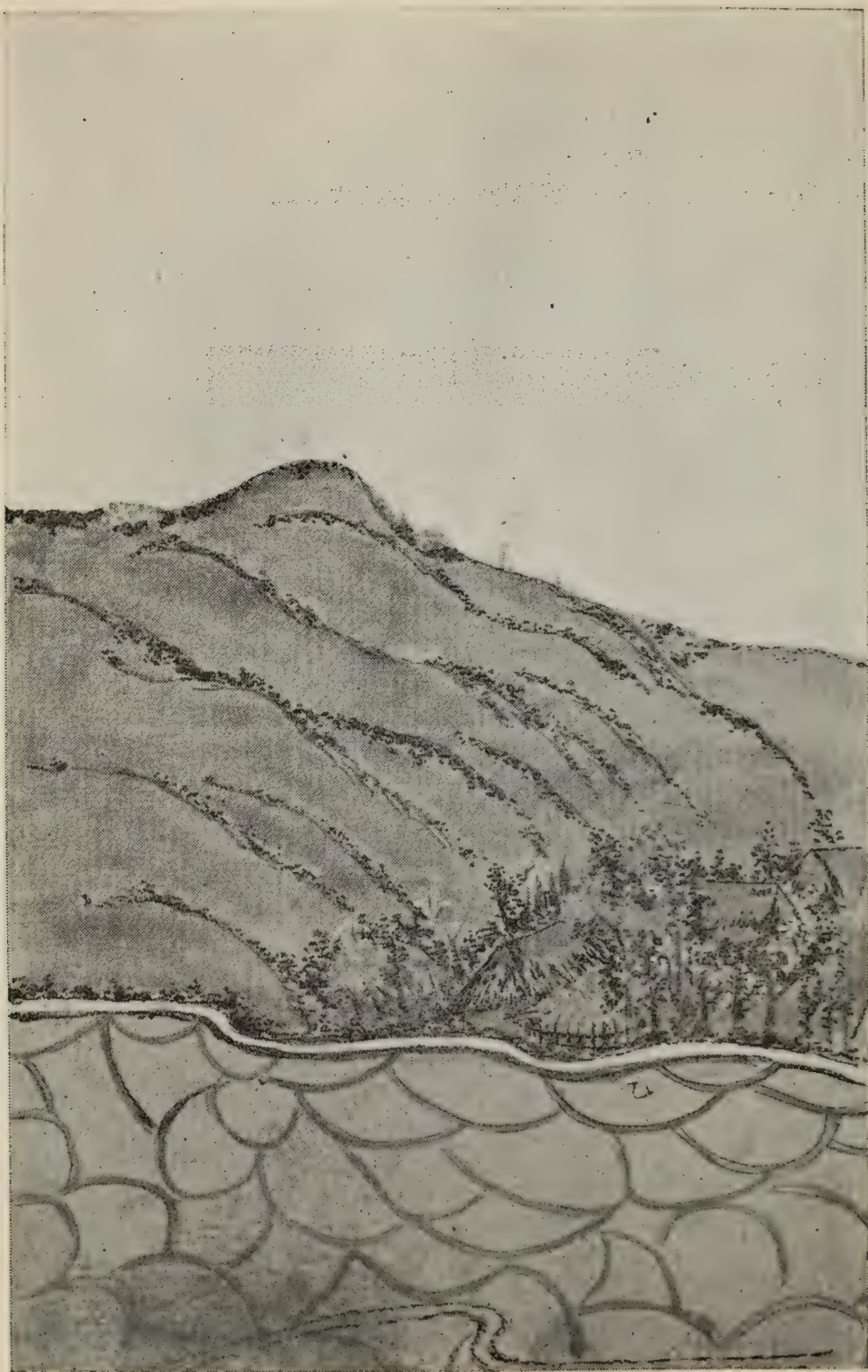
大空も霞の衣ぬきかへて夏來にけりと見ゆる山のは。

犬躑躅

狗筒自とて、花ふさことにおほらかに咲たるを植し屋戸あり。こは去年の春に、山より根こしてこゝにうつしたれと、枝も茂り、花も、とをゝによけくなと人のいふ。一枝はゆゑしてと、籬の外にもれ出たるをぬすみしかは、犬のほふ聲におとろきて、

うつし殖てはや里ひたるいぬつゝじまもらは守れ折なとかめそ。

秀酒企乃温濤

旅中の夫に

とて、はとうち笑ひて皈りく。

五日。人の旅立せしとて、そのあるしの婦ならん、泉のもとに、玉かしはふたつをひたにあらふ。こは、あしたことにかく水に濯て、わらじのはなを上ざまにむけて、その石の二をのせて、夕つかたとなりては、おなじ小石を、しほもてすりみがききよめて、これを休らはすとて棚にならべて、神酒そなふるは日毎の事也。手を折ふせて皈り路をかぞへ、こなたに人の向たらんとおもへば、沓のくひすをあなたへ向て、小石をくつの面に置ぬ。此事ところ〴〵に記しぬ。ところ〴〵に在りて露のたかひはあれと、もともふるきためしならん。

人をおもふなさけの露のたまかしはかゝるたもとや旅にぬるらん。

爾波奈加能阿須波乃加美邇古志波佐之てふこゝろはへ、いにしへのてふりも偲はれておかし。

諸の神詣で

八日。釋佉ほとけのあれませる寺のをこなひ、さることなから、けふはたか山の末、みしか山のいたゝきにおましある神詣ふでしてけるならはしとて、蝦夷か森、三徹の神霊、葛原の老犬堂、猿間村に藥研瀧、末廣瀧、芋の子瀧、音羽の飛泉なといふ流の末なる、鞍掛山の麓行あたりに在る、林の中のたな井堂といふは、松尾の神を祭りたる也。（天註——松尾の神は大巳貴命にして日吉とおなし。舊事本紀にいふ、大山上咋神、あるはいふ大巳貴神の御子大年の神の御子なり。さりければ松の尾のあかつ神こそ、みとしのおほん神によしある事なれ。そのゆへもて、しか種井の社はありけるものか。）老犬の神なん在

浴客風俗

方言二三

すは、もかさのかろらかならんを祈り、種井の神には、わさ田、おしねを佃る、みとしの秋のやよけんをいのるとなん。亦此大瀧のつかはらのほとりに、雌元(めのはじめ)のかたちを石もて作りて、かくれの神とて、くさむらの中にまろひかくろひて、更に知れる人なけん。雄元の神を陸奥の處〳〵に齋るは、かの拤つるよしもて、はた此神もそれになすらふにや。

十一日。湯のやかたに相やとりしたる男女とも、やかて浴みの人ゑらとたち別れなんはなむけ、なこりのうたけとて、酒のみ〳〵て酔て、こゑのかきりに、「けやくはなれとお庭の艸子、うら子は枯れても根子はきれない。」けやくは、假借しけるこゝろをいふにや。(天註――草子根子などいふは、何事もものゝしりへに子文字付ていふこそ、みちのく、津刈、あるは此飽田路のてふり也。)

十四日。雨のそほふるに、ちごをふところにかゝへて浴すとて、此のゝはうまずにや、あづきにやと、かさの出たるを見おとろけり。こと女のうかゝひ見て、あづきにや、はやすけにや、もかさにはあらじとて行ぬ。水痘の方言(かたな)を三河路にて弊委奈以といひ、阿豆岐とは、このあたりの辭也。烏萬須、波夜秀祁も、おなしさまの病にして瘡のことなり。三河のくにべにて、をさなき子の神ほとけを、のゝさまとたふとみ、陸奥宮城の郡あたりの、武士の孀をのゝさまとよび、松前の島人、士の妻をさしてなゝさまとなへ、磐手の郡に在りては士の男(おの)子(こご)を愛男(あいな)といひ、此あたりにて、武士(さもらひ)のもたるをのこ子を能農といふなり。ところ〳〵にて

郷いさゝかもへたつれは、浪速の葦に伊勢の濱淤企のたとへ、うへなり。ものはちらふるをかはゆひ、かはゆし、あるは、さたけないなともいへり。

霍公鳥

十六日。うちとの神をいはひまつる、河のへのみやしろに來てぬさとれは、をちかへり霍公鳥の聲、かしかましきまて聞へて、うへもふるさとをおもひ、行末をいのりて、

　阪木葉に四手の田長をかけまくもかしこしと鳴く山ほとゝきす。

おなしやとりに皈りく。

扇田村

廿一日。ひるつかたより、大瀧の湯のやかたのあるし奈良なにかしがもとをたちづる。去年よりの餘波なきにしもあらで、とひとはれたる人々にいひのこしたる。

　かきりあれはたちいつる湯に袖ぬれてわかるゝものか旅のつらけん。

曲田邑とて川越へに見へて、いくらも鷄栖の森のかけに立たるは、やはたの神籬とそ聞へたる。空坂越へて、おなしう川をへたてて中山、山舘なといふ村ともの木々の中に見へて、扇田の里の近つきたり。遠きむかしは、村の名を大木といひたりしを扇とはかいあらため、近き世となりて門田の名によび、今は里の名にいひ渡るなといふもの話りありけれど、みな、そらことなりとも人のいへり。みちの馬手に大なる杜に、としふる松杉の生ひしけり立るに、伊勢の神籬をうつしたるみやところのあるに、ぬかつきて、

里の名のあふきにかへてうちはらふぬさの追かせ袖に涼しき。

産物菅笠

田子の杜、あるはいふ達子の森といふひとつの小山を弓手にとりて、扇田のやかたともひし／＼と河つらに立ならひて、月ごとに三たびの市たち、女は菅笠を手業ととく起出て、朝顏むかふ鏡笠、岸の柳の風ふくれ、來寄る波笠うち重ね、冬の歩路の雪おろしは名さへ涼しげに、近きさつきの田殖笠とて、縫手の鍼のいとまなみ、一日に五百のをかさを縫出すとなん。（天註 ― 槿花、鏡、不久連、八寸（やき）、韮、雪卸なといふすか笠の其名こそ多かりけれ。）

白絲瀧行

皐月の朔日。うの花をくたすながめもけふにはれて、旅の舍にくすし武田成親のとふらひ來て、いさたまへ、小又なる白絲の瀧見にといさなへれは、去年見しところながら、雪にまほならされば尙見まほしう、つとめて扇田のやかたを出づ。田子の森をめてになして麓行、犀河の水いとふかし。（天註 ― 此犀川の名は遠江の國、あるは信濃の路なと、處／＼に聞へたり。）こゝに聞へ、かしこに聞へて、早乙女の田唄いとおもしろかりき。

雨もやゝはれてさなへをとり／＼に田子の杜かけうたふくにふり。

淺利の古蹟

谷木橋の村なる委都刀黎といふ山の、遠からす峙たり。長岡とて小高き原あり、やはたのおほん神垣を齋ひまつりて八幡臺といふ。こゝに、安佐利のむかし對城をかまへて、長岡の舘といひ扇田の城ともいひし。品累亦介もすめりしとか。松杉のむら立てかみさひたり。天

正のころ、淺利勝頼、生內權介らにはづかしめられしいにしへを偲びて、うちむかふ曲田の、緒楯山などいふあたり見やるかうちに、雲のいやふかうたちおほひ、日はさしなから、はつかにふり來けり。（天註——「扇田の邊長岡の城には淺利兵部少輔則剌（マヽ）の居れり。」「與一則頼は天文十九年六月十八日に十狐にて卒せり。」「民部少輔勝頼は天正十年五月十七日長岡にて卒。」「與一頼平は慶長三年正月八日卒。」此三代の木主は今大館の玉林寺に在り。家老な片山傳吉といひたりしよし。その末尚ありとなん。）

やさかにのてるまかたまにつらぬきて雨のをたてにかゝるむら雲。

新楯を經て、味噌內といふを左に見つゝ、やはら獨鈷の村になりぬ。去年の冬、一夜をふしわびたる翁か宿は、雪のしたにふりかくろひたりしか、今は青葉に軒を埋みたる門に昔なひて、事なしとて別たり。雪にふしたりし諏訪の松も、あらはれて稍高し。このあたりに珠數懸の雉子とて、鳩のすゞかけ見たらんかごと、首に玉卷くきゞすのありて、冬ことに雪の追鳥かりしてとりつ。こと雉子に、もともまさりて味やよけんと、行つるゝ友の語るほとに一聲たてたるは、こは珠數かけの鳴しとうち笑ひて、大日堂の前を弓手に太郎坂を越て、庚申堆といふ一村も過ぬ。此あたりに樂杜といふあり、淺利統世に榮へたりしころは、人々を集めて管絃ありたりし處といひ傳ふ。その森やいつこ／＼ともとめ來れど、もとめわびて二十九日村に來つゝとへば、過來しあしこといふをふりかへり見て、

わかのれる駒のひつめのとくふみてあとにあそひの杜は見へけり。

かくて須波利安比といふ山中を行て、ゆみてのかたに炭屋澤といふ、こかねほる山ありとか。森合の村近う、九郎坂といふに分のほりて見れば、谷陰より生ひ立る、としふる桂木のなかからはかりに大なる山櫻のやとり木ありて、おなし青葉のうすくこく、茂りあひたり。春の末夏の始には、雪をあさむく薄花櫻、ことにおもしろしと人とらのいへれば、花の頃をおもひ渡りて、

かけ高き月のかつらのかくるまてうつろひかゝる花のしら雲。

大渡リ村より長部、森の腰なとのやかたとも川越へに見わたされて、行〳〵路のかたはらに、山をくりしてともすといひて、なきがらを灰となしたるあとに、三曲ちふ三もとの木を結ひ立て、ふりたる鎌をうちかけ、木の弓箭を作りて北にむけて、ひきまかなひて掛たり。よもつ人のあやしき鬼も殘らば、根の國、そこのくにまても、追ひやらふのよしにやあらんかし。もとも、あかりたる世のふりにてもやありなん。かゝる山里に、家の二三五六とはあらさなるに、下タ大葛とて軒をならべたり。こかねほる山於保久楚に行は、山路のいと遠く、左にそのそがひ見へたり。大谷、戸澤、泥䉶を經て長シ臺といふ川づらの一ツ家にやすらひて、揚といへる山路はる〳〵とのぼり、いきくるしう、からくして峠によぢて、杜良の嶽の雪まだらに見渡して涼しう、岩にしりうたげせり。霍公鳥のひたふるに鳴しかは、武田敬夫成親なたいふ

ひ硯とうたして、

山彦の谷におちけりほとゝぎす。

尚ころのをやみなう、こゝに聞へ、かしこにひゞきたり。

分のほる友とや聞むころあけて名のるも高き山ほとゝきす。

賀左の澤といふにおりはてて、いくばくの小川をのみはる〳〵とわたり〳〵て、

五月雨にみかさまさりて澤水のあさ瀬もふかきやまのやまあひ。

敬夫の句あり。

細川や底も青葉をひたすかけ。

大杉とて一家のあるに、雨のふり來れば笠やとりして、

立よれは木の下露に猶沾れぬ雨のおほ杉いく世ふるらん。

敬夫の句あり。

涼風や名も大榾の家二ツ。

軒近うみなぎり流るゝを六郎川といふ。この奥山に夜叱通（やざつ）（天註―やひつとは山水のたぎり流るゝ處をいふにやあらんか。出羽、陸奥にその名いと多し。）といふ處のありて、そこにその人のいつのころならん、亂れを避てすめりし栖家のあとに筒井の殘り、畠作りたりしあとありて六郎殿の舘といふ。なにの六郎にや。山のあ

なたは陸奥狹布の郡にて、十郎館、五郎館とてありき、此はらからにてもやあらんかしといへり。この六郎川を、いつ瀬も、むせも、からうしてわたる。

　庵こゝにむかしむすひてすむ人の名になかれたる山河の水。

たけたのいへらく、

　夏川や氷をたゝむ鳥のむね。

青葉の中に映山紅の、いまを眞盛りとから紅のふり出て咲たるは、世にいふ霧嶋躑躅の緋なるよりも色濃く、英もいとおほらかなるか、ところ〳〵に咲たるは、めもあや也。おほひ立る大巖あり、冠岩とてふりあふき、袖うちふれて歩より行ぬ。蹈鞴(たたら)とて漲るに、

　行袖に波したゝらはくさまくらかり寐涼しく宿にしき寐ん。

たけたの句あり。

　鷲の眼の岩にするとし夏木立。

たかね、岩間、谷陰なとは、いまたに星のことく雪の殘りたるも涼しう、見る〳〵、沙子澤といふ家の十斗軒をつらねたるに至りて、

　かち人の行そわつらふたかすなこさは水ふかし山のかけみち。

屋戸に入て休らへは、酒わかして出せり。　　敬夫。

杯もあちなき里やかんこ鳥。

山の産物

このあたりの業とて山をもりたて、柚、山賤の栖家たり。春に紫蕨、さわらひを折り、夏は香(しい)蕈(たけ)、天花蕈(わかいたけ)、月會菌(つきあひたけ)といふものをとり、色の朱なるは鮭たけちふものゝ、老てはこれを木の耳とて、ほくすともせりけるをとり、秋は崑崙蕈(ししたけ)をとり猪茶、直根、横根なとの藥を採り、はた、つねに木の皮の沓を作りて、たつきとはせり。沙子澤川、大摺臼(するす)川もひとつに六郎川におち流て、あらき大河なから、此あたりのみ川淀にして、名を靜淵といひけるところに至りては、水底の明らかにはれて、鮭はいくつ鰭ふるなと、人の見うかゝへり。

行川の水のしつふちそこきよみすめるはらかの數も見るへく。

敬夫おなしうなかめて、

日の影に花も沉て花葡萄。

松陰の險

岩のつらに手かゝりあり、足かゝり付たるを力に身をそへ、身をひそめ、つまかゝりを命と傳ひてなからに至れば、津輕の麻蒸の浦なる、うとうまへのかけはしのさましておなしう、ひとひらの板を棧と渡したり。あやうさいふへからず。こゝなん松陰、あるはいふ松の懸とて、去年こゝをおちて、あないも徃還さざりしことの、うへならんかし。

生ひしけるきしの松陰そこに見ておなしみとりの水のふかけん。

此したつかたに硯臺といふ處のあるてふ。見やるだに身も寒さおもひして、やゝ渡り得て敬夫のいへり。

松かけや橋にとりつくかたつふり。

いたり〳〵下りては、弊陀の飛泉とて巖峙て高く、水うち迫りてこほ〳〵と鳴渡り、岸とゞろき、みなはわきかへり、たきちなかるゝそのすかたは、みちのおく磐井の郡、五串の飛泉見たらんにことならず。

鱒漁

この水に鱒ののぼらんを待て、夜須ちふものを投つきにつき、あるは小鍵てふものして、しら泡をかい分て、みなきるみなそこに潜して、かけつらぬいて、うき出て、これを淀のいけすのつなぎ鯉にひとしう、水ふかくかづらしてつなくなと語り行に、日も暮て、白絲口といふ處を過て、しらいと澤に入りぬ。その瀧は弓手のかたならん、ちいさき麿木舟にこがれて、雪に叩きたる門にふたゝび入たり。

坐魚、鵺鳥

二日。此あたりには井提、芳野川に名たゝる坐魚の多く、ひねもす小夜すからに鳴聲のあはれいとふかく、明ても鵺鳥のうらなきわたり、隱飛の聲うちくもりたる空也。

山ふかくうふめ奴要鳥雨に鳴きめかるかはつのこゑもをやまぬ。

夏の白絲瀧

やはら雨もはれてければ、小舟にのりて岸にいたり、宿のあるし大河なにかし、誰れかしなと、たか艸かい分て、去年雪にたとりわつらひたりし、不動尊の鳥居に入てからくしてわけ

出て、雪に路なかりしことく夏草ふかく、山路の露にぬれ〳〵て岩の上によちのほりて、ふりあふぎて見れば、日をふる雨に落そひて、去年見し、雪のしらいとを、あはをに亂れかゝりたりしとはことにして、白綾ひとむらを、高きいはねより風のひるかへして掛たらんやうに 雪吹にいやまさるたきのしら泡、山かせに吹いさなはれて、いまはた袖をはらふおもひして、こゝに見やり、かしこにながめて、身の寒きまで水の雲霧いとふかし。

風吹は空にみたれて青葉さす梢にかゝる瀧のしらいと。

雨は晴れど、瀧の時雨にそぼぬれつゝかれひこひらき、酒たうひてんと、人々菅笠をかたふけかつきて瀧雨をしのき、やゝしはしありて皈りなんとて　敬夫。

身のあせも氷てかゝるたきのいと。

こゝをなごりとうち見やり、出くるみちのへに、がんぎ石とて、なゝきだ、やきだの、みはしの形したる岩の、ふかきみなそこより、なからはあらはれて見ゆ。こなたに大岩のふせるがごとく、つとさし出たり。此水の行となうさかまきて青み渡りて、きし波さら〳〵とたちうごき、その深さはかりもしらぬを機織淵といひて、みなそこのいとひろく、女ありて、つねに機をりてすめり。その、をり姫を水神とそせりける。夜更、人さだまるころ此ふちに臨て聞は、きりはたり織るはたものゝ音、水の底にあるてふ、あやしのものかたりを、もはら人こと

小股溫泉

聟のごき、嫁が箸

にせり。

しらいとの瀧の流をくりためてふちにはたをる波のよるひる。

人々も、のぞみたゝずむ。敬夫のながめあり。

螢火や波にかき消へ岩に消へ。

川邊つたひにこゝを出れは、山ちさの花眞白に、こと木の花も咲ましりて路をふたきたり。谷陰を分めくりて小股(こまた)の溫泉(いでゆ)のもとに至る。湯はきはめてぬるけれど、ゆげたを立しぞけは、こゝちあたゝまりて身にあせしてやよけん。湯のやかたははたばかりならひたれど、人のやどりて浴るはまれなり。やゝ日もかたふけは、おなし小舟にのりて、はたをりふちをこかれ〳〵て、波のしら綾をりかくる中をかいわけ、のり出て湯の臺につきたり。

三日。あさひらきの空くらく雨風すれは、えいてたゝす。軒端の山の麓より聟の五椀(ごき)、嫁が箸てふくさを折もて來て、童ともの此草もて戰はし、うち戲れあそぶ。よめかはしは、はこねくさにや。此葉をこきやり、あか棚のはゝきとし、むこのごきは箭車といひ、鴨の脚、鷄の足てふ。これかから名は、鬼臼とかいへらんものにてや。此草のわか葉は折りて、しほつけとしてつね喰ひ、根は巨松によけんと。瀧の水上にのほり、あるは硯臺に行て石材(いし)とりてんとおもへと、此ころの雨に、いつらも水のふかければ、せんすへ波の下にうち見たるのみに

て、その大雪にわけ來しごとに、ことしも手をむなしうぞしたりける。こゝに近き千本杉と
いふに、白糸におとらぬ瀧のありと聞しか、そのみちの木々しげう、たかがやにとぢられて
行へうかたなければ、すべなう、おもひつゝ暮たり。

幹陀の瀧

四日。雨の晴たれは、つとめて朝川の舟渡りして、硯臺をむかひうち見つゝ幹陀の飛泉に來
けり。　敬夫の句に、

雷の岩に砕て苺の花。

となん聞へたり。かつ見つゝたちとまれば、足も、うこもつばかりひゝき渡りぬ。

ふりつゝく雨の日かすもけふいくか經たのたきなみうつもたかけん。

田植風俗

れいの松懸の梯もあやうけにふみ過て、岩づらをつたひて、はた賀郡(かけ)といふ處を、おなしう、
あめに雲ふむこゝちして砂子澤に來る。ある家に、稗(ひえ)もてかみしたる田殖酒を出せり。湯
の臺に近き河下の村は稻田のみなれと、此あたりはみな、稗田をそ殖ゆめるにいとなう、畠
ごとには火を焚きて、ちいさやかのやゞを作りて、童の守りてうた唄ふは、豆生にやゝ生ひ
たつ豆を、鳩のむらがりてひたにあされば、その鳥を追ふ小屋となん。小繫といふもへて、
鍋澤といふあたりの、むかふきしべの岩楯いとおかしう見つゝ大杉に來る。殖女こゝら、田
の面にをりたち唄ふ。なへてはくにのならはしとて、百刈る田の町を一人役と凡さだめて、

三灣

岩豆と蕃椒鳥

うつも、かくも、うふるも、ひとりしてすべき業とてしかいふ。とみうどの早苗は、萬苅の稲田を作るとならば、もゝたりの早乙女をゆひやとひして田の面にうちむれ、立人、小苗打など一日に殖へはつれば、田殖のころほひは、わきてにぎはゝしう。たかき、いやしきといはず、田の中みちを行かふ人に、いはふとて泥苗をうちかくれば、誰れもかも、うたれどとて、ひぢりこにまみれて、とくにくるを、もゝあまりの女ども、やらじと追さはげど、かゝる山里は、さるためしもつゆはかりはしたりけり。

　　これも又ゆひやとひしていそくらしひえ田のさなへふしたゝぬまに。

こゝより卯辰にさしてくろみたち、木ゝ茂りたる山をはる〳〵とわくれば、三灣といふところのありて、その山の谷水の、みちのおく鹿角郡（いにしへの狹布郡）の夜明ヶ島といふ處におち流れ、はた、此出羽の國仙北の郡の玉川におちながれ、この六郎川にもおち來て水のちまたなれは、しかいふとなん。錦帶花の澤水を渡り〳〵て安郁峠も越へ來れば、岩豆といふもの、いはほのはざま、苺地なとに多かるを採りて喰ふに味の甜し。これなん山枇杷菜てふものにや。淡海の國の岩梨子、あるはいふ、姨梨子の鐵漿附たるにたくひ、おなじきものか。土圏兒つらを掘り、牛尾菜を折る男あり、明日の料にやあらん。空のうちくもりて、のと呼びの鳴渡るを聞つゝ、これを、ひようす鳥かひるさへ叫ふとふりあふきぬ。此あたりにてはしかい

ひ、羽の色の朱なればとて蕃椒鳥、あるは、てろゝなといひ、陸奥にて、ひどりとも、こころところのくにことに多し。やはら長臺におりはてて流に足ひたし、水ひすひ、わりこひらきて、あつさやゝわすれて戸澤村に來れは、男女うちましり田づらの家のうちとに、こひちの肘を曲てひるねせり。梢くらく水鷄鳴ぬ。

くもる日はひるも鴨のたゝくなりくさの戸さはの夢むすふころ。

大谷村の長田治兵衞

大谷村に來て、長田治兵衞といふ翁の屋戸に休らふ。家まひろくすめり。翁は、たゝみのむしろ、花むしろを手をりにして、備後のくにうごにまねびたるとか。翁か上祖は陸奥の毛布の人にして、小豆澤の大日如來をもり奉る、阿倍左京のやからたり。養老のいにしへは家とみ榮へたりし、かの蜻蛉長者のものがたりをし、はた、ふたもゝとせのむかしのころなん、此おほや村に來て住つきて、長田を家と名のりたるゆゑを語りて、杯とれり。敬夫、大葛山に行けるにいさなはれて、やはら至る。二股村に、やかたともの立つらなりて多し。山のあるしを、荒河富訓といふ人に見へたり。臺所とて黃金ふくさもらひに、こよひはふしたり。

大葛雜觀

（天註――此大葛山へ行路のかたはらに碑あり。なかむかしとなん市之丈といふかねほりあり、女にかよひて、くゞつのもとより小紫といふうかれめを勾引來てその兩人こゝに死せり。時の人唄て曰「しらぬ山路を市之丈とつれて今は大葛の土となる。」ところ／＼のかれ山にて、ざるあげうた、石からみぶしなとに今も唄ふ一くさといへり。）

五日。このあした笹卷、菱卷、しほで、ながいも、すゞのたかうな、ほごなと、おしきに盈りて

人々の前にならべたり。けふの祝ひとて、

　風涼しこかねの花のつゆそひてのきはのあやめ吹かほる屋戸。

あすいきねなと、あるしのいへれは休らひぬ。ひき、ふむ、かな臼のところせく、かさかけ、せりもの、水流し、口吹、寄せぶきなとも、けふはさゝめたり。おもふに天平寶字のころほひくだらの敬福、みちのく山に咲そめたりしこかねの花を折て、わかみかとにたいまつりしよりこのかた、國てふ國にもほりそめ、近きいてはのくにゝは、その根さしふかくうちわたり、生ひのぼり、枝さしおほひて、しか、かゝる黄物(こがね)をいたせるものか。遠きむかしに坑場(かなやま)のひらけて、淺利なにかしが、この以度理といふ處に、こゝらのこかねを掘り得しを山口として、かゝる大久曾山に今も掘りき。中ごろ萬會といふかねほりあり。鋪主(しきぬし)にしたがひ坑穴(しき)入りして、鏨(たがね)うちしたり。鋪主(しきぬし)はそれといさゝかしぞき、まんくわいはすゝみて、よき作金(こがね)にあたりて是を掘りにほりて、やかて天生牙の大なるか、さし出て光たり。萬會うち見つゝ、こゝろあはたゝしう、とくほりて身をいつこにもおちのびてん、しきぬしに見せしものゆめゆめと、たかねしてほりうがち、うつに、しきぬしは竹火をてらし休らふをりしも、まんくわいとく〳〵とおもひ、うち落して、あなうれしと おもふほとに、こけまろびて、しきぬしか前に、くるまりの大さにて、をのづからなれるこがねのおち來りけるを、しきぬし見おどろ

金鑛の種類

大葛風習

き、こは天のみたまものならんとおしいたゝき、我しきにあらば、まん會にうちもころされなんと、こかねをかゝへもて雒を出て、家に飯り來て、風の吹付やうにとみ榮へたり。萬會は、殘りたるこゝらの金(こがね)を掘りて、しきぬしか門に入らず、いつこにか行けるとなん。うべも、そのころの盛掘(なをり)てふ事こそあらね、今し世も、ときはかきはに、こがねの花の露のめくみふかく、御代の榮へをよろこぼひて人倚こゝに住たり。こかねのから名を按彈、兼金、庚辛、天眞なといふ、その品いと多し。鑛(あらかね)を山色(やまいろ)といふ、そのたくひこと／＼に在る也。ひかりつき、桔梗、ふけつき、鳥の糞(かへし)、むらさきつき、さきひつき、靑地付、はがら付、硯石付、鳥のねば、きらつき、銀羽色、石喰ひ、しろこなとあれど、山／＼によて均しからず。幣邇差良(べにざら)てふあらかねは、この山に在りてもともよけん。山／＼のならはしあり、のりあり。わきてこゝのこがね山は、ことに山とことなるふり多し。いつらの山にても、かなほりの工となる身は、烟てふ病して齡みじかく、四十と世にふるものはまれなり。くにのならひとて、四十二のとし厄を舉りて祝ふは、とめるも、とほしきも、なそへなうすれば、かなほりの家にては、男の三十二と齡のつもれば、よそちふたつのとし祝ひのこゝろもて、年賀しけるとなん。さりければ、誰れも女は若して男にをくれ、身の老ぬるまでは、七たり、八たりの夫(つま)をもたるが多しと、聲のみて話りけるに、なみたおちたり。

六日。つとめて大葛山を出る。みちのかたはらの畑に、朝草苅る男の、ひとりつぶやきてい
ふ。こゝにて六とせのむかし水無月のころ、まさかりの男、あたら命を一ときに二人ﾘが捨
たり。いかにしてかとゝへば、聞給へ、この二股(ふたまた)村の嘉左衛門といふ男の家は、乏しからぬ
が、新墾つきひらきし畑あり。おなし村に、清七といふねちけ人ありて、そのあら畑を掘り
こぼちて、絲烹竈(いごにがま)とて麻苧(あさを)を蒸し剝く、その釜こゝに作りすゑてんと、村なる人あまたをい
さない來て、ほりにほりぬ。畠ぬし嘉左衛門やすからず、かねよき太刀を、ぼさつゞれとい
ふものゝ下にかくして、いかに清七よ、わか力をつくしてひらきそめたる此畠を、をのか心
のまゝにほりうかちしそ、露斗もわれに告しらせたらはゆるしもしてんものを、にくきやつ
はらかなといへば、清七かいふ、此事かねていひやりつるに、なと、とくは來らさるよとてあ
ざわらひしければ、尙やすからず、我ㇾ公にうたへ奉りて、あら山の木を伐ﾘ根を掘りうかち
て、たやすからず力を盡して畠とはなしたるを、己ㇾらがこゝろまゝにはしたるものか、ゆる
さじものをといふに清七か聞て、ゆるさじとて我をいかにはすべきとおもふと、いよゝうち
笑ひたるを、いておもひしらせんとて、ゆくりなうぬきとりて、やといひつゝ、ひとうちに斬
たり。人ごろしよと、みなにげちりまどふ中に、心たしかなるもの鋤ふり上て嘉左衛門か太
刀を打おとし、石にすり付て折り曲、投捨て、嘉左衛門よゆるさしと、鋤ふり揚て追行を、追

れながら我家に飛入り、ひをわりたるごとき太刀をふりかさし、髮ふり亂し踊り出たるさまのおそろしければ、おちて、みなにけしぞくをりしも、清七を斬りたるをのが屾畑に來て、むねさしつらぬかん、腹かききらんとためらふとき、弟富之助といふもの、あせ水になりてはせつきて、しはし〳〵と止れば打笑て、人を斬りて、いかてかいきのびなん、いざ、わかかうべをはねよ富之介、といふ。いかてか兄の頸を我うたん、つみのほどおそろしといなみければ、今わかいふことをそむかば、人のあまた來て、それらにからめられて、いくはくのせめにあひて、いかなるうきめをか見なん、我をおもはゞ、とく〳〵といふ。さあらば待たまへとて、老たる親ふたり、つま子をもくし來りて、草の上に居ならへて、人をはせ、濁れる酒二斗を漉して持來て進めぬれば、まつ親につき參らせて、われ親にさいたつのつみ、ゆるしたうばれ。弟にむかひ、我にかはりて親達に猶けうあれ、つま子にむかひて、今は別れなるぞ、なからん後、親にけうをつくせ、はらからにむつひあれといひて、つゆのなみたはあらて、清七か死むくろを、よきさかなとてさきくらひ、飯筒を盃としてさしめくらし、ひたのみに飲て樽もやゝ空しうなりしかは、富之助太刀とれとて、うち笑みて、こゝろよげにうたれき。あはれはかなき命を露ちりともおもはで、四十に近きものゝ此草の露と消へたりとて、なみたをはら〳〵と落して、苅り草かいあつめていにき。あはれ、いさましの物語也。淺川の面

をこゝに渡り、かしこに渡りて、はる〳〵と山路をくれば不如皈の鳴たり。

しら雲に羽うちかはしほとゝきすかさなる山の奥に入るらし。

尙行〳〵て大亘の村に來けり。川をへたてて夏焼といふところの、居ならぶふたつ、みつの屋根のみ、このれより、はつかに見こして、姥箇嶽の雲いとふかし。此嶽には、うば神とて觀音菩薩をすゑたり。そのそひらなる願生が澤といふを經て、龍が森といふ、いや高山にのぼるといふあたりは、八重たつ雲にへだてられて見へす。森合の邑に來て、

大亘村

五月雨に木の下雫もり合ひて行水ふかくめくるやま里。

此村にすめる岩水佐左衞門といふ、としやゝたかき翁あり。九戸のみたれを避てこゝにいたりて、世々を榮へて、としふる梨子の林あり。翁は、なりところのやうなる、さゝやかの屋につねにこもり、茶を手わさに作り、西の寺めくりせしをりしも、ところ〳〵のてぶりを見まねび皈り來て、としことの功のつもりいやまさりて、兎路、淡海にもをさしめられずやよければ、この茗をたうびつゝ、翁か家の名の、岩水のふたつの文字を思ひ渡て、雲脚の名とせまくあるしのいふに、おかしき事かなとこたへて、

岩水の銘茶

生ひ立る岩根の松のかけふかくなかるゝ水も千代をうつして。

となかめて、「岩根松」、「美都の千代」とつけて、あるしの翁にとらせてたち別れて、廿九日（ひつめ）村

も過て樂杜に來りて、いにしへ人をおもふ。

むかし誰れこゝにしらへしいと竹のこゑふきのこるみねのまつ風。

十狐村

十狐の村に來て大日如來堂に詣ふてて、浮嶋の池、天童田なとを見めぐり、雪ふみありきしとはことに、見ところありき。堂の前の庵のほとりに、無縫塔のことき石の、みさか、よさか斗なるかたてり。いつの世に誰かしるしとも、文字すれけちてさらに見へず。わらはやみしける人は此石をからめて、病いゆれば、その縄とくのしるしをうとなん。名をしら山石といふ。八十一隣姫をや、むかし人の齋ひけん。こゝを出て金剛山龍生寺に休らひ、去年の舎りをとひ、犀川のあなたに大保稲成の杜見やり、又扇田の見やられて、

見へ渡る里の扇田風おちてちまち涼しくなひく若苗。

ゆふつき行ころつきたり。

大瀧に歸る

十二日。武田成親をとふらへは、きのふ大葛山より來けるなと語り更ぬ。

十三日。明石なにかしのとひ來りて、あかせし日記を見つゝ、

涼風や葦のそよきも海と山。

といふ句ありければ和句して、

聡れは汗も涌かへる袖。

藤庭山長泉寺

十五日。藤庭山長泉寺に入りて、あるしに見へて、なにくれと語りて云、つたへきく、文祿の

願生坊物語

むかし願生坊といふ法師のこゝに在りて、この願生、姨が嶽の山かげ深く入て木をひたに伐りけれは、あやしけにたけ高き男の六七人來て、御坊は、なにの料にか木を伐り給ふやととふ。願生こたへて、我はさゝやかの庵に在り、のりのために寺を作りて、末の榮(さか)ゆかん事をおもふといへり。男ともの聞つゝ、さあらば、われらも力をそへて木をこり出て、みほとけに奉らんとて、なゝたり、やたりして、みや木をこる音の四方やもの谷にひゞき渡りて、もゝあまりの人の山に在りて伐りけるやうに、山鳴りとよめき、聞人あやしみて此よしを聞より、里人も集り手毎に斧をもて伐りためて、谷に投たをしけるほどに、雨のいたくふりにふりて、山澤、澗水のあふれ渡りて、あまたしてこりつる、こゝらのみや木の、なこりなう水にいさなはれて犀川に流れ來る。こは人の力、うま、うしもからて、いくばくのみや木の流れ來る事と、願生も人々もよろこひ、工、手をのはしめしてけり。その木はみな赤檜(がび)とて、いづらも〱臼となるべき、とし經たるこゝらの大木ともに火をかけて、燒ほそりといふ事をすとて、やきにやきて、前鉋ちふものしておしけづり、あるは、うちわりたるまゝにて板しきとし、木おほひ、かやおほひ、たる木ともせり。いまだ、まかなあらさなるころの、たくみの、いみしう作りなしたるさま、いふへうもあらす。慶長二のとしは、まほに寺となりぬ。此寺の

藤の大蛇

前にふる塚あり。此塚に大藤の生たり、此藤のうつほに蛇(をろち)すめり。淸き泉のあり。藤はと

しこゝに茂りたち、はひまつはりて堂の軒端をふたきぬれば、伐りすてなんとおもふ夜の夢に、藤のもとに女の立て、ものおもふさま也。願生坊あやしみてとふ、女こたへて、わはこゝにとし經てかくろひすむ、くちなはなり。この藤の森のきりもこほたれなば、いつこにか身をかくろひすみなん。あはれねがはくは、藤を伐らんことをとゝめてたうびなは、なかくみてらをまもり、泉をまもり、火の災はあらじといひしより、長泉寺の名は聞へたれど、里の子等は今ももはら藤井(ふぢゐ)寺(てら)、あるは藤寺ともいへり。寺のそひらのかたに梵字のいしふみあり。こは、ひんかしの流れを汲む寺の、のりたかひたるやうなれど、そのむかし、うはそくこゝに行ひたるか、此寺の法(のり)にこゝろさしいとふかく、老てのちは我庵の境まて、みな、みほとけに寄せ奉りたるしるしに、今も尙のこれり。寺の作りことなれは、近きころならん斐陀のたくみこゝに來りて、ふるきすみかねののこりたるを見なんと、うつはりにのほり、すみ木をさくり見あきれて、こは、なか／＼今の世のたくみらが、つゆまねぶへう事も及ばじ。あか遠つおやなとのたぐひにや。いかなる工の作りなしつらんとて、いにきなと。藤は、木々生ひのほりて茂るにおほはれて、花はまれなり。堂のしりなる處に、とし經たる松あり。そのもとに藤のわか根をうつし、この松に掛見まくほりしてけるなと、あるし玉洲のいへり。かゝる物語を聞つゝ、

秀酒企乃温濤

花の波かけて千代へん松たかみうつす藤井の水清くして。

尙二三日のやどりせり。過しころ、白絲の瀧見て皈り來しとき、雪液齋の句ありしをこゝにのす。

仙女（やまひめ）を見しやあやめのくさまくら。

となん聞へたるに、梅雨（つゆ）雲分し袖のうつり香。と、かいつけて贈りたり。

三十日。明石なにかしのやどにいたれは、としふる梨の木のもとに、なりところを作れり。雪液齋五草といふ。かねてむつひたれば、けふなんまどゐしてかたる。定信の畫たる、瀧おち木々の生ひしけりし汀に、舟つなきたる春のかたありけるを、あるしの、とうたして掛られたり。これに歌なかめて聞へしかば、

うつしとる筆にこゝろもすみかきのくまもかすみてかゝるたきなみ。

秀酒企乃溫濤

於保久曾夜萬

秀酒企乃温濤

秀酒企乃溫濤

秀酒企乃温濤

秀酒企乃温濤

巨麻太の温湯ハ

秀酒企乃温湯

小繋

美香弊乃譽路臂

共五冊 扇田
北秋田 五

「梶の葉流すよりはしめ「狹股の繼橋を渡り「鳥總立ちふる事を見「杜良の岳にのほり「醴の井「兜の社「鐙のやしろ 芒の郷「連枝鴨蹟葉樹「立田代の沼「穎齋（かひほかひ）の祭ひ（いは）「船木山「鸜鵒石「猿淵なとをしるし「埴輪「立物ほりづるにまじりて「頸鎧の出たるにかゝなひあはせて、此ふみの號（な）を「みかべの鎧」とぞせりける。

櫃崎にて

布美通岐の朔。いてはの國比内の郡櫃埼のやかたにすめる、麻呂岡の屋戸に夜經よりたひねして、おくるあした、このいきたなき人さらよ、牽牛花のまさかりなるもしらでなど、うちわらひてあるし定政のいへらく、「秋來ぬと朝いの人にあさかほのさきて告らん庭の初風」となんありつるも、おかしきこゝろはへと聞つゝ、おなしさまになかめして、

秋風のふきも通ひつさきしよりこほるゝつゆのあさかほの花。

かくなんかいつけて、あるしに見せつ。

團扇餅

三日。つとめてよこさめふり、ひるつかたとなりて雨風しきりに吹あれて、とにさしいつへうこともせで、くれ行空のすこしうちなごみたるまぎゐに、そばむぎのそば〳〵しきものから、團扇（うちは）餅（もち）てふものして、これなんすゝめられけるに、こゝら鳴虫のあはれもいとふかゝりければ、宇地王母智といふことを句の上におゐて、

うちなひきちくさに風やわたるらんものおもはせてちゝになくむし。

赤石まで

更にふけてふしぬ。

四日。比都差企をひるより出たつ。こゝのふる館といふに、譽田のおほん神を齋ふ。その地の形の、飯櫃に似たればとて河埼をしかいひしが、今は村の名におふとなん。館のぬしは誰ぞ。東鳥舍、西鳥屋てふ處も、いまは鷹鳥屋とて村あり。天正のむかし八森山、野代、山葵澤なとよりとりて、鷲、鷹のいくみつぎをして、秀吉のおほん手鷹とし給ひしといふも、比内は、多加度夜のほとりにてもや、あかけしたらんかし。そのやかたともをめてに赤石のやかたについて、正壽院のけんざ悟峯の庵をとふらへば、うちとの神のひろ前に、日ころこもりをこなひ居れるもとに、わらふたしいて語りくれて、夕月のさし入りしかは悟峯、あなおもしろの夕附夜やとて、

　小祠に眞向すかたや月の顏。

となん、なかめられたりけるに和句せり。　麈寐の耳に虫と松風。

七夕祭

七日。委氏賀波に在りて、ひとり川逍遙してければ、わらはべの集ひて草楫の葉をこきやり、ふたりと水に投てあそぶ。

　二星祭るこよひの手酬そとあまのなくさやけふ流すらん。

やはらくれて、空は晴れたり。

まがちや村

病人の禁厭

銀河まかちしけぬきひとゝせの淀さこよひをまち渡るらし。

なかめて更ぬ。

八日。近き野山の初秋をも見てんと、村はしの野はらに出てうち見やるやかたを、まがちやといふやかたの、山本に二ツならひてかみさひたり。まほの名は曲澤てふことを、よこなまりていふ。小鳥のむれり。

末遠くまか澤水のすむかたに聲もなかれて渡るむら鳥。

日もさしかたふけは皈りつ。

十日。おなし村にありて、近となりの里に行しかは、艸刈るあけまきの、野よりわらはやみして來けるを、こは馬瘧にや、無縁瘧にてや、はらひことしてたんもれやと、めしひの巫女(めかんなき)の、さちに門に來るをいさなひ入る。この移託巫女(いたこみこ)覆槽をし、弓をうち、かんかがりをなして、このやまうとのうへを、ありまさにかたり語る。むかしなにかしのみかと、瘧のおちたまはぬをうらみて「眞草刈る野邊のはらはやみち遠くすむ山里に皈り行らん、となかめおましましかば、おほんものゝけも、やかて夢のことくに、さめたまひしものかたりもあれば、このおほみうたを、かのわらはに、かいとらせつれば、そのおやねんして、もとゞりにむすひてふさしむるに、やかて露のけしきもなう、瘧(はらはやみ)の鬼(かみ)やおぢて、すむかた遠うやらはれ

けんかし、いへたりけるとなん。

こやし草刈

波都企の六日。阿仁の庄河井のやかたをたちて野原を行に、こやし草てふものを刈るとて、こゝらの人の群れ入たちて、からながき鎌して、しげきがもとより小萩、小芒、蕨のはたなとの小草苅るを、合せ刈りとて、箭形のやうになぎふせ、あるは立刈りてふことするかたもあれと、艸のみしかければ、しかそせりけるとなん。相野弦根といふ高岡にのほれば、品類(しなるゐ)の村、瀬の鍎の村なとの、やかたともの見ゆ。うす雲のかゝり、霧にこめたるは脇神が岡邊、小盛の岑なと仄にあらはれて、やかた〳〵はさらに見へねば、

　めになれしかたもそことはしら雲や霧にこもりの山遠くして。

青茅、鬼茅

かくて曲河といふ澤路になりて、池の邊なと路のぬかりて行なやめと、あしよき五調にのりたりければ、たひらかに分ぬ。青がや、鬼がや、こがねがやなとを刈りつかねて、追ふ馬のあまた連りて行。青かやはなへて芒をいひ、鬼がやは、荻がやてふことをよこなまれるにや。そのかやなん、荻にことならず。小河のあなたに、葭か澤てふ村の見へたり。下船木(しもふなき)と

いふ村にいたり、ひるの中宿をして水飲み、あるは李ひろひくて、のんどやゝうるほひたりなとかたらひて、人々休らふ。上がの下といふ村にいたりて、やはら上船樹の邑につきて、鈴木多左衛門といふぬしのもとへとふらふ。こゝに盃とりて、川井村に住る齋藤數馬治明とて、相しりたる人もありて、なにくれとめやすく、うちものかたらひ、送り來し人にふみかいてあつらへ、馬は飯しつ。かくて日はくれたり。

七日。つとめて治明を別れ舟木をたち出て、白頭山を見さく。南面太多羅のむかつをより、けふりいやたつは青金ぞふくなる。委度離越への坂こゆれば、三の直といふ山里の見へたり。大黑森山、小黑杜山など、いとおもしろし。大橋矢櫃とて、巖をうがちてうなでとなして、田に水ひくは承應、明暦のころ作りなしたるとか。このとし七日市の邑長長崎なにかし、ふたもゝちいそまり(二百五十)の人をうなかして、段の澤口といふところより、そのたけひとさほ(一丈)やさか(八尺)、そのめぐりはたひろあまりひとさか(廿尋一尺)の、千引の石をひきおとし、山川をせきふたぎ、田井に水ひきなんたよりとせり。岩波のかゝるいさをし、いくそばくぞや。羽立といふ村

と明也派村とのあはひの細路のかたはらに、安佐利統の墓碑とて、田畠の中より掘り出したるてふ、十あまり三とならひ立る。みな文字はけちはてて、はつかに梵形のみ殘れり。そか中に、庚申塚となずらへたるに、嘉吉それのとしと、こゝろあてによみときつ。みつもゝとせ

のいそまりの、むかしをやたどらん。あはれ阿佐利の與一、むかし甲斐の國よりみちのおくにいたり、はた此飽田にうつり栖りといふ。城山高う木々の生ひしげりぬ。こゝをしぞき、十狐(とつこ)の村にいたりて柵をかまへ、扇田の長岡に出城ありつるころ、末の子にいたり大保内權助にはつかしめられ、その子はらから權助を追來て、臼澤の山おく奧見内(おくみない)のほとりに來て、親のあたをうちぬと聞へしも、うべなり。淺利の統のこゝに住つより、阿佐利やまたてふことをよこなまりて、安加利也万多といふなと、あないの語る。さりけれど淺利のやからの墓碑とも、まほにしるべうわさこそなけれ、石のまんなのそれども見へねは、といふ人もありけり。黑瀧といふを見てんとて分入、松澤といふ、そのやかたもしたつかたに見なして、雨のそぼふるに登る。澤水、谷川、とよみ流て雲いやふかく、八杉の澤といふしけ山にいたれば、そがひ〳〵に炭竈のけふりくらくたちのぼるは、かなやき木こるてふ、そのそまかたの、こゝかしこにそ多かりける。わけ〳〵て提口といふ瀧のもとにいたり、弓手は漆澤、妻手は天狗嶽といひて雲猶ふかし。烏帽子か嶽といふあたりに、こゝらの猿の、むれあさるこゑこゑ聞へたり。あないの翁は、いきほひまうのものにて、吾れとし七十になりぬれど、わかき人とらにもまけじと細はぎふみならし、三右衞門とて、わか名はしらぬものあらし。みな聞たまへ、こゝの岩垘(いわたひ)と松澤の黑漠布(くろたき)と、大派(おほまた)の水源(かつら)の船人石見ぬものは、この比内の、大猿邊(おほさるへ)

山鬼道

の澤に生れしかひこそなけれとて、いやとしたかき人にも似ず、いさみたち、わけさいだつ。さりけれど老のぼけ〳〵しう、さはかりふかき山のみちふみたかひて、入ぬべきかたならぬ溪（さは）なかにいたり、せんすべなう木を渡りてはわけ、巖をよちては至る。よこたふ大木をあとこへ、かづらをたぐり、なびきし梢にすがりておりのぼる。これを柴手とて木ふかく、末しらぬ深山なりけり。來し船樹山は、あしこならんといふ。

とふさたて舟木伐りにしむかしよりいやしけりけん山のこたかさ。

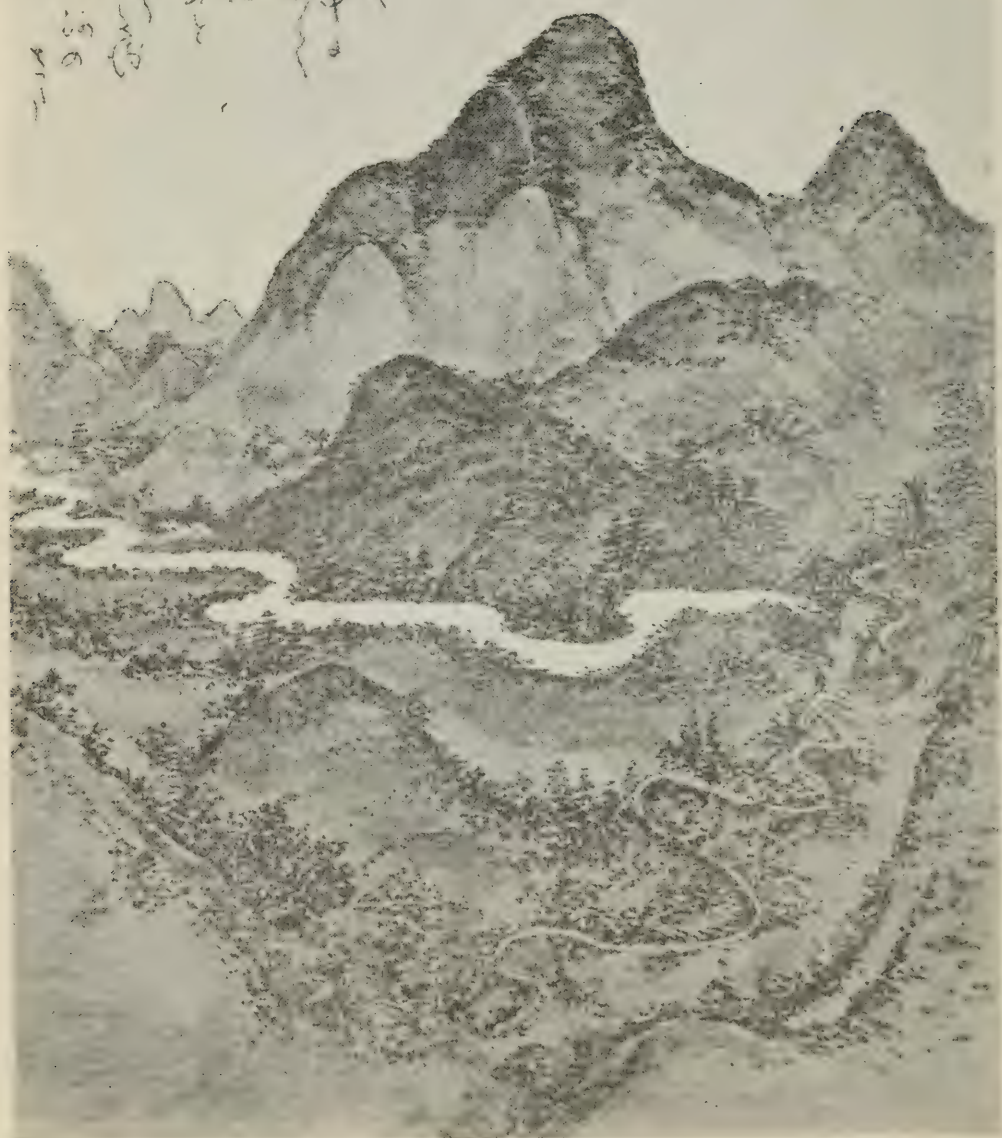
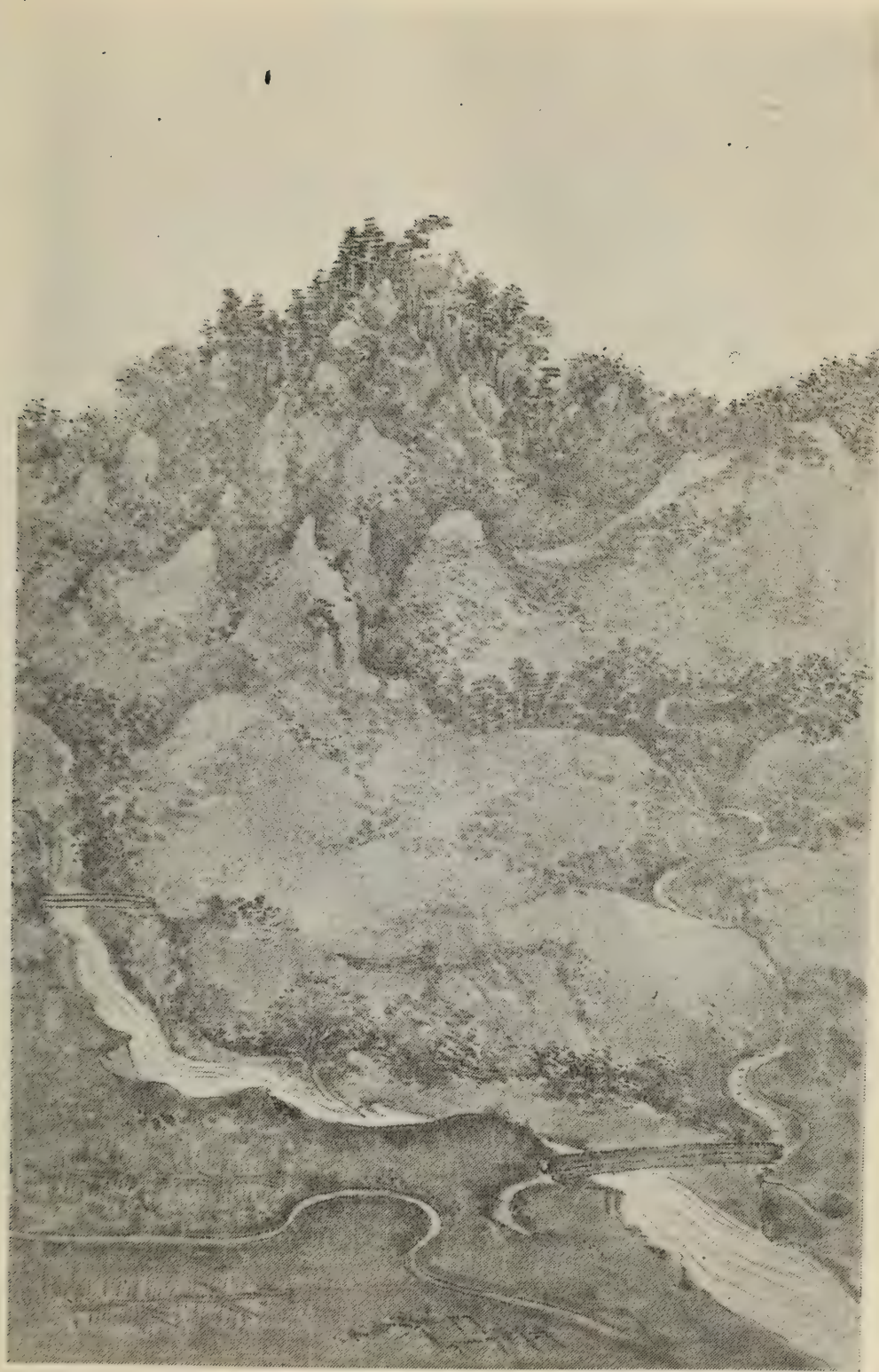
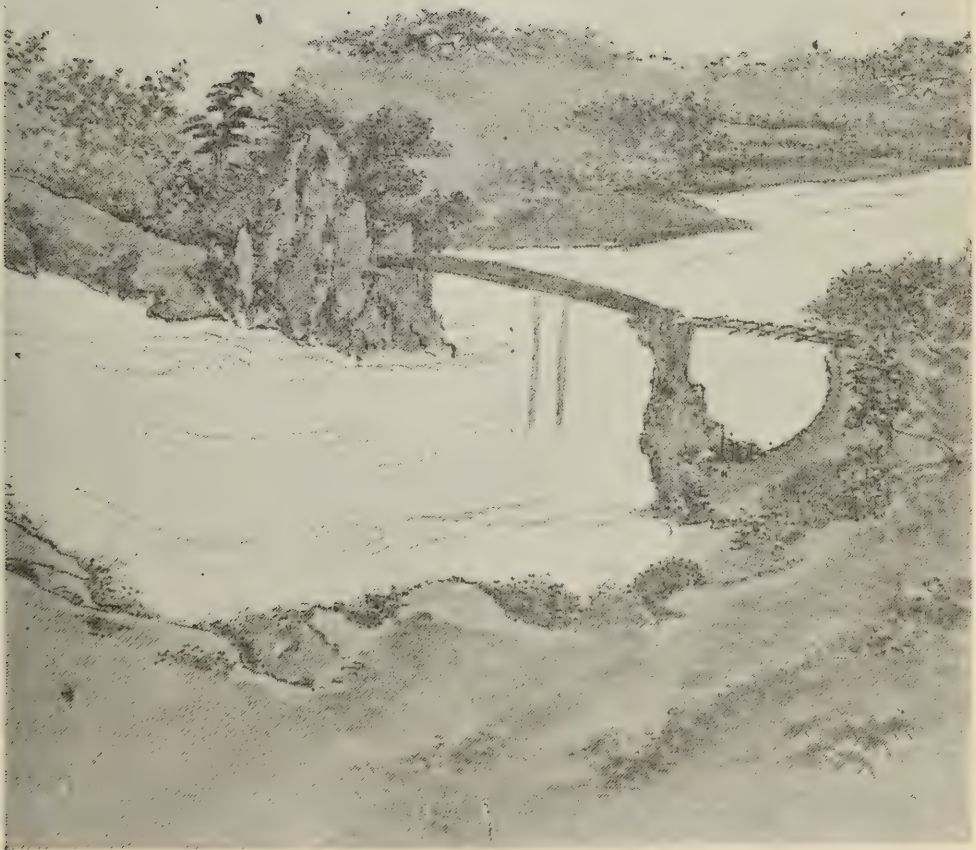
行へきかたは、そこともいさしら雲の中をたどる〳〵、雨さへいやふりにふれば、この翁のたゝずみていふ。吾、さらにこのすちはしらされとわけ來し。されど日はまだ高し、いづこなりともわけ盡し見ん。こゝまては來りしかど、行末のしれされは、われさてもいかゝしてんと、うんしがほつくりて、たゞ、谷河の水のつきたらんかたを峯とはしるべしと、こゑあららかにいふにまかせて分入れば、けにや、山川の水さらに音たへて、やゝ嶺とおぼしきところに、よこたふみちの、かたはかりそ見へたる。こは路のあり、あなうれしさいへは、あない、はとうち笑ひていふ。いつこの嶺にも山鬼（やまひと）のみちとて、みねのかよひちはありけるものなり。この道ゆかば、亦いづこともなうふみまよひなんとて、峯に至れは、しばし休らひて下りなん、この麓に里やあらんと、翁、はぎをかゝへて、けふりぐゆらせて居たり。あやしの

狭股に出づ

鱒茸

頴祭の古例

笛のやうに、烟管の鳴ルことよとおもへば、翁はうち眠るに、その音は、つゆやまざるはいかにと、あやしみおもふに、大なる鉤栗の朽木のうつほより、いつさかばかりあかりて、大なるをろちのいろ黒きが、二三さかばかり出て、こと木の股に頭をすへてうちいね、いびきしたるなり。こは蚺蛇にやあらん、はた樹有乖龍といふは、かゝるものにやと身の毛いよだち、すゞろ寒くなりぬ。翁にそれといはゞ、礫うちなどやしてん、身もあやまちなん。いざとて、先にすゝみて柴手とりすかり、はる〳〵と下り、水にそひて出て、稲田の見へたるにこゝろおちゐて、森吉の村にからくしてつき休らひて語れば、翁、その蛇をしらさりしことのねたし。この山刀にてすた〳〵にきりて、さかなとし、うまく酒は飲みてんものをと、のゝしれり。かくて天津羽の邑をへて、狭股の繼橋を渡りて、をささしの冬見しところながら、雪のかゝりしにことかはりて、見ところのいと多く、しはしありて、地ぬし吉田六郎兵衞といふかもとに、一夜をとこひて泊りぬ。

八日。雨のいやふれば、おなし宿に在り。きのふのあないは、けふは、こゝとみちよりして村つたひすとて、酒のみて舟木にいぬ。あさ飯に鱒葦とて、つくりたる赤腹の色なるをすゝめぬ。万須多祁は、栗、桂なとのとしふるに生ふるものにして、扁芝のわかきにことならず。雨はれぬれば、おしきに茄子の葉をうちしいて、にゐしき米をとて盛り、けふなん早禾ごり

はじつゑといひて、女の童の、家ことにもてわたりて、この日田甕(たかめ)に酒つぎ、頭祭(かひほかひ)をして、みとしの神を齋(いは)ふとなん。かひほかひの事(わざ)は、もとも、ふるきためしなりけり。このことは、ことふみにしるしたれば、つはらにはこゝにいはず。

九日。うらふれあれは、けふもこの狭股(さまた)に在り。家(や)は、絲ひくとていとなう、麻苧を蒸し剝(は)ぎて、かいやり、ひきむすび、木の棹にひしく\／とかけ、いとまなみ。きのふは藥師のうぶすな講、あすは亦、おかのへ齋(まつ)るとて、火なんきりあらためてさうしせり。

十日。とは、いまだくらきにおき出て、木の樋より滲る木檟(きつ)とて、水船に手あらひ口そゝぎ、身もきよまはり、あるしにおなひをたのみて出たつ。此嶽の精進は、燒味噌(やきみそ)、竹箸(たかはし)をかならずもつまじきのためしとて、人みな、いみおそれぬ。軒より桑の多かれば、かふこは大まゆ、小まゆもよけんとて、こゝの土毛にそしける。かくて二重(ふたへ)鷄栖(とりゐ)といふ小高ところをよちて、立るふたはしらにかいつくる。

峯いくへ雲の八重山へたつらんふたへとりゐを麓とはして。

恩荷の嶋輪、嬬戀(つまこひ)山を、なべては寒風(さふかぜ)と呼ぶ名さへ涼しけに見やり、陸奥の津輕の嶽く\／、岩(いは)樹峯(きね)を、こゝには國中山(くになかやま)とそいふなるも見やられたり。大鉤栗(おほぶな)とて、名だゝるその木、みちのべにたてり。群椙(むらすぎ)といふところに草ふける堂ありて、藥師如來ひとはしらをすへて、龍雲

うぶすな杉

寺と、こかね色にかける額ふりて、五くさの幣たてり。

　奉るとよみてくらのうちそよき涼しくかよふ秋のやまかせ。

空堆(そらだひ)といふをなからばかりも過れば、生土杉(うぶすなすぎ)とて、齋(いわひすぎ)杉のふたもとたてり。なかむかしのころ親杉の大なるかありしを、こゝろをさなきものありて、この生沙椙(うぶすなすぎ)を伐たふしてつかひたる。それらがうからやから、みな、をそき病をして死ほろひてさふらひき。こゝに親杉の根はありつとて、柴かい分れば、うべも山祭りをして、もとするをは山祇の神に手酬(たふけ)て、うれ葉の末をさしたるが、くちたる株(くひぜ)に生ひたち、としふり枝たれぬ。けにや、いにしへ人は、かゝらんことやおもひて、鳥總(とふさ)立てふことをやわさとしけん。伐操氏木末平波山神爾祭てふ大殿祭の、のりとことの辭も、うへならんとそ知られたる。こゝより、ゆめ、しとせざりける山のゝりなり。波良避川といふにいたれは、河くまのしのの葉を折て、さゝごりちふことを、みなしたりけり。

　小笹もて身のちりつみをはらひ川はらへは祓ふ袖の秋風。

曳上(ひきあけ)といふ高根を分て、此木のなから朽たるに萬須多郁の生ひたるとて、あないとりつ。これなん桂のくち木ならん。鉤栗(ふな)の木には、貫打蕈(ねきうち)、剝蕈(むき)そ生ひつるなとかたりもて、一の腰といふ峯のいと高きにのほれば、雄鹿の島〲、八龍湖、渟代の浦、なへて飽田の高根、のこ

杜良權現堂

神の花畠

おほひと
毛呂美

りなう見やられ、おりはつれば岩堂の峯にのほり、ひろ前にぬさとり奉る。少彥名の神を齋ひまつるほくらを、杜良權現となへ、いやまひかしこまる。吾れをとゝしの冬、二の股の麓よりのほりしとき、ほたきやのやふれたる板にかいつけし、たはれ歌のありつるを見て、三とせのむかしを偲ひたり。そのころ、向嶽といふをふみ見ざることのねたく、いてこたひはとて分るに、神の花畠といふありて、七くさをはしめ綬草、玉替、なにくれの花ひしくと咲き、葉は蛇莓の葉に似て一莖三葉にして、根は虎耳草のねにことならず。いはゆる蜀の支連たらんとそ、おもほゆれ。此草、津輕の耕田の岳に採しかはしめにて、をとゝし此山にても見しが、尙いと多くぞ、岩根、たかはらにありける。かくて前嶽をはるくと、みねの横路をつたひて下る。このそびらのかたこそ黑倉とて、眞木のしけ山にして、あやしのものゝすむといふなれ。くにうごは、もはら大人といふ。杣山賤らは、をりとして、それがすかたを見しことありとか。狒々、梟羊、山都なとのすめらんを、しかいふにや。毛呂美とて、樫の木のとしふりたるが、いとしげう生ひ立り。靈榧のごとく、鳳尾松にたくふ。栂の樹のさかとかしきすかたしたるも、玉くしけふたくさそありける。母路微とは檞檜てふことを、よこなまりていふにやあらん。この下枝、もとつ葉を折て、山つとゝして火にうちくべて、きよ火とさして神にも佛にも奉る。黑嵢は人おぢて行ことあらねば、木のふかう、さらに路なけん。

山人の物語　神田　ともし竹

溪底に瀧のありて幽に音の聞へたり。向嶽にわけのほるしのはらに闘牛兒ありて、眞盛の花の、紫のあへかに見へたり。峯はなへて白松偃臥して、いやかさなりて魚鱗をしくかこさし。このはひ松の枝をふみて、遠わたりする人もありけり。十とせのむかし、かみぬし鈴をふり、松の上をふみ／＼ありきて笥とりおとし、これを取てんとて、さうそくぬきやり、ひとさほ斗も松のしたにわけくたりて、ふるきおしきなとありしを見あやしみ、まさにやま人は栖みつるものかと身の毛いやたち、ひと言のいらへたにせで、山をとくおりはてて、このことを語りきとなん。いたゞきに石の藥師佛のかたしろあり。そのしりなるほぐらには觀音菩薩を中に、左に藥師如來、右にあみたほとけを石に作りてをさむ。祠の前に　聖政之化隨流水遠國君之壽與此山高、こは　享和辛酉年五月秋田林衡季豹小栗文聯並書」とあり。しはしのほとに雲霧くらくたちこみて、みちたとる／＼、あないの翁を別れて、神田てふ、水田の形なせるかこゝかしこに在るを、人あやしみ見つゝ出來。こは、みちのおくの都賀呂の耕田の嶽に在つるがごとく、人の佃りなしたるとはあらで、たゝ、水のうち渟たるさまに見へたり。されば秋田の山やこれならん。耕田は、小田なる山に黄金ほりてふなかめのしられたり。竹切とて、かね山のともし竹採る山賤らか飯るをあないとして、獅子岬といふ大なる岩のあたりを過て、日のおちかゝりて、松倉といふを分のほり分下り、日はくれはてて、そこども

保利巨
栩木澤
市太郎

しらず、たゞ足にまかせてたどるに、やかたとおほしきかたも見へず。かゝらば、この山中に一夜は寐なん、行なやみつかれたり、麓の里やいづこならん、いにし竹とりらが山家戸(やまけど)に泊たらば、かゝるうきめは見じものをと、くひ休らひ、いましばしとて下る。麓たらんか、ほのかにともし火の見えたり。いづこ行人ならんと、その火あかりをしるべに、あなうれしと岨路、山坂をたどり來て家あり。童二人、竹火をとりて行也。かれにとへば、栩木澤(とちのき)といふ村なり。山賤半三郎といふぬしのもとに宿こへは、あるしは、庚申すとてこと家に在つるか出來て、よきことなと、ねもころに聞へて、柯(から)四尺(よさか)あまりの鎌の保利巨てふものに竹火あか〳〵ともして、場のくままで照らして、ものくひてやすけにいねたり。(天註——坑場に竹火ともし分入る者を堀子といふにたくへ、かれほりの家に竹火さす器を、ほりこてふ名を呼へり。さりければ、かれほる山の近きあたりの村〳〵にてもしかいふとなん。)

十一日。雨ふれば、えいでたゞで、つれ〳〵とこゝに在りつるに、あら雄ら、たはやめか草刈來るを見れば、みさかあまりいつき、みきの、束長きとがまをつかふ。世に、しか長柄の鎌もて、艸刈る業はあらじかし。市太郎といふあら雄の來けり。この益良雄は、一貫二百寄の鉞をうちふり、一日に、かなやき木五ッ張リといふを伐りぬ。六尺三寸四方を一張といひ、この四を合せて一棚とはいふとか。此市太郎は、ひとりの母にいみしう孝をつくして、こゝろさしなべてならず、山賤にまれなるあら雄也けり。

栩木澤出て

埴輪掘得し

中村

十二日。雨もやゝ晴て七葉樹澤をいつれば、めてか、ゆみでか、いづらをと耕し人にとへば、阿古企のやうなる山のこなた、志具奈企の二ッ飛行しかたをさして、ゆくべしといふ。安巨耆は足休木にしてあぐらをいひ、斯久南吉はしやくなきを訛る辭にやとおもへば、にはくなぶりをこそ、こゝにはいふなれ。戸鳥内の村に來けり。もと蝦夷や栖つらん、山かげに於加志奈爲てふ處のあるにても知るべし。粟、稗、稷を佃る山畑を墾たりしをりしも、人の面の如き陶を、堀り得たる物語をそせりける。こは陸奥津輕寒苗の畠より、ほり出したるとひとしかりき。いにしへ、活目入彦五十狹茅のあめのすめらみことの、母のはらから倭彦命薨たまふ、身狹挑花鳥の坂に葬る。さりければ近うつかへまつる人をつとへて、生ながら陵の域りに埋せ給ふ。しは／＼日を死すして、晝夜いさち、とよみかなしむを聞しめして、いまよりして生人を埋み立をとゝめまくおぼして、出雲の土部におほせて、埴輪を作らしめてこれを埋みて、いく人に代ふ。波邇王の亦の名を、多底毛乃といふ。その御世よりこちに埋みたりし、埴輪、立物にてやあらんかし。中村といふに來れば動石とて、そとさはりても、うちうこくちふ岩あり。それ見なんも雨の頻にふり來れは、しはしはこゝにやとりてなと、いさなひ來つる男もいへと、いましはとてさし出て、

露分し袖はなか／＼村雨にみのしろころもぬるもいとはし。

まさかり石

打戸村

戸鳥内村

路のかたはらに、こまつめ石とて、馬蹄のひとつあらはれたるか、路のかたはらに屋形してそありける。しはしはなれて瘡かき石とて、身にかさある人のいのる草八幡とて、野槌、あるは草野姫(かやのひめ)を齋(まつ)るのたくひなり。駄良咩起といふ澤の兜石は、雄元(おのはしめ)にそ似たりける。はた鉞(まさかり)石といふが立り。ゆへをとへば、處女(たをやめ)に通ふあやしの男あり、闇よりいつるを、ある益良雄のしのひうかゞひ、我ひたにいひよれど、あはさなるにこそ、かゝる男のあれは、あかこゝろにしたかはぬならめ、うちころしてんと、鉞ふりあけてうちたりしかは、大庭の面にたふれふしぬ。人にはあらで大なる石なり。まさかりの刃(は)のあとたちながら、今もまろはれてそありける。打戸(うつと)といふ村に至る。こゝの沼平(たひ)とて大なる沼あり。此沼に生るゝ田螺(つぶ)はみな左り巻にして、大なるは石碓ばかりなるもあり。これを親つぶとて沼ぬしとせり。さりけれと、水のこゝろふかけれは、こふしはかりなるを淺岸に見しのみ。さゝやかなるは、いと多けん。鯽、ことい をもありとか。雨ふれば、鈴木長兵衛といふぬしのもとに、宿つきたり。

十三日。宇都度と出て、あまつゝみしてたとるく\、刀度利南章に來て柴田作右衛門のもとに、雨やとりしてくれたり。九助とて、けうのおのこ來けり。十とせのむかし、五つらの錢と、よねとを、くにのかみより、かつけたまふと語る。此やかたの山川の源には、水尾瀧、五

兵衞瀧、中の派の八十が瀧とて、見どころのいと多かれど、水ふかく道も遠ければ、すべなう見さることのねたし。

鳥越村

十四日。ひるつかた雨いさゝか晴れしかば、こゝを出たつ。ところ〲の橋おちて、行かひたゆはかりなれば、野尻村をへて鳥越へといふ村に渡る。槻瀨の橋とて、いとあやうし。かくてそのやかたになりて、日は高けれど、高岡六右衞門かもとに泊る。

根子村まで

十五日。雨霽れに鳥越をいづ。このあたりにて「水尻、五兵衞瀧、兩のさま、こゝろつくしよ、小諸澤。」とうたふ。みな掛水ありつるところを、かぞへていへる唄也。早瀨の澤とて小股におなじ名の、この大股にもはたありけり。溪川に逆卷水を渡らんに、めてのしたつかたは大瀧とて、雪のくづれ落るかと、立石の爪あとをふみて下り得て、人にたすけられて、みなきる波に身はなから入て、からくして岸に至り、與吉野といふに出れば一ッ家あり。鶉の訛て鳴くを、よきちといふ。そのよからぬ鳥や此野にあらん、與吉男や、ひらきそめつらんか。川をつたてて菅生といふやかたあり。洲淵內といふ小川を渡て、長畑のやかたをへて、比立內のやかたを過るに大橋を渡る。この溪水は、仙北の郡檜木內の、中里の山よりおちくとなん。高野亘のやかたをへて、まかねふく眞木山のほとりにも在る、岩浪澤のこゝにもありけり。しはし川のへに休らひて、

おかしない

又鬼の祠

月祭り

けふいくか日をふる雨にやま川のいはなみたかく音聞ゆなり。

紫芋形したる、石のみかたの大なるを石神とし、もかさをいのるかたてり。高橋をわたりて笑内といふやかたのありけり。松前の西なる磯つたひに、可笑内といふが、江差の港に近くもありし。かく、おなし名どもの多かる、何ない、かないてふ内は、もと澤てふことをいふ蝦夷の辭にして、もとも、むかしは住つらんかし。伏蔭のやかたをよそに、中嶋金兵衞といふもとに休らひて、山ひとつ越れば根子てふやかたあり。この村はみな萬多耆とて、なべて冬かりをする獵人の宿、軒をつらねたり。この又鬼の長か家に傳ふ、卷物といふをひめり。彦火火出見尊より遠つみおやを引もて、それらがつかふ山辭のうちに、得ものゝ肉を幸肉といひ、米を艸の實といひ、あるは、蝦夷詞もいと多し。佐藤利右衞門といふ、地ぬしのもとに宿つけり。ことに國に庄屋ちふことを、こゝには肝入りといひ、地主は、きもいりの次なる村長をいふなり。こよひの月を祭るとて、軒端に棚をゆひあけ、新菜、瓜の葉にことしよねを盛り、稻穗を三ふさをとりそへ神酒をさゝげて、みとしの神をいはふなるためしを、こよひの、月よみの神祭るにとりませてせり。

手向つるわさほのかつら軒ことにかゝるこよひの月のくまなさ。

童の群れ來れは、りうごう、しとき、なにくれと、くだものとらせて更たり。

銀山滯在　米內澤村　楢岡氏上祖

十六日。こゝをたち萱艸のやかたをへて、荒瀨のやかたをへて銀山のやかたにいたり、舘岡喜太郎といふ、相知たりけるに泊る。こゝに四五日、人々とかたらひて日を經たり。

廿二日。くらきより出て、水無の舟にあまたの人さともにうちのりて、大蛇岬、赤熊など、おやうきふち瀨をからくして、米內澤の、けふの市路にいたる。此里に栖る楢岡なにかしは、嘉成右馬頭重盛に仕へて惣之五郎と鬪へたりし。重盛の父常陸入道泰淸とて、功ありし人たり。右馬頭重盛うち死の後より、上祖奈良岡惣ノ五郎光豊の、米內澤の縣にすめりとなん。あるし、一ッの箱のうちよりとうたして見せられける、ふるきふみとものうちに、

「此度九戸左近將監政實依征伐蒲生忠三郞氏鄕爲先手來八月二日及惣責之條仙乏筋者因遠近三人任軍役令出陣可有忠勤也仍如件

天正十七年　七月朔日

秀　吉　花押

小笠原右衞門殿

「態以使者申進候今度同氏小次郎働候之刻貴殿御介成故首尾爲合候儀初陣之仕合貴邊御恩候一族之大慶(マヽ)勝斗候書向驗迄葦毛馬進之置候　恐々謹言

五月晦日　松橋形部少輔

美香幹乃峯路臂

美香幣乃寮路臂

盛　光　花押

奈良岡惣五郎様」

あるは、城介實季書翰なとありき。はた、安東なにかしの家につたへたるとて、

明後日者奥劦へ下り合戰之儀は衣河に而之事斯は松前方へ指て趣可申哉と相心得仕度可被致候　頓首

閏四月二日　　義　經

武藏坊江」

はた、銀山の里なる椙埜なにかしのもとに、源三位賴政の手にて書ける念佛德失義といふ册子の、むかしありたりしなと語りぬ。此市人の皈るなかに、銀山の三女とて、母ひとりにけうをつくす女の宿りつるちか隣なれは、かれに、ことつてせり。雨のふり來れば、雨つゝみして川井の村につきたり。

川井村

のちの葉月の四日。このやかたにすめる加藤なにかしにいさなはれて、やかたのしりの小

薄井村

川より舟出して、大河にさし出て川井の村を見さく。舟とく渡りて七倉山、あるは天神の森のあたり、はや梢けしきはみて、秋の色かつ見へたり。薄井のやかたにやはらついて、村長秋林なにかしのもとにかたらひて、日もかたふきぬ。此宿の砌に、朱の鷄栖の立たり。八船豐受媛を齋ふ。

　時もいまぬさと手酬む色ふかく秋のはやしに染るもみち葉。

かくてくれたり。

七倉の天神

連理の銀杏

五日。二鰤のやかたに近きところに舟つけておりぬ。七倉の山のそひらに在る、坊壽といふほとりに、木々のいやふかきこの森に五舍とて、あみた佛、藥師、觀音、せいし、地藏のいつはしらを、神とし、佛ともしてあかめいはふ。鳥居のあり。ひだんの谷かげに、連理の銀杏の大木あり。亦、八尋めくる一もとの大銀杏、なへて三もとそありける。この一本を本孀木といひて、乳ふさのたれて、下つ枝には、をのれ／＼がねきことして紙をひきむすひ、あるは乳袋てふものを、しら布して縫ひて、米と錢とを入れてつらね掛たるは、乳汁とほしき女のいのりとなん。枝をつらねたる雄木は七尋をめくり、雌木を妾にたぐふ。これは五尋をめくれり。大なるもとつ枝の梁のごとく、こと木にわたれり。此したつかたをせくごまり、石室のありけるにまうづる。こゝにいたれる人、親子、はらからなと、つらなれる枝の雄元

切石の潮井

のすかたしたれば、面うちそむけなとしたるもおかし。童、おち栗ひろひ休らひて、ふたゝび棹さし濟して、飛來峯のきしべ近う見やり、切石のやかたになりて、潮の井のありけるを尋れは、七折山（たなをりやま）の麓、大倉といふ所に筒井あり。これなん空海のしめしたまふのよしを、ところ人のいひ傳へり。われ見し、美濃の國なにかしの郡篁筧の里の邊に、源三位賴政の齋ひ給ふ宮ところのかたはらにも、潮みつ井あり。或、甲斐の國にしほの山あり。みちのくには海士ならで、山賤のくむと、大潮の里の名にいひ流して人みな知れゝど、かゝる山陰にあらんものとはおもひきや。もろこしに、いはゆる井鹽、地鹽のたくひにして、味ひは光明鹽にひとしかりなん。此汝井のあたり、やゝけしきたつ梢の色、風情ことに見つゝありて、

　影うつる紅葉はいくちしほの井の底もしくかにからにしきして。

兜の明神

林つたひに兜の明神にまうづ。次郎泰衡ぬきをさめ、鎧は槻木村の神社にをさめ、贄の柵にいたりて、しのひかくろひてんとほりせし身を、河田こゝろかはりして、あか君とたのみし世もありつるぬしを、うちとりしころよりありつといひ、はた河水に流れ寄り來しを、あらかひわかちて、むかしをさめ、神と祭ひ（いは）しとも傳へり。義經記に、かふとの明神、よろひの明神とありつるは、こゝを書けるにや。そのふみは、最上路なとのやうにもおもはれたり。此社の兜は、陸奧のかなたくみ、五德明甲を作りなせしものゝ家たる後にて、宗次の弟子の大

切石と槻木

一入道か、天喜のころほひ作りたりし、かねよき器にして、あたへたふとく、ちゝのこかねにかふとか。寛政のとし、くにのかみにこれをたてまつれば、そのかへりことして、社に、よねあまたを寄せさせたまひ、はた近きとし、兜社と君か手にて額かいて奉り給ふとなん。この切石はもともふりにし里にて、遠き世には嫁澤（よめさは）といひ、なかむかしには船泊の宿といひて、村はしの處に、やかたのはつか斗在しか、今し世となりては、七居山（ななをりやま）のほとりに石工（きりいし）の業すれば、村を切石ともはら呼び、神をも吉利石明神ととなへ奉るなりと、老たる人の語れり。村長なる、工藤名左衛門といふやとにしはし休らひ、舟渡りして田畠の路をつたひ、鎧の明神の杜にいたる。冑は、稗井の村なるうはそこ泉光院か家に在つるを、火のためにうしなへるとも、盗人のとりいにしとも、人の物語に聞へたり。社のかたはらに、大なる槻の本ッ樹（き）はくちはてて、株（くひせ）おほらかに、ひこばへの生ひ茂れり。うべ、いにしへこゝに、槻の木てふ村のありたりしことこそ、しられたれ。いまは田の字、畑の字となりて殘れり。ぬさとり奉れは、石の鎧を作りてかんさねとしたり。かくてこと路に出れは、蓼藍の花の、稲田、豆生（まめふ）の中に、紅のふりはへて見へたり。黍草子、狗尾草ともいひ、ゑのこくさてふものを、こゝの畑作りは、もはら白蛇と、から言葉にいへるもあやし。このわけ行あたりは、はだ芒いや生ひたる野良にして、五六とほしき家とものありしといふ。

薄井村

そのいにしへは薄（すすき）の里といひしを、梅

津なにかしのひらき、田佃りもあまた住つきて、薄井と今の村の名におへりと、語もて行て、比井野の村の近づいて寺あり。むかし十王堂のありたりし、それを大平山長谷寺とて、眞言の僧侶のすみき。慶安のとしに天德寺の十一世　（マヽ）和尙を開山とし、天神の杜も近となりなれば、天神山清德寺と、天德の二の文字をわかつに叶ひ、山の名、寺の名とかい改て、宗洞の家とはなれり。寛永八とせの春のころ、西江道人筆記せられたりし碑は、門に入て弓手の方にたてり。石の面の磨滅て、よみもときかたかりしところ〳〵そ多かりける。

梅津彰德碑

維寛永辛未之春一部長左衞門尉家次踵門而告貧道曰羽州比井野開發之功甚大矣願得師之文刻諸石而永爲不朽貧道呵云咄哉儞出去令時之爲人臣者惣似這般（マヽ）、後無時稅斂無度辟土地而樹功府以涯忠便曰我能事君辟土地充庫財功不浪施（マヽ）、苦屈古人云今之所謂良臣者古之所謂民賊也（マヽ）、哉斯言吾聞上古之爲人臣也憂則先民而憂樂則復民而樂思民之有溺者由己溺之也思民之飢者由己飢之也是以與民同飢寒與民等苦樂儞不聞也禹稷當平卅三過其門而不入其急如是也豈可與儞輩同日而（マヽ）、曰豈得以隣有（マヽ）、皃而遂己之順花他家有佞臣自家之忠士乎其名雖同其功各異請詳察焉貧道曰儞之辟土地其志何如儞之主綠并成功之始末委悉與我說曰我是大平之主綠平民之末葉也爲人好辟土地之道（マヽ）、塗凡見廣野大澤輙規度指盡耕犂之地一得仁君而欲施成功而已也爾則梅津苗裔憲忠高弟主馬亮政景性寛仁而有大度常懷　世之志　　國君秋田少

將好其風操而以政事委焉政景既執國家之柄以公滅私垂惠布政我謁門而伸素志因（マヽ）、以司農擧申午春以勸農故到於山山之陽有荒原號比井野其境任而其地美矣我以狀聞政景欣然遂發倉粟散庫財以養衆力之施功於是（マヽ）、作而盡思勤力而勞心折其地之可耕墾黠其水之可（マヽ）、灌築鑿決排計盡功積遂歷三寒暑而成矣加旃封疆之內墾辟之地不可勝計矣所以處々其田美而多家其食足而有餘於之州民益富國家大興豈曰小補之乎古云富國大司農其斯之謂與輒揮毫而勤其所說以爲諸序其辨曰

洪荒之世　天下不知　一草一水　有溺有飢
聖人迭興　漸次除治　二（マヽ）、沒跡　萬靈展眉
九穗競秀　十蓂鬪奇　祥可浮浮　瑞氣（マヽ）、、
寒暑迁謝　世道陵夷　野有餓莩　處無常資
南北泣岐　廣黑悲絲　時維我國　立太平基
量邦當寸　補箇大司　大興田宅　無地不苗
平彼大野　渺而無涯　奉奇（マヽ）、溝　靈塼怪堤
流虹諸山　浮龍迴崖　引水之設　既灌之施
機巧八神　功出慮知　桑而沐雨　飄以梳颸

戴星而往　佩月而回　三嘆霜葉　九月秀芝
畇畇原濕　靡有(マヽ)丶遺　經界井地　清洫畛畦
盡美盡善　可象可規　則地之利　察天之時
田無妖孽　只無亡餓　久旱無侵　濟水無壞
合穎千秋　連蕚萬斯　是盡膏澤　涵億世黎
不朽功名　藐永劫焉

旹寛永八年辛未孟春良辰
太平山住菴僧西江道人謹書

墓碑高八尺三寸、亘三尺六寸、厚一尺六寸。

清德寺を出て屋戸のあるし秋元なにかし、加藤なにかし、かれこれ、よたり、いつたりかたりつつ薄井に來れば、ともし火とれり。

誰か袖も露そこほるゝ秋風になひくすゝきの里のゆふくれ。

夕附夜のみちおもしろく宿に皈りつく。

九月七日河井村より

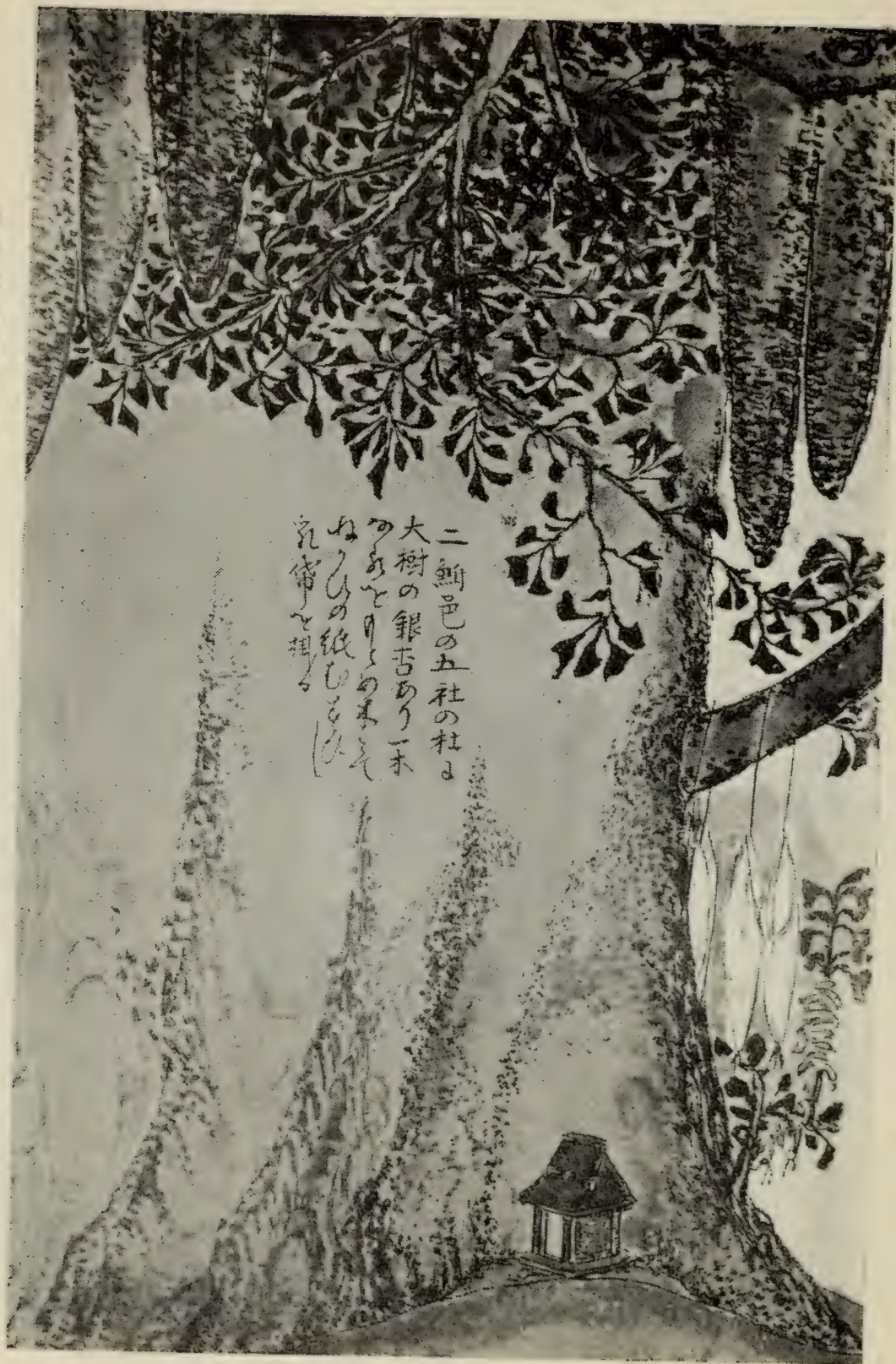
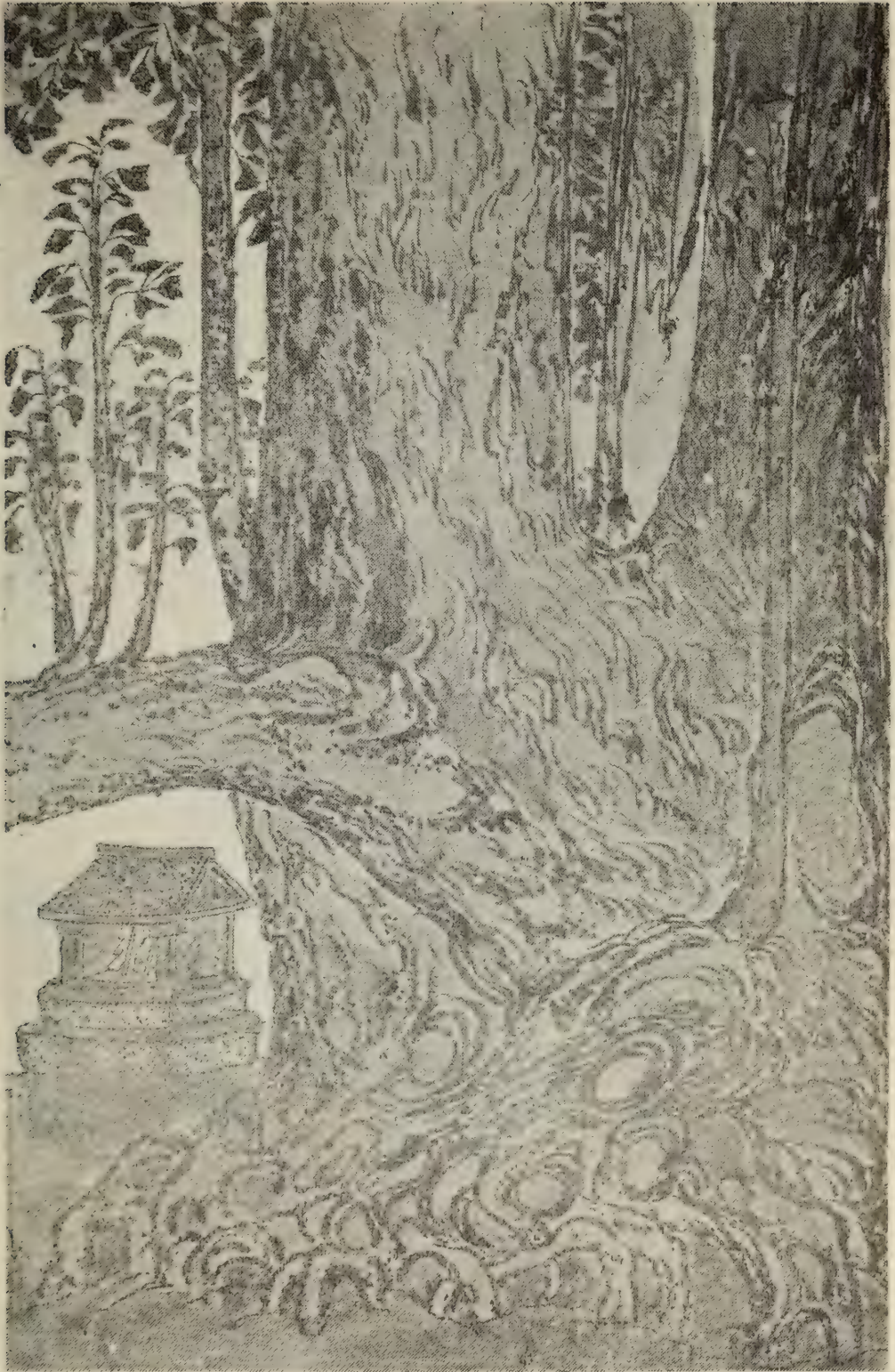
山本の郡阿仁の庄にありて、露熊山の赤葉、大澤山の黄葉、あるは岩波澤なとの紅葉の眞盛のよし。見まほしけれど、一とせの秋そのあたりわけ見しくま〳〵なれば、こたひは、こと山の丹葉も見てんと、白乳山にのぼり田代山も分なんと、なか月七日斗朝川濟りて、出こし河井のやかたを見さく。羽根山のやかたを經て、澤羽立(はたち)といふやかたを弓手に見なして、陰(かげ)の澤といふ山坂をのほり、行〳〵て七段坂といふあり。

七段坂

むかし琵琶法師が、みちゆきぶりのくちすさひたるが、七段かたりしたれば、やゝ坂もはてつといふ童の物語あり。白地山にのほり得て、いくそばくならん、大峽小峽、みな杉のむらたちふかゝりけるなかより、紅葉のこきも、うすきも、いまだ時雨まつなと、えもいひしらし。杜良(もりよし)か嶽は、雪はつかはかりふりそめ、陸奥の栗駒山にや、岩手山にや、いたゝきの雪のしら〳〵と遠う、森吉の弓手の尾よりあらはれたり。人ごとにとへど、こたへぬものから、

　くちなしに染る梢の色わきてそれといはての山のしら雪。

田代の村

空のうちくもりて、雨やふりこん、とく〳〵といへば、あないをさい立て田代の山里になりぬ。こゝに布染るやの、松橋なにかしのもとに宿つきたり。このやかたのひんかしには名左衞門村、西に七右衞門村、中村、八兵衞村、治五右衞門村、高屋鋪なと、やかた〳〵ならびて山田を作り、酌子、木履、まさのそぎたをいだし、炭やきをして、世のたつきとせる。屋の二(ま)

二鯆邑の五社の杜よ
大樹の銀杏あり一本
のあへとりしの木そて
ねうしの紙むすひ
乳備へ揖る

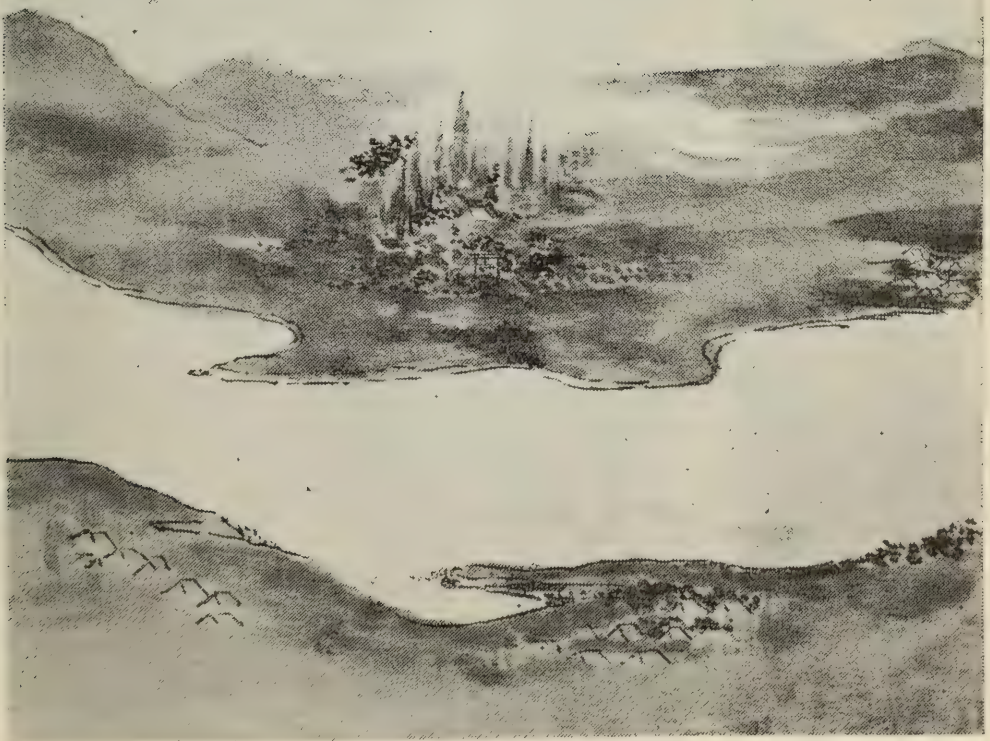
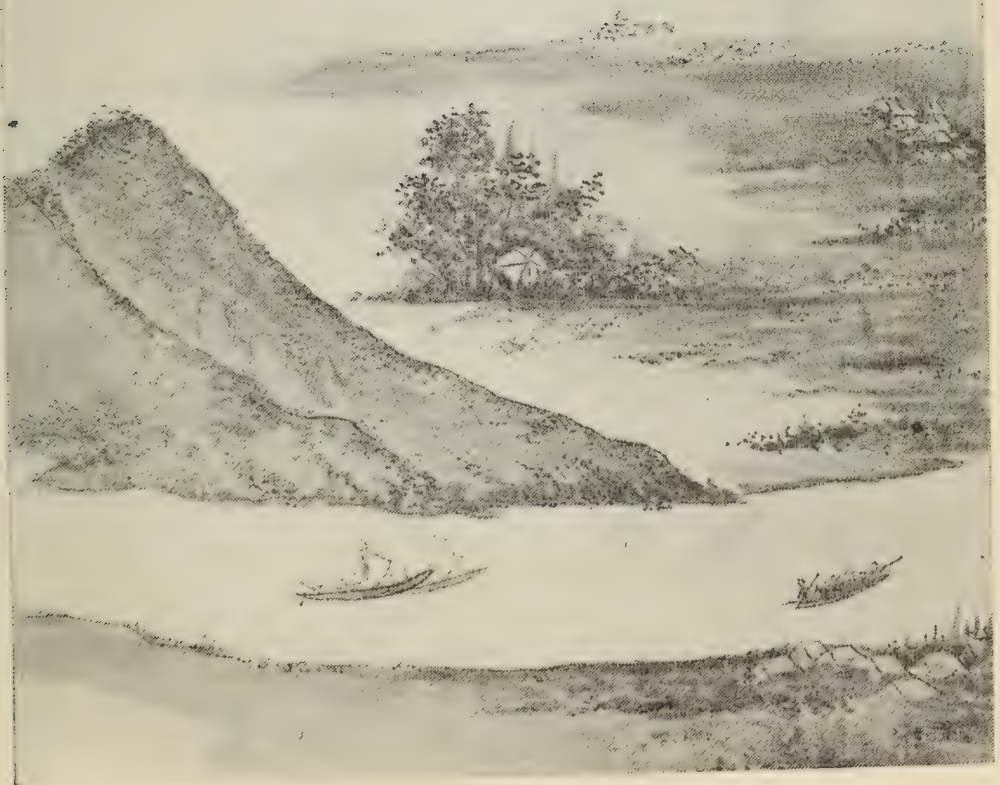
五社の森ハ　薄井村と
北井埜邑との川のむかひ
二鯽村にあり

切石村の井臨

宇須為の専明神の杜を
吉利香斯の渡より
見やりゑかく

雁木ばしご

方言の色々

精進潟

階（天註――二階を間下（まげ）てふこと津輕路にてもはらいふ。さりければ、その近き山里など此出羽にてもいへり。）てふところには、雁木階子とて、蝦夷人の二キガリにことならぬものをかけ、ましらの木傳ふごとくのほりぬ。かねほりらか、しきはしこてふものにして、方の柱に、つまかゝりせしのみ。あるしの姨、茶煎しいでて、あつくは、うめ申へてやといふ。さまし飲むべしといへば、いかにとおもへるけしきあり。このあたりにては、濃き薄しとはさらにもいはで、うすし厚しとそいふめる。わは、熱湯ならんとおもひさりたりしを、女のあやしめり。くにうどの言葉聞しらさればいみしう、よけなる詞すら、はと、うちわらふたくひこそ多けれ。まおとことは、みそか男にあらす。わかせし眞男をさしていひ、こはいとは困じたることをいひ、かはゆいとは、はづかしきことをいひて、顏榮し、目榮しのたぐひにして、さしむかひかたきさまをいひて、面榮しといへらん辭にこそひとしからめ。

八日。雨のいたく降り霙かちにして、いさゝかもはれやらねば、出たゝで、おなし宿にかたりくらしゐたり。

九日。高きにのほらんとて、駒木堆をめてに見なし、分來りしふる潟を路のべに見過て、鳥居の澤に入て新潟をのそめば、四方の山は、杉檜たちしけきかもとに、こゝらの梢の色を盡して、もみちぬ。かな木てふ木々は、わきていろこく、みなおしなへて影おちて、さばかり

大瀧横瀧

田代より薄井へ

紅葉よし

廣く深かりける底の、こひちまて錦しくかさ、うち見やられたり。井守のほかは、さらにさゝやかのいをたにすまねは、精進かたともいひ、はた、いにしへ法師の作りしなせし水とて、ほうしかたともいふ名のありとなん。いとゞ清げにこの水落なかれ、岩つらにかゝり瀧となりぬ。

もみいつる木々のくまはによる波のにしきをたゝむ秋の山風。

しはしありて此飯さ、道よりめてに大瀧よこ瀧とて、おもしろきところありとて、あるしのいさなへるにまかせていたれば、うへもこゝしき水のおちく。此瀧の末にも、雄瀧といふかありて小懸川におち、二鮒に出つなと語りぬ。とはかりありて、やかたのしりなる不動尊にまうてて、日はしたになれば、けふもおなしぬしのもとに泊る。

十日。あるし松橋を別れて、札の木てふ山路をゆみてに入て、堀皆なと過て、鍵懸(かんかけ)の大ぶなの木あり。かの懸想(けそう)人のうらひを、こゝにもせり。板落し、舟木おとしともいふあたりの紅葉、いふへうあらずおもしろし。ろくろあげ山を經て、かや野坂に休らひ、見やる艶いとよし。山葵堆(せんのうたい)とて村あり。めてに山をのそみて、はたひろ斗の岩あり。この巖の末の紅葉、夕陽まはゆきまで染たり。冬はこゝに、あをさるてふ。これなん山羊にして、あをしゝといひ、かもしゝ、かもしか、にく、くらしゝ、いはしゝ、いはとりなとそ、いふなるものにこそあな

れ。この岩、ものいへばこたふ。いはゆる鸚鵡石ならん。雌雄瀧、千代森など、赤葉いろいろに染ませてことに、うち見過かたき山路なり。山川の流を左に長瀬をつたひ、猿渕、釣橋おとしなど木を渡せるさま、みちのおくの浦、うてつの崎に至らん四枚橋にことならじ。海と川との、けしきかはれるのみなり。出戸あけといふところに一家あり。はた、奥あげといふ山の木の中に、三の家あるてふ。分行みちの中に、大臼ひとつを、あら作りにしてまろばしたるに、戯れ歌かいつく。

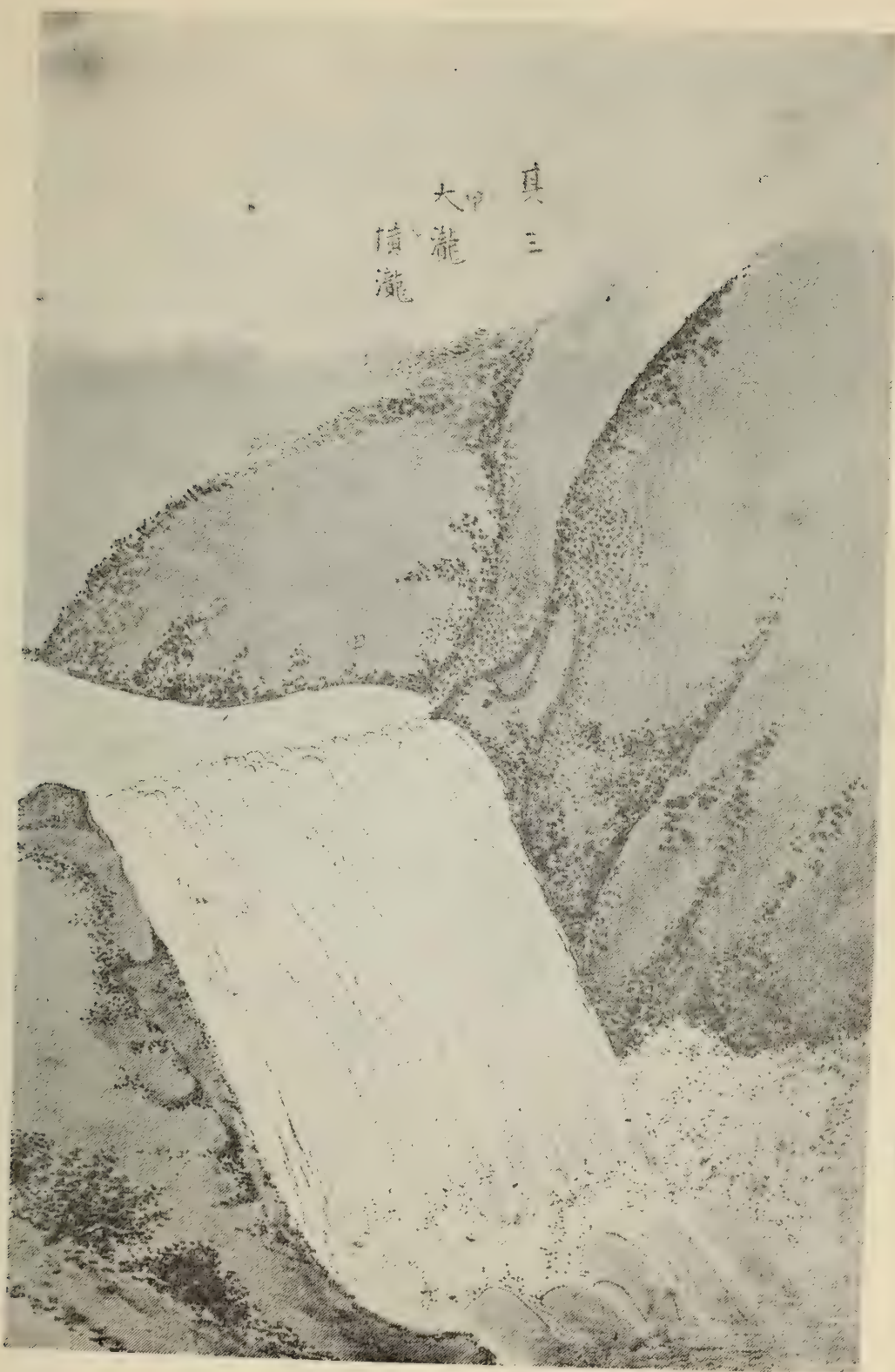
　いかにしてこのひともとのうすもみちことやまは濃く色つきぬれと。

横子内（よこしない）といふ岨つたひをして、めてに伏籠の田づらを見おろし、はしご坂を見やり、戸ひら石を見つゝ弓手にふりあふけば、琵石、小瀧をめてに、提の口などを見つゝ鬼神の村を見やり、かの鬼鹿毛か嘶の澤の瀧も、いまを眞盛に紅葉色ふかし。小懸村にいたり二艘の村に出て舟渡りして薄井になりて、秋林のもとにつきたり。」

其一

真三
大瀧
横瀧

美香幹乃塁路傍

賀武吾波斯古

贊能辭賀樂美

此册子の名を「贊の柵」とつけつるゆへは、その事もはらあけたれは、しかいふ。やまくちに「扇田の物語」「達子の森の圖（かた）」「伊達治郎泰衡の墳」「人の栖家、あるは祝聴陶、ふみものなとほりしものかたり」「松峯のやま〳〵」「驛路の鐸の物語」「しら瀧」「井殿冠者安藤太郎良宗のふるあとをしるす。

扇田にて
六月の朔日
移託の女巫

扇田の名の
由來

微南通企の朔。今朝は氷室の祝ひして、誰か屋戶もみな氷餅くて、齒固てふためしそしたりける。移託の盲（めしゐ）の女巫（めかんなき）の、外（と）にたちふたかりて「さなからみうちの御祈禱には、さうふの鬼か玉をとる、孔雀さんにてきやうさする、佛法の山はしげければ、さんざん石は巖となる、莓のむすまて苔の松は、八千代をかけて君そまします。やんらめでたや。」と、頸に挂たる長すゞをすり鳴らして唱るに、うちまきとらすれは、又門に、こといたこの杖つきいたりて、「沖の鷗の寄り來るは、こんれも戎のはからひか。」と唱ふ。戎楫といふもの也。（天註—「委多巨は移託みこにて、よりましのたぐひ也。蛭兒の神、あるは事代主の御神に仕へ奉る神子をもととして、委多加なといふくにふりことかはれとも、衣美須加持の名そありける。」）

二日。武田のもとを出たつ。法王山十却院正覺寺に、源九郞義經の高館にもたまひし御佛とて、みたけひとさかはかりなる正觀音ほさちを、砌の堂にすへ奉る。ゆへ尙ありとなん。（天註—十却院に紀主羅師の一枚起請文を、辨連社貢定上人、もろこしへ渡らんのころ書給ふたるにありき。）化柳といふ朽木あり、千葉上總之介常正か古墓（ふるつか）のよし。味酒の、三輪のおほん御神籬をうつし齋ふ祠のしりなる處に、辨扇（あふぎ）に似たる稻田の

あり、それに要房とて小田のそひて、三百苅の稅(いね)を佃るといふ。さりけれは、この里を扇田の名におへる事しかくとなん。（天註――「檜山の郷に近く比内に在る大舘、仁井田、扇田などおなし名あり。いづらか前なる處ならん。扇田の名のあり事や佐竹にたくふにや。おもふに、佐竹の屋敷は名越道の北、妙本寺の東の山に五本骨の扇のことくなる疇あり。その下を秀義が舊宅といふと新編鎌倉志に見へたり。此扇田も佐竹のしるよしのしゐしにやあらんかし。亦いにしへ人のかれて墾りしにや。その盤目（かなめの形まてありけるも、世にめつらしかりき。二井田、近き世まで新井田、仁井田なとかいなしたりけるよし。」）小田の中路はるくと行ば、二井田のやかたもやゝ近く見やられたり。むつもゝとせのむかし、厚樫山、無根藤なとの軍やふれて、陸奥の

藤原泰衡

押領使藤原朝臣泰衡おちかくろひて、蝦夷かちしまにや渡らまく出羽の國にいたりて、世々相たのむの郎徒、贄の柵に栖めるをたつねとひしかは、その郎徒なる河田の治郞なりけるもの、さかなう心かはりして泰衡の公をとりかくませて、やかてうちとりつ。この頸をわれ二品にたてまつらん、さくくとて、あゆみとうする馬にむちして、はせまゐりたりしとか。文治四年戊申九月の二日のことゝなん。けふも二日にて、在りし世を偲ぶあまりに、

たのみつるその木のもとも吹風のあらきにつゆの身やけたれけむ。

西木戸塋

その墳とて、みちのほとりの田の中の、出向(いでむかひ)といふ處のちいさき杜に、猪心、山櫻の生ひましり、小松のふたもとに鷄居あらそひたてり。こは、花の樹好きたまふ塚のぬしとて、花咲く樹のみ殖て手酬(たむけ)奉り、（天註――「此あたりに英といふ村のむかしありたるよし。いづことゝへと、さらに知る人なけん。」）ところ人は、太郎國衡のことにてうたれたりけるとおもふにや、吾れも人も西木戸塋といひて、田の神とあかめまつ

贄の柵趾

釋迦内考

泰衡の妻

る。うちひさす都にすめる伊藤善韶の書けるふみはあれど、いしぶみいまだならすして、たゝ、ましろけなる石の大なるを立たり。伊達次郎泰衡のうたれたりし日は、なか月の二日ながら、こゝには九月三日にかんわざをし、やよひの三日にも、みわすへまつるなど、田草採る女どものつはらに語りぬ。二井田は贄田のゆへにや。贄の柵の址や、此あたりをいふらん。はた、八幡の神籬をこそ古舘といへれ、さは、そのところをやいひつらんかし。遠き昔はこゝに牲をやつなぎけん、贄殿やありけん。はた、近きあたりに釋迦内といふやかたありて、道崇入道のをんなめ、韓絲姫のなきたまをこゝにも祭りたれは、釋迦佛をすへ、寺建給ふかゆへ、村の名、處の名も斯夜佉寧爲といふといへど、釋迦内の名はところ〴〵に聞へたり。司野儞甫委はもと蝦夷の辭にして、奈以は澤てふことをいへり。おもふに、おほむかし、そこは坂合部連贄宿禰のしりけんところにや。贄といふ名のうち聞へ、阪合、釋迦内の相似たれは、ふと、ひがことをおもひあはせて行〳〵、ひとり、はとうちわらひて、里なかの、やはたのみやところにぬさとり、二井田のやかたもやはら過て、高邑といふこなたの、白洲穴といふ草のいや高う茂りたるところにたちて、巖松山溫泉寺を田づらに見わたして、やゝ暑さ忘るゝはかり時うつれば、八角坂にかゝりて、むかしは、いくさの箭庭たりし陣の越も見めぐり、寺埼村にいたり、五輪堆に來いたりぬ。こゝに、伊達治郎泰衡の嬬、あかつまの行衞をし

たひ來て、篠原の中に身をかくろひて二日三日ありつるほどに、泰衡うたれしと聞より、のんごに、つるぎつきたてて身まかれりとなん語つたふ。そのしるしとて、長谷部藤右衛門といふか家の苑に、五倫石のくたけちりまろびうせて、三殘りたるを層ねて、堂を作りてをさめ、奥津城とそせりける。伊達迎の田の神とひとしう、やよひの三日、なか月の三日には、御酒、粢をさゝげて祀るといふ。此南の山ぐろに、八幡殿の舘址とて神籬あり。はた、うちこのおほん神を齋ふ神門たてり。前田といふ村に來けり。こゝにも桂清水とて、その木のもとによき寒泉涌出る事、南部路に均う觀音薩垂（マヽ）のいはれあり。（天註――「桂清水は陸奥の鹿角郡浄法寺の外に、毛馬内の神田村、赤田名部の邊もあり。稲搗唄に、「桂清水は戀の水四十男か若くなる。」多南夫のその村にて、もはらうたふ。」）

　うつし見る月のかつらのかけきよくむすはぬ水も涼しかりけり。

大開泊り

杉澤の村のほとり、小坂の路のかたはらなる處に小祠あり。長き石をいくつも立ならへて瘡神と申、品累なる草八幡のごとく、身の瘡いやし給ふ御神とて人まうでぬ。大子内の村を經て、大披といふ村になりてやゝ日もくれかゝれは、宿こひて泊りたり。蚤蚊のいと多くいぶせく、一夜のいもやすからず。いまた外はくらきしげ山のとかげに、鵄鳥の卜歎わたるも淋しう聞つゝ起出たり。

はぶかけの出土品

三日。流に手あらひ、つとめてのくひものすらこゝちよからねば、いさゝかは、ものして出

たちぬ。あない、手を折ていふ。はやはたとせのむかしならん、こゝの破布倘開(はぶかけ)といふところあり、（天註――坡（はぶ）とは、あまそき、はまひさしのごとく、いや高き處をさしていふ。）そこを曳欠河(ひつかけ)とて、於差奈以(おさない)の澤を源として流れ來る、そのはぶかけの高岸の、水のためにくづれ落たる中に、家居二三そありける。こは、いくはくのとしをか、つちのうちに埋れたりけんと、そこに人の栖家の在りたらんを語り傳へても、知りきといふ人も侍らじ。そのこほれやの、やばらの板のいと厚く、黒みたる斗にてよけなれば、取りつかふとてとりつれば粟、稗、筆、硯、甕、へひぢ、こばちなど出たる中に、板に彫たるみほとけ、あるは、木の沓のありけるかいと大にして、すもをさのふみものにひとしう。これに、したうつのごとく右あり、左ありて、いにしへのふり見るにたれり。いまもわらんづに、左右を、このくにうどの作りて、さしはくなどかたりもて、そのもとにつきたりしかば、聞しごと、うべも水にいざなはれたりし處とおぼしくて、ところ〳〵、小山のやうにひき連りて塊あり。今も年ふる良材(みやぎ)を穿て、そぎたとも、なにくれとしてけり。その岸に臨てうち見れば、木の根の大きやかなるか川くまにあらはれ、この上なる處にいとひろき野のありて、行かふ人のふめは、しと〳〵と鳴りぬ。いまた土の底には、屋形ともの埋て倘あらんと語り分るに、またぶりを杖とすがりて、年いやたかき、耳うとからぬか來かゝりていふ。長享、延徳のむかしにてやありつらん、此あたりにかね山ほりがありて、こゝらの人の住た

出川村まで

がんくら餅
ぐわつたら餅

りしといふものがたりを、わか親なるものに傳へしか、それらが宿ともにてやあらんづらんと、杖を曳とゝめ、あせおしのこひていへり。あないにも、老らくにも別て、小袴の村にいたる。このあたりの詞に、ふどしを己波加麼といふなれば、ことなるやかたの名なりと、ひとりほゝゑみて行末をとへば、唄うたひ草苅る男の、小褌破れて、ふぐり出河といふ村の、近となりに在りと、うち戯れていふを聞つゝ、われも人も、はといひて過る。弓手に地藏山、亦の名を庚申山といふあり。青見の澤、桔梗か堆とて、秋はことにおもしろかりけるところありとし聞けど、うらふれにこゝちよからねば、水こひ休らひて引懸川を渡り、人のしるべせし、櫃崎村へ行みちふみたがへて、聞つるその出川のやかたにつきて、又水こひのみて休らふほとに、

夏艸をわけいて河に日はくれぬ水ひとむすひふたむすひして。

やどを、こゝにもとめたり。

四日。うらふれにや、あつさにいよゝたへず。こゝちよからねばいでたゝす、屋戸のあるじの、病とひ來る人多かる。そのきうぞうのもとよりと聞へて、あるしへ贈りたる賀牟具良母地、具和ッ多羅毛知ちふものをいだして、ひたに進めぬ。がんくら餅は鍋子摺といひ、なべすりもち、ねまりもちなど、數〳〵の名だゝる牡丹餅、萩の餅てふもの也。ぐわつたらもちは、

つねのましろのもち、眞餅ちふものをこそ、しかいへり。

八日。大子内の村の長とひ來て、ものかたりてけるは、いにし月の二十五日の大雨に、三層瀧より岡啄や出つらん。その行たるあとは、大なる石まろひ、みや木ふしなびき、根こしおし流れたるなと。近きとしにかゝる洪水ありつることは、八十になる人すらしらしなと。」大虵をさしてもはら委波婆美、あるはいふ宇波婆美といひ、みちのくに、いではの辭なとは、叫加馬眉とそいふめる。おもふに、素盞鳴尊すなはち天蠅斫の劔をもて大蛇を斬給ふこと、古語拾遺にいへる。素盞鳴尊、あめより出雲の國の簸の川上にくたりまして、あめの十握のみつるぎをもて、八岐の遠呂地を斬り給ふ。そのみつるぎの名を、天の羽羽斬といふ。いま石上のみやところに在りと。ふることと葉に、をろちをはゞといふ。をろちを斬るのこゝろとなん。さりければ、うはゞみ、いはばみ、おかはみ、みなこれ、おほはゞみてふ言葉の、うつりたるならんかし。

十一日。尙あつさ避ぎてんと、五六日、おなしあるし左藤のもとに在りつるほとに、ふみしてとふらひしちかとなりの村長、櫃埼の麻呂岡定政のもとより、ふみの返事にこめて、「案山子なる身とはおもへと山畑のあるしと人にとはるゝそうき」と、いひおこせたりける詞のこたへして、

贄能辭賀樂美

陸奥押領使藤原朝臣泰衡壟

賛能辭賀樂美

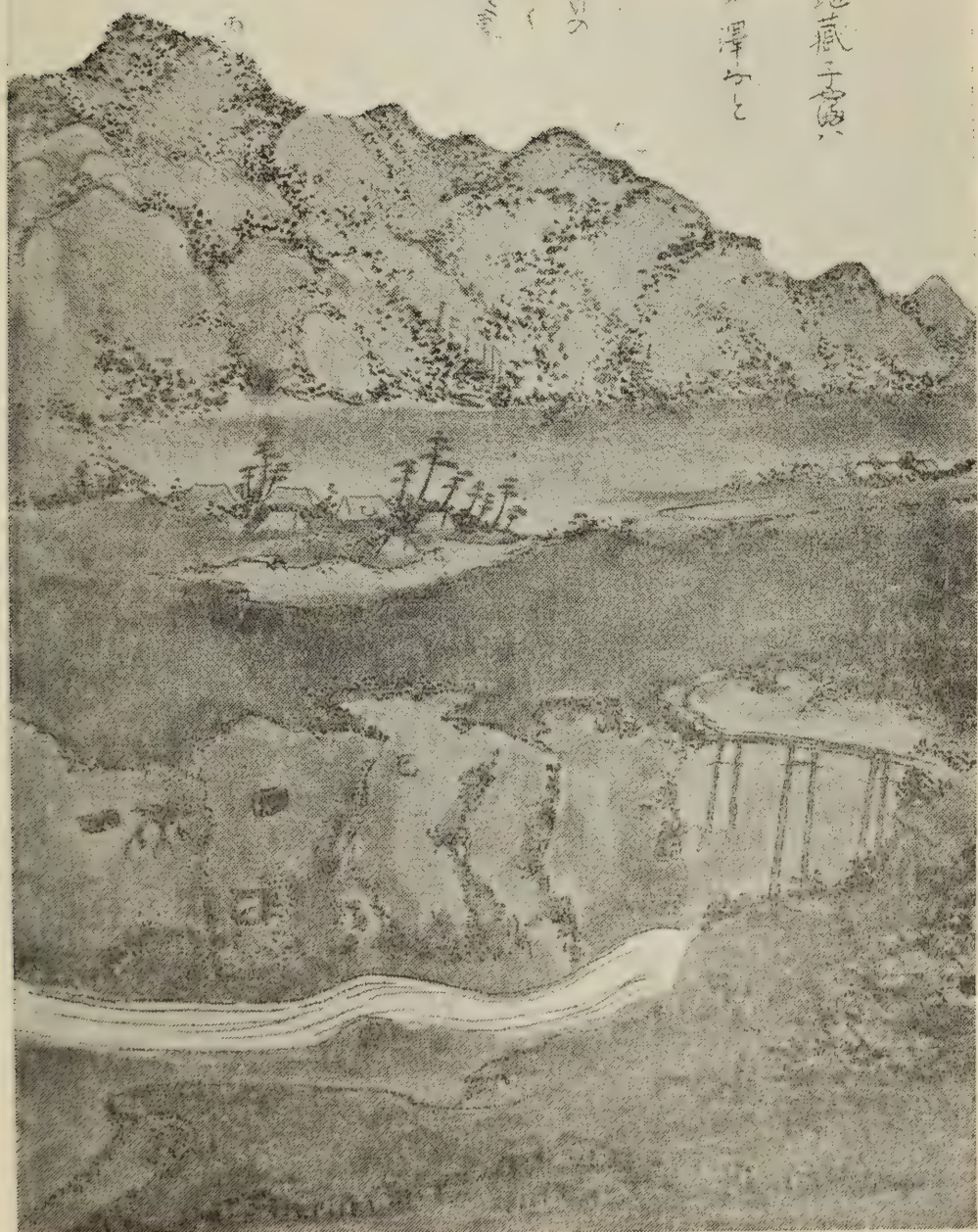
巖松山温泉禪寺を訪ひけり

贄能辭賀樂美

贊能辭賀樂美

下河原遠望

簑掛松

大舘の郷

ことの葉の花のかかしと身をなして世にすむ人や樂しかるらん。

おなし十七日。左藤久五郎かもとをたちて、出川のやかたをさく。行ほどもなう、志太加波良といふやかたをふとて、巳午のあはひに姬箇嶽、寅卯に杜良の峯(たけ)、午未に谷木橋(やぎ)の村なる委刀離(いつとり)やまなと、（天註——「委刀利は蝦夷辭にや、かれ山詞にや、獵人（またぎ）言葉にやあらん。母山（もや）てふ高岳のことく、ところ〳〵にいと多かる名なり。」）をちこちの雲ふかうしてやゝあらはれたり。二井田埜とて、廣き野はらの中を行みちのへに、簑掛松といふあり。この松のすかたは枝葉ふしたれて、蓑うちかけたらんに似たればしかいひしとも、近きとし野火のかゝりて枯たり。あたら松を、むなしくもなしつと行人のいへり。小高きところに山松を殖へつぎて、その跡のしるしとして今も名におへり。亦いふ、泰衡雨のまきれに簑笠着てのかれ、そのみのならん、この松にかけられたりしよしもいひ、淺利與一の、簑挂けたれはしかいふとも、まち〳〵に語る。さと小雨のふり來れば、

雨しのくみのかけ松の在し世をとひてきぬれし身そしられぬる。

みちよこぎれて篠生(しのはへ)といふやかたに出て、米白河の渡りして大舘の里にいと近し。雨をやみたれと、遠かたは白雨すらし。吹むかふ風、さむきまで吹に吹ぬ。

ふしなひく野路のしのはへ風おちてたもとすゝしく渡る舟長。

根木戸といふ村の馬手にある、あらら松原の中に朱の鳥居の立たるは、八船豊受比咩のおほ

獨鈷町

長木山

んみつ籬と灼然く見奉り、うちとの神籬のありけるにぬさとりむけて、やはら大館の郷になりぬ。かの十狐の村なる和田野よりうつせりといふ、鳳凰山玉林寺に阿佐利の家の木主とものありけり。此事すでに、ここと日記にいへり。此寺にたぐふゆへ多し。鬼箇城、立石、天鼓、小鞠合なと名にいふところ〳〵の、近きさかひに在けるとか。（天註――「大館の城はむかし秋田城介實季のはらからなる安東忠治郎實泰の君あるしたりしころ、南部よりめとりて比内御前と聞へたりし。其とき、うじな化して夜ごとに出つ。ある夕つかた比内の方浴したまふに、あやしの男入來けり。かゝることしけ〳〵なれば比内の方、かくと殿に告まひらせらるゝに、くせものござんなれとて短刀をくゝり染の下にかくして、女の湯ひくことくゆあひとのに入りてうかゞふに、うへもへんくゑの來りけるを一刀にさしころし給ふたるとなん。うぢなともいひ、山猫のとし經たるともいひ傳ふ。」）三太刀川てふ流はいつらをやいふらん、ありとのみ聞て、ゆへも處もしらて十狐町といふを過る。淺利世に榮へてけるころには、ふたもゝちあまりのさもらひを、こゝにすへられたりけるよしを、人の耳に在りて語る。そのゆへ、しか獨鈷町の名もありけるものか。いまも足輕のゐたちをこゝら栖せ給ふも、いにしへを捨たまはぬ、公のおほんうつくしみにこそあらめ。里を放れて長樹河を渡る。この水上は栗垣山、あるは腑莉山にて、眞木のしげやまの、津莉の郡を迫めて大峽小峽の嶺わたりし、谷めくりてふかく、山蕗は阿仁山、陀比良山にまさりて莖いと大に長く、葉ひろし。みねかひともいはず、としふる杉のひし〳〵と生ひ立て、千代經し蒼彌白といふ杉の沉を採りて香とし、その音のいや高ければ、飽田榻の名も世にかくばしう、かほり充たりなと人のかたれり。汀にたちて大館のやかたを見さく。一本杉な

初七日山

亂川の亂橋

あきびと留

といふ坂のいさなかやかに、かんやしろともの見へ、こなたには磐神とて、山の尾よりさしのほりたるいはほの、こゝにおほらかに見へたり。行〳〵むかふ獅子守山は、むかし、太笠山にたぐふ妙なる音の聞へしかば、微妙山の名あり。たゝ此麓のみ行やうにおもはれて、板子石邑も過れは、やかて杜のあり。うちとのおほん社を、高やかに御阪を作り齋ひ、金精のあかつかみとて、こゝにも雄元を、ほぐらのうちにさゝやかにたてり。初七日山と、こかね色なる文字して額あり。堂のうちには道崇入道の、弘長のむかし國めぐり給ひしころ、妾韓絲の前のなきたまのために寺をたてて、釋迦牟尼佛のみかたしろを三軀作らせたまひてをさめさせ給ふたるとか。こゝぞそのはしめとて、いまも釋迦内とはいふとなん。亂川といふちいさき流にかけわたせるを、亂橋とそいへる。あの山よりこなたさまは、みな軍のちまたにて、いくさ君の入り亂たる名にや。おなし名の、相模の國にも聞へたり。岸の柳かい分るやうにして、ふみ過たり。（天註――「尾張の國山田の郡の右馬允明長、承久の亂のときとらはれとなり鎌倉へひかれ、義明の見參に入りて湯井か濱にてうたるべかりしを、亂れ橋といふ所にて年來の智音にあひて、戈瀬川のものがたりをせしことなどいふものかたりとも沙石集等にも見へたり。ふるき名の此比内にもありて、近きに鎌倉街道といふかあるもゆかしう、いにしへを偲ぶにあまれり。」）

　山かせに柳のいとのみたれ橋みたれて渡る風の涼しさ。

此河かみは賈人留とて、そのむかしは鎌倉へ往復せし山のかげみちありて、そこに泊りし、ものあき人の貨むさぼりて、これをうむすといひて縊りころせし物語は、みちのくのいは

でのほとりに在りける、朝不見(あさみず)のいはれにひとしかりき。

　亂河みたれし波のつるきさへうちをさまれる御代のしつけさ。

暑さ、たへかたけなれは、日さなかながら、このうまやに宿つきて休らふ。こゝそさかないの里なる。

釋迦内の里

十八日。松峯といふにのほりてんとて、つとめて、夜經宿(よべね)たりし酒殿(さかどの)のあるし作右衛門がもとをたちて、徵妙山實正寺の東なる小坂をおりて、霜内河、大森川なと渡り得てひとりたどる〳〵分れば、雨ばれの山のけしき、いとおもしろし。けらこてふ蓑着たる男の、長串にあまのよさづらをきりさいて、あまたかゝへもて、田畔にこれをさしありく。こは風のなからんことを、みとしの神にいのりけるあがものとなん。去年阿仁の莊にて見たる田鏡といふものなれど、こゝにては稻の鏡、いなかゞみてふ名のありけるも亦おかし。反り葉、はしり穗とて、いなばらみをし、むらぼの出なんころほひなん、ふみ月のはしめ、田づらに立るならはしながら、ことしは月もくはゝりてければ、此水無月に出穗のあれば、かくぞせりける。いなかゞみは禾屈(いなかゞみ)にて、八束穗にしなひ、ゆたかならんことになずらへて、おきつみとしを祝ふためしにてや。みのりたるみとしの穎(かひ)を、こゝの辭(ことは)して屈むとこそいふなれ。田の面に女のたてるを、

稻の鏡

松峯山傳壽院

田草とる處女やよそふいなかゝみいな葉の露の玉をかざして。

とうち戯れて、たどり〱て大森のほとりを過れは、松峯といふやかたあり。こゝよりは麓までもとも路の近けん。妻手に遠う見やられたるは、雌神山、雄神山、尉倚森なとはすがたことに、長木山は遠く、萩箇杜、橋桁、白澤、寺野澤、松原なといふ處をへて、長走のせき屋、陣場邑とてやかたつゞき、それにつらなれるやま〱のみゆ。禊川を渡る。こゝにとなふる「波良避河安南多巨奈黨能譽布己惠加道者乃聲可波迺瀨濃音。」といふひとくさを、神樂唄(うた)にそせりけるとなん。丸木橋あやうくて、

水無月のあつさをよそにはらひ川わたせのなみのかゝる涼しさ。

山にふみ入れは、伊勢のうちとを齋(まつ)る社あり。尙分れば普賢石、草八幡石なとをへて、やはら至れは驗者の寺あり。松峯山傳壽院とて此家世々經たり。としことの卯月八日には祀りして、此みねの不動尊にまうづる人多し。そのころも、木のめもいまださかず、草もしげからねば、たかねによぢ岩群(いはむら)にむれ渡りて、大峯の順逆のことくのほりて、それ〱のをこなひのあれど、かゝるみな月ともなればしからず。遠きむかしは近きさかひのうばそこら、大峯、葛城にいまた入らざるともがら、まづ、さんぐゑ〱をとなへ數理、鈴繫、頭襟、ましこ、ひきしき、あやひ笠に身をよそひたて、獨鈷杖に法螺、錫杖を鳴らして、このみねに入しこと

宇多帝御製

卅二番札所

のありつるよし。山は空海の闢き給ひき。嵯峨の帝のおほんとき、弘仁八とせに兩部金台のみほとけ、なもあみたほとけ、觀音のみかたしろを鑄させ、しろかねをもて、ますみのかゝみを作らせ、御代たひらかに黎民やすけんのおほんいのりのありて、おなしき十三年壬寅の春、左大臣誠公卿、杜良の嶽にわけのぼりてんといたり給ひしかど、雪のいまた深ければこの松峯にのぼり、堂を建て寶あまた寄せ給ひたりしを、文徳の帝の天安のとしのはじめ、やよひの三日の事になん、なへ大にふりて堂舍ゆりこぼれ、山うちくづれて御佛も、みたにの底に埋れて三十の年を經たりけるほどに、宇多の帝の御代寛平三とせにみことのりありて、菅原の道眞卿のおほん手して、「月山大權現」といふ額をかいあらため、月の山の神を齋り、つきよみのみことをいはひて、御製とて、「いやましの光も時に埋れしあらはれ照らせ松峯の月。」となん。かゝるおほみうたのありしより、松峯の月の光も日に增し、としに榮へたり。そのおほん使は出羽郡司小野良實の子、四品良房に給ふ。おなしき七年六月十五日に、ふたゝひ御堂作り成てうつし奉る。手斧はしめより、すなはち小野良房朝臣は奉行し給ひし、となんかいつたへたり。はた後朱雀院の御宇に、平賀の郡なる御嶽山におましませる、鹽湯彥の命の臣卜部大連氏致の末の子にて、滿德長者保昌といふ人、家を出て保昌房と名のりて眞熊埜にこもり、まさしき夢のみさかにあひて西の寺めくりをし、やがて都に皈り

境内處々

のぼりて、觀世音菩薩の卅三の軀(みかたち)を大佛師定長に作らせ、比叡にのぼりて山の阿闍梨敎圓に見へて、此ぼさちの供養をたのみて、あかふる鄕に皈り來て、かのみそまりのみかたしろを、名あるところ〱の山〱にをさめ奉らまくほりして、いではのくぬちに、雄勝、平賀、仙北、河邊、秋田、山本、此六の郡におきてけり。長久のとし、敎圓阿闍梨はる〱と保昌房をとふらひ來りて、いさなひ連てかの觀音の堂建しところ〱に、あざり、みづから歌詠み手酬て西の寺めぐりにたぐへて、つがひ〱をさため、まづ鹽湯彦の神社の近きに在る、溫(ゆ)泉(の)嶺(みね)の白瀧の觀世音をはしめとして、此山は三十二番にあたりて、「我たのむ人松嶺の觀世音世と名とともに御手にもれまし。」となん、今もとなふ。むかしは金台の大日如來をいのりのむねとし、いまは不動明王をいやまひ奉り觀音薩埵(マヽ)もおはしまして、山にくさ〱の物語多けれどはぶきぬ。

つく〱ほうし、なにをうつくしよしとひたに鳴ぬらんと、ふりあふきて、

　　秋をまつみねの木すゑの涼しきはふもとに蟬の聲そしくるゝ。

御坂はる〱とのぼれば、樋に水をおとしたるなといと涼しう見つゝ至れば、坂のかたはらに水の神、觀世音、宇賀の神とて、三のおましあり。やかて堂に入りて不動尊にまうてて、さしいづる弓手の山ぎはの藥師ふちの堂に、よねうつ人あり。やはら坂をさく〱とおりは

出土の古鐸

てて、鷄栖のひんかしの徑に入て幸の神平といふ野原に出て、小高き堆のありけるにのほりてあふき見れは、はるかなる嶺に竅ありてそひへ立たる石を窟岩といひ、それなん胎内潜とて、この巖廂の内を行めぐるをこなひのひとつなり。松杉に峯おほはれてくらし。あるしのけんざ、寺の榮へなんなかめあれなといへれば、

いや高くしけるむら松峯のこゑ千代ふき傳ふ壽きの寺。

かくて日もかたふけは、此傳壽院のゐとに一夜をこひて宿る。あるしの云、吾か統の遠つおやは、神ぬし、祝のたくひにてこそあらめ、家は佐左木にて、善左衞門、久作なと名もにつかず世々を重ねて、役のうはそこの法をしたふ。世々壽長し、金藏院の翁は九十三にてかくれけり。其翁か世に明應のころならん、南谷のくづれより驛路の鐸をほり得たり。こは古きものとて翁めでくつがへり、家の寶とをさめて、我が世まで八代持つたへてやゝ老たりしか、近きとしに此鈴をめしたまへは、守に奉りきと聞へし。その鈴の圖とて人のうつせるを見しに、なゝき、やき斗にてゐやあらん、世にことにめつらし。常陸の國の正等院に在りといふに、つゆ似もやらじ。やつかれ、さるものあまた見しに、いづらも形のひとしからじ。思ふに、こは天安の年地震動ふりて、堂ともの名殘りもなう、ゆり埋れたりしときゆ入にし御鐸にて、鐵鐸、須黎底てふものにてやあらんかし。ことなる鈴さへ見れば、いやしくゐ驛

路の鈴とのみ、吾れも人もしかいひつれど、いにしへは弓にも鏡にも佩(おもの)にも鈴をつけ、なにのをこなひにもふる鈴のためしあれば、あなかちに、なへて、うまやの鈴ならんともわいだめがたう、さへき、すりても多からん。われ見し鐸(すゞ)の圖(かた)うつせる、くさ／＼もたり。

寺に在りて

十九日。暑さにたへず、いましはらくはと、あるしのけんさのひたにとゝめけれは、はし居にくれて夕やみもしるへはかりに、月のあかくさしのぼりて、遠近のやま／＼、河のくまくまゝて照り渡りて、涼しう更たり。

松峯山巡り

二十日。遠き國の人たれば、草深くも分て峯入して皈りいきねと、あるしゆるして、わかき法師をさいたゝせければ、いとうれしう坂の弓手の方より入て、瀧の平(たひ)といふ山かげの原にいたれば、やかたの遠う見へたるは保瀧澤なと、おもしろき瀧も山のとかげにあるてふ物語して、あしこなりと手してをしふ。劒か嶺といふもやゝよち過て、小天狗、大天狗の岩といふも蹈すぎて、いはやどのやうに見へたるところあり。それを天狗の釣橋(つりはし)といひて、虹のごとき石梁(いはし)の、なからはむら雲に埋れたるいたゞきの(マヽ)聞つたふ、かの天台に山の名たゝる、石橋のうつし画(え)を見たらんにことならず、莓に手をつき、ひざつきて、めをふたぎこゝろをしつめて、あせも凍るおもひしてわたりつ。籠石(かごいし)といふ處の芝生(しはふ)を、しとしとふみとゞろかせば、うちのむなしかりけるにや、こう／＼と鳴りぬ。のぞき岩といひ、亦の名

奥の院

を屏風岩といふあり。をこなひは、大和の大峯に、新客の登りたらんふるまひにおなし。飛石といふあり、横飛石といふあり。馬手にかいのぼれば、北に長走山をはしめ、やま〳〵高くひきつらなり、西に田城山、あるは腰山の十の瀨、いと近きは寒山、高森、目名市の倉の澤、岩瀨の赤倉の嶽なと、あるは、弓手の山のまちかきは山田の藥師峯、その麓のあたりに多かるやかた〳〵の、とをしろう、此冑石のかた岨にたちて見渡しの面白し。

木々はみなしくるゝこゝろに吹かよふ風も秋まつみねの凉しさ。

奥の御座の、巖のはさまのありけるに十二錢をうちむけ、山役とて、一百一孔の錢をひとりかもとより出し、つみあかなひて山めくりするを、山ののりとせり。こゝに、ゑんの正角のうはそこやおはすらん。巖にむかひ、「雲車に油をさす時も降雨は御衣を潤さず。」と、うち唱へたり。はるかにへたたりたるは護摩の段といひて、おほむかしに、近きくにべのうはそこらが、みときやうすきやうし、柴燈たきなとせしゆへを語りもて、坐禪石といふあり。「枝葉の扉明晴に、峯のあらしも音信し、座禪の床には紅葉を、錦の茵に重ねしき。」と唱へて、錫杖ふり鳴らせり。岨に、權現の岩とて獅子頭に似たり。こゝをしぞきて、胎內潜の岩窟にとりすがりて、くゞるをこなひのあやうし。この岩のはさまごとに松の群れ生て、あやしうおもしろし。かゝる巖の末に、からうしてのほり見れば、大森川、花岡川、霜內川、亂川、長樹

川なと、みな米代の流につとひ落る水のやちまたも、それにたちつらなりたる村々里々、野山のくまわも、ひとめに見やられたり。谷よりさと吹おこる風に身も寒きこゝちして、水無月の空ともおもほへず。大日岩は、うちもゆるぎなん、まろびもおちなんやうに見ゆれど、さゝれ石のむかしより、八千代の苔に埋れて松の生ひたてり。藥師岩の渟水に眼をあらひて、そのしるしそありける。やはら見めぐりおりて、觀音の窟とて、南比良といふ處に岩屋戸のあれと、草いやふかく、くちはみしげうをれば、分見んことのかたしとて寺に入れは、日かたふき日くらし鳴たり。

廿一日。つとめて雨ふり風のいや吹き、ひるつかた、いよゝ雨はふりて梢をそゝく音高く、山水はあらぬすちより瀧と落ち、川と流たり。

廿二日。朝ひらきのあまばれに松峯でらを出て、幸(さい)の神平(たひ)、日(ぬ)藏平(くらたひ)なとをへて姥澤のやかたにいたり、妻手に猫箇岬(はな)といふ岡ひとつを見つゝ、弓手の山陰に猿が鼻てふ處あり。卯辰に、めおの、ふたばしらの山はいと高うならびたてり。雨雲いまたむら／＼とかゝりぬ。花岡いと近けれど、川水のふかければ人にいざなはれ助られて、からくして渡り、きちかう、をみなへし、藤袴の、時しりかほに咲たるをふみしたき分け出て、

岡の名の花もひもとく秋近き野邊のもゝ草露ふかくして。

岩本山信正寺

岩本山信正寺といふあり。此砌に、牛の三ッはかりふしかくろふべき銀杏の樹の、としふり生ひたてり。此寺は、出羽庄司なにかしが末にて河田治郎信正、あがうちたりし、泰衡のなきたま齋らんために建たるよしをいひ、はた河田信正かために、淺利家より建られたるともいひ傳ふ。こゝの西北にあたりて、萱苅平のほとりに勝山といふあり、いまは寒山と人のいふ。そこにて、それの年の師走の朔淺利の軍やぶれて、いくさきみ淺利左衛門尉定頼うち死せり。その木主とてこの寺に在り。

成田と藤陸の裔

殘りたる家の子郎等辨川勘右衛門、成田與右衛門、明田勘解由、白瀧但馬、藤陸丹後等も、あくる正月十六日にうちまけしかば、いよゝ秋田の家は、勝山の名も高うあげたりしとか。此里に成田與右衛門、藤陸與惣右衛門とて、その末の今もありて、むつきためしにも温雜粥も烹ず、乾餅挂てふ事なと、ゆめ〳〵せさる二ッの家のならはしとなん。此信正寺は、舊粕田の澤の細越といふ處に在りたりしを、こゝにうつしたるよしを語る。その細越に殘りたる礎のあるに、何ならん、文字のほのかに見ゆなといふ。そこは鎌倉へのうまやぢにて宗祇のなかめとて、「岩本の御法の鐘のこゑ聞はいかなる罪かえもや殘らん。」となんかたりつれと、いかならんか。

敎圓の法歌

今此寺は、三野の國谷汲寺になすらへて札うちをさめられし、阿闍梨敎圓の「念彼力過去現在の罪消へてありやなきやの根井のしら瀧。」この白瀧といふは、近きほとりにありきといふ。尙たつね見なん。觀世音に手向の

根井權現堂

盲良宗の塚

こゝろをなかめたり。

　枯れし枝も花咲くふかき惠みとて木々の根の井をくみてこそしれ。

里はつれは、内外のかんみやしろのある、杉むらのほとりの田の中に、根井權現といふ神の森あり。此鷄栖に入てぬささる。蝦夷(えみし)むけたひらげんと、阪上田村麿此根井の堂に宿(こもり)て、「おもひある心のうちの瀧なれはおつると見へて音の聞ゆる。」と、堂の柱にかいのこし給ふとなん。山陰の、さゝやかの堂のほとりに泉あり。夜更人さたまるころ、ひとり心をしつめて聞は、耳のうちに落瀧つ水の音の聞へて、あくればさらに瀧こそあらね。さりければ、しらぬ瀧てふことをしら瀧ともいふか。尙高う分のほれば、ちいさやかの堂あり。こゝなん、安倍賴良の嫡男、厨河の次郎貞任の兄、井殿盲目安藤太郞良宗、いとわかうして身まかれり、その壟となん。過き來りし目倉平(めくらたひ)といふ處も、そのゆへやあらんか。近きに十三森といふあり。井殿冠者良宗のため十三佛を置たりといひ、亦、堂屋敷といふあり、いにしへの根井堂のあとにてやあらん。七ッ館、蝦夷舘といふあり。はたゝ、こゝにも桂淸水の觀音といふありなと、あないのいへり。貞任のせうとなる阿倍良宗、めしゐとなりきとのみ聞つたへて、こゝにをはりをとれりとは、あにおもひきや。そのゆへの尙とはまほしけれど、むげにこゝろなう、たれしれりといふ人もなけん。山坂おりはてて、山陰の細路をめてにしばし行

ば、白瀧とて泉流るゝ音のみ聞へて、水いやよけん(マヽ)。

石はしる音はさやかに聞ゆなりいさしら瀧はおつとなけれど。

十三森のほとりを過たり。栩内(とちない)村の實入(みいり)地藏大士へ行徑のあり、ゆへやいかならん。里に出て此花岡に宿づきたり。

花岡より扇田へ

廿三日。こゝにすむ、鳥潟與三郎高守といふあるしのもとをとひて、なにくれと語る。高守の遠つおやならん、山本郡八森庄鳥潟の村に出て、そこにきうそうあるよしをいへり。河水のいまたふかからん、けふ斗はと、なさけ〳〵しうとゝめられて、「涼風の能もとゝきつ澤の奥 扇峯」といふ句をものし聞へしかは、たゝにやみなんも風情あらねは、

命と掬ふ屋戸の眞淸水、と和句せり。袖の露ひるまはかり花岡を出て、かなたに行とならば松原といふ村のあり。こゝに法相とやらん、眞言とやらん、大寺のむかしありたり。その寺はいまうつせり、さるゆへ村を松原とはいへり。寺はいまの補陀禪寺也。其古寺の跡を寺の澤とて村あり。尙ゆきとゆかば、みちのおく津輕の境たらん。へたつる關舍(せきや)をさして長走といへり。淸少納言、關を譽めて横走りのせきといへる名に近く聞へて、長走のせきも又おかしかりき。雌神、雄神、入道嵢(ぐら)、萩長森なとをめてに、花岡を見さく。神山のやかたもやゝ過て馬手に大杜(おほもり)のあり、行道の弓手の田の中に異婦(をなめ)盛りといふあり。大杜の柵の君

秋風通ふ

の姿(そんなめ)たりけるよし、その館の址とそいふなる。大杜川水深く渡りて、松峯村を經て霜内川をからくして越へ、釋迦内のうまやになりぬ。こゝより馬にてあしとく過て、風兀村をしりになして、亂橋も板子石もへて、うちむかふ二重鳥居山(ふたへとり)、鍋破山(なべこし)(天註――「二重鳥居は杜良山の麓狹股の村に同名のあり。鍋破しといふ、つがろちに聞へし。松前尻打山にもありけり。杣山賤かいひそめし名ならん。ところ〳〵に在り。」)なといと近く見やり、遠きは雄嶽、近かき長者もり、虎の臥し蹲るすかたして、雲をはなるゝ龍か森と、いごみあらがへるさませり。杜良の岳はよこほりていちしろし。こゝらの山のかさなりて、雲の中に見へみ見へすみ、空うちくもりて涼し。大館になりて、みちのへの大池に蓮の眞盛、たゝすめば風吹わたり、かくはしき袖のなつかしう、しはらく休らひて、

蓮咲くそこのこひちも見へぬまてうき葉涼しき露のしらたま。

池内といふ村に出て(天註――「池内といふ名もと蝦夷詞にして、ヘツチナヰてふことにして、津輕ヒヲナヰの浦に在り。池内といふ名も多し。」)日もくら〳〵になりて、舟渡りして路たとる〳〵、ふたゝひ扇田につきたり。この夜地藏祭のある夜とて、ともし火とりて行かふ人多し。かくて武田敬夫のもとにいたる。

廿九日。比都差岐の村にいたりて丸岡定政のやとを訪ひて、小夜すからうちものかたらひてけるに、河瀬のさと音信て更行まゝに、秋や來ぬらん、しかすかに風すさましう聞へて、

身滌川いくしなかれて夏といふしるしも波のさそふ秋風。

あるしも筆をとりて、「草枕夏も名殘と小夜更て秋や通へる虫のこゑ〳〵、とそありける。
この返しとはあらさめれと、かくこそおもひ渡りつれ。
むしの音も樂しき屋戸にたひねしてこよひ涼しきゆめやむすはん。

内外御神
金生社
釋迦堂
亂橋
釋迦内驛

松山峯の雉栖し傳壽院

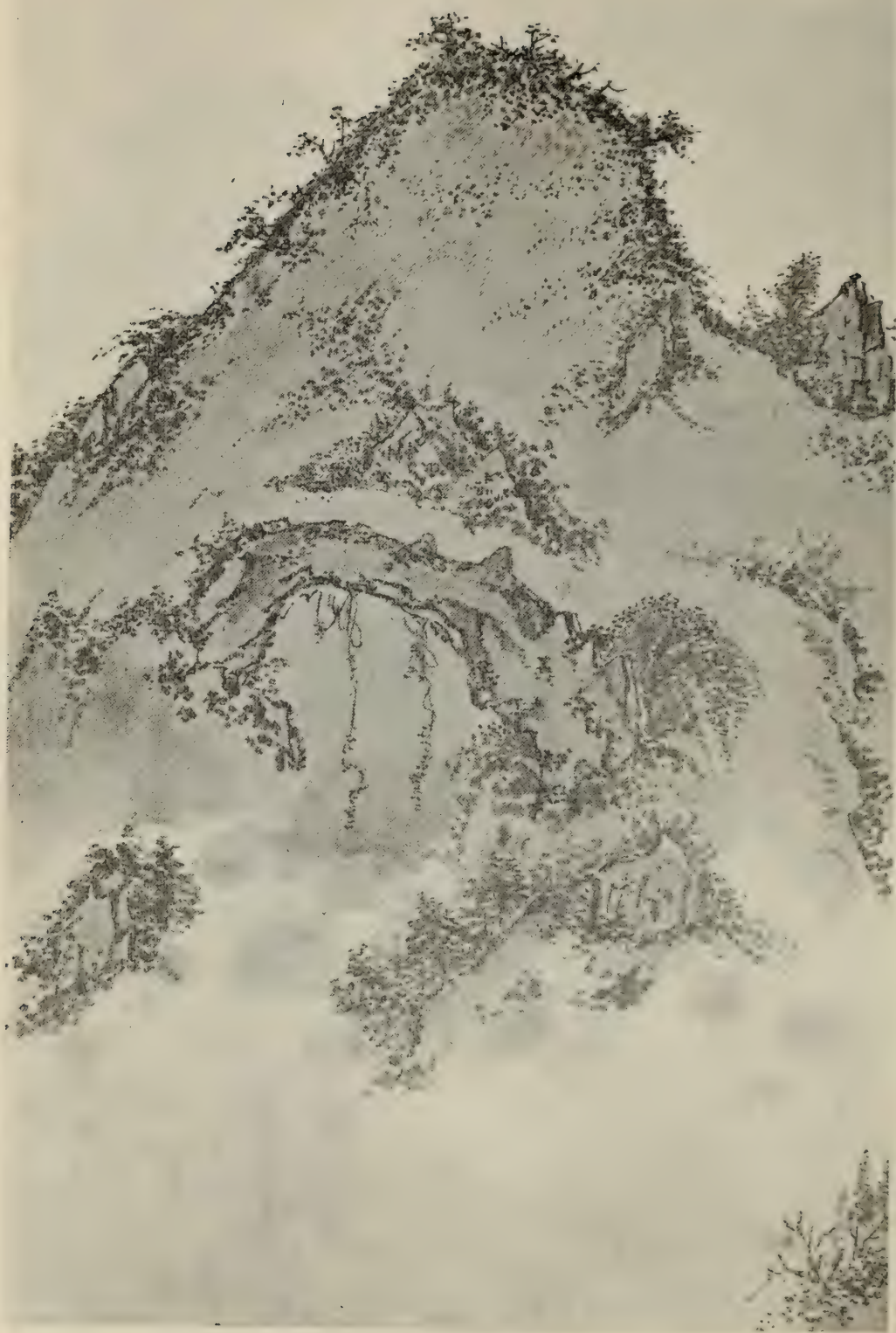
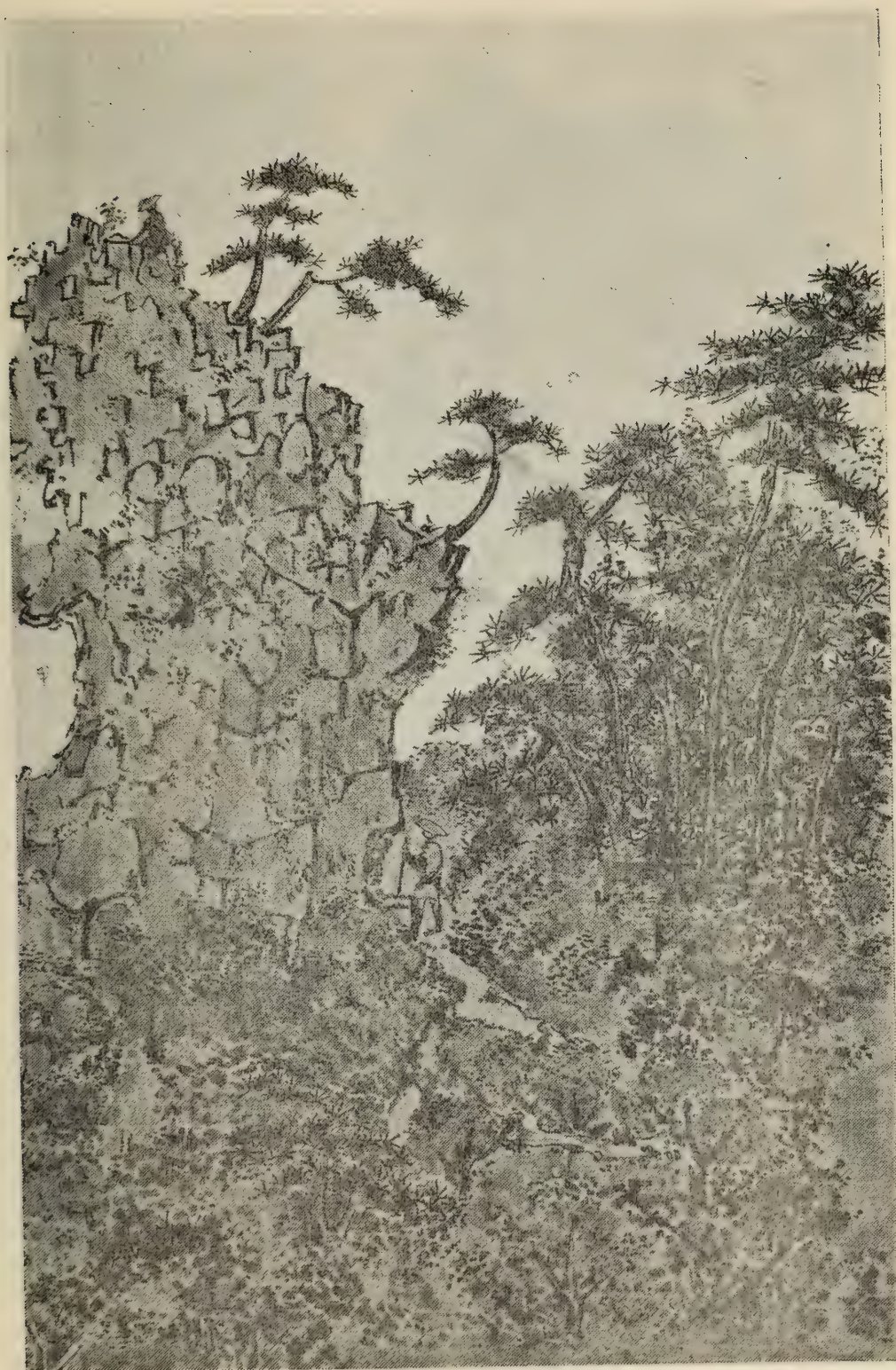
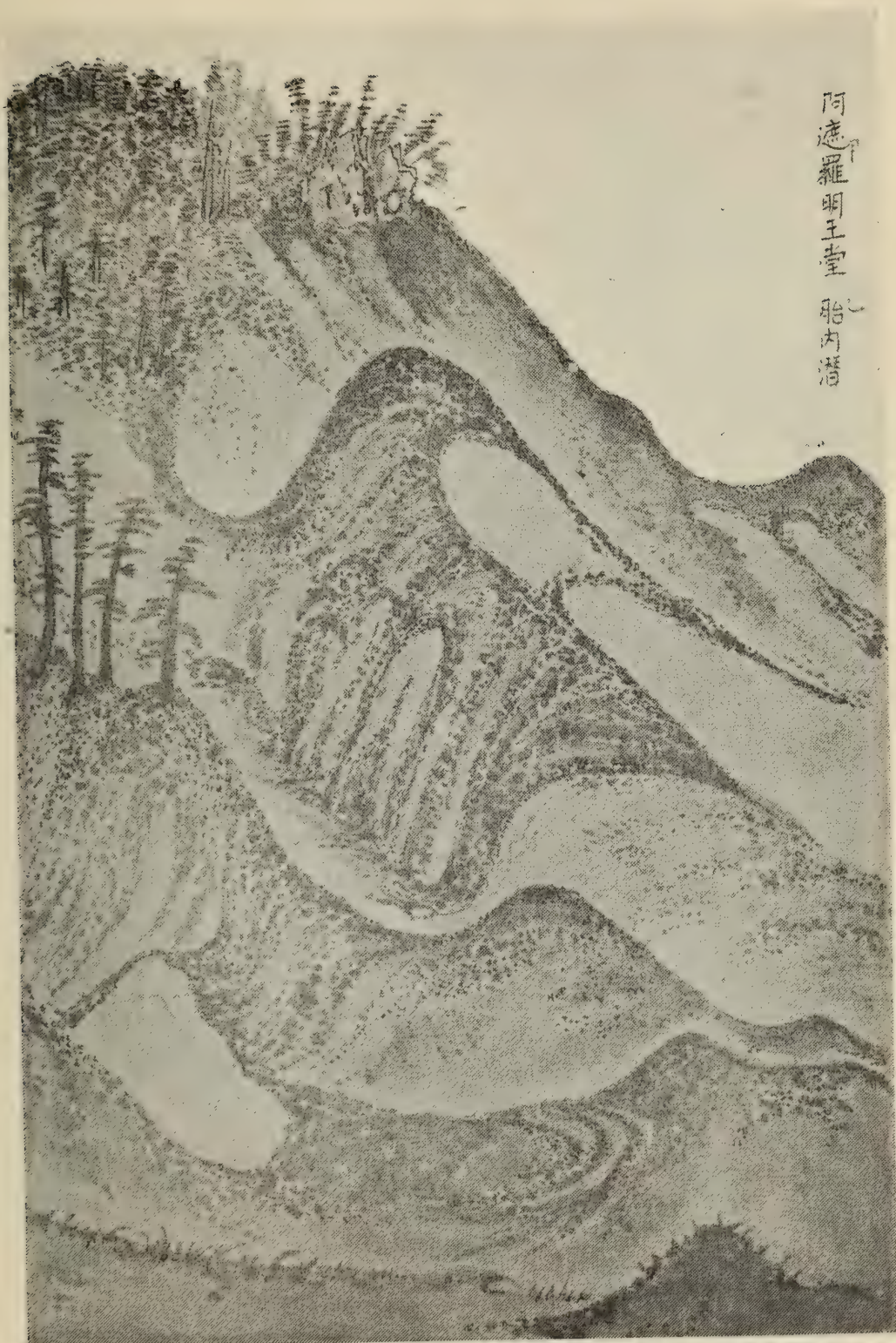
贄能辭賀樂美

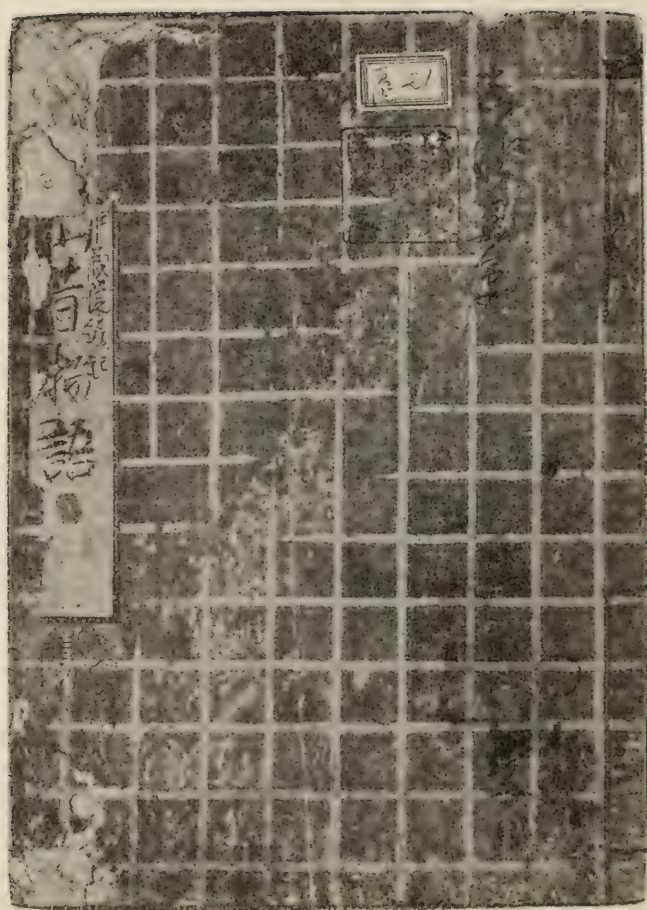
松峯山に石橋あり天狗の釣橋と云

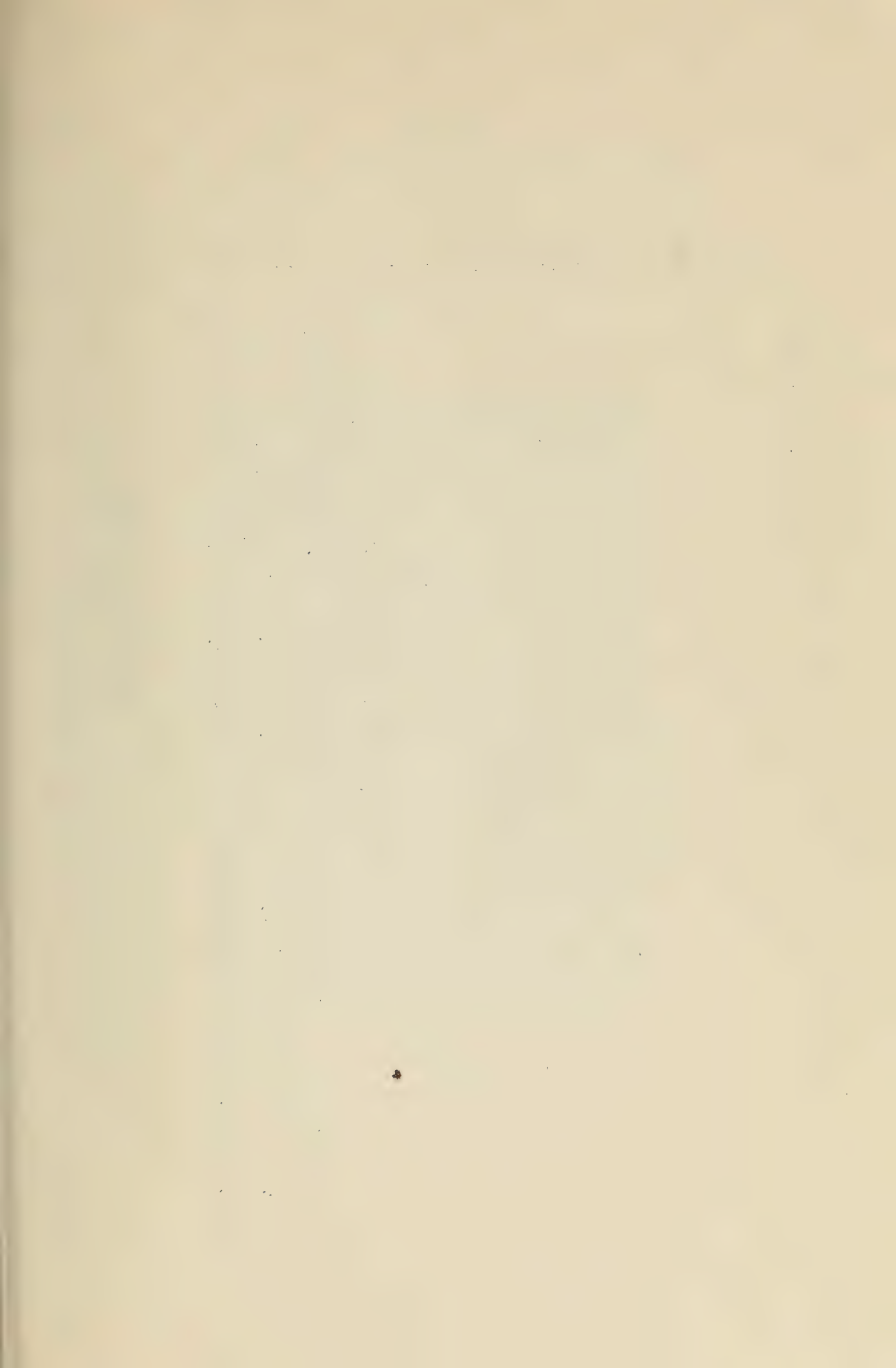
執能辭賀樂美

胎内滑の岩窟

阿遮羅明王堂
胎内潜

花里村
内外宮　白瀧
安東太郎阿倍良宗墓

贄能辭賀樂美

房住山物語

房住山昔物語

此ものかたりは、あやしき事どももあれど、名處、古名、また其時を知れゝばこゝに記しぬ。房住山は坊中にや、梵定にや。富士山に詣登るを不二禪定と云ひ、又近江ノ國の膽吹山へのぼるを蓮上ともはらいへり。そのよしをもて云はゞ梵場などにや。房住山とは、いかゝあらむかし。

○人名　○地名　みな巻中に在り。

・阿計徒麿ハ身ノ長ケ一丈三尺五寸。

・阿計留麿ハ身ノ長一丈三尺。

・阿計志麿ハ身ノ長一丈二尺。

・日高山　今云ふ八ツ面也。八人の賊徒さし違へ死たるより首をかけたるよし。

・中津六郎

・長面　阿計留、阿計志を葬埋せしより名あり。

・翁面　高倉長者あり。

・寺内　田村將軍、阿計徒追伐のため古四王宮に參籠あり。

・大長麿

・菩提坂　大衆、阿計徒か首を持くだり念佛となへし坂也。

・蹈鞴野臺

・橡ノ木塚　阿計徒麿を埋し壟也。

・幕洗ヒ澤

・目見エ堆・木戸ノ澤・切所作平（きりはぎたひ）　幣切りし處。

・日高見山　八面ノ山ノ古名也。
・大兄が澤　古名米が澤也。
・小兄が澤　古名釜が澤也。
・三種川
・扇が瀧
・林崎村　早咲村と唱ふ。
・歌橋の梅　みたね川の橋也。梅もそのもとに在し。
・聳瀧今誤てソビ瀧といふ　一名禪定か瀧也。
・禪定が瀧も誤て善次瀧といふ。
・秦徐福か末胤能助菩薩ノ四人ノ従者。
・豐前ノ公源泰
・阿波ノ公源義
・伊勢ノ公源覺
・大和ノ公源海

○又梵字宇山興立記ノ中、人名、地名左の如し。

・開山圓靜
・金剛界大日如來
・五院　祖師堂　教學堂
・梵字宇山大幢寺　　・五大院東光坊
・孤月山専行寺　日洞院ノ里寺　小又口
・見嶽山淸岸寺　月松院ノ里寺　長面
・獨鈷山常樂寺　仙遊院里寺　達子
・荒澤山源川寺　寂勝院ノ里寺　小荒澤
・田城山蓮池寺　　桂源灌佛華水の閼伽本とす。
・鬼面山高臺寺東光院　阿計徒丸菩提也。
・慈眼山福壽寺　阿計留丸菩提寺。
・藏王ノ社　中津又
・八面山ノ空院　中津又
・儀鳳山瑞雲寺ノ熊野ノ社　八森
・凌雲山東光院　八森

・翁面山重樂寺　阿仁

・多々羅堆金剛界大日如來

・久安五年攝待石地藏尊

○房住山昔物語

出羽ノ國山本ノ郡大幢寺の古記云、「保延のむかし山下の老夫當山に登り來て、終夜大衆と共に遊んで此山の物語して云ク、傳へ聞く、往昔より當山を房住山とは申せども、いづれの頃如何なる人の開基といふ事をしらず。世俗の諺に、天台の沙門來て此山を開基せり。それより天台山と號くといへども、坊の數多く有るがゆゑ坊住山と唱へしといふ。大施主は高倉ノ長者也。礎石、材木、米錢、諸色皆此長者一人の寄附也とぞ。相續て七八代を經たりといへり。其後東國の夷賊追伐の勅命ありて、坂上將軍田村麿當國に下向し給ふ。前年は御父、後年は田村丸の御子の將軍下り給ひて、夷賊の首長を誅伐し殘黨をのこりなくさがし出し、當國男鹿山の麓まで追伐し給ひしが、其眷屬こゝかしこに隱れ、其中にくつきやうの夷賊十一人、其中にも名に聞えたる兄弟三人あり。兄の名を阿計徒丸、其次を阿計留丸、其次を阿

阿計徒丸
阿計留丸
阿計志丸

日高山
中津六郎某

長面
翁面

計志丸といへり。此阿計留、阿計志二人を、長面兄弟と申たりとぞ。それをいかなる事といへば、其者の面の廣キ事一尺三寸、額髮際より頤まで二尺四五寸有し故、長面とぞ申ける。許多の夷戎みなうたれたるが、阿計徒一人行方をしらず。阿計留、阿計志二人、日高ノ山間より出來て迯んとせしを、南の河邊山間の狹き處に、中津六郎某等の、狹みに木戸をゆひ、河を淀めて待掛たる處に、あんのごとくこゝに迯來る。後よりは將軍御勢あまた追ひ來りて、東西より引包みせめたゝかふほどに、數日の戰につかれ、力及がたくや思ひけん、無二無三に淵の中へ飛入りたりしかば、手々に礫を雨の如く打かくれば、目くらみ終に水中にて死たり。其丈ヶ一丈に餘りたる男の鐵の鎧二領重ね着たれば、川より引上ッとすれども岩石の如くにして、二三十人して引ともゆるかず。兎も角もして大將の御前へ引出し、都ノ人々にも見せたく、さま〳〵にして一里斗川下へかき下しけるが、心にまかせねは、川の南の小高き處に埋めさせ給ふ。將軍さすかに憐みをたれ引導し給ふ。今その處の字を長面と申す也、云々。扨又翁面の高倉ノ長者、田村將軍の御下向と聞て大に喜び勇みたち、數日を相待ける處に、阿計志丸都勢に追立られ、岩石をおどり越て東の山下に迯げ延けるを、高倉が眷屬、手々に得物を執り持て追廻れば、かの坊住の堂の邊に隱れ一息ついて居たりけるを、都勢と高倉勢とをめき叫てはたらけば、山も崩るゝ斗也。山の大衆大に驚き、すはや鬼戎當山へ入り來りた

寺内

大長丸

り、油斷すへからずとて大鐘、大鼓をうち鳴らし、墨の衣にたまたすきをかけて、おの〳〵得ものを引提て、をめき叫て追立るほどに、さすがの阿計志丸、何かは以てたまるべき、西をさして山下へ下りけるを、山々の隅々谷間〻、透間もあらず加勢來り、大將軍の御勢小股(また)の澤口より出合けるほどに、阿計志丸度をうしなひ、河にしたがひ下りけるが、軍勢のはなつ矢は簑毛の如く身におびて、流るゝ血の色に川も染たり。あまりにつかれけるにや、川中にうち倒れふして聲も得立す、そのまゝ死たり、云々。その川の北の平なる處に埋みて、その處をも長面といふ也。大將軍は、阿計徒を見失ひ給ふ事殘念におぼして、寺内古四ノ社に、御立願のため御參籠あり。其時當山の大衆喜ひ居たる處に、東の山上より、大音聲山も崩るゝ斗叫ける。人々、思ひも寄らぬ事なれは大驚き、いかなる事か出來らむと魂を飛ばしければ、鬼賊か申やう、汝等よく聞ヶ、我は、此間の戰に死たる阿計留丸、阿計志丸が兄の阿計徒丸也。阿計志丸は其身の長ヶ一丈二尺、阿計留丸は其長ヶ一丈三尺、某阿計徒丸は、我身の長は一丈三尺五寸也。我こそ日本一に勝(すぐ)れたる男(をのこ)とおもひつれ。官軍にも身方にも並なき者ありつれは、みな人それを大長丸(おほだけ)と申たり。是も去年の戰ひに伐れたれば、今は我に勝(まさ)る者あらじ。然れども、數日の戰ひに少しも眠らされば絕へがたく、日高山の麓なる洞穴に隱れ、晝夜のわかちなく寢入り目覺て聞ヶば、二人の弟も死たり。されど、敵の手にかゝらさるこそ

ほゐなれ。大長丸はうたれ、長も世に賴みしかひなし。又、長ヶも劣らぬ朋輩の者八人有しが、是も糧(かて)盡て力なく、敵に頸を取られじとて日高山に登り、同枕に死たり。哀成かな、兄弟二人も數日食に飢て、つかれ死たるなるべし。兄弟の敵をうちたくこゝろはやたけに思へど、追かくる力なし、云々。汝ら如きもの相手には足らざれども、兄弟朋友まで死亡せしは、是全汝らか奏聞に依てなり。最後の門出なるぞ、おもひ知れと云まゝ、雷の如き大音して走出て、僧俗數多有ける寺の檐にもろ手を掛て、二ゆり三ゆりゆるかしければ、寺は忽ちうち潰れ、何とかしけむ阿計徒丸、寺の角木の落かゝりたるに押され、身に疵の付たりけるにや、大手をひろげて大音聲にて、曳や／＼此角木を除んとすれと力及ばず、あな口惜と身をもだゆる處を、坊主の中より大刀とり來て左右なく首をうちたりけり。是たゝことならず、佛神の加護なるべしと皆感涙を流したり。其時鬼賊阿計徒丸が兩眼より、光物飛出て一丈斗飛あかり、一ッに成つて北方をさして飛行たるは、不思議のことといひあへり。夜も明方に及びぬれば、大將軍の方へ早脚(はや)力を立て申上れは、大將御悅喜かぎりなし。誠にたゝ事ならず是御神力のなす所也とて、寶殿に禮拜ましまして御陣所へ皈り給ふ。いそき首を持來れとありければ、當山の大衆をはじめ人夫あまたして、阿計徒が頸を御目通りに舁きすゆれば、大將先東ノ高根に登り給ひ、あまたの軍兵を前後左右に立テて、其中に鬼賊の首を居へて御引

實檢長根
菩提坂
踏鞴臺
栃木塚
幕洗澤
目見ノ堆
木戸ノ澤
切所作ヿ
八面は日高山ノ古名也

導をなされたり。阿計徒丸は阿計留、阿計志に引替りて頭上に角生立て、二目とも見られさる懼ろしきありさま也。此御引導ありし處を、實檢長根と申なり。此御引導終て、實檢長根より其首を下スとき、大衆異口同音に念佛を唱へたり。其山坂を菩提坂といふ也。其首を東の尾崎踏鞴の臺に埋させ、しるしとて橡の木を殖置給ふ。其時陣幕の血に穢れたるを、澤水を湛へ洒せ給ふ。そこを幕洗ひ澤といふ。かくて後大衆僧俗とも御目見をゆるし給ふ。其陣所の有りし野原を、今目見ノ平といふ、云々。極て賊徒東より來らむとて、要害に、澤口に、木戸を構られたり。そこを木戸野澤といふ。さて翌日、東の高根實檢長根の近き處は、最上の高き處なれば、祈願の賽のため羽黒三所へ奉幣すべし、山上の大衆は實檢の首持來れば、其身不淨なりとて、山伏あまた集め給ひて、其御神事營あり。假屋を建て幣帛七五三に切り作給へば、其所を切はきノ堆と申也。又軍神にましませば牛頭天王をはじめ、其外諸神に奉幣あり。かくて都に御飯陣ありき。」其後七八代も續きけるやらむ、何となく寺々僧房も衰て、みな跡かたもなく成りしよし申傳ふる也。○又大衆問て云、八ツ面といふ處の所謂はいかなるよしにや。老夫答云、その八面山は、本は日高山と申せしとぞ。阿計徒兄弟に劣らぬ者八人ありしが、數日の戰ひ飢につかれて山上に登り、みなさし違へて死たりしが、大將軍山に登り八人の首を掛ヶ並べ給ふ。その處を八ツ面とは申也。○又問云、大兄澤、小兄澤と申ス

大兄が澤古名米が澤也

小兄が澤古名釜が澤也

はいかなる所謂かぞや。老夫答云、そも〳〵むかし、高倉長者か家より出たる名ども也。長者に一人の娘あり。聟を取りければ村民兄殿と申ける。長者に男子又誕生せり。是も正嫡なれば迚みな兄殿と申て、二人ながら兄殿と唱へて差別なかりければ、故に聟の事をば大兄と唱へ、實子のかたをは小兄と唱へし也。後に兄弟諍ひ出て、我は正嫡の子なれば家督也といふ。聟は、我年増したれば我こそ家督なれと、互ヒにあらがひ止さりければ、長者も詮方なく、家錄財寶二ツに別て鬮を立て、弟にも兄にも運に任する處なり。我に於ては私なし。分家の鬮に當たるものは分家すべし、本家の鬮に當たるものは本家家督相違あるまじきとて鬮とらせければ、聟は分家の鬮に落たり。是によりて、聟が家を立たる澤を大兄が澤と云ひ、實子が居たる所をば小兄が澤と申せし也。又大昔は、大兄が澤をば米が澤と云ひ、又小兄が澤をば釜が澤と申たる也。○又問、翁面といふ所謂如何。老夫答曰、むかしは彼里に家もなき深山なりしとき、河より西の山下に大樹あり。幾千年を經たるやらむ、地上より上へ一丈斗あがりて折たる空木にして、其堅實なる事石のごとし。節瘤いと多く、耳目自ラそなはりて人面の如し。木樵、山賤注連繩を引わたし、又、願とおぼしき處へも幾重の注連引はえたり。上下に注連張たれば、上なるは白髮の如く下なるは白鬚（しらひげ）のごとく、木の皮は剝げ風雨にしやれて、木の肌青白くして、まことに翁の面のごとくなるよしをもて翁面とは申たる

也。それより後杣山賤の小屋立ならべ、終人家とはなりたる也。さるよしをもて、翁面と里の名をいふ。その名をあやまりて、今は沖田面とは申也。かくて幾年を經てか、其人面たりし神木も朽はてぬ。何國よりか沙門來て、朽木の跡に小祠を建て、觀世音を安置して村里の鎮護とせり。○又問云、南に谷川あり、其名はいかに。老夫の云、往昔巡國の高僧、主從五人して神佛巡拜せんと、此山に來り給ひて數日御逗留有けるとぞ。其高僧の御裝束は、桐形の浮紋の衣に白錦の袈裟、白綾の襟覆、木蘭色の袴、赤鞘の黄金作の長劍を從者に持せ、短刀を帶し、五寶の念珠をつまぐり無節竹杖をつき、伴僧の裝束とても、なか〱以て常ノ人とは見えたまはず。しかるに、當山の神佛に清淨の阿伽を奉らばやと、云々。寺僧に尋ね給へば、南に谷川ありといふ、云々。樵夫に問ひ、山賤に尋ねて川原に至る、云々。川磐平にして赤き事馬腦の如し、云々。磐上きよらかなること鏡面のこと、うたかふらくは是仙境ならんと、高僧あやしく尊く、かくて源泉とおほしきに、老翁一人岩石に腰をうち掛居たり。白髪帶を越へてたれ、高僧あやしみイみければ老翁の云、高僧、何故此處に來り給ふや。僧答云、我此山に登てもはや飯國にいたるべし。これに依て、當山の神佛に清淨の阿迦を奉らむと、源泉もとめて此處に來りたり。翁の云、則此處水源也、流を汲玉へといへり。其時伴僧、旣に汲んと竹筒を出しぬ。翁の云、それは旅用の器なるべし。我に一ツの器あり。是を貸ッ奉

るべしとて、瑠璃の水瓶を高僧に奉る。僧拜して云、尊翁の栖室何れの處ぞ。翁の云、我に定れる栖家なし。かしこの巖窟、こゝの空木の入りて風雨を凌ぐのみ也。僧の云、しからば恩借の麗瓶、何れの方にか返辨奉らんや。翁の云、つとめ終り給はゞ、その水瓶岩頭に居へ置キ給ふべし、日を經すして取り得べしといへり。又僧問て云、此清川の名あるべし、示し給

三種川

へ。翁ノ云、此流は三種川と號く也。此川の名によしありや。答云、水甘クして毒なし、是長壽の種也。又淺くして渡り易し、山業、農稼滯りなし。是福祿の種也。又蛇蠍のさまたげなく邊村晝夜交り遊び、樂のたね也と云ひ終て、翁は東山に去りぬ。高僧、是は神仙ならんと、跡を拜謝して見送り給ひしとなり。三種川の由來かくのごとし。高僧も、かの瑠璃水瓶に水を汲せ山本トに皈り給ふ。翌早旦供養し奉り、翁の敎のごとく、かの麗瓶を小高き岩上に居へ置き、かくて後、山主に向て數日の饗應拜謝して、山を下らんとし給へば山主の云、通路は西に在り。高僧ノ云、先日のごとく南川に下リて流にしたかはゞ、見殘る處なかるべしとて、南川の小路に赴き給へば、山主も別を惜み、此夕の旅宿まで見送奉らんと、一僕を具し御ともをぞ申されける。やゝ歩行し給ふ處に瀧あり、此名はいかにと問へるに山主の云、此瀧

扇ヶ瀧

は細く瀧口廣く、扇面に似たれは扇か瀧と申といへり、云々。數村の橋々を渡りて大路に出て村居あり。はや夕陽に至れり。山僕に問たまはく、是までの橋の數を算へ知れりや。僕か

云、水上の小橋より唯今わたり過し橋までの數は、三十に候と申ける。かくて村居につかせ給ふほどに男一人出來りければ、此村を何とかいふ。かの男、はやさき村と申さふらふ也。文字はいかに。文字は知らずさふらへども、林崎と書さふらふよし。しかれども、それをはやざき村と唱へ來候と申上れば、おもしろしとのたまひて、しつかにあゆみて又大橋あり。其橋のかたはらに、櫻の半開きかゝりたり。山僕御側にかしこまり、此橋にて三十一橋わたり候と、高僧の從者の方へ申上れは、件僧に仰て筆紙墨を取出させて、

三種川三十(みそぢ)の橋のあやなきにはやさきかゝる花の歌橋。

と書て櫻の枝にむすび給ひし。それよりこのかた、林崎(はやさき)村の大橋を歌橋と唱へ候は、此所謂れなりとかや。さて高僧主從、山主も互に別を惜み給ひて、旅宿にて終夜笹をたのしみ御物語ありて明れは、高僧主從を見送り奉りて、山主は川上さして皈り給ひしとぞ。〇又問、北の方に淸靈の瀧あり、其名ありや。老夫答云、聳(そひえ)瀧と申也。又それを禪定が瀧とも申也。聳瀧とはいかに。老人答て、巖頭高尖として天を突くがごとく、常に雲霧の聳て、瀧の絕頭の顯はるゝ事まれ也。さる故聳瀧とは申也。禪定が瀧と申は、往古の開山其瀧壺に下りて、禪定ありしゆゑしか申傳ふる也。是をもみな名を誤て、聳瀧をばそび瀧、又禪定が瀧をば善治瀧など申候也と語り終れば、曙の空朝風涼しく吹來れば、又重ねてと、杖を曳き老夫は里

はやさき
林崎村

歌橋

聳瀧
又名禪定瀧
誤テ、ソビ
瀧といふ

禪定瀧なぜ
ンジ瀧と

に皈りければ、阿波ノ公聞たまひて、後の世の記念ともなれとて、筆をとりて書記し給ふ」

秦徐福来

能助菩薩

豊前ノ公源泰、阿波ノ公源義、伊勢ノ公源覺、大和ノ公源海

○梵字宇山興立ノ記

夫レ羽州秋田梵字宇山の開山叡鶴を尋るに、近世不思議の大徳出給ひて、法を西南に弘むとこ。ほのかに其性を聞クに、往古我朝に渡來る秦ノ徐福か苗胤也とぞ。いとけなき時より、深く佛陀を敬ひ神威を尊み、人倫に居る事稀にして熊野、大峰、葛城、其外遠近の諸山修行ましへて、古今未曾有の大先達也。其身の長ケ六尺に餘り、鬚襟を覆ひ髮肩を掩ふ。威儀ところさして錫を杖て屣をはき、鈴を帶し經卷を持し給ふ。其法驗といふは、必死定業と見えし病者も、加持を施し給へば忽チ平癒快樂はこり、又死シテ三日を經たるも、加持によつて蘇生して長齡を得たり。是に依て世人敬ひ尊て、能助菩薩と唱へ奉りしと也。尊へきかな、役優婆塞百三十七世の傳燈ノ大德なりとぞ。諸國巡行ましへて、信州戸隱山に至り數月修法ありて、毎夜寅より庵外に出て日の出を待て拜禮あるに、艮に當て遙に玄字薄雲の中の月の如く見えける故、東國の方に佛法興隆の地あらんと思召て、戸隱山を立出て吾妻の方に下リ給ふ。其時隨身の賓客の四人あり。豊前ノ公源泰、阿波ノ公源義、伊勢ノ公源覺、大和ノ公源海と號して、何れも何れも藤橘ノ苗中より出て共に公卿の庶流也。終に當國に至り給ふ。是こそ佛法の靈場なりとて東西を巡見したまへば、梵刹の跡とおぼしき礎石顯はれたり。欹斜なら

開山圓靜

金剛界大日如來

五院祖師堂敎學堂

梵字宇山大幢寺五大院東光坊

ず思召て、草を苅らせ苔を起して見給へは、牌堂とおぼしき處に牌形二三本顯れたり。其銘に彫たるやうに見えて、開山圓靜の四字、かしこの筆頭、爰の筆尾幽に朽殘りて、四字のみ見顯はせり。餘の牌は、ありといへども文字さらに見えず。即一字を建立ありて、金剛界大日如來を安置し奉りければ、檀越、施主引きもあへず、米穀の山をなし金錢地に敷が如く、繁榮彌增て、其間〻もなく五院祖師堂、敎學堂を建立したまひ、山を梵字宇山と號し、寺を大幢寺五大院東光房と號し法幢を立給へば、負笈飛錫の徒當山を慕ひ來るもの日に增し月に盛り、繁昌いふはかりなし。打續て十六房を立。

○其十六房中左に記之。

○日洞院　本尊降三世　豐前公源泰
　宮之房
　薩之房
　岡之房
　梅之房

○寂勝院　本尊軍茶利　阿波ノ公源義
　普門房
　劔之房
　杉之房
　法林房

○本堂本尊　金剛界大日如來

○祖師堂

○中輪院　本尊不動明王

○敎學堂

孤月山專行寺
見嶽山淸岸寺
獨鈷山常樂寺
荒澤山源川寺
田代山蓮池寺

魔面山高臺寺
東光庵

慈眼山福壽寺
藏王社
空院
儀鳳山瑞雲寺

本尊金剛夜叉
○仙遊院
大和ノ公・源海

瀧之房
岩之房
普賢房
楞嚴房

本尊大威德
○月松院
伊勢ノ公源覺

角之房
地藏房
奧之房
延命房

其後又、「孤月山專行寺を建て日洞院の里寺とす「小又口村、「見嶽山淸岸寺を建て月松院の里寺とす「長面村、此別堂に彌陀、藥師、觀音を安置して阿計志丸が得脫を祈らしむ。「獨鈷山常樂寺を建て仙遊院の里寺とす「達子村、「荒澤山源川寺を建て寂勝院の里寺とぞ「小荒澤村、「田城山蓮池院を建て桂源、灌佛、華水の閼伽本とす。その昔阿計徒麿か寂後の時、兩眼より飛出たる光り物、米代川の北の方に落て消失けるか、其靈魂二十年を經てあらはれたり。火の中に。六尺斗の恐ろしき首あり〱と見ゆる。是を見るもの難病をうけ、又死するもの多かりければ、里人當山に來て、怨靈退散のいのりを願ひ頻なれば、則一字を構へて魔面山高臺寺東光房と號し、退轉なく修法勤行有ければ、阿計徒丸怨靈障碍も長く止りしと也。

又慈眼山福壽寺を建て、阿計留丸が敎化菩提を祈らしむ「中津又、又藏王權現を建て順峯修行の初入護摩場とす「中津又、又八面山の麓に空院を建て難苦行場の山宿とす「中津又、又儀鳳山瑞雲寺を建て熊野權現を勸請ありて、逆峯初入七日行の護摩場とす「八森、當山に七日の行の間、凌雲山に運て難行して又當山に飯宿す、是に依て安居の長床とす。又凌雲山に東光房を

翁面山重樂寺

久安五年

攝待

仁平元年

建て難苦行場とす「八森、又、翁面山重樂寺を建て順逆修行の中供養長床とす「阿仁、又多々羅の平(たひ)に一字を建て、金剛界大日如來を安置し奉り、別に空院を構て本山の寺房の名を號し、毎年怠轉なく三五七九の四ヶ月には山を下り、此處にて大法會を設け國土安穩の祈り、遠近村里の詣者に結縁せしむ。又阿計徒丸か怨靈得脱を祈るの道場とす。七十五代崇德院の御世、長承三甲寅年當山を開基有て、僅に星霜十八年の間に、寺院僧房數多御建立ありて、殘りなく巡行有りて、七十六代近衞院ノ久安五己巳年ノ六月朔日より、一七日の大法會行れ、大祖役優婆塞の先蹤を繼き一千本の卒都婆を建て、六躰の地藏尊の石像を安置し、往昔軍死の諸卒、阿計徒丸兄弟惣テ一切衆生、有性、非情、前亡、後滅、皆供成佛の作善供養ありける事、殊勝にして尊き御事と、尊卑感涙をそ流しけるとぞ。然るに其大供養の場所は、本山より澤を隔て東南の山中、東下リの野原あり。阿仁澤の施主等が其願には、當山の開基の時も、高倉長者は大壇那の數なりといへども、末世其證も見えず。然れば此度の施主、我々の中にも長者が末大方一門の類ひなる間、其地藏尊を阿仁澤の方へ向て御建立下されたしと申故、實と思召其人々の願ひに任せ、かの處へ御建立ありしとぞ。其時より數年、攝待を立て參詣の信者供養せしゆゑ、其處の字を攝(あき)待と今に申也。仁平元辛未年、法系を源泰に讓りて角(すみ)の房に閑居し給ふ。其後源覺、源海の二公を伴ひて羽黑山に參詣し、華藏房に入り給ひて兩公に仰らるゝに

は、我聊心願の旨ありて、依て此山に久しく逗留すべし。二公は皈り給べしとあれば兩公、阿闍梨、我等此山に止て給仕奉らんといへり。いなさにあらず、黄泉に伴ふとも何の益かあらん。御遺命あらは傳へん。餘の義にあらず、老夫が物語に昔八人の强勇、又阿計徒兄弟、何れ名ある者ども皆他の刄にかゝらずして死にふせり。阿計徒は拔群の者なれとも、取に足らさるものゝ刄を受て本山にて死たれば、其恨奈落非相貫くべし。法勤盛なる時は障碍あるべからず、澆季法衰へなば、其靈魂不信の者に入ッ替ッ害を成ㇱ事必定也。つとめて怠る事なかれと、此旨を源泰公に傳へて山中に諳してよ。生死明日を期すべからず、今年七十一歳也。我若飯山なく其行方の知れずんば、今六月七日出山の日を以て遷化の日と定め給へ。早ク皈山あるべしと。是に依て、力及はす兩公皈り給ふ。

○開山角源　二世豐前ノ公源泰　三世阿波ノ公源義
四世伊勢ノ公源覺　五世大和ノ公源海　六世泰行

第六世泰行現住の時、奥州の秀衡公より鏡二面（一面ハ圓形 一面ハ八花形）五百俵、砂金五十兩の寄附狀を添て當山に贈り給ふ。其八花形の鏡は神明の御正躰に祀ひ奉り、圓形の鏡をば中院の護摩壇に安置し奉り、それより猶も法威盛に、山中繁榮して歷代經たり。

○理俊　俊行　鏡庭　高易　威法　鏡順　閑壽　俊永

嘉元三年九月二十三日回祿

十四世の現住俊永の時、岩川の城主當山に來て狩す。使僧を以て仲テ云、兼て御存知られ候通、當山は殺生禁斷の處也。重てヶ樣の義有べからずとぞ。城主返答もせず皈られけるが、遺恨にや思ひけん、重て大勢を曳て當山に入込み、無二無三に寺を打破り彼所（かしこ）の房を倒し、こゝの房を潰し、下部小屋に至るまで、みな殘りなく打破りて散亂せし程に、彼の處より出火し、山中の騷動目もあてられぬ有樣也。嗚呼時なるかな、開基より以來遠近となく、尊卑となく運信皈依の莊嚴なるに、片時の煙と回祿す。今年は如何なる年ぞ、此日はいかなる日ぞや。九十三代後二條院嘉元三乙巳年九月廿三日、四ヶの里寺よりも亡諳來りければ、誰一人もの云ふ人もなく、みなあやしみてぞ立居たりける。是ぞ開山大德の御遺命、今こそ思ひ合せたり。世澆季に至り、勤務怠惰にして佛祿に奪りけるか。恐らくは護法善神の妙罰ならむ。此時に當て怨しき城主なりと、泪ながらに齒嚙をなせども力及はず、剩、八方に番を居へ置キ往來の通路を斷ぬれば、眼前の飢渇、山中の道俗すべきやうなく、大衆夜中に忍び出て、小又口の北の山上に壇を築（きつき）て、怨敵の咒咀の護摩を修し、鈴掛の袖に涙を拭ひ、南無梵字字鎭座の諸尊聖衆、只今一山忽に破れて大衆地上に漂泊す。急ぎ怨敵を降伏ましまして、再ひ興立の聚會を擁護し給へと、大音聲に泣けるは哀れなりし事ども也。泣々、俊永先達に暇乞の拜をなし、泣々法螺を吹立て先八方にぞ別れける。俊永先達も、法系を首に掛て源川寺に

明德四年

鬼頭權現
大日山大幢寺
東光院

落行けるが、是焰焦となりにける。村民に語らひ少庵を結び、若や時もあらむかと法系を守護し、形を俗にかへて、薪を樵り渡世として年月を經たまへり。

嶽觀　觀壽　觀海

○十七世觀海の時に至りて、漸僧形をぞあらはしける。

嶽全　貫道　賢榮　圓慶　鑁秀　大澄

○二十三世大澄の時に至り、漸く繁榮の氣色の見えければ、時なるかな、法幢を立むには衆生緣にしかじと、先多々羅の堆(たい)に寺院を建て、時を待て本山を興立せんと、明德四癸酉年多々羅堆に先一字を建立し、金剛界大日如來を安置し奉る。然れば勤修の功力に依て、阿計徒が靈魂も得脱しけるにや、年久しく障碍も絕へぬれば神と祭るべしとて、本尊如來の御脇に神祠を建て、鬼頭權現と崇む。寺跡に一宇を建て大日山と號し、大幢寺と號す。五院揃はざる故、中輪院の教學堂の名號を轉じて教學院と號し、房號を東光坊と號し、途中の五房を建て角之坊、奥之坊、宮之坊、法林坊、〇〇坊(マヽ)と名付ヶ、本院には不動明王を安置し奉る。四院の代りに、山の折目を一ノ瀧、二ノ瀧、三ノ瀧、四ノ瀧と名付て、四大明王勸請し奉り、菩提坂より東本堂までを奥ノ院と名付ヶ、菩提坂より西に、徃昔大將軍田村麿の奉幣ありし跡へ羽黑三所の神殿を建て、南には牛頭天王の宮を建、西の下に一宇を建て前寺と號、五房を構へて參詣の

神明宮、稲荷、辨天　寅彦

牛が澤

供養坂

森岡村

大宅か舘

菩提堂

宿房とす。四の瀧の下に門を構へ、又本院の後の堆(たい)に神明、稲荷、辨財天女三社を、一棟に建奉る。寅彦に申附て、攝待場の地藏尊一體を殘し置奉り、五躰を取り迎へ奉りて菩提坂の上、三所社壇の並に安置し奉る。又五輪等もよせ奉りて段々に安置せり。尊像、五輪、礎石まで寅彦が心力を盡し、牛に附てもて運びけり。又川向に小屋を作り牛を置キ、小屋の後ロの澤は艸よき處なれば、その牛どもを放て養ひける。故にその處を今牛が澤とは申也。當山造營のとり運びは牛の功たるによるが故、當社へ牛の画を懸る事も此故也。又開祖大德の先蹤に効て、菩提坂に千本の卒都婆を建て、諸佛菩提を供養し奉りし故供養坂とも申なり。又森岳村の檀主の願には、御山は遠方にて折々も運びかね候もの多し。老人女人のために、佛躰を御引越し下されたきよしを申によりて、立像の延命地藏菩薩、五輪塔を添て別ち遣しければ、其村の北の端より東に離れて、地形四面にして堀を廻し、大宅(おほやけ)か舘(たち)といふ家跡あり。そこに少房を構へて安置し奉る。違中の法輪房を遣はして守護せしむ。村民それを菩提堂と唱へける。其地何ほど早き處にや、四隅の堀は自然と埋れ水艸など生じける故、狼狐なども自由に往來するゆゑ、依て危きよし申ければ、其處より申酉の方にあたりて野原ありける故其處へ移しける。大日山に立たまへる時も東に向ひ給ひしとて、東向に立給ひけり。諸人信向厚きゆゑか、靈驗あらたにましますと也。此地形も廣き事故に、角々の房を發しけり。

文龜二年

彦太、彦八

其時橋を隔て西の方には菩薩堂を立、尤古例に任て東向に安置奉りて、兩房して是を守護し奉りし也。

○賢明　賢義　鑁厚　儀寶　泰鑑

○此二十八世泰鑑の時、法會を設け鬼王大權現と祟む。其法の繁榮、山上山下市をなす事、長承のむかしも斯やらむと歎せぬものなし。

○伯山　喜寶　賢鑑　寛隆　以寶　寶後　俢道

○此三十五世の俢道の時に至りて、文龜二壬戌年の秋北風はげしき折から、夜盗夥敷入來て、前寺宿房へ火を掛てたちまち燃上りけるほどに、三社の御殿に火うつり盛に燃上りけるゆゑ、本院より院主、達中殘りなく馳出けるが、亦本院本堂達中よりも燃上りければ、本院に立皈りけれども盗賊等本堂本院に亂入り、寶物雜の差別もなく手々に盗み取る。大勢の夜盗、小勢をあなどりて少しも恐るゝ氣色もなく、大衆あまたに周章(あわて)騷く有さまを見物して有けるが、不的といふとも餘りあり。扨又彦太、彦八是を見て、すはや一大事と身をあせりけれども、洪水にて渡る事叶はざりしが、おめ〳〵と見て居るべきにあらねば、兄弟手と手を取組み川に飛入りしに、川水あらく瀨枕打て、逆卷水に浮つ沉つ流れけるが、あまりに苦シみ持たる得物もみな打捨て、百間斗もおし流れ、漸く岸に取すがり打上り馳付たりしが、とかくす

天神

る間に、みな焔燒そしたりける。いまた盗賊共はかしこに在りけれども、互(ふたり)は得ものは持ずその上裸の體なれば、牛が澤には妻子ども泣き叫ぶこゑ〳〵、いと哀也ける事とも也。火やゝ鎮りぬればみな本院の燒跡に集り、只茫然として立居けり。夜明れば寺跡、社跡を打廻り見けるに、風烈しく吹飛して炭灰も殘らず、言語にのべむかたなく、みな〳〵なみだをそ流しけり。惜哉、神明宮の御正躰と齋(いは)ひ奉りたりしは八花形の御鏡、本院の道場なる圓鏡、其外本山繁榮の時諸々より寄附の寶物法器、一時に灰塵とぞ成にけり。扨又彦太、彦八は昔大澄の當山開發なされし時、牛をつかひて人力を盡したる功のものゝ、寅彦か子孫也。造營極りて後は、牛が澤に家を立てさし置れたり。かれらは當寺歷代の家賴也。惜しきかな彦太晩年にして洪水を渡り、夥敷水も飲み苦みけるほどに、忽病さし起り、三日三夜苦痛して終に空しくぞ成りにける。をしむべきは、兄弟が忠功かぞふにいとまあらず。本院の跡より艮の方の河端近き處に、一山歷世の墳墓有ける。大功忠義の者なればとて、その歷代の墓處に葬りける。痛しかりける事ども也。かくて社檀寺跡取かた付け、天神の社內へうつり假院をしつらひ、先冬籠をぞしたりける。翌年より心力を盡し、七ケ年が間に本堂本院斗を造立し、漸々と遷宮の式を營み、道場入佛供養の儀式を調へ、山中の諸尊皆道場に勸請し奉る也。

寛道　寛秀

〇三十七世寛秀の時より、春夏秋は本院に居住し、冬は天神林の假院に住居せし也。

泰秀

御光比良

〇三十八世泰秀の時、聊心願ありて御光ヶ比良より西に濕處あり、其處へ池を掘り、辨天供養を行はれけるとぞ。又御光比良の嶺ｷは、四季勤行の時護摩堂の本尊壇なればとて、假塔を建て人足を除かしめんとす。

泰春

大日山

〇卅九世泰春の時、林埼村並惣氏子の願ひに依て、大日山をば本堂斗を造營して、天神の社内に引移り住居せり。其時、石像等をば社内に移し奉る。

春藏

鷹嘴長九郎
佐五ノ八郎
槺田ノ長子
駒之助

〇四十世春藏の時三人靈夢を蒙り、座像の尊躰をは鷹嘴長九郎に迎ひさせ奉り、一門の鎮守と崇め奉る也。二躰は佐五ノ八郎に迎へさせ奉る。立像をば鎮守に崇め、座像をば古主槺田ノ長子駒之助菩提の爲とて、小堂を建て是に安置し奉り、日夜怠轉なく供養し奉る。然れば往昔大德の誓ひなりとて、三躰ともに東向に安置奉る、云云。」

維時元和巳丁年四月吉旦

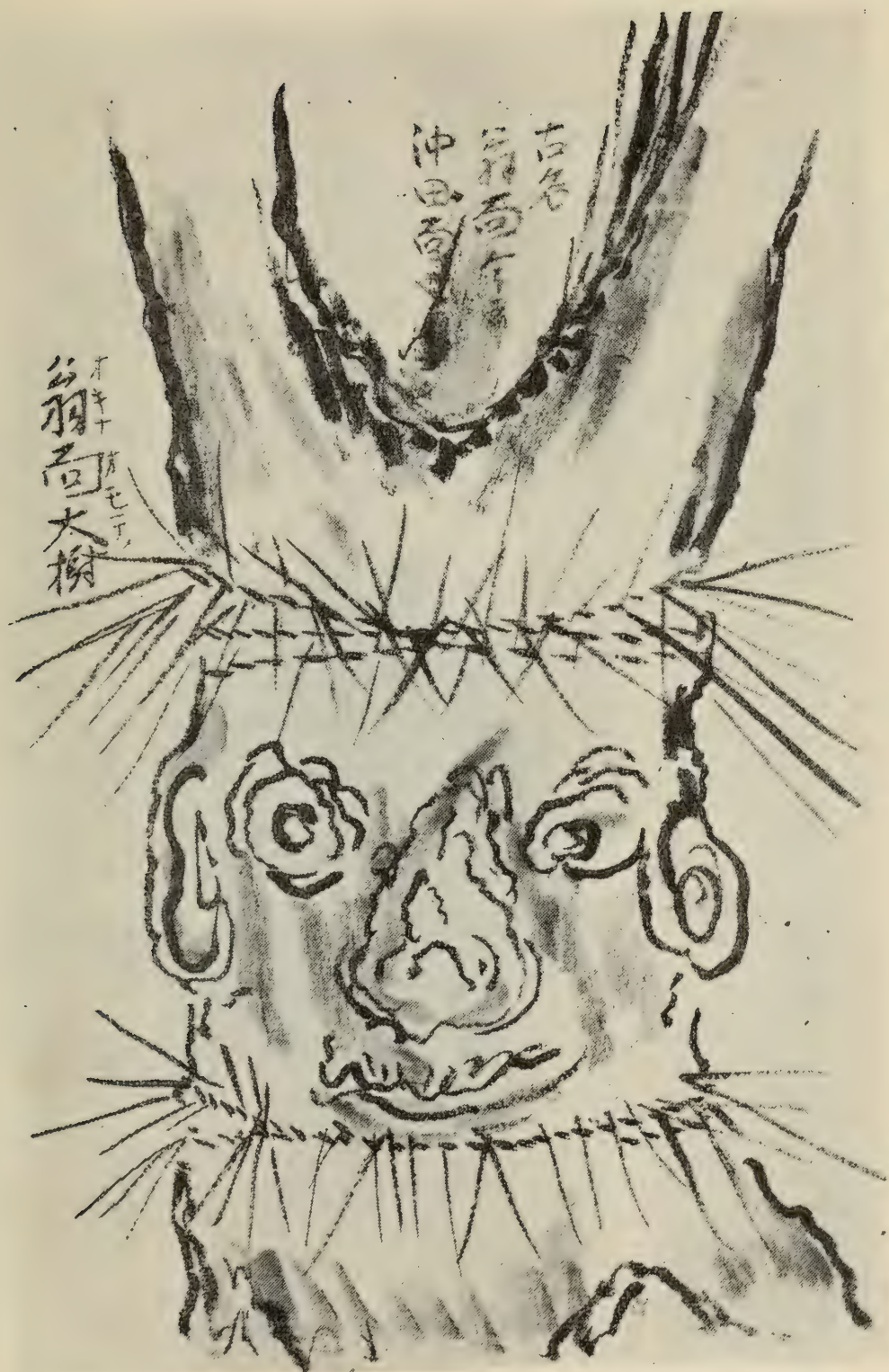
大幢寺東光房四十一世現住　見　藏 五十五歳

古本補破壞謹令改書焉畢

梵字宇山開基ヨリ今年迄四百八十四年

代筆薩州密乘沙門　亮　全

寛政四壬子三月吉日　華藏院智圓謹寫」とあり。

翁面大樹

昭和五年十二月二十日印刷
昭和五年十二月二十五日發行

秋田叢書別集　菅江眞澄集第二

不許複製　（非賣品）

編輯兼發行人　秋田叢書刊行會
代表者　深澤多市

印刷者　甲田藤太郎
東京市麹町區紀尾井町三番地

印刷所　東京印刷株式會社麹町出張所
東京市麹町區紀尾井町三番地

發行所　秋田縣横手町
秋田叢書刊行會
代表者　深澤多市
振替仙臺八二五二番